

五日牛清水田遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
（縄文編）

1993

建設省
群馬県教育委員会
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

『五目牛清水田遺跡』 正誤表

頁	行・図	誤	正
口絵 3頁	4区北壁B地点	XXII	XVI
口絵 3頁	5区G地点	IVX III V X	XVI XVI
例言	3行目	言聞閣教育委員会	群馬県教育委員会
72頁・73頁	第58図・第59図	28集石 29集石 30集石	10集石 11集石 9集石
75頁	第60図	9集石 10集石 11集石 12集石	12集石 13集石 14集石 15集石
76頁	第61図	13集石 14集石	16集石 17集石
77頁	第62図	15集石 18集石 19集石 20集石 27集石	18集石 19集石 20集石 21集石 22集石

資料	財群馬県埋蔵文化財	01-330
	調査事業団保管	25
NO. 4918	平成10年 5月17日	1 (7)

五日牛清水田遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
（編 文 編）

1993

建設省
群馬県教育委員会
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団



道陸上空から西方の標名山を望む。手前の粕川からローム台地の間の圃場整備された低地が五日牛清水水田遺跡。ほぼ中央の道が波志江沼。上武道路は赤城山南麓台地を横断して進む。



北方上空から見た1日水田金景（1～3区）この水田は弘仁九年（818）の大地震により発生した泥流で埋没した兼里水田で、3区大アゼは坪の区画を示す。



IV A_s-B下水田耕土

V
I
IV

古代遺構確認面

VII

X 縄文時代
中～後期包含層

XI 前～中期包含層

XII 前期初頭包含層

4区西壁 (K-22グリッド)



XI

XII

XIII 2次堆積ローム層

XIV

河道部堆積層

XVII 砂礫層(基盤)

4区田河道部D地点 (M-28グリッド)



4区北壁B地点 (J-23グリッド)



I	
VII IX	微高地の土層
X	3-5区の微高地には1.5-1.8mの黒色土-褐色土が堆積しており、その上半部(X-XII層)に縄文時代前期-後・晩期の包含層が形成されている。
XI	
XII	また、4区中央から東側にかけて、調査区を横断する粕川の旧河道が確認された。
XV	
IVX	
BVX	

5区G地点 (O-37グリッド)



I
 II
 III
 IV Aa-B
 Aa-B下
 水田耕土
 VI 1日水田
 耕土
 XVII
 ↓
 旧河道埋積層

1区東壁田河道部



IV
 V
 VI-IX
 X
 XI-XX

XXVII

2区東壁田河道部



3区西壁（プラントオーバー分析試料採集A地点）



- I
-
- II
- III
-
- IV
-
- V
-
- VI
-
- VII
-
- X
-
- XI
-
- XII
-
- XIII
-
- XIV
-
- XV
-
- XVI
-
- XVII
-
- XVIII
-
- XIX
-
- XX
-
- XXI
-
- XXII
-
- XXIII
-
- XXIV
-
- XXV
-
- XXVI
-
- XXVII
-

低地の土層

弥生時代後期以降、低地ではたび重なる船川の氾濫を免れながら、漁耕と水田耕作が継続されてきた。表土下1 m以上に層々と重なる土層の一番一層は、この地域の人々が歩んだ歴史そのものを示している。

高調査面



縄文時代前期初頭 花積下層式土器 (1住-2)



同 花積下層式土器 (1住-1)



同 花積下層式期の粘土塊
左側のスケールは10cm。



同 花積下層式土器 (1住-4)



ㇿ 浅間B 軽石 (1108年降下) 直下出土短刀

船川に面した5区低地に単独で置かれていた。身が厚く、深い冠部
としが特徴的な逸品で、鞘の木質を一部とどめる。

序

埼玉県深谷市と本県の前橋市を結ぶ一般国道17号線のバイパスである上武道路は、既に、新田郡尾島町の国道354号線から前橋市今井町の国道50号線までの区間が開通・供用されており、通過市町村の産業経済の発展に大きく貢献しています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が分布しています。このため、道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が昭和48年度より群馬県教育委員会及び当事業団により行われています。

本書は、昭和59年8月より昭和61年2月にかけて発掘調査をしました佐波郡赤堀町五目牛所在の五目牛清水田遺跡の報告書ですが、縄文時代前期初頭の花積下層式の古い段階の土器及び集落の様子、8世紀代までさかのぼる条里制地割り、水田址等貴重な遺構、遺物の調査成果が報告されています。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、佐波郡赤堀町教育委員会、地元関係者の方々から種々、ご指導ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成5年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長

小寺弘之

例 言

1. 本書は、一般国道17号（上武道路）改築工事に伴い事前調査した、「五目牛清水田遺跡」（事業名称）K24五目牛清水田・中田遺跡）の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査および整理事業は、建設省関東地方建設局高崎工事事務所から委託を受けた言問間教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施したものである。
3. 遺跡所在地 群馬県佐波郡赤堀町大字五目牛字甲中通
4. 発掘調査期間 試掘調査
本調査 昭和59年8月1日～昭和61年2月10日
5. 発掘調査担当者 試掘調査 石坂 茂、斎藤利昭
本調査 飯塚 誠（昭和59年度）、藤巻幸男、中山純一、大西雅広（昭和60年度）
事務局 白石保三郎、梅沢重昭、井上唯雄、大沢秋良、松本浩一、上原啓己
秋池 武、定方隆史、国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏
6. 整理事業期間 平成2年4月1日～平成4年9月30日
7. 整理事業担当者 主任調査研究員 藤巻幸男、岩崎泰一
整理補助員 市田武子、金子ミツ子、須田はつ江、高橋千代子、高橋裕美、田中晚美
新平美津子、萩原由美子、蜂巣綾子、羽島望東子
遺物写真 佐藤元彦
保存処理 関 邦一、北爪健一、小村浩一
事務局 邊見長雄、松本浩一、近藤 功、田口紀男、佐藤 勉、神保佑史、能登 健
岩丸大作、斎藤俊一、国定 均、笠原秀樹、小林昌嗣、須田朋子、吉田有光、
柳岡良宏、船津 茂、高橋定義、松下 登、野島のお江、並木綾子、
今井もと子、角田みづば、松井美智代、塩浦ひろみ
報告書編集 藤巻幸男
本文執筆 岩崎泰一（II-6-(2)）、大西雅広（遺物観察表）、藤巻幸男（前記以外）
なお、出土遺物や土壌の科学分析、および人骨・足跡の分析については、関係諸機関・研究者に依頼し、分析結果については付録として別冊にまとめた。
8. 発掘調査及び整理事業にあたって、以下の委託を行った。
遺構測量、地形図・出土遺物トレース (株)測研
井戸掘削 原沢ボーリング株式会社
縄文時代包含層出土遺物の分布作成 システム提案株式会社
9. 出土石器の石材鑑定は、飯島静男氏（群馬地質研究会）に依頼した。
10. 発掘調査及び報告書作成にあたって、以下の方々に御指導、御教示、御協力をいただいた。記して感謝いたします（敬称略）。
松村一昭、松村和子、藤原宏志、宮崎重雄、鈴木徳雄、細田 勝、澁谷昌彦、鈴木鹿一
11. 五目牛清水田遺跡の出土遺物及び資料は、一括して群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。

目 次

I. 発掘調査と遺跡の概要		
1. 発掘調査に至る経過	1	
2. 遺跡の位置と周辺の地形	1	
3. 周辺の遺跡分布	2	
4. 調査の方法と経過	10	
5. 基本土層	12	
II. 縄文時代の調査		
1. 調査概要	13	
2. 竪穴住居	16	
3. 土 坑	66	
4. 集石土坑	71	
5. 配 石	79	
6. 包含層出土遺物	82	
(1) 土 器		
(2) 石 器		
(3) その他の出土遺物		
7. 包含層の遺物分布	191	
III. 古代の調査		
1. 調査概要	211	
2. 竪穴住居	215	
3. 掘立柱建物	332	
4. 竪穴状遺構	345	
5. 特殊遺構	347	
6. 祭 祀 跡	350	
7. 前方後円墳	365	
8. 土 坑	376	
9. 溝	387	
10. 畠	390	
11. 旧 河 道	403	
12. 水 田	412	
IV. 中・近世の調査		
1. 調査概要	488	
2. 2区の調査	489	
3. 3区の調査	490	
4. 4区の調査	496	
5. 5区の調査	501	
V. 考 察		
1. 花積下層式土器について	531	
2. 1H水田を埋める 氾濫堆積物について	538	
3. 五目牛清水田遺跡に認められた 条里地割りの施行年代について	539	
遺物観察表		
付載 科学分析		別冊
付図1 縄文時代包含層の遺物分布		
付図2 縄文時代包含層の遺物分布(花積下層式)		
付図3 縄文時代包含層の遺物分布(前期土器)		
付図4 縄文時代包含層の遺物分布(中期土器)		
付図5 縄文時代包含層の遺物分布(後期土器)		
付図6 縄文時代包含層の遺物分布断面図(土器・石器)		
付図7 縄文時代包含層の遺物分布(礫)		
付図8 縄文時代包含層の遺物分布断面図(縄)		
付図9 縄文時代包含層の遺物分布(銅片石器)		
付図10 縄文時代包含層の遺物分布(礫石層)		
付図11 縄文時代包含層の遺物分布(打製石片)		
付図12 縄文時代包含層の遺物分布(石器・石材)		
付図13 縄文時代包含層の遺物分布(黒曜石)		
付図14 縄文時代包含層の遺物分布(チャート)		
付図15 縄文時代包含層の遺物分布(黒色頁岩)		
付図16 縄文時代包含層の遺物分布(安山岩・玄武岩・頁岩)		
付図17 縄文時代包含層の遺物分布(粘土塊・片岩)		
付図18 4号住居と包含層の遺物分布(土器)		
付図19 4号住居と包含層の遺物分布(礫)		
付図20 4号住居と包含層の遺物分布(石器・石材)		
付図21 縄文包含層下の確認調査状況と土層堆積状況		
付図22 6世紀後半以後の居住域全体図		
付図23 旧河道部の土層堆積状況(2区東端)		
付図24 遺跡周辺の地割りに残る条里地割り		
付図25 1H水田に見られる条里地割り		
付図26 中・近世の主な遺構と条里地割り		

表 目 次

第 1 表 五日牛清水田周辺の遺跡	4	第 4 表 集石土坑石材別個数	199
第 2 表 粘土塊観察表	189	第 5 表 集石土坑石材別重量	200
第 3 表 出土土器一覧	194	第 6 表 配石石材別個数・重量	201

挿 図 目 次

第 1 図 五日牛清水田遺跡の調査範囲	1	第 50 図 5号住居出土土器(2)	63
第 2 図 周辺の遺跡分布	3	第 51 図 6号住居および出土遺物	65
第 3 図 遺跡の調査範囲と調査区	10	第 52 図 土坑(1)	66
第 4 図 グリッド配置図	11	第 53 図 土坑(2)	67
第 5 図 基本土層模式図	12	第 54 図 土坑(3)	68
第 6 図 縄文時代の遺構配置	14	第 55 図 土坑出土土器	69
第 7 図 遺構面下の自然線の分布状況	15	第 56 図 土坑出土土器	70
第 8 図 1号住居	16	第 57 図 集石土坑(1)	71
第 9 図 1号住居遺物出土位置図(土器)	17	第 58 図 集石土坑(2)	72
第 10 図 1号住居遺物出土位置図(石器)	18	第 59 図 集石土坑(3)	73
第 11 図 1号住居出土土器(1)	20	第 60 図 集石土坑(4)	75
第 12 図 1号住居出土土器(2)	21	第 61 図 集石土坑(5)	75
第 13 図 1号住居出土土器(3)	22	第 62 図 集石土坑(6)	77
第 14 図 1号住居出土土器(1)	23	第 63 図 集石土坑出土遺物	78
第 15 図 1号住居出土土器(2)	24	第 64 図 配石(1)	79
第 16 図 1号住居出土土器(3)	25	第 65 図 配石(2)	80
第 17 図 2号住居	26	第 66 図 配石出土遺物	81
第 18 図 2号住居遺物出土位置図(土器)	27	第 67 図 1区包含層出土土器(1)	82
第 19 図 2号住居遺物出土位置図(石器)	28	第 68 図 1区包含層出土土器(2)	83
第 20 図 2号住居出土土器(1)	30	第 69 図 3・4区包含層出土土器(1)	84
第 21 図 2号住居出土土器(2)	31	第 70 図 3・4区包含層出土土器(2)	85
第 22 図 2号住居出土土器(1)	32	第 71 図 3・4区包含層出土土器(3)	86
第 23 図 2号住居出土土器(2)	33	第 72 図 3・4区包含層出土土器(4)	87
第 24 図 2号住居出土土器(3)	34	第 73 図 3・4区包含層出土土器(5)	88
第 25 図 2号住居出土土器(4)	35	第 74 図 3・4区包含層出土土器(6)	90
第 26 図 3号住居	36	第 75 図 3・4区包含層出土土器(7)	91
第 27 図 3号住居遺物出土位置図(土器)	37	第 76 図 3・4区包含層出土土器(8)	92
第 28 図 3号住居遺物出土位置図(石器)	38	第 77 図 3・4区包含層出土土器(9)	93
第 29 図 3号住居出土土器(1)	40	第 78 図 3・4区包含層出土土器(10)	94
第 30 図 3号住居出土土器(2)	41	第 79 図 3・4区包含層出土土器(11)	95
第 31 図 3号住居出土土器(3)	42	第 80 図 3・4区包含層出土土器(12)	96
第 32 図 3号住居出土土器(1)	43	第 81 図 3・4区包含層出土土器(13)	97
第 33 図 3号住居出土土器(2)	44	第 82 図 3・4区包含層出土土器(14)	99
第 34 図 3号住居出土土器(3)	45	第 83 図 3・4区包含層出土土器(15)	100
第 35 図 4号住居	47	第 84 図 3・4区包含層出土土器(16)	101
第 36 図 4号住居遺物出土位置図(土器)	48	第 85 図 3・4区包含層出土土器(17)	102
第 37 図 4号住居遺物出土位置図(石器)	49	第 86 図 3・4区包含層出土土器(18)	103
第 38 図 4号住居出土土器(1)	51	第 87 図 3・4区包含層出土土器(19)	104
第 39 図 4号住居出土土器(2)	52	第 88 図 3・4区包含層出土土器(20)	105
第 40 図 4号住居出土土器(3)	53	第 89 図 3・4区包含層出土土器(21)	106
第 41 図 4号住居出土土器(4)	54	第 90 図 3・4区包含層出土土器(22)	107
第 42 図 4号住居出土土器(5)	55	第 91 図 3・4区包含層出土土器(23)	108
第 43 図 4号住居出土土器(1)	56	第 92 図 3・4区包含層出土土器(24)	108
第 44 図 4号住居出土土器(2)	57	第 93 図 3・4区包含層出土土器(25)	110
第 45 図 4号住居出土土器(3)	58	第 94 図 3・4区包含層出土土器(26)	111
第 46 図 5号住居	59	第 95 図 3・4区包含層出土土器(27)	112
第 47 図 5号住居遺物出土位置図	60	第 96 図 3・4区包含層出土土器(28)	113
第 48 図 5号住居出土土器	61	第 97 図 3・4区包含層出土土器(29)	114
第 49 図 5号住居出土土器(1)	62	第 98 図 3・4区包含層出土土器(30)	116

第99図	3・4区包含層出土土器(31)	117	第132図	3・4区包含層出土土器(19)	155
第100図	3・4区包含層出土土器(32)	118	第133図	3・4区包含層出土土器(20)	156
第101図	3・4区包含層出土土器(33)	119	第134図	3・4区包含層出土土器(21)	157
第102図	3・4区包含層出土土器(34)	120	第135図	3・4区包含層出土土器(22)	158
第103図	3・4区包含層出土土器(35)	121	第136図	3・4区包含層出土土器(23)	159
第104図	5区包含層出土土器(1)	123	第137図	3・4区包含層出土土器(24)	160
第105図	5区包含層出土土器(2)	124	第138図	3・4区包含層出土土器(25)	161
第106図	5区包含層出土土器(3)	125	第139図	3・4区包含層出土土器(26)	162
第107図	5区包含層出土土器(4)	126	第140図	3・4区包含層出土土器(27)	163
第108図	3・4区出土土器の器種組成・石材構成及び 石材別重量	127	第141図	3・4区包含層出土土器(28)	164
第109図	3・4区出土土器黄緑別石材組成	128	第142図	3・4区包含層出土土器(29)	165
第110図	石鏝分類別石材組成	129	第143図	3・4区包含層出土土器(30)	166
第111図	石鏝A・B期の長幅比と形状	130	第144図	3・4区包含層出土土器(31)	167
第112図	3・4区包含層出土土器(1)	133	第145図	3・4区包含層出土土器(32)	168
第113図	3・4区包含層出土土器(2)	134	第146図	3・4区包含層出土土器(33)	169
第114図	3・4区包含層出土土器(3)	135	第147図	3・4区包含層出土土器(34)	170
第115図	3・4区包含層出土土器(4)	137	第148図	3・4区包含層出土土器(35)	171
第116図	3・4区包含層出土土器(5)	138	第149図	3・4区包含層出土土器(36)	172
第117図	3・4区包含層出土土器(6)	139	第150図	3・4区包含層出土土器(37)	174
第118図	3・4区包含層出土土器(7)	140	第151図	3・4区包含層出土土器(38)	175
第119図	3・4区包含層出土土器(8)	141	第152図	3・4区包含層出土土器(39)	176
第120図	3・4区包含層出土土器(9)	142	第153図	3・4区包含層出土土器(40)	177
第121図	3・4区包含層出土土器(10)	143	第154図	3・4区包含層出土土器(41)	178
第122図	3・4区包含層出土土器(11)	144	第155図	3・4区包含層出土土器(42)	179
第123図	3・4区包含層出土土器(12)	145	第156図	3・4区包含層出土土器(43)	180
第124図	3・4区包含層出土土器(13)	146	第157図	3・4区包含層出土土器(44)	181
第125図	3・4区包含層出土土器(14)	147	第158図	3・4区包含層出土土器(45)	182
第126図	3・4区包含層出土土器(15)	148	第159図	3・4区包含層出土土器(46)	183
第127図	3・4区包含層出土土器(16)	149	第160図	3・4区包含層出土土器(47)	184
第128図	3・4区包含層出土土器(17)	150	第161図	3・4区包含層出土土器(48)	185
第129図	打製石斧分類別石材組成	151	第162図	5区包含層出土土器	186
第130図	打製石斧の類別長幅比	152	第163図	3・4区包含層出土土器	188
第131図	3・4区包含層出土土器(18)	154	第164図	花楸下層式土器の分布と遺構	192
			第165図	竈・焼窯の分布と集石土坑	193

写真図版

- P L 1 遺跡遺景
- P L 2 1. 遺跡遺景(上空から)
2. 遺跡遺景(南から朝山を望む)
3. 朝山の東麓にある「牛石」
4. 試掘調査状況
5. 同4
- P L 3 1. 1号住居全景
2. 同1 全遺物の出土状況
3. 同 主要土器出土状況
4. 同3
5. 同3
- P L 4 1. 1号住居 南側遺物出土状況
2. 同 炉の確認状況
3. 同 炉完備状況
4. 同 炉埋没土器
5. 2号住居全景
- P L 5 1. 2号住居 全遺物の出土状況
2. 同1 南東隅
3. 同床面 黒曜石碎片の出土状況
4. 同炉 埋没土器の確認状況
5. 同炉 埋没状況
6. 同炉 断面
7. 3号住居 全遺物の出土状況
8. 同7 地山礫を取りきった状況
- P L 6 1. 3号住居全景
2. 同 主要土器の出土状況
3. 同2
4. 同2
5. 同 石皿の出土状況
- P L 7 1. 4号住居 遺物出土状況
2. 同 礎脚状況
3. 同 完備状況
4. 同 埋土の状態
5. 同 土器の出土状況
- P L 8 1. 4号住居 主要土器の出土状況
2. 同1
3. 5号住居 全遺物の出土状況
4. 同部分
5. 同 黒曜石碎片出土状況
6. 同 完備状況
7. 6号住居 遺物出土状況
8. 同7
- P L 9 1. 1号土坑確認状況
2. 同 遺物出土状況

3. 同 完備状況
 4. 2号土坑確認状況
 5. 同 完備状況
 6. 3号・4号土坑
 7. 3号土坑確認状況
 8. 4号土坑確認状況
- PL 10 1. 5号土坑確認状況
 2. 同 完備状況
 3. 6号土坑確認状況
 4. 同 完備状況
 5. 7号土坑確認状況
 6. 同 完備状況
 7. 8号・9号土坑確認状況
 8. 同 完備状況
- PL 11 1. 10号・11号・12号土坑完備状況
 2. 10号土坑確認状況
 3. 同 埋土の状況
 4. 13号土坑土器の出土状態
 5. 同 完備状況
 6. 14号土坑 遺物の出土状態
 7. 同 完備状況
 8. 15号土坑 遺物の出土状態
- PL 12 1. 1号・2号集石土坑周辺の遺物出土状況
 2. 1号・2号集石土坑 上面の確認状況
 3. 同 断面の状況
 4. 同 完備状況
 5. 3号・4号集石土坑確認状況
 6. 同 上面の確認状況
 7. 同 断面の状況
 8. 同 完備状況
- PL 13 1. 5号～11号集石土坑確認状況
 2. 同 確認の分布状況
 3. 11号集石土坑上面の確認状況
 4. 5号～8号集石土坑 全景
 5. 同 完備状況
- PL 14 1. 5号・6号集石土坑上面の確認状況
 2. 同 完備状況
 3. 5号集石土坑下面の礎群
 4. 同 埋土の状況
 5. 7号・8号集石土坑完備状況
 6. 7号集石土坑上面の確認状況
 7. 同 埋土の状況
 8. 同 完備状況
- PL 15 1. 8号集石土坑上面の確認状況
 2. 同 完備状況
 3. 9号・10号・11号集石土坑確認状況
 4. 同 完備状況
 5. 9号集石土坑上面の確認状況
- PL 16 1. 10号集石土坑上面の確認状況
 2. 同 完備状況
 3. 11号集石土坑上面の確認状況
 4. 同 完備状況
 5. 12号・13号・14号集石土坑確認状況
- PL 17 1. 12号集石土坑上面の確認状況
 2. 同 断面
 3. 同 完備状況
 4. 13号集石土坑上面の確認状況
 5. 同 断面
 6. 同 下面出土の地山礫
 7. 同 完備状況
 8. 14号集石土坑上面の確認状況
- PL 18 1. 14号集石土坑断面
2. 同 下面出土の地山礫
 3. 同 完備状況
 4. 15号集石土坑確認状況
 5. 同 断面
 6. 同 完備状況
 7. 16号集石土坑上面の礎
 8. 同 下面の確認状況
- PL 19 1. 16号集石土坑断面
 2. 同 完備状況
 3. 17号集石土坑 全景
 4. 同 断面
 5. 同 礎下土坑の確認状況
 6. 同 断面
 7. 同 完備状況
 8. 18号集石土坑 礎の確認状況
- PL 20 1. 同 礎下土坑の礎群の確認状況
 2. 同 下面の礎群の状況
 3. 同 完備状況
 4. 19号集石土坑上面の確認状況
 5. 同 断面
 6. 同 完備状況
 7. 20号集石土坑上面の確認状況
 8. 同 断面
- PL 21 1. 20号集石土坑完備状況
 2. 21号集石土坑上面の確認状況
 3. 22号集石土坑断面の確認状況
 4. 同2 礎下の調査
 5. 1号配石確認状況
 6. 同 部分
 7. 2号配石確認状況
 8. 同 大型礎の出土状況
- PL 22 1. 3号配石確認状況
 2. 4号配石確認状況
 3. 5号・6号配石確認状況
 4. 5号配石全景
 5. 6号配石全景
 6. 7号配石確認状況
 7. 同 礎下出土土器の状況
 8. 同7
- PL 23 1. 3区遺物の出土状況(南から)
 2. 同1(西から)
 3. 同1(部分)
 4. 同1(部分)
 5. 同1(部分)
 6. 同1(部分)
 7. 3区遺構の確認状況
 8. 3区雪中での作業風景
- PL 24 1. 3区遺構確認地下地山礫の状況
 2. 同1(部分)
 3. 同1(部分)
 4. 同1(部分)
 5. 同1地山礫下土層の堆積状況
- PL 25 1. 3区遺物包含層の状況(南から)
 2. 4区西側北半部 遺物の出土状況
- PL 26 1. 4区東半部 遺物包含層の調査状況(上面)
 2. 同1 石礫の出土状況
 3. 同2 土偶の出土状況
 4. 同3
 5. 同1 遺物の取り上げ作業
- PL 27 1. 4区東半部 遺物包含層の調査状況(東から)
 2. 同1(西から)
 3. 同1(東から)

	4, 同1 遺物出土状況	4, 同1
	5, 同4	5, 同1
P L 28	1, 4区東半部遺物包含層 大原碑の出土状況	P L 39 1号住居出土遺物
	2, 同1 遺物出土状況	P L 40 1号住居出土遺物
	3, 4区東半部 遺物包含層最下面の調査	P L 41 1号住居出土遺物
	4, 同3 垂玉の出土状況	P L 42 1・2号住居出土遺物
	5, 同4	P L 43 2号住居出土遺物
P L 29	1, 4区西半部 遺物包含層最下面(K-23グリッド付近)	P L 44 2号住居出土遺物
	2, 同1 (K-25グリッド付近)	P L 45 2・3号住居出土遺物
	3, 同1 一括土器出土状況	P L 46 3号住居出土遺物
	4, 同2 石皿出土状況	P L 47 3号住居出土遺物
	5, 同1 割片出土状況	P L 48 3・4号住居出土遺物
	6, 同5	P L 49 4号住居出土遺物
	7, 同1 黒曜石石核出土状況 (P-28グリッド)	P L 50 4号住居出土遺物
	8, 同7	P L 51 4号住居出土遺物
P L 30	1, 4区西半部 遺構確認状況	P L 52 4号住居出土遺物
	2, 同1 地山障の状況	P L 53 4・5号住居出土遺物
	3, 同2	P L 54 5号住居出土遺物
	4, 同2	P L 55 5号住居・土坑出土遺物
	5, 同4 地山障に落ち込んだ遺物	P L 56 土坑・黒石土坑出土遺物
P L 31	1, 4区東半部 旧河道の確認状況	P L 57 黒石土坑・配石出土遺物
	2, 4区西半部 遺物の出土状況と旧河道	P L 58 1区包含層出土土器
P L 32	1, 4区東半部 旧河道の調査状況	条腹文系土器
	2, 同1 旧河道の埋没状況	花壇下層式土器
	3, 同2	P L 59 花壇下層式土器
	4, 同2 最下層に砂礫層が見られる	P L 60 花壇下層式土器
P L 33	1, 4区中央部南側の遺物出土状況 (東から)	P L 61 花壇下層式土器
	2, 同1	P L 62 花壇下層式土器
	3, 同1	P L 63 花壇下層式土器
	4, 同1 台付香炉形土器出土状況	P L 64 花壇下層式土器
	5, 4区東半部 旧河道上面の調査	P L 65 花壇下層式土器
P L 34	1, 4区東半部 旧河道上面遺物の出土状況	P L 66 花壇下層式土器
	2, 同1	P L 67 花壇下層式土器
	3, 同1	P L 68 花壇下層式土器
	4, 同1	P L 69 花壇下層式土器
	5, 同1	P L 70 ニツ木式土器
P L 35	1, 4区西半部 遺構面下の確認調査	諸磯 a 式土器
	2, 4区深掘り断面 (J-23グリッド)	P L 71 諸磯 b 式土器
	3, 同2	五領ヶ台式・腰板式土器
	4, 同1 (L-25グリッド)	P L 72 加曾利 E 2 式・同 3 式土器
	5, 同4 断面	加曾利 E 3 式土器
P L 36	1, 4区西半部 遺構面下の確認調査 (P-26グリッド断面)	P L 73 加曾利 E 4 式土器
	2, 同1 (M-23グリッド)	称名寺 1 式土器
	3, 同1 (L-24グリッド)	称名寺 Ⅱ 式土器
	4, 同3 断面	P L 74 堀之内 1 式土器
	5, 同1 (O-24グリッド)	P L 75 堀之内 Ⅱ 式土器
	6, 同5 断面	P L 76 堀之内式・加曾利 B 式土器
	7, 同1 (M-24グリッド)	P L 77 加曾利 B 式土器
	8, 同1 (P-26グリッド)	P L 78 加曾利 B 式土器
P L 37	1, 4区西半部 遺構面下の確認調査 (P-27グリッド)	P L 79 加曾利 B 式土器
	2, 同1 (P-28グリッド断面)	P L 80 管谷式・安行式土器
	3, 同1 (R-28グリッド断面)	P L 81 後・晩期土器
	4, 同1 (R-29グリッド断面)	P L 82 後・晩期土器
	5, 4区東半部 遺物包含層確認調査	P L 83 特殊土器
	6, 同5 (Q-31グリッド)	P L 84 諸磯 a 式・同 b 式土器
	7, 同5 (P-31グリッド断面)	加曾利 E 2 式・同 3 式土器
	8, 同5 (O-31グリッド断面)	P L 85 加曾利 E 3 式土器
P L 38	1, 5区遺物包含層の状況 (西から)	称名寺 1 式・同 Ⅱ 式土器
	2, 同1 (Q-34グリッド周辺)	堀之内 Ⅱ 式土器
	3, 同2	P L 86 加曾利 B 式土器
		P L 87 安行式土器

後・晩期土器
5区出土石器
P.L. 88 石鏃
P.L. 89 有舌尖頭器・石鏃
P.L. 90 石鏃
削器
P.L. 91 削器
P.L. 92 削器
P.L. 93 加工痕ある剥片
P.L. 94 加工痕ある剥片
使用痕ある剥片
P.L. 95 使用痕ある剥片
石核
P.L. 96 石核
P.L. 97 打製石斧
P.L. 98 打製石斧
P.L. 99 打製石斧

P.L.100 打製石斧・礮器・磨製石斧
P.L.101 磨石・凹石
P.L.102 凹石
台石
P.L.103 台石・石皿
P.L.104 砥石
多孔石
P.L.105 磨身具
土偶・岩版・石棒
P.L.106 花壇下層式土器 文様集成 (1)
P.L.107 花壇下層式土器 文様集成 (2)
P.L.108 花壇下層式土器 文様集成 (3)
P.L.109 花壇下層式土器 文様集成 (4)
P.L.110 粘土塊 (1)
P.L.111 粘土塊 (2)
P.L.112 粘土塊 (3)

報告書抄録

フリガナ	ゴメウシシミズダイセキ
書名	五目牛清水田遺跡
副書名	一般国道(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第144集
編著者名	藤巻幸男他
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北郷村下箱田784-2
発行年	西暦1993年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ゴメウシシミズダイセキ 五目牛清水田	ゴメウシシミズダイセキ 佐波郡赤堀町 大字五目牛 清水田	104612		36°21'28"	139°12'45"	昭和59年8月～ 昭和61年2月 19840801～ 19860218	17,000㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
五目牛清水田	住居	縄文時代	竪穴住居	6軒	花積下層式期土器・石器・石材 多数	縄文土器胎土分析 38点 プラントオパール分 析 25点 花積下層式期黒曜石 産地年代同定 50点	
			土坑	6基			
			集石土坑	22基			同期純粘土塊 178点
			配石	8基			他に前期～晩期土器・石器
			遺物包含層	1基	耳飾り・土偶・岩版・石棒		
			旧河道	1本			
	住居	古墳時代	竪穴住居	47軒	4世紀中葉～8世紀前半	水田土壌 プラントオパール分 析 花粉・珪藻分析 種子同定	
	墓	平安時代	掘立柱建物	17棟	土器 石器		
	墓		竪穴状遺構	2基	須恵器高台付短頸甕 1個		
	生産		特殊遺構	5カ所	壺 15個		
			祭祀跡	3カ所	形象・円筒埴輪		
			前方後円墳	1基	浅間B軽石(1108年降下)直下出		
			土坑	34基	土短刀		
			溝		平安時代瓦		
			畠	4面以上			
			水田	11面			
	住居	中世以降	溝	28条	中～近世陶磁器類 内耳ナベ		
	墓		掘立柱建物	5棟	石鉢・石臼・茶臼・玉輪塔・砥石		
			井戸	9本			
			墓壇	2基	中世青磁4片		
			土坑	49基	第二次大戦中統制番号 「岐955」銘入り陶器ナベ 1個		

五目牛清水田遺跡



国土地理院20万分の1(宇都宮)を使用

I 発掘調査に至る経過

1. 調査に至る経過

上武道路は国道17号線の交通混雑の解消を目的として計画されたバイパス道路のひとつで、深谷バイパスの上武インターチェンジ（埼玉県熊谷市西別府）を起点とし、利根川を渡河して群馬県尾島町に入り、伊勢崎市の東側を迂回して、前橋市田口町で国道17号線に取り付け、全長40.5kmのバイパスである。

群馬県教育委員会では計画路線に沿った幅2kmの範囲で遺跡分布調査を実施し、472カ所の埋蔵文化財包蔵地を確認、最終的に発掘調査を要する対象地は57カ所となった。これにより、昭和48年度に建設省関東地方建設局と群馬県教育委員会の間で、発掘調査委託契約が締結され、第1期工事区画である新田郡尾島町から前橋市二之宮町の国道50号線までを対象地域として、昭和49年1月から発掘調査が実施されることとなった。

発掘調査は県教育委員会により、南から順次進められ、昭和53年度以降は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団がこれを引き継いだ。当初一班で進めてきた調査も、工事の進捗に対応して、昭和59年度から三班、60年度から四班編成で対応し、発掘調査の進捗を図った。また、遺跡範囲の確定を目的とする事前試掘調査を実施し、計画策定に必要な遺跡の内容と範囲を確認するとともに、分布調査では不明確であった低地部分についても、遺漏のない対応が図られた。

五目牛清水田遺跡は粕川右岸の低地にあり、計画当初は調査対象地から外されていたが、昭和59年度に実施された試掘調査により、微高地には縄文時代の包含層と古墳時代から奈良時代にわたる集落が広がり、沖積地には水田が重層して存在する大規模な遺跡であることが確認された。これにより、本遺跡は早速昭和59年8月から調査を開始することになった。



第1図 五目牛清水田遺跡の調査範囲

2. 遺跡の位置と地形

五日牛清水田遺跡は、群馬県南東の平野部、佐波郡赤堀町に所在する。伊勢崎市街地の北北東2.5kmの所に位置する。

この地域は、地形的には南流する粕川を境に、西側に赤城山南麓の樹枝状に開析された低台地が広がり、東側には大間々扇状地桐原面の広大な低台地が広がっている。両台地の比高差はこの地点ではほとんどなく、北から南へ緩やかに傾斜した低平地がつづいている。両台地とも中部ローム以上をのせるローム台地である。赤城山南麓低台地地域では、小河川を伴う低地と南北にのびる細長い台地が交互に南下し、台地末端付近に流れ山を伴うものが多い。本地域にも石山・洞山・地藏山と呼ばれる流れ山があり、これらにはいずれも古墳群が形成されている。

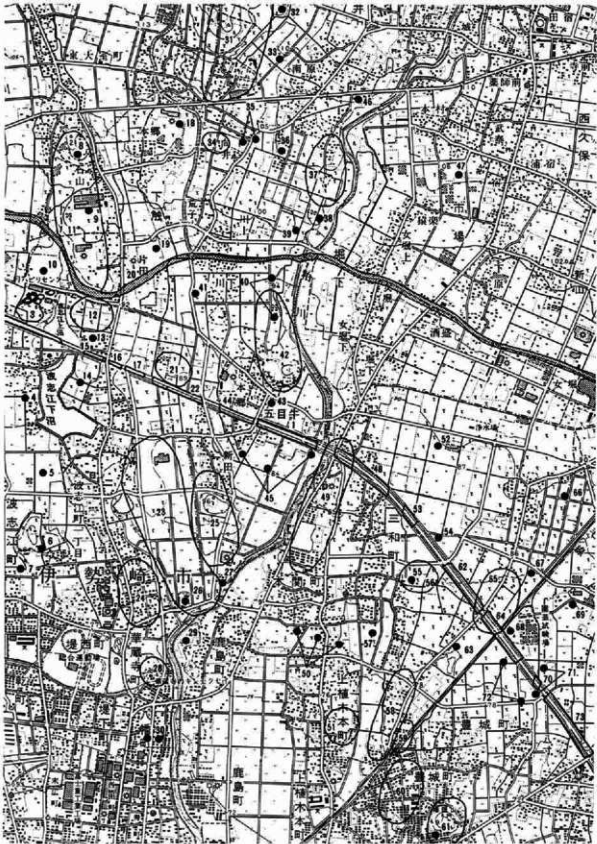
粕川はこの両ローム台地の間を蛇行しながら南流するが、本遺跡はその蛇行部に形成された中州状の微高地と低地に立地している。低地は東西500m、南北1300mの広さで、このうち微高地は現粕川寄りにあたる。この微高地・低地は大間々扇状地の礫層を基盤層としており、ローム層の堆積は認められない。標高は低地部が84.5m、微高地が85.5mで、粕川現河道との比高差は微高地で5.5mである。また、西側の台地は87m、東側の台地は86mである。

3. 周辺の遺跡

本地域は中・小河川や湧水地などの水に恵まれており、各時期にわたって濃密な遺跡分布が認められる。旧石器時代では環状構造の遺物分布が確認された下触牛伏遺跡(10)を含む4遺跡が認められるが、ローム層中の確認調査が実施された遺跡はまだ少なく、今後の調査進捗により増加するであろう。縄文時代では草創期から晩期にいたる全期間の遺跡が確認されており、本地区が狩猟・採集社会にも適合した地域であったことを示している。なかでも前期の遺跡が多く、本遺跡周辺でも五日牛南組遺跡(44)や八幡林遺跡(21)は、本遺跡と関連する前期前半期の集落が調査されている。

弥生時代の遺跡の確認例はまだ少なく、本遺跡を含めて4カ所が確認されているにすぎないが、本地域は水田耕作にも適した地域であり、今後増加がはかれるであろう。そのことは、古墳時代以降の遺跡分布からも読み取ることができる。赤城山南麓地域で最も古い前方後円墳である華蔵寺裏山古墳(28)、5世紀代では全長81m帆立貝式の丸塚山古墳(57)、6世紀代では全長100m級の前方後円墳五日牛二子山古墳などの主要大形古墳をはじめ、5～7世紀代の古墳群がひしめくように集中している。古墳時代の遺跡分布もほぼ全域に認められ、本遺跡周辺では弥生時代終末から継続する伝統集落も認められる。また、豊城町北東部には6世紀前半の豪族居館である原之城遺跡(72)が存在するなど、本地域が古墳時代の一大生産地であったことを示している。

この豊かな生産基盤はつづく奈良・平安時代にも引き継がれたであろう。本地域は古墳時代以降の交通上の要衝でもあり、上武道路の北側に東西に走る現道が東山道と想定されている。また、その南の上植木本町には、山田寺式系統の単弁八葉蓮華文軒丸瓦をもち、7世紀第3四半期の創建と推定される上植木廟寺(50)が置かれている。これらの存在は、本地域が律令制による地域把握の一つの拠点であったことを示している。この他に、平安時代終末期に開削された大用水堀である女堀(20)が、推定東山道の北側に沿って通過している。



第2図 周辺の遺跡分布

0 1:25,000 1,500m

第1表 五日牛清水田周辺の遺跡

No	遺跡名	時期	検出された遺構				遺構の概要	文献
			住居跡	生息跡	墓跡	その他		
1	五日牛 清水田遺跡						本報告書の遺跡	
2	波志江 今宮遺跡	古墳 奈良 平安 近世	○		○	溝 灰窯	神沢川左岸に位置する。古墳は東側、波志江沼との間の台地上にある。6世紀から7世紀にわたる8基の古墳が調査された。台地の西側には狭い谷地が入り込み浅間Bテフラ下の水田跡と溝が検出されている。	1 2
3	宮貝戸古墳群	古墳			○		波志江今宮遺跡の北側に位置し、今宮遺跡、下触牛伏遺跡で検出された古墳との関連が強く考えられる。4基調査されている。	3
4	宮貝戸下遺跡	奈良	○		○	井戸・溝	神沢川左岸の台地西縁に立地する。住居跡1軒を検出した。	4
5	大沼下遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○ ○			溝	赤城山から延びる舌状台地の先端部に位置する。古墳時代前期から平安時代にかけての住居跡を検出した。	5
6	波志江 棚形山遺跡	縄文					縄文時代の早期の土器片、石器が出土している。	6
7	西畑岡遺跡	古墳 奈良・平				溝 溝・井戸	大沼下遺跡の南に位置する。溝・井戸を検出した。	5
8	石山遺跡	縄文				包舎層	石山丘陵の南側斜面に位置する。100余点の尖頭器をはじめとし多数の剣片等の遺物を出土した。	7
9	庚塚古墳	縄文 古墳			○	集石 小石室	赤堀町大字下触の西端に続く小丘上に位置する。縄文時代前期の土器片と、5世紀末の小石室遺構、7世紀末の古墳を検出。	8
10	下触牛伏遺跡	先土器 縄文 古墳	○ ○		○	陥穴・土坑	神沢川の左岸ローム台地上に位置する。先土器時代、縄文時代前期、古墳時代後期の遺構・遺物を検出した。	9
11	下触片田 古墳群	古墳			○		石山、庚塚、片田と南北に続く低い丘陵上には、『雑覧』によれば70基以上の古墳が分布していた。厩物人物地輪が出土した。	8 60
12	牛伏古墳群	古墳			○		波志江沼東側の台地上に位置し、この台地上に牛伏古墳群、祝堂古墳群および大沼上遺跡が分布する。1号墳の形状は直径約30mの円墳で、主体部は角閃石安山岩使用の横穴式石室である。	11
13	祝堂古墳	古墳			○		平地に築かれた直径30mの円墳で牛伏古墳群の南に位置する単独墳。主体部は角閃石安山岩使用の横穴式石室である。また、石室の基礎にあたる部分には版築技法が用いられている。	11 12
14	大沼上遺跡		○				土器使用の住居跡1軒を検出した。	11
15	波志江 天神山遺跡	縄文				包舎層 陥穴・土坑	波志江沼に東接し、台地ほぼ中央に位置する。縄文時代、及び近世の溝と土坑を検出した。	13
16	波志江 六反田遺跡	先土器 縄文 平安 近世	○	○		溝 掘立・井戸	石山丘陵から南に延びる赤城山斜面台地の縁辺に位置する。平安時代の住居跡と浅間Bテフラによって埋没した水田が検出された。	14

3. 周辺の遺跡

No	遺跡名	時期	検出された遺構				遺 構 の 概 要	文 献
			住居跡	生産跡	高跡	その他		
17	渡志江 中嶋岸遺跡	縄文 平安 中世		○ ○		溝	西穂川左岸の沖積台地上に位置する。浅間Bテフラに埋没した水田と溝が検出された。	15
18	下触下寺遺跡	縄文 古墳 奈良 近世	○ ○		○	井戸・大溝	桂川右岸の沖積低台地上に位置する。4世紀末ないしは5世紀初頭の周溝墓、古墳時代～奈良時代の住居跡4軒が調査された。	16
19	中畑遺跡	縄文 古墳	○			竪立	西穂川右岸の低台地上に位置する。古墳時代中・後期の竪穴住居跡35軒を調査した。	17
20	女堀	平安 中世				用水遺構	下触牛伏遺跡の東側に遺構の一部が残存する。前橋市上泉町付近の旧利根川を起点に終点の佐藤郡東村西国定まで、赤城山南麓から大間々扇状地1面にかけて幅15～30m、深さ3～4mの規模で12.75kmにわたって開削された用水遺構である。	18
21	八幡林古墳群	縄文 古墳	○		○		畑下八幡遺跡の北側に接する。縄文時代前期山の住居跡4軒と6世紀～7世紀構築の古墳4基を検出した。	19
22	畑下八幡遺跡	先土器 縄文 奈良 平安	○ ○ ○			包含層 土坑・竪穴 掘立・溝 井戸	西側に沖積地にはさまれた台地上に位置する。先土器時代の遺物は暗色帯上部から3つの文化層として確認され、縄文時代前期、奈良～平安時代の住居跡も検出された。	20
23	賀沼東古墳群	縄文 古墳	○ ○		○	包含層 竪穴・溝	三郷地区の東端、西穂川と粕川右岸の低地帯に挟まれた丘陵地に連続し連なった古墳群で、70基以上の存在が確認されていた。ほとんどが円墳で、6世紀末～7世紀中頃にかけ構築された。縄文および古墳時代前期の住居跡、方形周溝墓も検出している。	3 4 21
24	台所山古墳群	古墳			○		粕川の右岸、華蔵寺の北方に位置する台地上にある。『総覧』によれば7基が確認されていたが、調査時には姿をとどめていなかった。調査された1基は凝灰岩質の箱石積の主体部を持つ。	22 60
25	地蔵山古墳群	古墳			○		赤城山の台地上に位置する。熊手塚古墳をはじめ5～8世紀にいたる古墳55基が群集する。	23 24
26	間之山遺跡	縄文 弥生 古墳	○ ○		○ ○		西穂川が粕川に合流する手前の左岸に位置する。浅間C軽石で覆われた住居跡1軒を調査した。間之山裾部からは縄文時代早期の土器が出土している。	12
27	間之山東遺跡	縄文 奈良・平	○				間之山遺跡の東約250m、粕川の右岸台地上に位置し、鬼高期の住居跡、縄文時代中期の土器片を検出している。	12
28	華蔵寺 裏山古墳	古墳			○		粕川右岸の独立丘陵上に位置する、主軸長約40mの前方後円墳と考えられる。複口縁蓋形土器の破片が出土し、5世紀初頭のものと推定されている。	25
29	上西畑遺跡	古墳 奈良 中近世	○ ○		○	溝 井戸	粕川によって形成された浸蝕崖左岸台地上に位置する。住居跡26軒、方形周溝墓5基、石塚1基、溝15条、井戸3基等を検出した。	26
30	八幡町遺跡	古墳	○			小ピット群 土坑	華蔵寺丘陵から南にのびる舌状微高地の先端部寄りに位置する。古墳時代の住居跡、平安時代の溝等が検出された。	27 28

1 発掘調査に至る経過

No.	遺跡名	時期	検出された遺構				遺 構 の 要 要	文 献
			住居跡	生産跡	墓跡	その他		
31	多田山 田向古墳群	古 墳			○		多田山の東斜面に立地する1基は切石の石棺が用いられた。また、この丘陵の南端部に位置する田向古墳群は、調査された7基全てが円墳で、7世紀代の構築と考えられる。	29 30
32	田向遺跡	縄 文 古 墳 奈・平	○ ○ ○				多田山丘陵の東南、沖積地を覆む台地上に位置する。縄文時代中期の住居跡1軒、以後平安時代まで42軒の住居跡を検出した。	31
33	柳田遺跡	縄 文 古 墳 奈・平	○ ○ ○			土坑・集石 土坑	毒島から続く沖積地の左岸台地上に位置する。沖積地をはさんだ両側に田向遺跡がある。縄文～平安時代にかけての住居跡・土坑墓等を検出した。	31
34	向井古墳群	古 墳			○		桂川の左岸に位置する。1基が調査されている。	29
35	下触向井遺跡	縄 文 古 墳 奈・平		○ ○			毒島湧水池による開析谷右岸の微高地上に位置する古墳時代後期～奈良・平安時代の集落遺跡。縄文時代の土坑からは早期末の土器が、平安時代の住居跡・土坑からは墨書土器が出土した。	32 33
36	今井 赤坂南遺跡	縄 文 古 墳 奈・平	○ ○ ○			土坑	毒島からの湧水による谷地状の低地を挟んで、向井遺跡と相対する。縄文～奈良・平安時代にかけての住居跡を検出した。	34
37	南原古墳群	古 墳			○		粕川右岸に発達する舌状台地上に分布する。「跡寛」によれば、愛宕山古墳を中心に円墳27基が記載されているが、そのほとんどが消滅した。6基が調査されている。	35 60
38	今井南原遺跡	縄 文 弥 生 古 墳 奈・平	○ ○ ○ ○		○	掘立	粕川右岸の洪積台地上に位置する。縄文時代前期の住居跡1軒、弥生時代後期～古墳時代44軒、奈良・平安時代115軒、掘立柱建物跡4棟を検出した。古墳からは小形の乳文甕が出土している。	36
39	川上遺跡	古 墳 安	○ ○			掘立	粕川と桂川に挟まれた洪積台地上に位置する。古墳時代前・後期、平安時代の住居跡を検出。掘立柱建物は礎石を有している。	37
40	北通遺跡	縄 文 古 墳 平 安	○ ○ ○			土坑 井戸	粕川右岸の台地縁辺に立地する。縄文～平安時代の住居跡を検出した。「大門」の墨書土器が出土した。	38
41	廣島遺跡	縄 文 奈・平 中・近	○ ○			土坑 土坑 溝	旧桂川の左岸、台地縁辺に位置する。縄文時代前期と、奈良・平安時代の住居跡・土坑等を検出した。墨書土器が出土。	38
42	羽山古墳群	古 墳			○		粕川右岸の残丘状の台地上にある。「跡寛」では17基が確認されていた。今までに7基が調査されている。	38 60
43	五百牛 洞山遺跡	縄 文	○			土坑	洞山の丘頂部に近い東斜面、西南斜面から低地にかけて縄文時代後期の住居跡及び土坑を検出した。	39
44	五百牛 南組遺跡	縄 文 古 墳 近 世	○ ○ ○		○	土坑・集石 木炭甕 掘立・井戸	赤城山南麓の多田山丘陵から南に延びる台地南端に立地する。縄文時代前期の住居跡4軒、古墳3基、近世～近代の埋蔵跡が6棟検出されている。	40
45	五百牛東 遺跡群	縄 文 古 墳 奈・平	○ ○ ○			包含層 掘立	粕川と旧桂川に挟まれた微高地上に、3地点に分かれて立地する。縄文時代～平安時代までの住居跡、掘立柱建物跡等検出した。B地点からは墨書土器が出土している。	41

3. 周辺の道跡

№	道跡名	時期	検出された遺構				遺構の概要	文献
			住居跡	生産跡	墓跡	その他		
46	今井学校道跡	古墳	○			溝	船川とその支流鍋木川との合流点右岸段丘上に占地する。石田川期と古墳時代後半の住居跡を検出した。	42
47	市場寺回道跡	縄文				包含層 土坑	船川と鍋木川の合流点の東にあり、大林寺の西方およそ300mに位置する。土坑は22基検出され、出土物から縄文時代前期後半のものと思われる。	43
48	上植木 光仙所遺跡	縄文 古墳 平安 近世	○			陥穴 掘立 井戸・土坑	大間々扇状地の西部部に位置し、船川左岸台地上に立地する。5世紀末～7世紀の古墳10基、平安時代の小鍛冶跡等を検出した。	44
49	岡山古墳群						船川左岸の沖積台地上に位置する古墳群。7世紀から8世紀初頭にかかると推定される古墳時代の末期に近い時期に形成された。	45
50	上植木薬師寺	奈良～				寺院跡	赤城山南麓の端部、南北に延びる舌状微高地上に立地している。1982(昭57)年からの調査で南北と西辺を囲む溝、標列が確認され、膨大な量の遺物が出土している。7世紀後半に創建され、約300年間存続したものと推定される。	46
51	恵下道跡	古墳 奈良・平	○ ○	○	○	溝 溝・井戸	大井戸跡水池による開析谷に面する舌状微高地に立地する。古墳時代前期～奈良・平安時代の住居跡、古墳、溝等検出した。古墳はいずれも6世紀中頃の構築である。	47
52	舞台道跡	古墳 奈良	○ ○			溝	大井戸跡水池の開析谷に面する右岸台地上に位置する。古墳時代前期～奈良時代の住居跡、溝を検出した。井戸からは14世紀代の板碑5基が出土した。	48
53	上植木 窓町田道跡	古墳 奈良・平 中・近		○ ○ ○	○	井戸 井戸・溝	大井戸跡水池による開析谷右岸の台地上に位置する。古墳時代～平安時代の住居跡、土坑、火葬跡等を検出した。	49
54	舞沼東道跡	縄文 古墳 奈良・平 中・近	○ ○ ○			井戸・溝	大井戸跡水池の開析谷に面する微高地上に位置する。縄文時代中期～平安時代の住居跡が検出された。井戸からは板碑が出土している。	48
55	高山道跡	縄文	○				大間々扇状地の西端台地の縁辺部に位置し、縄文時代前期の住居跡が調査されている。	50
56	高山古墳群	古墳			○	方形特殊遺構 溝	赤城山南麓の開析谷から延びる舌状台地の先端部に立地する高山と呼ばれる独立丘陵の裾部に構築された古墳群。竪穴式石室を持つもの1基、横穴式石室のもの2基、計3基を調査した。7世紀初頭と考えられる。斬形埴輪が出土した。	50
57	丸塚山古墳	古墳			○		大井戸跡水池による開析谷に挟まれた横積微高地の南端部に位置する。後門部墳頂に箱式格状竪穴式石室3室を持つ。全長81mの帆立貝式前方後円墳。5世紀後半の構築。	51
58	大道西古墳群	古墳			○		水田を挟んで恵下道跡と対峙している。3基の古墳を調査。	12
59	大道東古墳群	古墳					豊城町の標原山北方に点在するものであったが、開墾などによりすべて平夷されたため、構築の時期や状態は不明な部分が多い。	12

I 発掘調査に至る経過

No.	遺跡名	時期	検出された遺構				遺構の概要	文献
			住居跡	生産跡	墓跡	その他		
60	権現山 北古墳群						『遺跡台帳』には4基が記載されているが、現在はすべて平夷されている。	29
61	権現山古墳群	先土器 古墳			○	包蔵地	権現山は天ヶ池を水源とする開析谷の西側台地上にある独立丘陵のひとつ。6～7世紀に構築された古墳4基が調査されている。また、先土器時代の石器が出土している。	52
62	書上本山道跡	先土器 古墳 平安	○			包含層 井戸 溝・掘立	大井戸湧水池による開析谷の左岸台地上に位置する。先土器時代のユニット2、古墳時代の住居跡4軒、平安時代の溝、掘立等を検出した。瓦破片、石椀骨磁器が出土している。	53
63	天野沼遺跡	古墳	○				天野沼を中心として北から東西に囲い込むように形成されている台地の基部に位置する。古墳時代末期の竪穴住居跡5軒が検出された。	50
64	書上 上原之城遺跡	奈・平 中世	○ ○			掘立・溝・井 戸	天ヶ池湧水池による開析谷の右岸台地上に位置する。掘立柱建物跡の在り及び多数の墨書土器の出土等から、調査地は集落の中核部分と思われる。	49
65	書上古墳群				○		2つの沖積地に挟まれた台地の東辺に位置する。2基の古墳が調査された。いずれも7世紀末～8世紀初め頃の構築と考えられる。『跡敷』によれば30基の古墳が記載されているが、墳丘の残存しているものは1つもなくなっている。	49 60
66	天ヶ池遺跡	縄文 古墳 奈良	○ ○ ○				天ヶ池湧水池南の台地東縁辺に位置する。縄文時代から古墳奈良時代にかけての住居跡が8軒確認された。	50
67	下書上遺跡						包含層から土師器片数片が出土している。	50
68	梨園芸試験場 第二遺跡	奈・平	○			掘立・井戸 土坑	天ヶ池湧水池の開析谷右岸台地上に立地する。8世紀後半から10世紀初頭にかけての住居跡7軒を抽出した。	54
69	中西原遺跡	縄文 古墳 奈・平	○ ○ ○				天ヶ池より南下する開析谷の東側台地上に位置する。縄文時代～平安時代の住居跡が検出している。	55
70	書上 下吉祥寺遺跡	縄文 古墳 平安 中世	○ ○ ○ ○			土坑 ○ 掘立・溝	天ヶ池湧水池を谷頭として樹枝状に広がる小開析谷の右岸台地上に立地する。縄文時代前期の竪穴住居跡3軒、古墳時代9軒平安時代1軒、中世基壇1基、掘立6棟、溝、土坑等を抽出した。	49
71	下吉祥寺遺跡	縄文 古墳 奈・平	○ ○ ○			製鉄遺構・溝	天ヶ池遺跡の北方約1kmに位置する。縄文時代の住居跡3軒、古墳時代から奈良・平安にかけての竪穴住居跡、甍の周囲に槽状施設を持つ1軒を含む、63軒が調査された。	56 57
72	原之城遺跡	古墳 平安	○ ○			掘立・溝	天ヶ池湧水池による開析谷右岸の狭帯台地上に位置する。長方形区画の廻りに壕を持つ古墳時代中期の環壕居館跡、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・竪穴跡・内部区画の溝等が抽出されている。	58
73	八寸 大道上遺跡	縄文 古墳 奈・平 中近世	○ ○ ○ ○	○		築石 掘立・溝・井 戸 掘立・溝	天ヶ池湧水池による開析谷左岸の狭帯台地上に位置する。縄文時代の集石遺構14基、土坑12基を抽出。古墳時代の住居跡はほとんど重複はなく、後期のかなり取られた時期のもので、飾り玉を製作していた竪穴住居が1棟含まれる。	59

参 考 文 献

- 1 石塚久則他「今宮遺跡」朝鮮埋文 1981
- 2 「波志江今宮遺跡」昭和60年度一般国道(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理概要」朝鮮埋文 1986
- 3 中澤貞治「宮貝戸古墳群・蟹沼東古墳群」伊勢崎市教育委員会 1983
- 4 中澤貞治他「蟹沼東古墳群・宮貝戸下遺跡」伊勢崎市教育委員会 1978
- 5 村田喜久夫・松村一実「大沼下遺跡・西福岡遺跡」伊勢崎市教育委員会 1977
- 6 下城 正「波志江権現山遺跡」『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市 1967
- 7 相沢忠洋「群馬県赤坂石山遺跡」『考古学ジャーナル6』1967
- 8 松村一昭・松村水子「昭和63年度埋蔵文化財発掘調査概報」赤堀町教育委員会 1988
- 9 岩崎幸一「下城牛伏遺跡」朝鮮埋文 1986
- 10 松村一昭・松村水子「下城片田古墳群発掘調査概報」赤堀町教育委員会 1989
- 11 中澤貞治「牛伏第1号墳・祝堂古墳・大沼上遺跡」伊勢崎市教育委員会 1982
- 12 「伊勢崎市史 通史編1」1987
- 13 「波志江天神山遺跡」昭和60年度一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理概要」朝鮮埋文 1986
- 14 「波志江大反田遺跡」昭和60年度一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理概要」朝鮮埋文 1986
- 15 「波志江中峰岸遺跡」昭和60年度一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理概要」朝鮮埋文 1986
- 16 松村一昭・松村水子「下城下寺遺跡及び磯十二所遺跡発掘調査概報」赤堀町教育委員会 1987
- 17 松村一昭・宮田水子「中城遺跡・女堀用水遺構発掘調査概報」赤堀町教育委員会 1986
- 18 鹿田雄三「女堀」朝鮮埋文 1984
- 19 松村一昭「八幡林古墳群及び文住居跡調査概報」赤堀村教育委員会 1982
- 20 岩崎幸一「堀下八幡遺跡」朝鮮埋文 1990
- 21 中澤貞治「蟹沼東古墳群」伊勢崎市教育委員会 1988
- 22 横沢克明「台所山古墳」『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市 1987
- 23 松村一昭「赤堀村地蔵山の古墳1」赤堀村教育委員会 1978
- 24 松村一昭「赤堀村地蔵山の古墳2」赤堀村教育委員会 1979
- 25 坂崎一寿「華蔵寺裏山古墳」『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市 1987
- 26 村田喜久夫・須長善一「上西根遺跡」伊勢崎市教育委員会 1985
- 27 早川隆弘「八幡町遺跡(B地区)」伊勢崎市教育委員会 1988
- 28 松村一実・須長善一「八幡町遺跡(D地区)」伊勢崎市教育委員会 1990
- 29 「群馬県遺跡台帳1(東毛編)」群馬県教育委員会 1971
- 30 松村一昭「田向古墳群」『群馬県史 資料編3』群馬県史編纂委員会 1981
- 31 松村一昭「今井柳田遺跡発掘調査概報」赤堀村教育委員会 1982
- 32 松村一昭・松村水子「町内遺跡発掘調査報告」赤堀町教育委員会 1989
- 33 松村一昭「下城内井遺跡発掘調査概報」赤堀村教育委員会 1980
- 34 松村一昭・松村水子「今井赤坂南遺跡発掘調査概報」赤堀町教育委員会 1990
- 35 松村一昭「南原古墳群」『群馬県史 資料編3』群馬県史編纂委員会 1981
- 36 松村一昭「今井南原遺跡発掘調査概報」赤堀村教育委員会 1981
- 37 松村一昭「川上遺跡・女堀遺構発掘調査概報」赤堀村教育委員会 1980
- 38 松村一昭「洞山古墳群及び北浦・重屋遺跡発掘調査概報」赤堀村教育委員会 1983
- 39 松村一昭「五目牛瀬山遺跡発掘調査概報」赤堀村教育委員会 1980
- 40 坂井 隆「五目牛瀬山遺跡」『年報 5』朝鮮埋文 1986
- 41 松村一昭「五目牛瀬山遺跡群及び赤堀村8号墳発掘調査概報」赤堀村教育委員会 1980
- 42 松村一昭・松村水子「町内遺跡発掘調査概報」赤堀町教育委員会 1990
- 43 松村一昭・松村水子「昭和60年度埋蔵文化財発掘調査概報」赤堀町教育委員会 1989
- 44 飯塚 誠「上城木光仙所遺跡」朝鮮埋文 1980
- 45 中澤貞善「関山古墳群」『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市 1987
- 46 早川隆弘・松村一実・須長善一「上城木所寺一昭和62年度発掘調査概報」伊勢崎市教育委員会 1988
- 47 村田喜久夫「恵下遺跡」伊勢崎市教育委員会 1979
- 48 中澤貞治・村田喜久夫「無沼東遺跡・舞台遺跡」伊勢崎市教育委員会 1977
- 49 飯塚 誠「書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上城木宅町田遺跡」朝鮮埋文 1988
- 50 中澤貞治「高山遺跡・天ヶ見遺跡・天野沼遺跡・下書上遺跡」伊勢崎市教育委員会 1977
- 51 坂崎一寿「丸塚山古墳」『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市 1987
- 52 横沢克明「権現山古墳」『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市 1987
- 53 「書上本山遺跡」昭和59年度一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理概要」朝鮮埋文 1985
- 54 井上唯雄他「須賀宮試験場第二遺跡・下江田前遺跡」群馬県教育委員会 1974
- 55 「東村史」東村史編纂委員会 1979
- 56 村田喜久夫「下吉祥寺遺跡」伊勢崎市教育委員会 1979
- 57 中澤貞治「原之城遺跡・下吉祥寺遺跡」伊勢崎市教育委員会 1981
- 58 中澤貞治「原之城遺跡発掘調査報告書」伊勢崎市教育委員会 1988
- 59 坂井 隆「八丈大路上遺跡」朝鮮埋文 1989
- 60 「上毛古墳群」群馬県史跡名勝天然記念物報告第5編 群馬県 1938

4. 調査の方法と経過

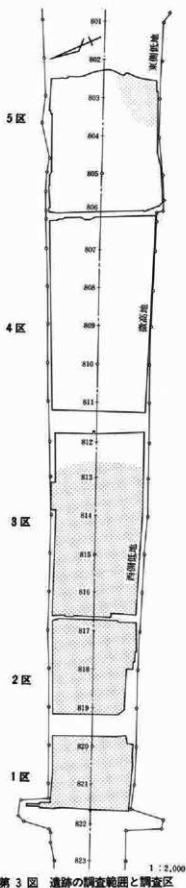
昭和59年度に実施された試掘調査の結果、粕川右岸の微高地および低地には、全域にわたって遺跡が展開していることが判明した。その対象面積は17,000㎡であり、当初から全域にわたる多面調査の必要性が見込まれていた。

発掘調査区は390mと長大なため、調査区を横断する現有の生活道路をもとに、西側から1区・2区・3区・4区・5区と区分し、区毎に調査を進行することとした。このうち、1区・2区と3区の大半が低地の調査区、3区の一部と4区・5区が微高地であり、5区の一部にも旧河道の低地が存在した。

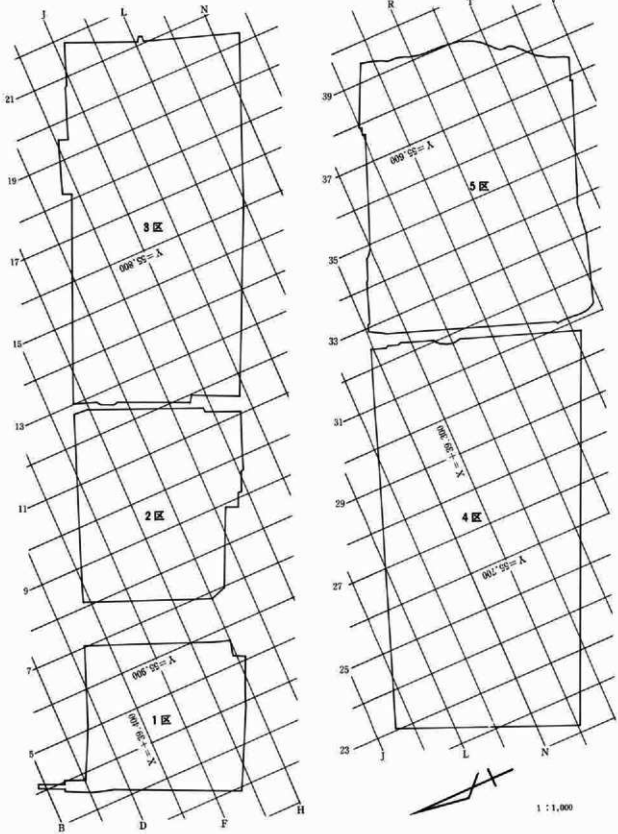
測量の基準グリッドは、調査区が長大であり、約半分が水田域であることを考慮して10mグリッドを採用し、国家座標を基準に設定した。グリッドの名称は、長い東西方向を西側から順に1～40、南北方向を北から順にA～Vとし、グリッド名は北西隅の杭を基準に呼ぶこととした（例えばE-5グリッド）。

表土の掘削、および10cm以上の掘削はバックホーを使用し、その他は手作業による発掘を行った。排土は調査区外への搬出が不可能なため、当面4区を排土置き場とし、1～3区の低地部を主力に調査を進行した。調査が進捗するにしたがって調査面が想定されていた以上に多面に及ぶことが判明し、最終的には西側低地で9面、微高地でも部分的に5面の調査が必要となった。そのため、排土の移動や置き場の確保は困難を極めた。さらに最終調査面である縄文時代の遺物包含層は微高地全域に及んでおり、3区から4区西半の地区では層厚80cmにおよぶ遺物包含層下に集落の存在することが判明した。

県内において、同一地点で9面の水田が確認された例は他になく、また縄文時代の文化層は上面を古代以降の重畳する文化層でバックされた状態であったため、試掘調査段階でその内容と広がり正確に把握することは不可能であった。そのため、当初計画の調査工程は大幅な変更の必要性が生じた。以上の要因を打開するため、昭和60年8月以降は他調査班の応援体制を要請して調査人員の増強を図るとともに、数回に及ぶ調査工程の見直し・調整をはかりながら、昭和61年2月18日をもって発掘調査を全て終了した。



第3区 遺跡の調査範囲と調査区



第4図 グリッド配置図 (1 : 1,000)

5. 基本土層

本遺跡は粕川によって形成された微高地・低地に立地している。基盤層は東側台地と同じ大間々畷状地砂礫層で、上層にはローム層の堆積は認められず、全て粕川によって運ばれた河川堆積層で構成されている。この地区は粕川沿いの東半部がやや高い微高地となっており、西側低地部とは土層の堆積状況が異なっている。また、低地・微高地とも下位に粕川の旧河道が存在し、さらに低地部では粕川の氾濫層で埋没した水田が7層にわたって存在するため、両地点を対比させることは不可能である。そのため、基本土層は低地部と微高地部とに分けたが、I層からV層までは共通の区分となっている。なお、5区の一部にも低地が存在しており、この地点については西側低地と共通の土層区分を行った。

I 表土層



第5図 基本土層模式図

II 縄文時代の調査

1. 調査概要

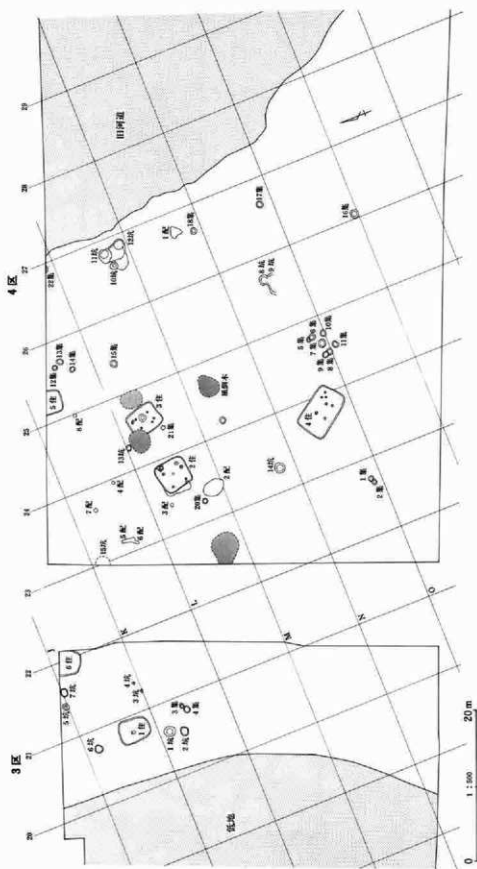
縄文時代の調査では、前期初頭花積下層式期の集落と前期初頭から晩期に及ぶ遺物包含層、および旧河道の存在が判明した。検出された遺構は住居6軒、土坑15基、集石土坑22基、配石8基があり、このうち関山式期の土坑1基以外は全て花積下層式期に属す。

まず発掘調査により判明した事項をもとに、縄文時代の本遺跡の変遷を追ってみよう。

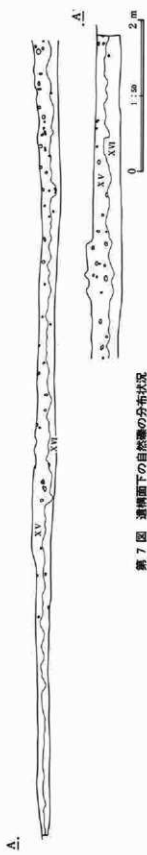
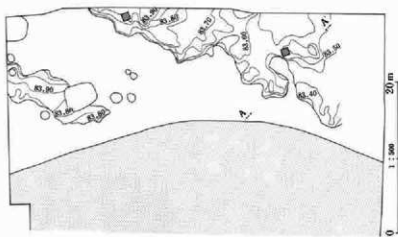
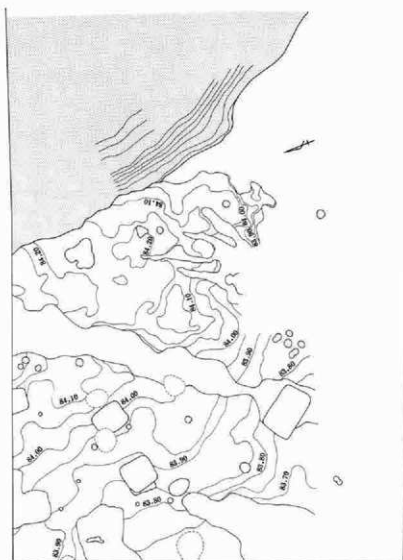
縄文時代前期初頭以前、粕川（あるいは一支流）は微高地の中央部を流れていたが、その後流路は西側の台地寄りに変流し、微高地の旧河道は埋没をはじめた。埋没の過程で数次の氾濫をくりかえすが、そのなかには微高地上に礫を押し流す規模の氾濫もあったことが、Ⅳ層上面の礫の存在から判かる（第7図）。この段階まで本地区に人の活動は認められない。前期初頭になり、本地区が安定すると、人々は旧河道の西側微高地上に集落を設置し、粕川の河床礫を持ち込んで一定期間生活を営んだ。集石土坑の礫はほとんどが粕川の河床礫であるが、旧河道東側の微高地上にはこの時期の遺物分布がほとんど認められず、この地区は活動域からはずれていたようである。おそらく、粕川は西側低地部を流れていたであろう。花積下層式期後半には集落は移動するが、その有力候補は西側台地上の五日牛南組遺跡周辺である。そこでは花積下層式終末の集落が確認されている。その後も本遺跡は何かの活動の舞台として断続的に利用され、前期後半以降は旧河道も埋没を完了して平坦化し、活動は5区微高地上にも及ぶようになる。こうして本遺跡は晩期まで生活範囲として活用された。

以上が本遺跡の大まかな変遷である。試掘調査の段階で、3区微高地縁辺から花積下層式土器の破片が数点出土し、包含層の存在が指摘されていた。しかし、発掘調査が進行し、3～5区の微高地の存在が確定した後も、ローム台地より1～2m低い水性堆積の微高地に、前期初頭の集落が存在するとは予想しなかった。3・4区微高地の調査をはじめると、厚い部分では1mにもおよぶ黒褐色土～灰褐色土中に多量の遺物が包含されていること、分布はほぼ全域に広がる事が判明した。調査期間はすでに終盤にさしかかっており、他調査班の応援体制を準備して、120名の人員で1工程20～30cmの掘削を3工程行うこととした。調査はジョレンを使用し、遺物の集中する部分では移植ゴテを併用した。また、遺物包含層は褐色系の土壌であり、遺構の検出がむずかしいことから、細片以外は全て出土位置を点で記録した。結果的には遺構は確認できたが、こうして記録された遺物は土器6,064点、石器5,786点、礫3,018点の総計14,868点に及んでおり、その成果は付図1～20に示した。

包含層出土土器のうち約半分は花積下層式土器で、中・後期土器よりも下層のⅣ層上半に集中する傾向が認められた。その分布状況は花積下層式期の遺構配置とよく一致しており、同期の包含層が現位置に近い状態で保存されていたと考えられる。土器の分布は住居群の背後に数地点の集中部分があり、遺構とともに北側にさらに延びる状況が看取できる。南側は遺構・遺物とともに分布が少なく、この部分が外縁にあたる事が想定される。また、4号住居以外の住居は弧状の配置をとっており、土器の分布は住居群の背後に集中し、その内側には少ない。このようなあり方は環状集落に共通して認められる形態であり、本集落は環状集落となる可能性が高い。その場合、土器の分布が少ない内側に集中して認められた配石は、墓址か祭祀に伴う遺構の可能性が考えられる。

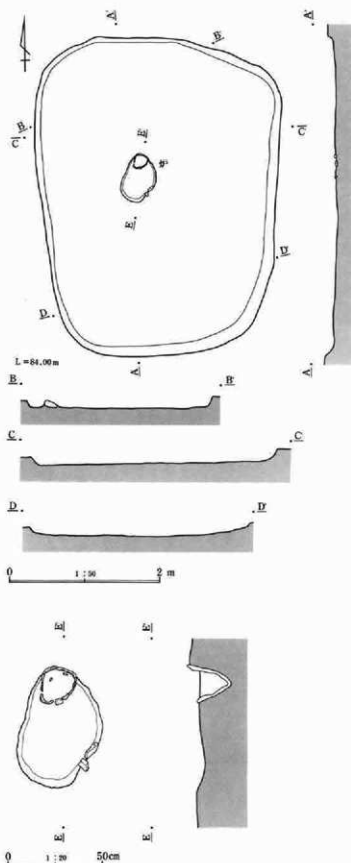


第 6 図 縄文時代の遺構配置



1. 調査概要

第7図 遺構面下の自然面の分布状況



第8図 1号住居

2. 竪穴住居

1号住居

J-20グリッドに位置する。西側低地に面した微高地上に選地し、北東9mに6号住居がある。

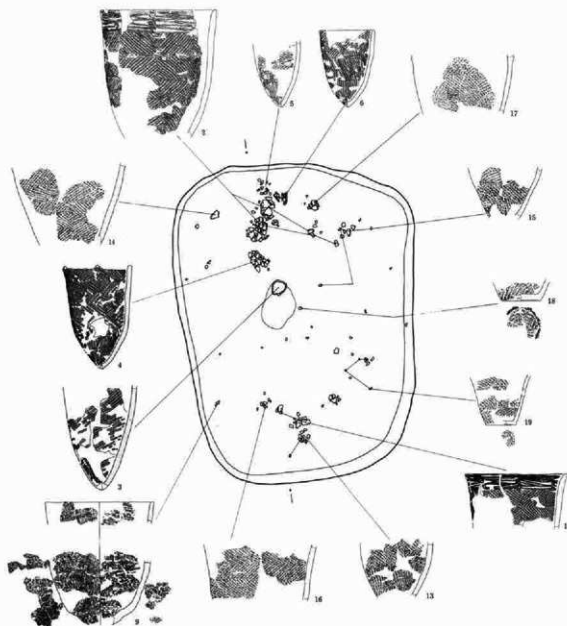
外形は長軸4.19m、短軸は北側で3.21m、南側で2.65mの台形状を呈する隅丸長方形である。長軸はほぼ南北にとり、面積は10.92 m^2 である。

床は硬質面がなく、明確にとらえられなかったため、炉と遺物の出土レベル、および地山標から判断した。確認面からの深さは15cm前後で、壁は緩やかに傾斜しながら立ち上がる。

炉は土器埋設炉で、住居中央のやや西寄りに設置している。長軸60cm、短軸42cm、深さ4~6cmで楕円形に掘り込み、長軸の北端に尖底深鉢(3)を埋設している。東側の縁辺に焼けて破砕した礫2個があり、石囲いのあった可能性もある。焼土はほとんど残っていないが、埋設されていた土器は被熱でもろくなっていた。

柱穴は確認できなかった。

遺物は床面から覆土中にわたって多量に出土している。そのなかから土器19点と石器23点を図化した。このうち4~6・17・18の土器5点と、22・26・28・29・33~35・38~40・42の石器11点は床相当面に接して出土している。土器のうち、4は炉の北側から、5・6は北壁寄りの床に2つならんで、いずれもほぼ一括状態で出土しており、5は脆弱で欠失部が多いが、4・6はほぼ完形に復している。また、土器のうち1・2・14・18は住居外出土土器との接合が認められ、1は3区1点、2は3区3点・4区1点、



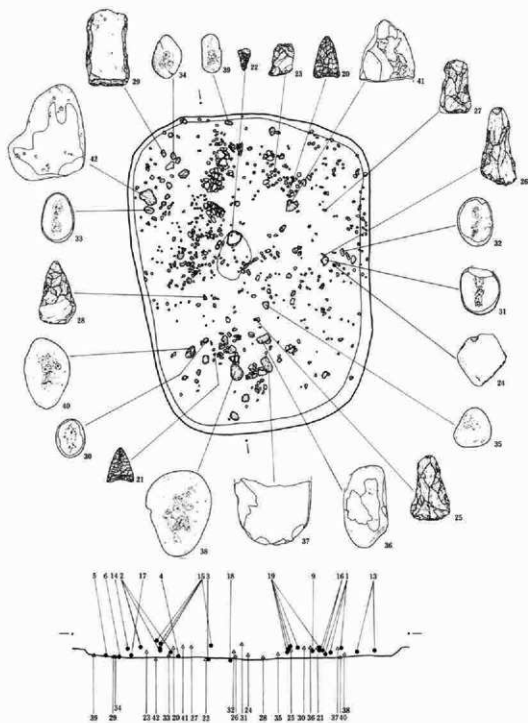
第9図 1号住居遺物出土位置図(土器)

14は3区1点、18は4区1点が、各々接合している。

1・2は口縁部文様帯をもつ土器である。口縁部文様はR繩とL繩を合わせた矢羽根状の燃糸圧痕で、3段に重畳する菱形文を構成し、各菱形の中央に渦巻文を付す。2では上位の渦巻文の位置に円形の貼付文を付して文様単位を示すが、1では口唇下肥厚部に小突起を付けて表現している。文様単位は4単位で、渦巻文は8単位付けられている。胴部は口縁部文様単位に合わせて、RLとLRの横位施文で菱形羽状繩文を構成する。胴部繩文の変換は1では文様単位に合わせて4単位で構成するが、2では渦巻文の単位に合わせて8単位構成となっている。繩文は一帯の施文幅が広く、口縁部文様帯幅とほぼ一致する。なお、2は繩文4帯目の幅が広く、下半の条が縦位に流れることから、尖底を呈するものと思われる。

3は炉に埋設されていた尖底土器で、上半部を欠損している。全面にLRの繩文を横位に施文するが、底部

II 縄文時代の調査



第10図 1号住居遺物出土位置図(石器)

付近では条が縦位となる部分もある。

4～6は縄文のみを施した尖底土器である。4は口縁部に文様の単位を示す小突起を4個付けている。縄文は胴上半にRLとLRを横位施して菱形羽状縄文を4単位構成し、胴下半では縄文を縦走させている。5も同様の構成をとるが、胴上半は羽状縄文となっている。6はRL縄による縦走縄文で構成される。上半部には2種類の原体で菱形を構成する部分も見られるが、施文はかなり乱れている。

7・11は縄文のみ構成される土器の口縁部破片である。7は菱形構成をとっている。8・10は口縁部に燃

2. 竪穴住居

器種別組成 (95点・1763.35g) 制片石器

① 打棒 (9点)	② 加工片 (7点)	③ 制片 (28点)	砕片 (36点)
-----------	------------	------------	----------

- ①石錐 (5点)
 ②削片 (5点)
 ③石核 (1点)
 ④使用痕 (4点)

石材別点数 (36点) 砕片

黒頁 (9点)	チャート (7点)	黒曜石 (16点)	①
---------	-----------	-----------	---

- ①珪質 (2点)
 頁岩 (1点)
 黒安 (1点)

石材別重量 (156.7g) 砕片

黒頁 (53.9g)	チャート (63.1g)	黒曜石 (34.5g)	①	②
------------	--------------	-------------	---	---

- ①珪質 (13.3g)
 ②頁岩 (4.7g) 黒安 (5.2g)

石材別点数 (28点) 制片

黒頁 (14点)	チャート (10点)	①	②
----------	------------	---	---

- ①黒曜石 (2点)
 ②珪質 (1点)
 緑片 (1点)

石材別重量 (540.1g) 制片

黒頁 (455.9g)	①	③
-------------	---	---

- ①チャート (44.3g)
 ②黒曜石 (5.7g)
 ③緑片 (26g)
 ④珪質 (8.2g)

類別組成 (5点) 石錐 Iは未製品

B1類 (2点)	I類 (3点)
----------	---------

石材別点数 (5点) 石錐

黒頁 (1点)	チャート (2点)	黒曜石 (2点)
---------	-----------	----------

類別組成 (9点) 打棒

A1類 (4点)	A2類 (4点)	B (1点)
----------	----------	--------

石材別点数 (9点) 打棒

黒頁 (8点)	砂岩 (1点)
---------	---------

器種別組成 (49点・32630g) 礎石器

礎 (32点)	四石 (3点)	①	②
---------	---------	---	---

- ①磨石 (4点)
 ②凹石石台・台石・石皿 (各2点) 敲石・多孔石 (各1点)

石材別点数 (17点) 礎石器

粗安 (17点)

石材別点数 (32点・10090g) 礎

①	粗安 (24点)	緑片 (3点)	②
---	----------	---------	---

- ①チャート (2点)
 ②磨盤 (2点) ホルン (1点)

糸圧痕で文様帯を構成する土器で、10は1・2と同様の構成となるであろう。8は口縁部に突起が付くタイプで、矢羽根状の擦糸圧痕は横位に流れている。

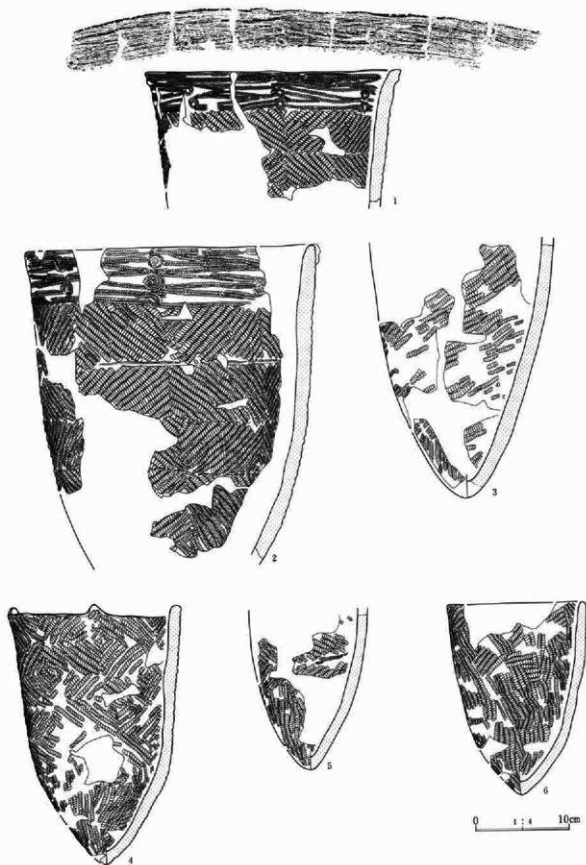
9は丸底状を呈する深鉢で、器面は凹凸が著しく、胴下半は器厚1cmと厚手の作りとなっている。外面に無節Lの縄文を施すが、口縁部では横位、胴部では縦位に施文しており、底部付近には施されない。なお、縄文下には縦位の条痕施文がうっすらと認められる。内面は無文である。

12は縄文施文帯が狭いもので、羽状構成となるであろう。

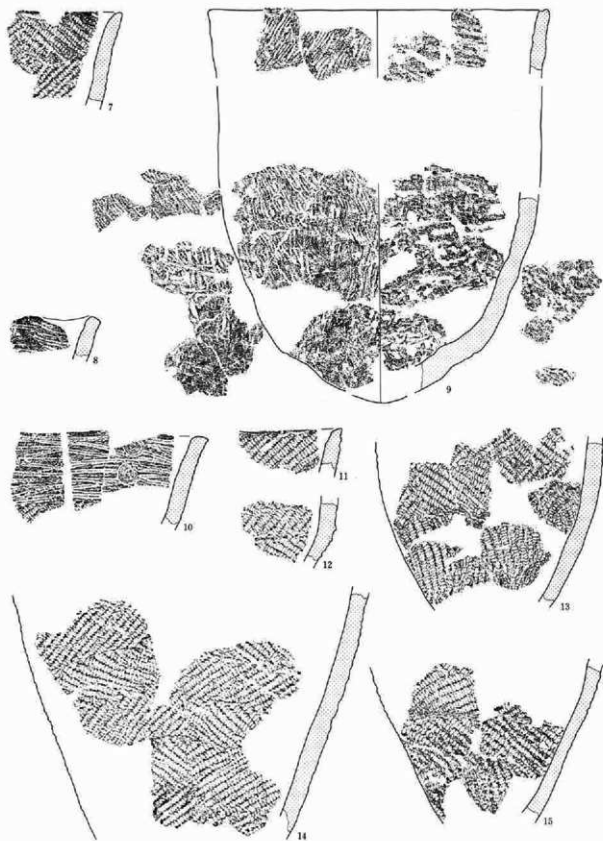
13~17は胴部の大形破片で、いずれも2種類の原体で菱形羽状縄文を構成する。13・15は胴下半に縦走縄文が施されており、尖底となるであろう。

18・19は平底の土器で、底面にも縄文が施されている。19は2種類の原体で羽状縄文を構成しており、12と同様に縄文施文帯幅は狭い。

以上の土器は、いずれも花積下層式土器に含まれるが、9は特異な土器であり、糸痕文系土器の系統を引く一群であろう。花積下層式土器は器厚1cm前後の厚手の作りで、胎土には多量の繊維を含む。内面はほとんどがナデ調整で、口縁部内面に研磨を施すものも少数認められるが、糸痕を施文するものはない。縄文はいずれも0段3条縄を使用しており、圧痕に使用される擦糸も同様である。このような特徴は、本住居においても同様に認められた。なお、1・5・15・18では、



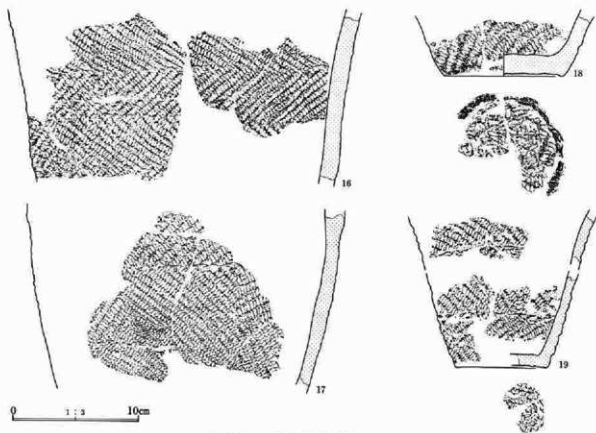
第11図 1号住居出土土器(1)



0 1:3 10cm

第12图 1号住居出土土器(2)

II 縄文時代の調査



第13図 1号住居出土土器(3)

縄文施文帯間あるいはその途中に、原体端部を結ぶ紐の圧痕が見られる。

土器は19ページに示した総量が出土している。剥片石器類は総点数95点(1763.35g)、礫石器は49点(32630g)が出土しており、このうち利器は剥片石器30点、礫石器17点である。

2号住居

L-24グリッドに位置する。微高地の中央部に選地しており、東側5mに3号住居、西側5m以内に2・3号配石と20号集石土坑が近接している。

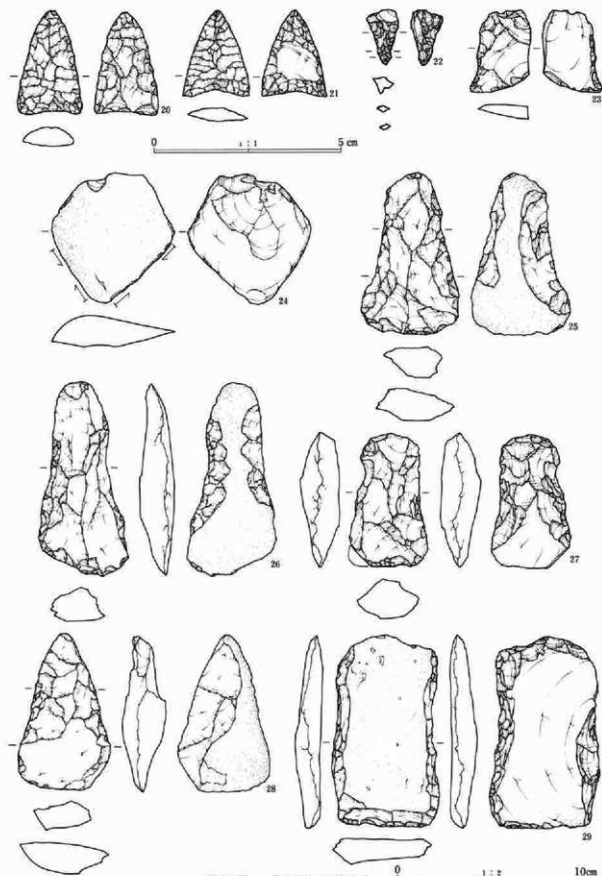
外形は長軸4.30m、短軸3.98mの隅丸方形で、面積は14.58㎡である。確認面からの深さは18cm前後で、長軸はほぼ南北にしている。西側の壁外に南北3.32m、深さ15cm前後の落ち込みが確認されたが、本住居との関係は明らかにできなかった。

床は地山面を使用しているが、硬質な面は認められない。炉は土器埋設炉で、住居の中央に設置している。直径42cm、深さ25cmの掘形内に、胴部上半を打ち欠いた平底の深鉢(4)を埋設しており、これに伴う掘り込みや礫は認められない。炉内や周辺部に焼土はほとんど認められなかったが、埋設土器内および掘形中に少量認められた。

柱穴状の落ち込みを7個確認したが、主柱穴と判断できる材料は得られなかった。外形との位置関係ではP₁~P₄の4個が有力である。また、東壁の北端に接して不定形な落ち込みを確認した。深さは18~23cmで、埋土中から石皿片(45)が出土している。

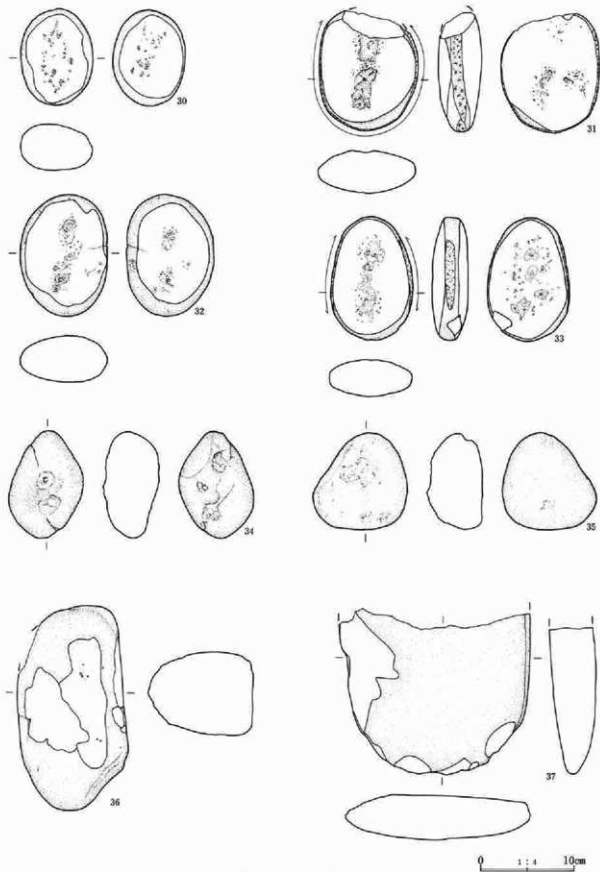
遺物は周縁部の覆土中を中心に出土している。土器の出土量は少なく、いずれも破片で住居南側の覆土中

2. 窟穴住居



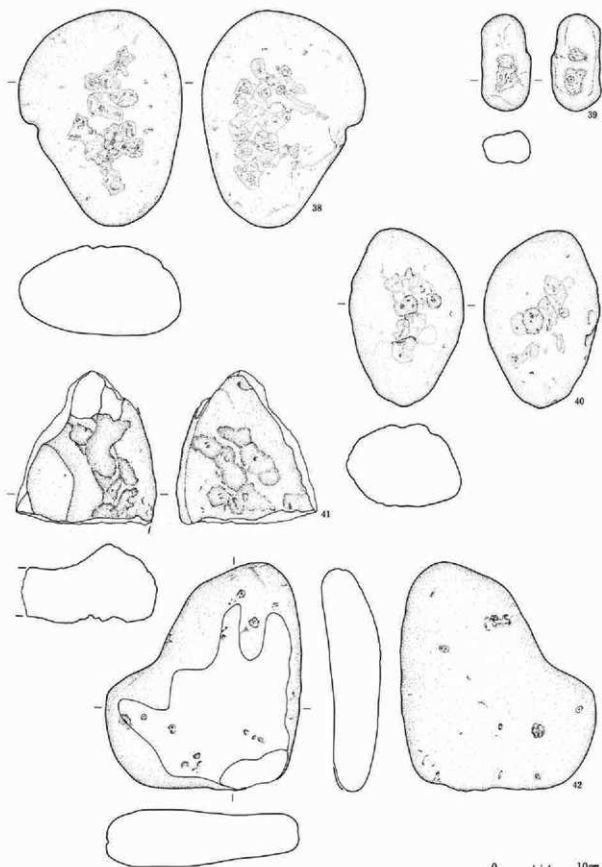
第14图 1号住居出土石器(1)

II 縄文時代の調査



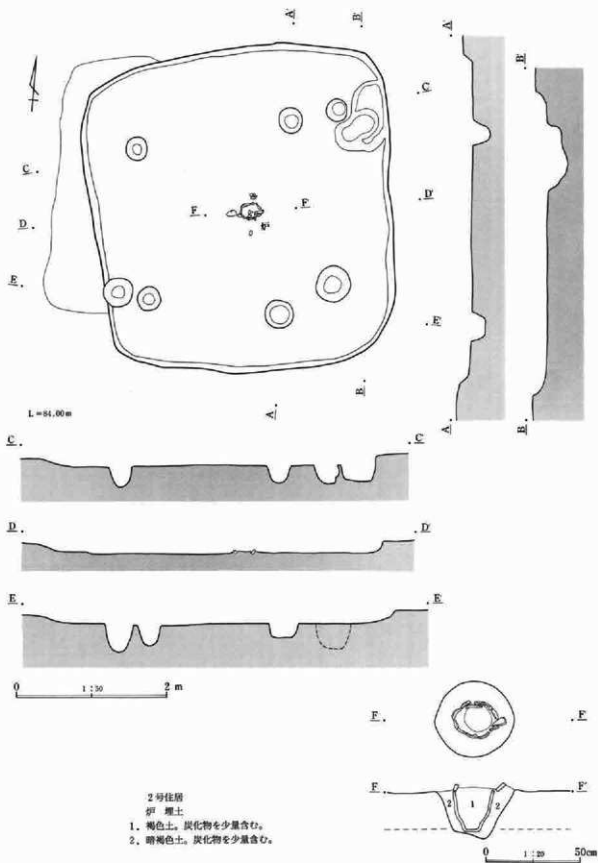
第15図 1号住居出土石器(2)

2. 墓穴住居

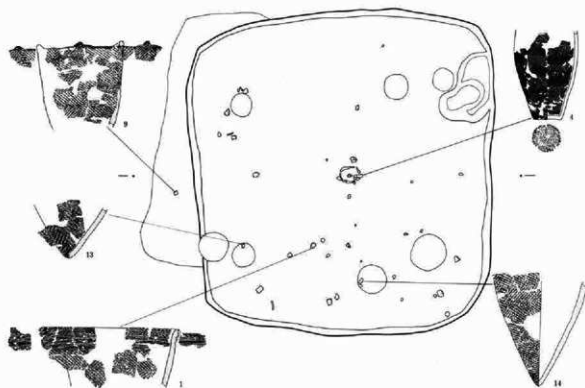


第16图 1号住居出土石器(3)

II 縄文時代の調査



第17図 2号住居

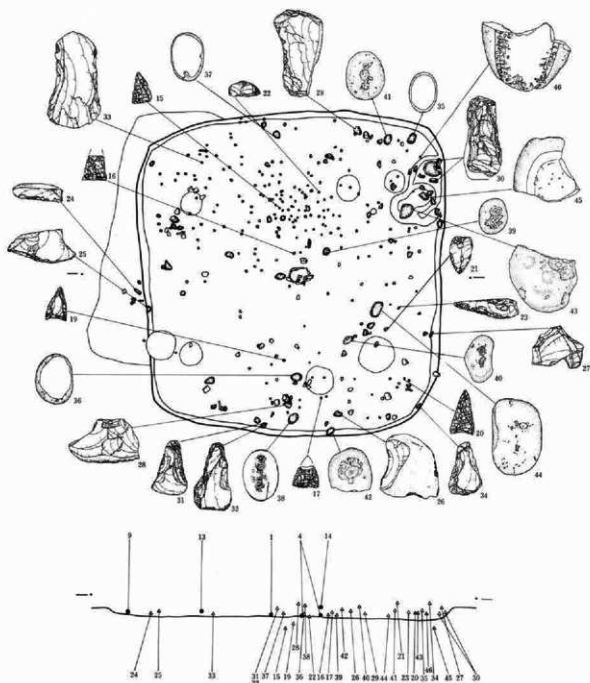


第18図 2号住居遺物出土位置図(土器)

に散在した状態で出土している。床面からの出土は1の一部分のみである。1・2・7・9・14は住居外との接合があり、1は3区2点・4区15点、2は4区4点、7は3区1点・4区11点、9は4号住居2点・3区6点・4区8点、14は3区2点・4区1点が、各々接合している。石器は比較的多く出土しており、北東隅と南壁際にやや集中している。床からの出土は22の1点のみである。なお、住居北半の床面から床下5cmにかけて、黒曜石の微細なチップが多量に検出された。本住居出土の黒曜石の破片・剝片は大半がこの部分からの出土である。床面下出土の石鏃2点(15・20)も、この調査時に検出されたものである。

土器は14点を図化した。

1～3は口縁部文様帯をもつ深鉢である。いずれも口縁部文様は、RとLを合わせた矢羽根状の襷糸圧痕による重畳する菱形文で構成される。1は口唇下に2条の低い隆帯をめぐらし、その間にも襷糸圧痕文を施文している。隆帯上の斜位の刻みは上下の隆帯で方向を換えて矢羽根状とし、文様単位に併せて方向を変換させている。菱形区画に伴う渦巻文は、文様単位を示す位置に4単位施され、その間は縄末端(クロスエンド部分)の刺突で表現されている。刺突に使用した原体は、胴部縄文を施文した縄であろう。なお、文様単位を示す渦巻文の上位隆帯部分には、縦長の突起が付けられる。胴部には、口縁部文様に合わせて菱形羽状縄文が構成される。縄文一帯の施文幅は広く、口縁部文様帯幅とはほぼ一致している。2は口縁部文様帯下を隆帯で区画するタイプで、隆帯上にもLRの縄文が施されている。また、口縁部渦巻文のうち、上位の一つは楕円形の隆帯で表現されている。胴部の縄文は羽状構成で、菱形とはならない。3は口縁部が外反し、口縁上端がくの字状に内傾する土器で、口縁には上端に渦巻文を施した突起が付く。口唇部と眉曲部には刻みを施し、その間に矢羽根状襷糸圧痕を数条めぐらせている。



第19図 2号住居遺物出土位置図(石器)

4は炉に使用されていた深鉢で、胴部上半は打ち欠かされている。胴部は2種類の原体を交互に横位施文して、4単位の菱形羽状縄文を構成し、平底の底面にも同心円状に2帯施文している。なお、胴部最下位の2帯は羽状縄文となっており、3帯目との間に不都合が認められる。

7・9は縄文のみで構成された深鉢で、基本構成は4と同様である。9は口縁部に4個の突起が付く土器で、RLとLRの縄文に変化をつけている。5・6・8・12は、菱形羽状縄文が施された胴部破片である。

10・11・13・14は尖底土器である。いずれも底部付近の縄文は縦位羽状の構成をとっているが、10・11では2種類の原体を交互に縦位施文するのに対し、13・14は1種類(LR)の原体を交互に縦横施文すること

2. 竪穴住居

器種別組成 (367点・12125.8g) 剥片石器

①	②	剥片 (28点)	砕片 (297点)
---	---	-------------	-----------

- ①石鉄 (14点)
 ②打斧 (5点) 削器 (7点) 石槌 (3点)
 加工砥 (7点) 使用砥 (6点)

石材別点数 (297点) 砕片

①	チャート (36点)	黒曜石 (239点)	②
---	---------------	------------	---

- ①黒頁 (16点)
 ②頁岩 (9点)
 黒安・粗安・ホルン (各1点)

石材別重量 (233.1g) 砕片

黒頁 (47.3g)	チャート (75.8g)	黒曜石 (88.0g)	②
---------------	-----------------	----------------	---

- ①頁岩 (3.8g)
 ②黒安 (1.1g)
 粗安 (11.8g)
 ホルン (5.3g)

石材別点数 (28点) 剥片

黒頁 (7点)	チャート (7点)	黒曜石 (11点)	①
---------	--------------	-----------	---

- ①チャ頁・砂岩・緑片 (各1点)

石材別重量 (425.8g) 剥片

黒頁 (175.6g)	チャート (53.9g)	①	チャ頁 (39g)	砂岩 (77g)	緑片 (55g)
-------------	-----------------	---	--------------	-------------	-------------

- ①黒曜石 (25.3g)

器種別組成 (14点) 石鉄

A1類 (3点)	B1類 (2点)	①	I類 (7点)	②
-------------	-------------	---	---------	---

- ①B2類 (1点)
 ②不明 (1点)

石材別点数 (14点) 石鉄

黒頁 (2点)	①	黒曜石 (11点)
------------	---	-----------

- ①チャート (1点)

器種別組成 (5点) 打斧

A1類 (3点)	A2類 (2点)
----------	----------

石材別点数 (5点) 打斧

黒頁 (4点)	粗安 (1点)
---------	------------

器種別組成 (44点) 礫石器

礫 (28点)	凹石 (5点)	磨石 (5点)	①
---------	------------	------------	---

- ①凹石 (1点) 凹石台石 (2点) 敲石 (1点)
 石皿 (2点)

石材別点数 (16点) 礫石器

粗安 (15点)	①
----------	---

- ①黒頁 (1点)

石材別点数 (28点・2979g) 礫

粗安 (22点)	磨砥 (3点)	①
----------	------------	---

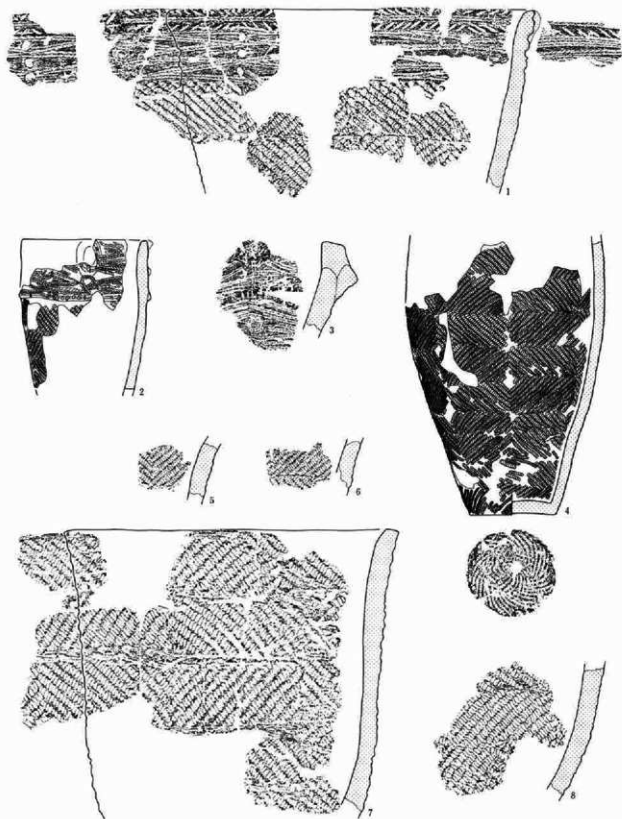
- ①ホルン
 埴頁
 頁岩 } 各1点

によって、羽状構成を表出している。14の上半部は横位施文による菱形羽状縄文である。

本住居から出土した土器は全て花積下層式に含まれる。器厚1～1.5cmの厚手のものが多く、胎土には多量の繊維を含んでいる。内面はナデ調整が主体で、内面にかかる研磨を施すものもあるが、条痕を施すものはない。縄文は全て0段3条縄を使用しており、施文幅はいずれも広い。なお、7・9では縄文帯間に原体端部を結ぶ紐の圧痕が認められる。

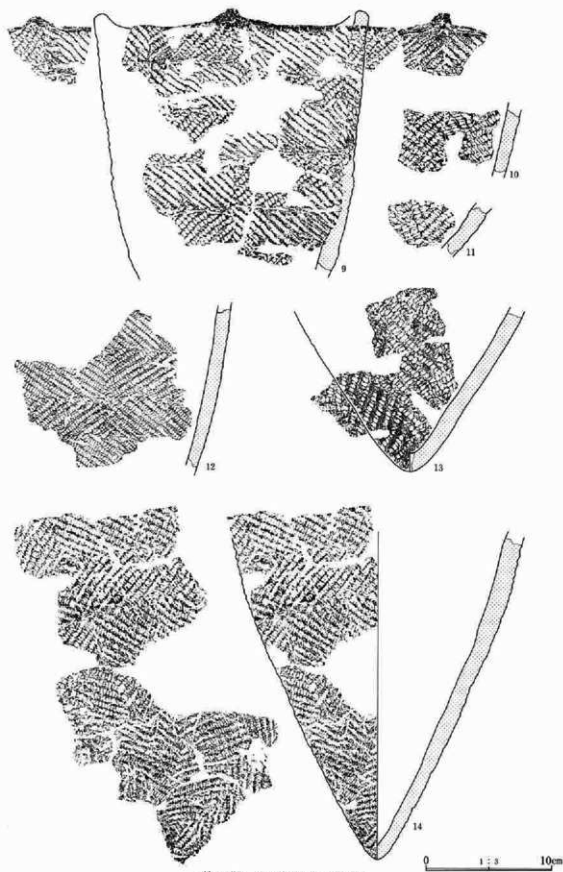
石器は29ページに示す総量が出土している。石鎌はA1・B1・B2の各タイプが認められ、打製石斧はAタイプのみが出土している。削器は横長剥片を素材としたものが多用されている。石皿は欠損品2点が出土している。

II 縄文時代の調査



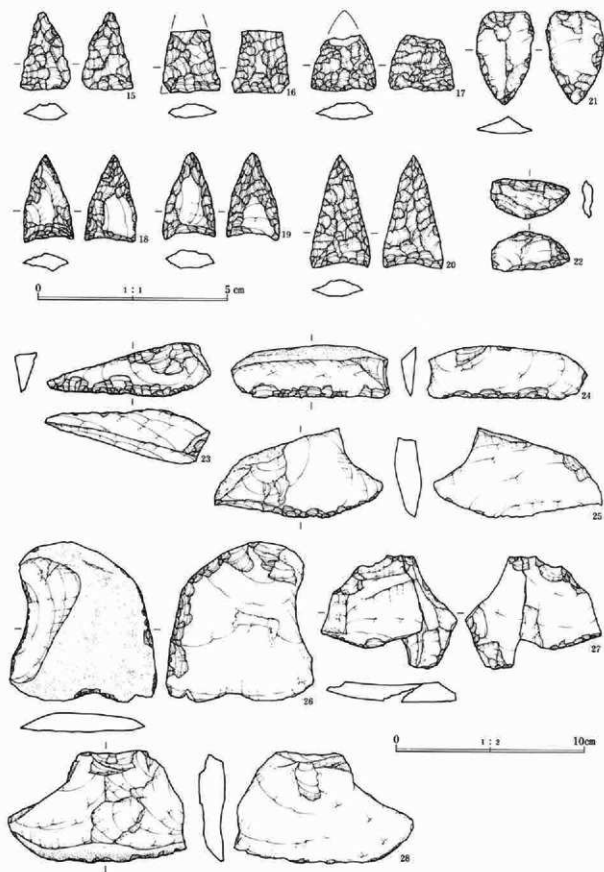
第20図 2号住居出土土器(1)

0 1:3 10cm
2.4121/4



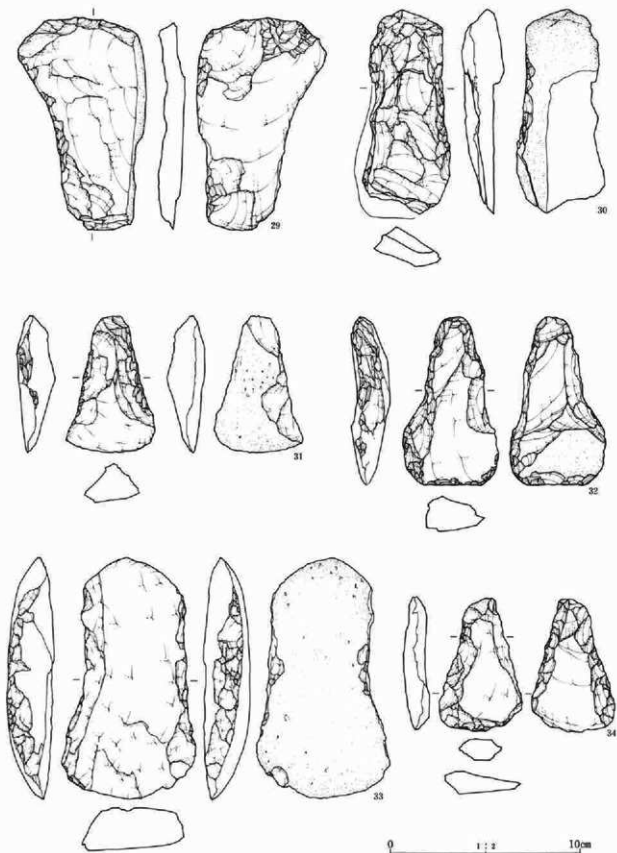
第21图 2号住居出土土器(2)

II 縄文時代の調査



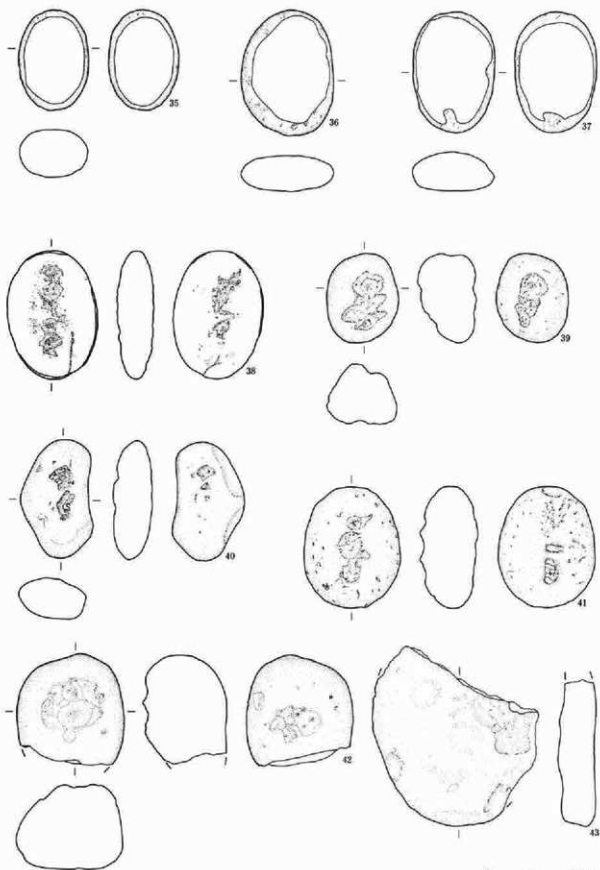
第22図 2号住居出土石器(1)

2. 竖穴住居

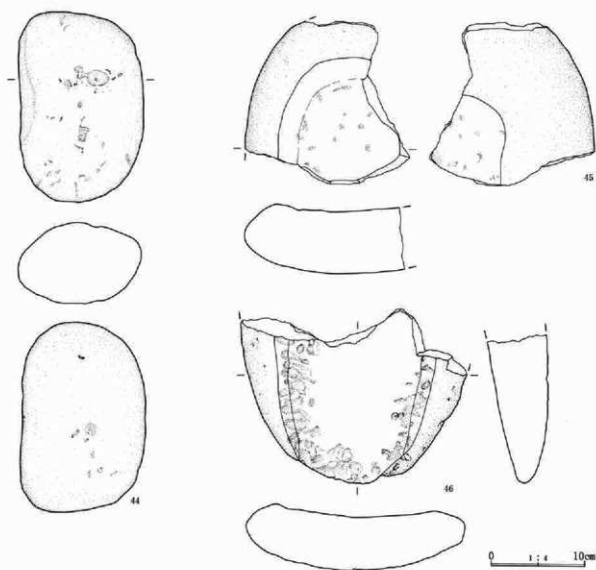


第 23 图 2号住居出土石器(2)

II 縄文時代の調査

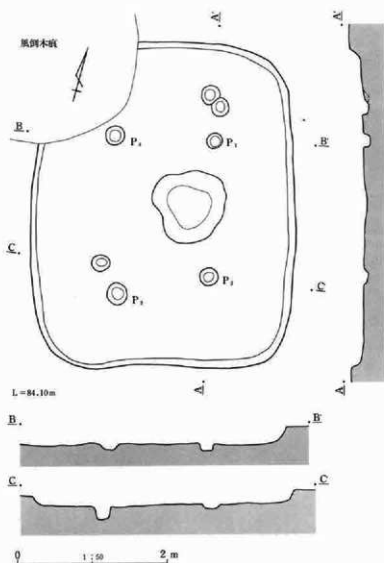


第24図 2号住居出土石器(3)



第 25 图 2号住居出土石器(4)

II 縄文時代の調査



第26図 3号住居

3号住居

4区L-24グリッドに位置する。2号住居の東側4.5mの位置にあり、東側40cmに21号集石土坑、北側1.5mに13号土坑が各々近接している。

外形は長軸4.27m、短軸3.51mの整った隅丸長方形で、北西隅をその後の風倒木痕により壊されている。長軸はほぼ南北にとり、面積は10.89㎡である。

床はほぼ水平となっているが、堅い部分は認められなかった。確認面からの深さは20cm前後で、壁は緩やかに傾斜しながら立ち上がる。

住居のほぼ中央に直径95cmほどの不正円形形状の浅いくぼみが認められたが、焼土等はない。

柱穴状の穴は合計7本確認できた。深さは大半が10cm前後で、最も深いものでも16cmである。このうちP₁～P₄の4本は住居対角線上に位置しており、主柱穴の可能性が高い。

遺物は覆土中を中心に、多量の地山礫と混在した状態で出土しているが、土器・定形石器の量は比較的少ない。そのなかから土器20点と石器19点を図化した。土器のうち、2と3はほぼ一括の状態で出土しており、2は床土7cmから、3は床面に接していた。その他の土器はいずれも破片状態で出土しているが、接合関係のあった土器のうち、5・11・12は床面出土の破片と覆土中出土の破片の接合が認められた。また、1・4・5・7・11は本住居外出土土器との接合関係が認められた。1は本住居床面出土の破片に4号住居覆土4点、3区包含層1点、4区包含層12点が接合、4は本住居覆土中出土の破片と4区包含層出土の20点が接合、5は本住居床面および覆土中出土の破片に5号住居覆土中の3点と4区包含層出土の2点が接合(あるいは同一個体と認定)、7は3区包含層出土の1点が接合、11は本住居覆土中の破片に4号住居覆土の1点と4区包含層出土の11点が接合した。以上のように本住居出土土器には、3・4区包含層出土土器との接合以外に、4号住居出土土器との接合例2例、5号住居との接合例1例があり、そのうち1・4・11は本住居以外の破片が主体を占める接合例であった。石器では23・37の2点が床面に接して出土しており、33は床面下からの出土であるが、その他はいずれも覆土中からの出土である。



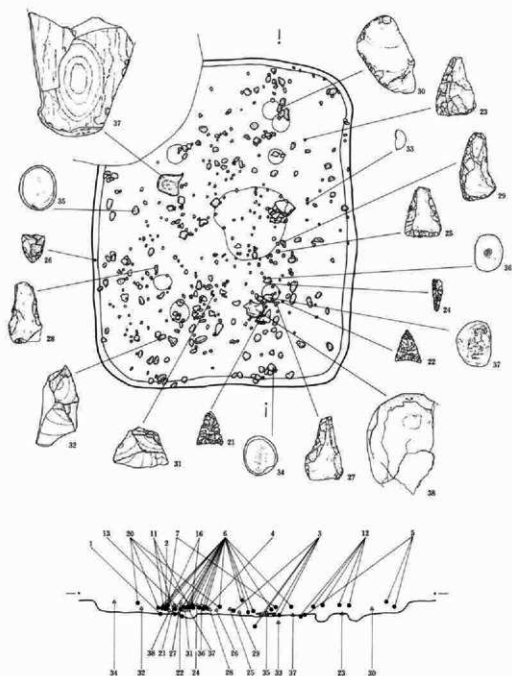
第27図 3号住居遺物出土位置図(土器)

1は口縁部文様帯をもつ土器で、胴下半部を欠失するが尖底となるであろう。口縁部には文様の基本単位を示す縦位の棒状貼付文が付けられ、口唇部には斜位の刻み目が見られる。文様は1段R縄2本を単位とする捺糸圧痕で菱形文を構成し、菱形区画内には同圧痕による蕨手状の渦巻文が付される。胴部にはRLとLRを交互に横位に施文して、菱形羽状縄文が構成される。文様の基本単位は4単位であるが、口縁部の渦巻文は8単位であり、胴部縄文もそれに合わせて器体を8分割している。口縁部文様帯の幅は比較的狭く、胴部縄文施文幅と一致している。

2はやや小形の尖底土器で、口縁部と底部の一部を欠失するが、本住居では唯一全構成が理解できるものである。文様は単純で、器面全体に縄文RLをやや斜めに全面施文している。底部の一部に縦位施文の部分もあるが、羽状構成は意識されていない。

3は尖底を呈する土器で、胴上半部を欠失している。胴部縄文の構成は、上半部にRLとLRを交互に横位施文した菱形羽状縄文、底部付近にはLRをまばらにランダム施文し、その間をRLの斜位縄文帯で埋めている。この斜位縄文帯は器形の変換部分にあたり、施文は最終段階に行われている。

4は胴下半部にくの字状の屈曲部をもつ平底の土器で、胴部上半を欠失している。胴部は、全面がRLとLRの横位施文による羽状縄文で構成され、やや上げ底の底面にも縄文RLが環状に施されている。胴部の縄文は施文幅が狭く、菱形構成とはならない。



第 28 図 3号住居遺物出土位置図(石器)

第30図5～10はいずれも口縁部文様帯をもつ深鉢である。

5は口縁部破片をもとに器形を復元した。比較的大形の深鉢で、口唇下をめぐる2本の隆帯に矢羽根状となる刻みを施し、隆帯間にも矢羽根状の撫糸圧痕を施している。口縁部には、R縄とL縄を合わせた矢羽根状撫糸圧痕4条を単位とする集合施文で菱形文を構成し、集合施文帯の交点および菱形区画内には同圧痕による渦巻文を施し、さらに渦巻文間に縄原体の端部による刺突文が加えられている。また、渦巻文の上部隆帯間にも同刺突文を付して文様単位を示している。口縁部文様帯下は刻みを施した隆帯で明確に区画し、胴部には縄文を施す。この土器の特徴は、口縁部文様帯幅が広く文様帯区画が明確なこと、口唇部下にIa文

2. 整穴住居

器種別組成 (191点・4163.97g) 剥片石器

①	剥片 (93点)	砕片 (122点)	
---	-------------	-----------	--

①石鏃 (3点) 打斧 (4点) 削器 (3点)
 石柱 (1点) 石核 (3点) 加工痕 (3点)
 使用痕 (9点)

石材別点数 (122点) 砕片

黒頁 (23点)	チャート (20点)	黒曜石 (67点)	①
-------------	---------------	-----------	---

①砂岩 (5点) ホルン (2点) 石英 (2点)
 粗安・粗安・緑片 (各1点)

石材別重量 (132.4g) 砕片

黒頁 (47.4g)	チャート (24.5g)	黒曜石 (41.6g)	①
------------	-----------------	-------------	---

①砂岩 (89g) ホルン (3.1g) 石英 (9.2g)
 粗安 (1.9g) 粗安 (1.1g) 緑片 (1.7g)

石材別点数 (43点) 剥片

黒頁 (17点)	チャート (11点)	黒曜石 (9点)	①
----------	---------------	-------------	---

①緑片 (5点) 珪頁 (1点)

石材別重量 (639.91g) 剥片

黒頁 (366.59g)	①	③	珪頁 (157.92g)
--------------	---	---	-----------------

①チャート (64.9g)
 ②黒曜石 (14.9g)
 ③緑片 (34.8g)

類別組成 (3点) 石鏃

A1類 (1点)	B1類 (1点)	I類 (1点)
----------	----------	---------

石材別点数 (3点) 石鏃

黒曜石 (2点)	珪化木 (1点)
----------	----------

類別組成 (4点) 打斧

A1類 (2点)	A2類 (2点)
----------	----------

石材別点数 (4点) 打斧

黒頁 (4点)

器種別組成 (85点・38041.6g) 礫石器

礫 (74点)	①
---------	---

①凹石 (5点) 礫石 (2点) 白石 (2点)
 敲石 (1点) 石皿 (1点)

石材別点数 (11点) 礫石器

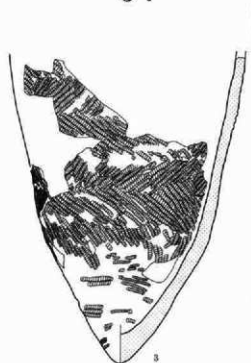
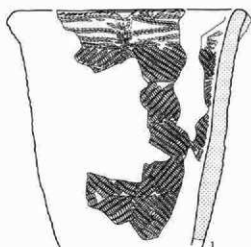
粗安 (9点)	①	頁岩 (1点)
---------	---	------------

①緑片 (1点)

石材別点数 (74点・15945g) 礫

①	粗安 (56点)	滑石 (9点)	②
---	----------	------------	---

①チャート (4点)
 ②砂岩 (4点) 石斑 (2点)



0 1:4 10cm

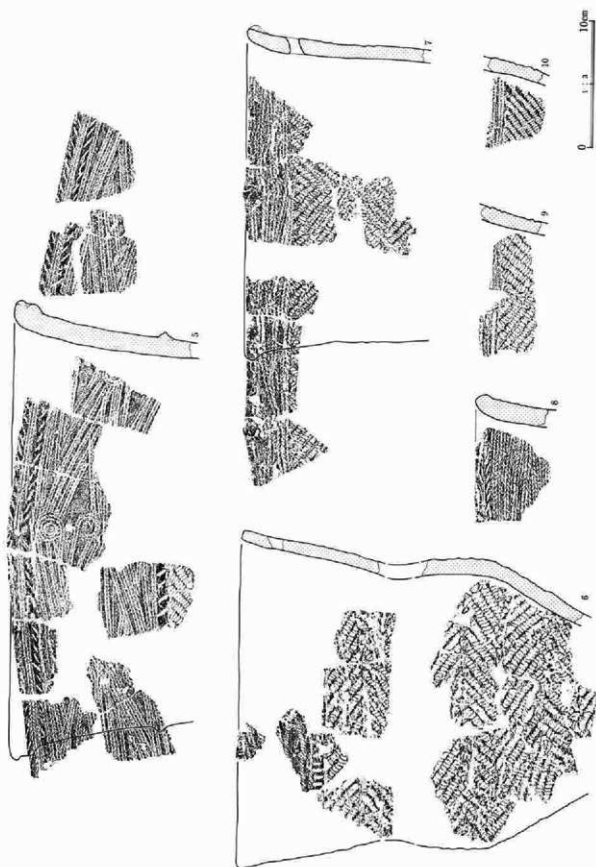
様帯とも言うべき区画が存在すること、燃糸圧痕文が帯状に集合施文されること、縄原体端部による刺突文が施されることなどの点を合わせもつことにあり、文様の組み合わせや変化、および他の土器の位置づけを考える上で重要な土器である。

6は同一個体と判断した大形破片から復元した土器である。胴部下半がふくらむ深鉢で、本遺跡では希な器形である。口縁部文様は同じ燃りのR縄の燃糸圧痕2本で、菱形文を構成すると思われる。文様帯下は縦位の刻みが施された偏平な隆帯で区画され、胴部にはRLとLRによる羽状縄文が構成される。

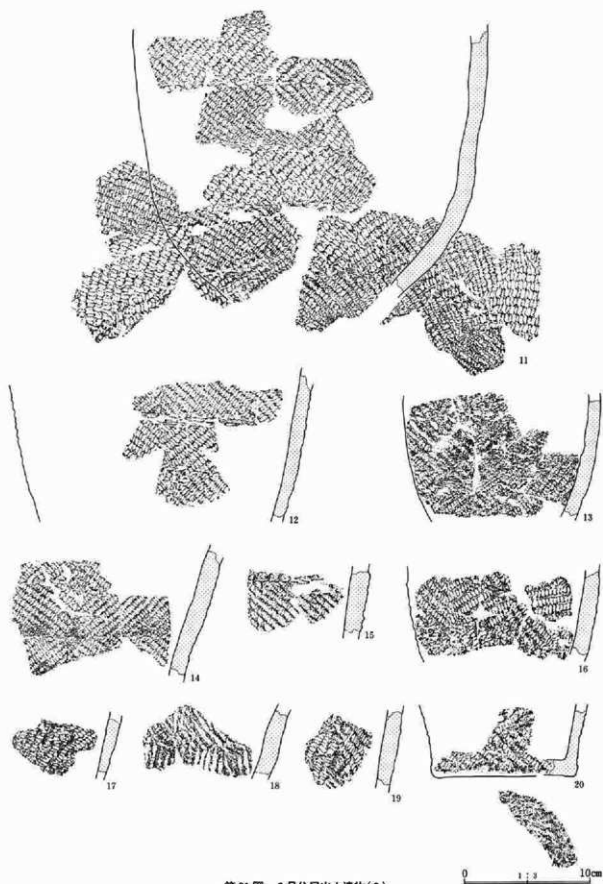
7は円筒状の深鉢で、口唇部に文様の単位を示す小突起が付く。文様は4単位構成である。口縁部文様帯は幅が狭く、R縄とL縄を合わせた矢羽根状燃糸圧痕で菱形文を構成し、突起下と同圧痕による渦巻文が施される。胴部文様との境は同矢羽根状燃糸圧痕で区画され、胴部はRLとLRを交互に横位施文下菱形羽状縄文で構成される。9・10はこれと同一個体の可能性が強い。

8は口縁部破片で、口唇部に矢羽根状の刻みが付く。口縁部文様は、5と同様に矢羽根状燃糸圧痕数単位の

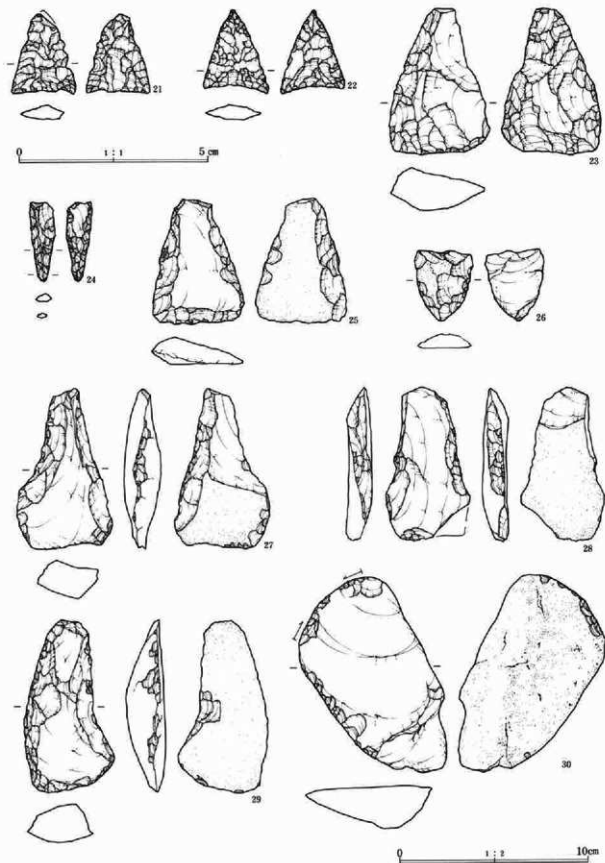
第29図 3号住居出土遺物(1)



第30图 3号住居出土遺物(2)

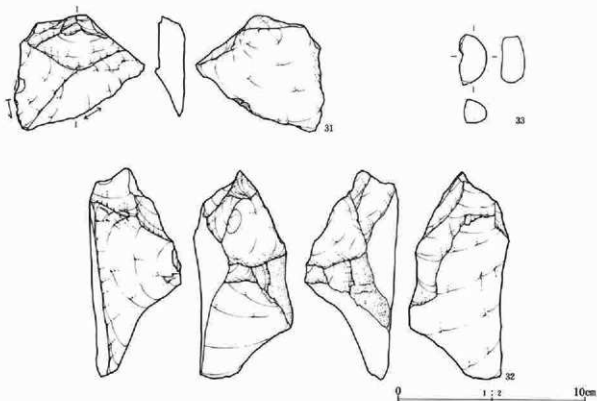


第31図 3号住居出土遺物(3)



第 32 圖 3号住居出土石器(1)

II 縄文時代の調査



第33図 3号住居出土土器(2)

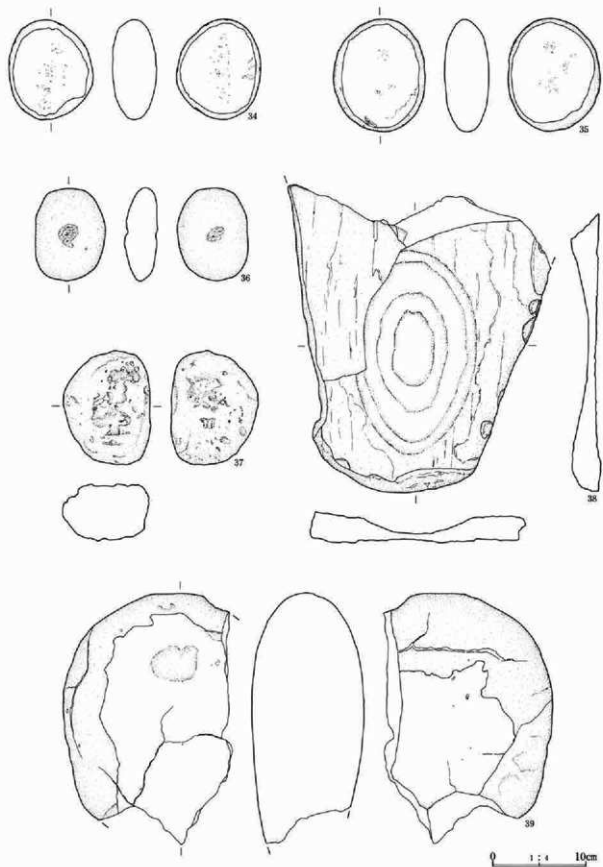
集合施文により、菱形文が構成されるものと思われる。

第31図11～19は胴部破片およびその接合例である。11～16はRLとLRを交互に横位施文して、菱形羽状縄文を構成するが、15は菱形とはならないかもしれない。11・12・14は施文帯間に原体端部の結び目が観察でき、12は特に明瞭である。11では2種類の原体の節の大きさが異なっているが、これは意図的にアクセントを加えたものかもしれない。また、11・16の下位の施文は乱れており、これらは尖底となる可能性が高い。17～19は尖底土器の底部付近の破片で、17・18はRLの縦位施文、19はRLを横位・縦位に施文して縦位羽状を構成している。

第31図20は平底の底部破片で、底面にも縄文が施文されている。胴部の縄文はRLとLRによる羽状縄文と思われ、第30図6の底部となる可能性もある。

本住居から出土した土器は、全て花積下層式に含まれる。器厚は1cm前後の厚手のものが多く、いずれも胎土には多量の繊維を含んでいる。器内面はかるい研磨を施すものもあるが、大半はナデ調整で仕上げられており、条痕等の施文は認められない。縄文原体はいずれも0段3条縄を使用しており、口縁部文様の燃糸も同様である。

出土した石器の総量は39ページに示した。このうち石鎌3点(21～23)、石錘1点(24)、削器2点(25・26)、打製石斧3点(27～29)、使用痕ある剥片2点(30・31)、状耳飾りの再調整品1点(32)、石核1点(33)、磨石2点(34・35)、凹石2点(36・37)、石皿1点(38)、台石1点(39)を図示した。石鎌は未製品(1類)1点以外はA・B類に限られ、打製石斧は4点ともA類である。



第34图 3号住居出土石器(3)

4号住居

N-23・24グリッドにまたがって確認された。微高地の中央部に位置しており、東側4mに5号～11号集石群が存在する。本住居は包含層遺物集中地点の南側縁辺にかかっており、同包含層下で確認された(付図18～20参照)。

外形は長軸6.56m、短軸4.19mの長方形で、面積は27.43㎡である。本遺跡で確認された縄文時代の住居のうち最も大形のもので、長軸を北西にとる点も他の住居とは異なっている。

確認面からの深さは24～30cmであるが、北東側に中心をもつ遺物包含層の出土レベルを旧地表に見たてると、40cm前後の深さが想定できる。床は中央部がやや低いものの、ほぼ平坦な面が構築されている。

伊は確認されていない。

柱穴状の掘り込みは7本確認された。直系は24～36cmで、深さは12～15cmほどのものが多い。住居の対角線上に近い4本が支柱となる可能性が高いが、特定できない。

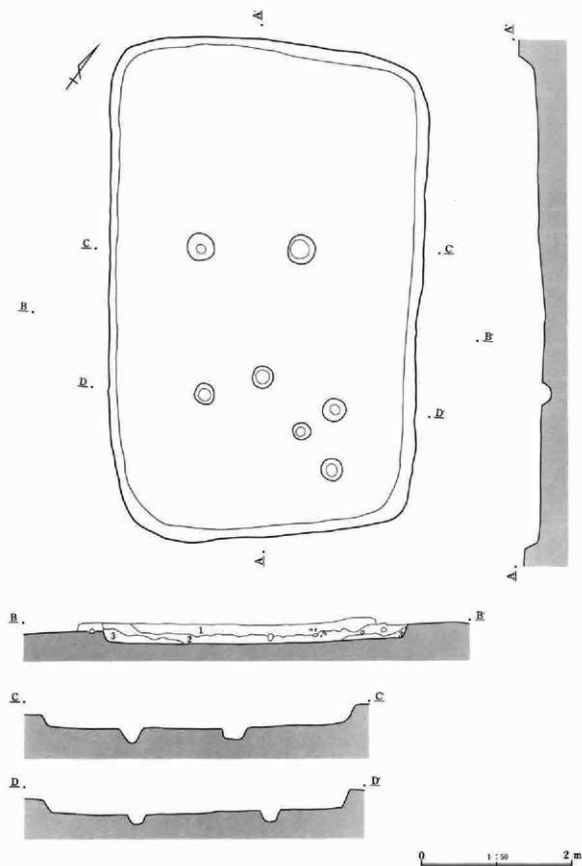
遺物は覆土中から多量の土器・石器が出土しており、そのなかから土器43点と石器32点を図化した。床面からの出土はほとんどなく、土器・石器ともに覆土上層にほぼ水平状態で出土している。土器のうち一括状態で検出されたものは1点(25)のみであり、その他は広範囲に散乱した状態で出土したものが多く、石器も出土量は多いが、一定範囲に集中する傾向は見られず、住居内にまんべんなく散乱している。また、土器のうち、1・2・4・12・15・21・24・25・26・32・42・43の12個体は、住居外との接合関係が認められた。1は4区包含層出土の7点が接合、以下同様に2は3区16点、4は3区8点と4区15点、12は4区5点、15は4区3点、21は4区3点、24は4区5点、25は4区1点、26は3区1点と4区20点、42は4区1点、43は4区6点が各々接合している。2・4・26は3区包含層出土の土器も含めて、かなりの点数が住居外から出土しており、広範囲にわたる接合例と言えよう。本住居は先述のように包含層遺物集中地点と一部が重なっている。住居出土遺物としたものは、住居形状が確認できてから取り上げたものに限定したため、その上位の遺物は包含層に含めており、接合例のあるものはそれにあたる可能性もある。ただし、住居と遺物包含層(ここでは花積下層式期の包含層をさす)はほぼ同一時期の所産であり、両者の明確な分離は困難である。

第38図1～第39図8は口縁部文様帯をもつ深鉢である。5以下はいずれも燃糸瓦痕による菱形文で口縁部文様帯を構成し、胴部にはR LとL Rで羽状あるいは菱形羽状縄文が施される。

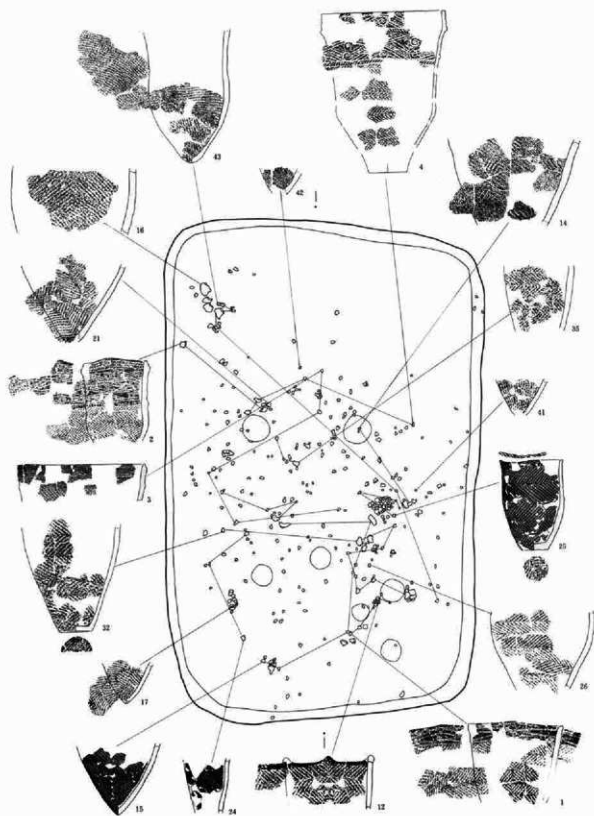
1はR縄とL縄を合わせた矢羽根状燃糸瓦痕を使用し、菱形区画内に渦巻文を施文するタイプで、文様は4単位構成、菱形文は2段構成である。文様単位を示す渦巻文の部分に粘土を貼り付けて肥厚させており、その直上口唇部は突起状にやや盛り上がっている。胴部との境は燃糸瓦痕文で画され、胴部には菱形羽状縄文が構成される。なお、口縁部文様帯の幅は狭く、胴部縄文1帯のはばとほぼ一致している。

2は波状口縁の土器で、胴部下半がくの字状に突出する。口縁部文様帯の幅は広く、くの字状に内折する口唇下にはI a文様帯が形成される。口縁部文様は、1本単位のL縄を3条平行に施文した燃糸瓦痕で菱形文を3段に構成し、各菱形区画内に渦巻文を施している。文様は4単位構成である。I a文様帯も口縁部文様と一体化しており、見かけ上は4段の構成になっている。胴部は施文帯幅のせまい羽状縄文で構成され、口縁部文様帯との境は縦位の刻みを施した扁平隆帯で画している。なお、口縁部文様の燃糸瓦痕の間に斜位の刻みが付く部分があるが、I a文様帯との間には縦位の刻みを施して文様帯区画を明確にしている。

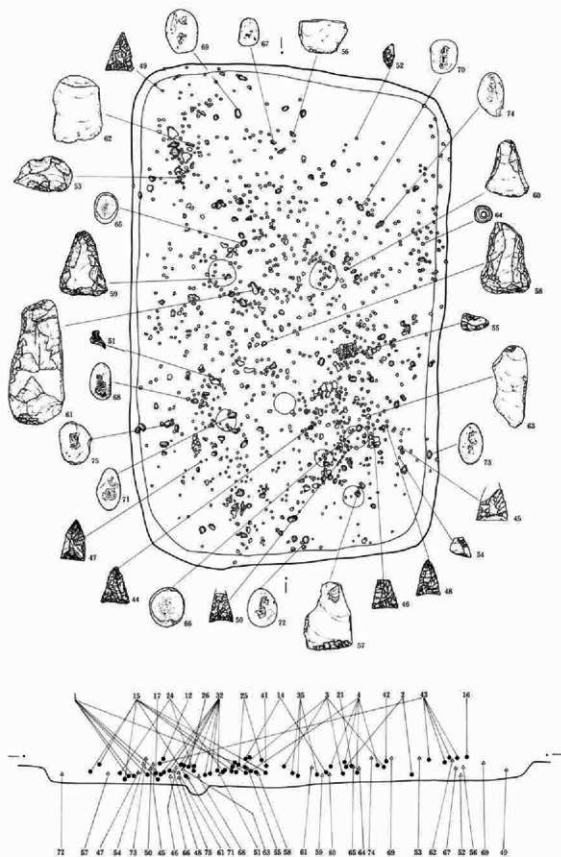
4も2と同様に、口縁部が内折し、胴部下半がくの字状に突出する器形の土器である。文様構成も、口縁部文様帯の幅が広いこと、I a文様帯と口縁部文様帯の文様が一体化していること、口縁部文様の燃糸瓦痕は1本単位のL縄のみを使用していること、胴部は施文帯のせまい羽状縄文で構成されること、などの基本



第 35 图 4号住居



第36図 4号住居遺物出土位置図(土器)



第 37 图 4号住居遺物出土位置图(石器)

II 縄文時代の調査

器種別組成 (885点・4416.68g)

③	副片 (148点)	砕片 (641点)
---	--------------	-----------

①②

①石磯 (25点)

②加工痕 (23点)

③陶器 (14点) 石核 (14点) 使用痕 (11点)

打穿 (7点) 石錐 (1点) 石匙 (1点)

石材別点数 (641点) 砕片

黒頁 (106点)	チャート (171点)	黒曜石 (333点)	①
-----------	-------------	------------	---

①粗安 (15点) 頁岩 (9点) 珪頁 (3点)

ホルン・砂岩・黒片・石英 (各1点)

石材別重量 (555.3g) 砕片

黒頁 (151g)	チャート (181g)	黒曜石 (153g)	①
-----------	-------------	------------	---

①粗安 (37.3g) 頁岩 (14g) 珪頁 (7.4g)

ホルン (7g) 砂岩 (5.2g) 黒片 (1.3g)

石英 (0.5g)

石材別点数 (148点) 副片

黒頁 (50点)	チャート (27点)	黒曜石 (58点)	①
----------	------------	-----------	---

①粗安 (3点) 珪石 (1点) 黒安 (2点) 頁岩 (1点)

ホルン (2点) 砂岩 (1点) 緑片 (1点) 石英 (1点)

軽石 (1点)

石材別重量 (1249g)

黒頁 (621g)	++ 黒曜石 (307.8g)	粗安 (194.5g)	①
-----------	-----------------	-------------	---

①珪頁 (40g) 黒安 (27.7g) 頁岩 (36g) ホルン (24.9g)

砂岩 (3.6g) 緑片 (11.2g) 石英 (1.9g) 軽石 (0.1g)

類別組成 (25点) 石磯

A 1類 (5点)	① B 1類 (3点)	② I 類 (10点)	不明 (5点)
-----------	-------------	-------------	---------

① A 2類 (1点)

② B 2類 (1点)

石材別点数 (25点) 石磯

①	チャート (12点)	黒曜石 (11点)
---	------------	-----------

①黒頁 (2点)

類別組成 (7点) 打穿

A 1類 (3点)	A 2類 (1点)	D 類 (3点)
-----------	-----------	----------

石材別点数 (7点)

黒頁 (5点)	頁岩 (1点)	粗安 (1点)
---------	---------	---------

器種別組成 (114点・29397.2g)

罎 (93点)	四石 (13点)	①
---------	----------	---

①磨石 (3点) 敲石 (5点)

石材別点数 (21点)

粗安 (19点)	①
----------	---

①実玄 (1点) 角玄 (1点)

石材別点数 (93点・21584.2g)

①	粗安 (59点)	②	③	④	⑤
---	----------	---	---	---	---

①チャート (13点)

②砂岩 (5点) ③漆黒 (5点)

④石斑 (3点) ⑤緑片 (2点)

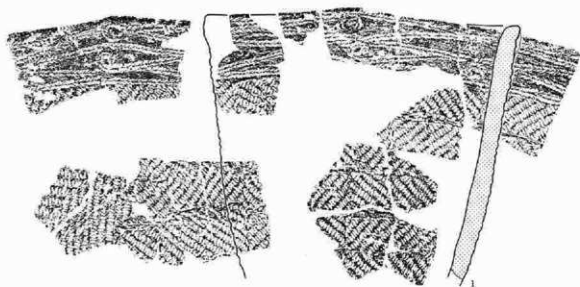
⑥ホルン・実玄・珪頁・輝石・かこう岩・硬珪 (各1点)

構成は2と一致しているが、各文様帯が斜位の刻みを施した偏平な隆帯で明確に区分されること、口縁部菱形文は幅が広く1段で構成されること、渦巻文は菱形の区画と一体化して腕手状に描かれ、区画内の上下に一对で配されること、撚糸圧痕の間に斜位の刻みを施し、菱形区画をより明確に示していること、などの点で異なっており、また器壁が薄い点もこの土器の大きな特徴と言えよう。

6～8もこのタイプに属すが、6は器壁が厚い点で2に類似している。3もこのタイプと共通する点が多いが、口縁部文様帯およびI aの文様帯の幅が狭いこと、R縄とL縄を合わせた矢羽根状撚糸圧痕を使用していること、胴部縄文が菱形羽状構成をとることなどの点は1と共通しており、両タイプの折衷型であろうか。

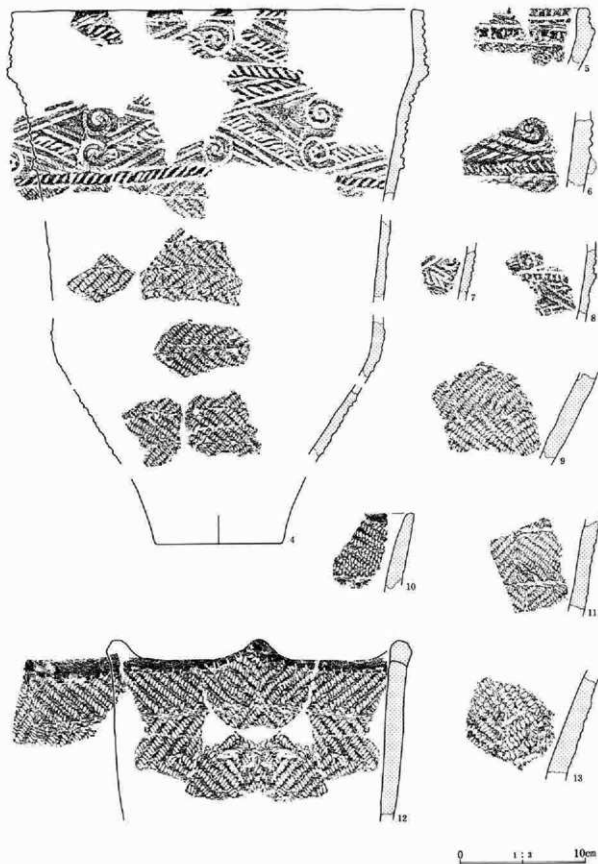
5も口縁部が内折するタイプであるが、口縁部文様は省略され、I a文様帯には半載竹管による沈線が施されている。

第39図10・12、第40図25、第42図36は口縁部文様帯をもたない一群で、器面全体に縄文が施される。12は口縁に山形の小突起が4単位付くタイプで、口唇には刻みが付くが全周はしない。縄文

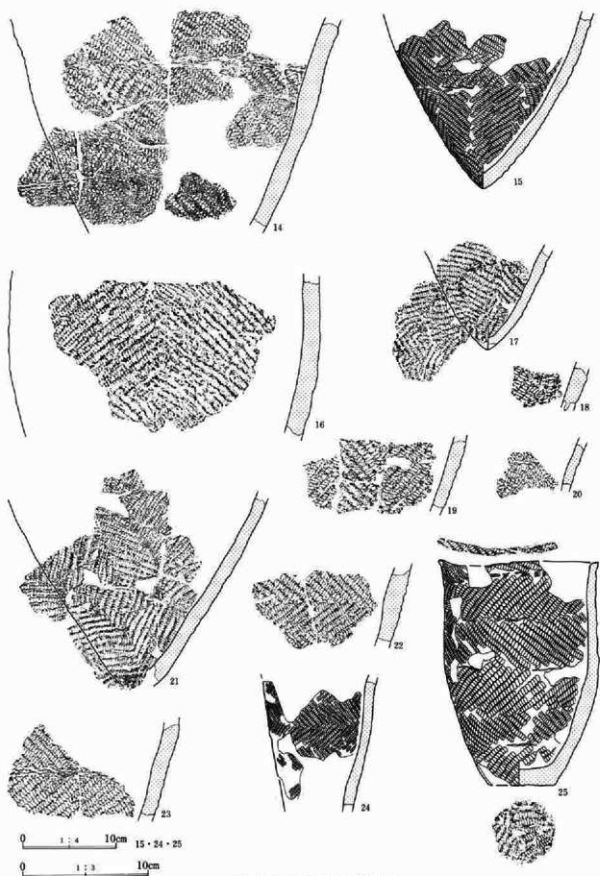


第38图 4号住居出土土器(1)

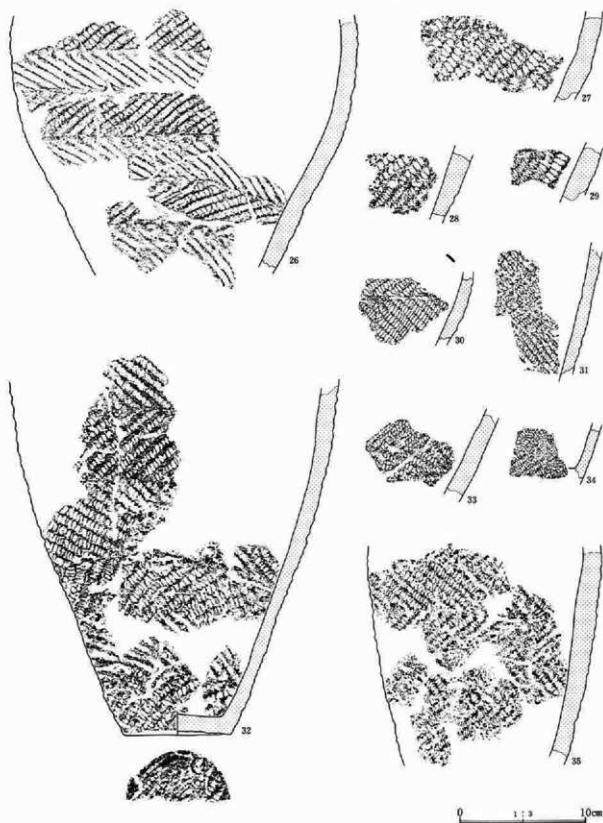
0 1:3 10cm



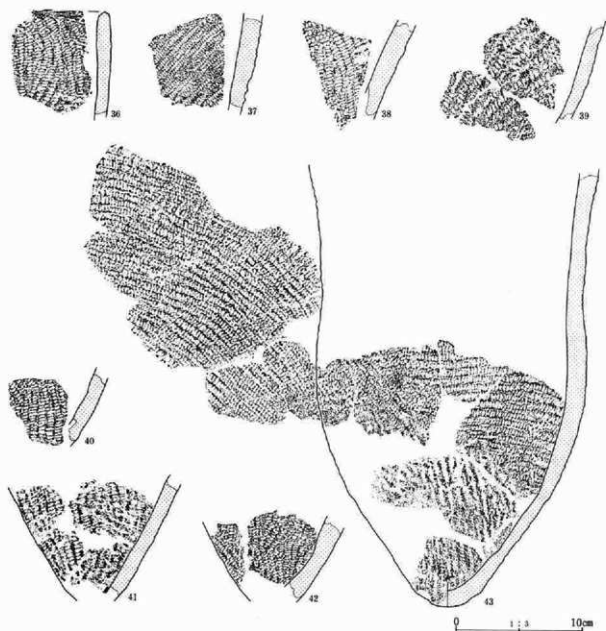
第39図 4号住居出土土器(2)



第40图 4号住居出土土器(3)



第41圖 4号住居出土土器(4)



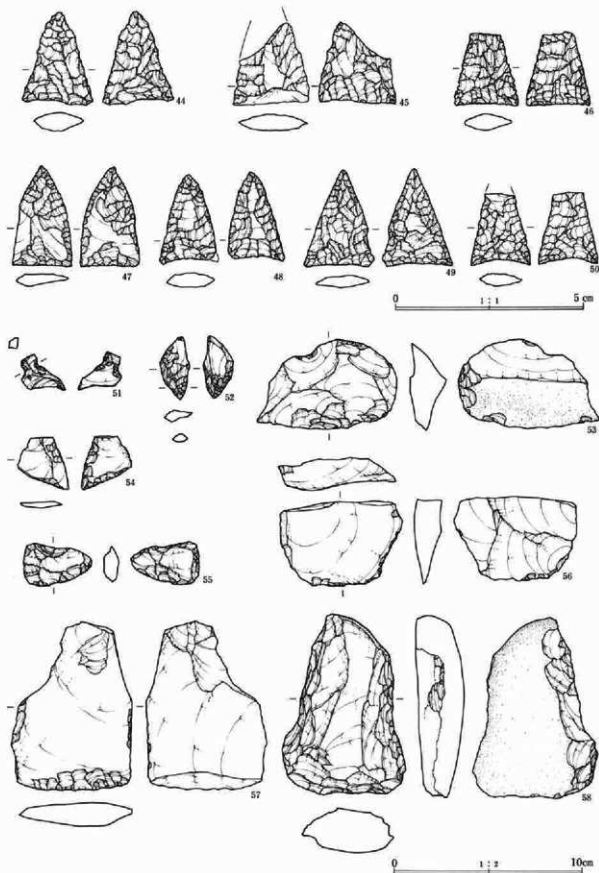
第42図 4号住居出土土器(5)

はRLとLRによる菱形羽状縄文で、小突起に合わせて器体を4分割している。25は本住居で唯一完形に復した土器である。平底を呈する平縁の深鉢で、RLとLRで羽状縄文が構成されている。縄文施文帯間の圧痕は、原体端末の結び目である。なお、口唇部と底面にも縄文が施文されている。10は羽状縄文が施された口縁部破片である。36は斜位施文による縦条の縄文が施されるタイプで、縄文はLR。

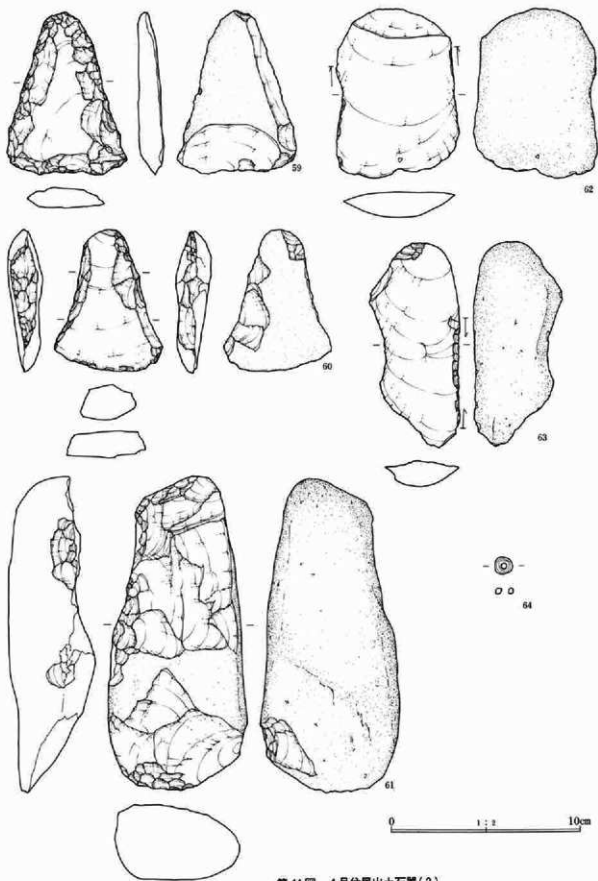
その他の土器は、いずれも胴部以下のものである。

9・11・13・14～21は菱形羽状縄文が施された一群で、このタイプは大半が尖底となる。胴部上半はRLとLRの横位施文で構成されるが、下半はいくつかのパラエティが見られる。9・11・13は上半の破片である。14・16は下半が斜縄文となる。17は羽状縄文であろうか。15は下半のみを縦位施文して縦位羽状を構成している。18～20も15と同様である。21は同一原体を縦横に交互に施して縦位羽状を構成している。

II 縄文時代の調査

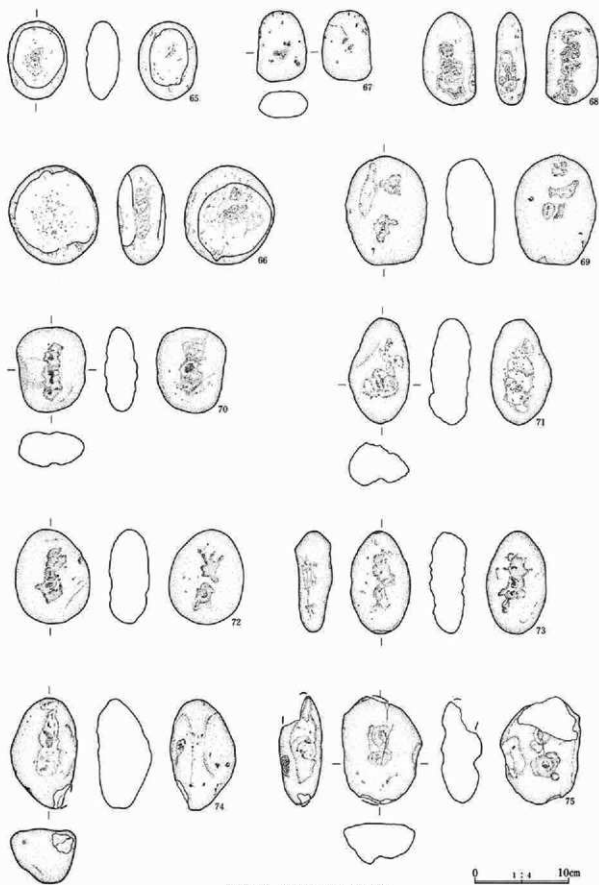


第43図 4号住居出土石器(1)



第44图 4号住居出土石器(2)

II 縄文時代の調査



第45图 4号住居出土石器(3)

22~24・26~35は2種類の原体で羽状縄文を構成する一群で、このタイプは平底になるものが多い。この一群には縄文一帯の施文幅が狭いものがあり、22はそれにあたる。また2種類の原体に変化をつけるものがあり、26では一方の節が不鮮明であり、27~29では原体の太さを変えている。32・34は平底になる土器で、32では底面に縄文が施文されている。

67~43はその他の一群を一括した。37は縄文一帯の施文幅が広いもの。38・39は条が縦方向に流れるもので、尖底部付近の破片であろう。40~42は条を縦に施文する一群で、いずれも尖底部の破片である。43はRLの斜縄文を施文する土器であるが、胴部の一部にLR縄で条を横に施文し、底部ではLR縄で条を縦に施文している。

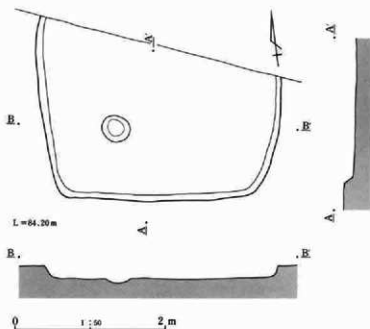
本住居から出土した土器はいずれも花壇下層式に含まれ、土器の作りや文様の特徴も他の住居出土土器と同様であるが、口縁部文様帯幅が広く、口唇下に1a文様帯が形成され、1本単位の摺痕とその間の斜位刻み目を文様要素とする一群(2・4~8)、および平底と結び付きの強い羽状縄文施文の一群(22~35)が出土土器の主体を占めている点は、他の住居とは異なった特徴として重要である。

出土した石器の総量は50ページに示した。このうち石鎌7点(44~50)、石匙1点(51)、石錘1点(52)、削器5点(53~57)、打製石斧4点(58~61)、使用痕ある剥片2点(62・63)、小玉1点(64)、磨石2点(65・66)、凹石9点(67~75)を図示した。石鎌の出土量が多いが、不明の5点と未製品(I類)の10点を除くとA・B類に限られており、打製石斧も未製品(D類)の3点を除くとA類に限られる。破片は黒曜石を中心に641点出土しているが、床面からの出土はほとんど認められなかった。

5号住居

K-25グリッドに位置する。3号住居の北東10mのところあたり、南西に8号配石、南東に12号~14号集石がある。

南北方向に主軸をもつ隅丸方形を呈すると思われるが、北側半分が調査区外へかかるため、全形は不明。



第46図 5号住居

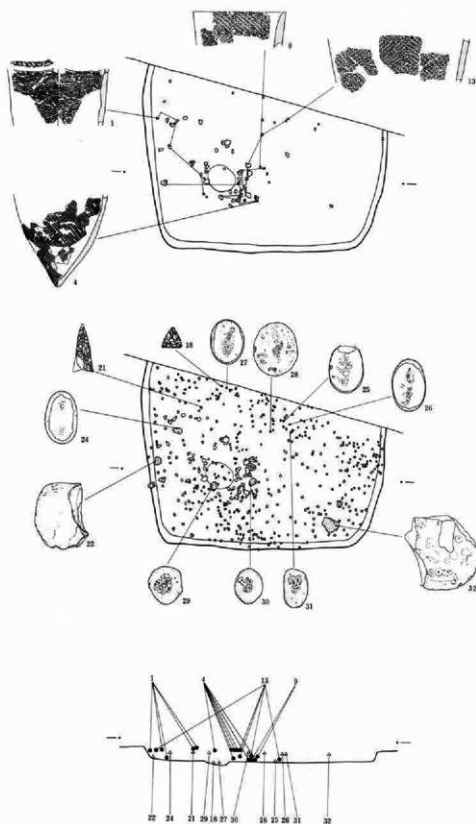
東西幅は3.23mである。

床は硬質面が認められないがほぼ水平で、確認面からの深さは18cmである。

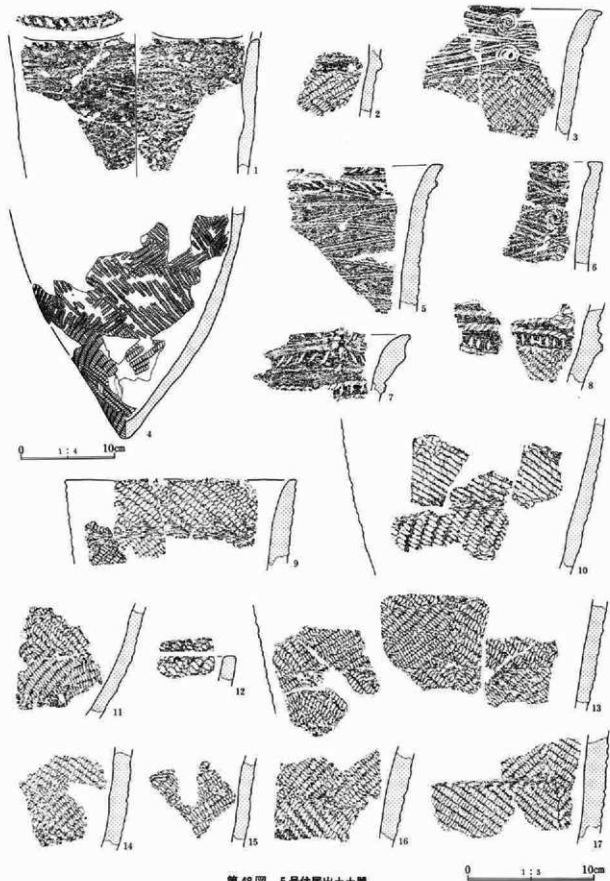
住居内南西寄りで浅い落ち込み1カ所を確認したが、炉や柱穴は確認できなかった。

遺物は覆土中を中心に比較的多く出土した。本住居周辺は遺物の出土量が少ないため、住居への集中度が特に目立った。特に黒曜石を中心とする破片が多く、覆土中を中心に834点の出土があった。2号住居・4号住居でも同様の傾向が認められており、石器の遺跡内製作を暗示している。土壘の出土

II 縄文時代の調査

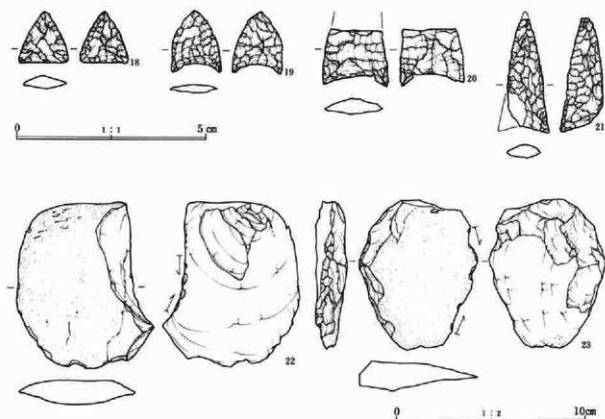


第47図 5号住居遺物出土位置図



第48图 5号住居出土土器

II 縄文時代の調査



第49図 5号住居出土土器(1)

量は少なく、浅い落ち込みの周辺を中心に破片状態で出土したもののなかに、接合関係が認められた。また、3・4・9・10・14は遺構外との接合例があり、3は4区包含層出土の2点が接合、以下同様に4は4区13点、9は4区1点、10は4区3点、14は4区1点が各々接合している。

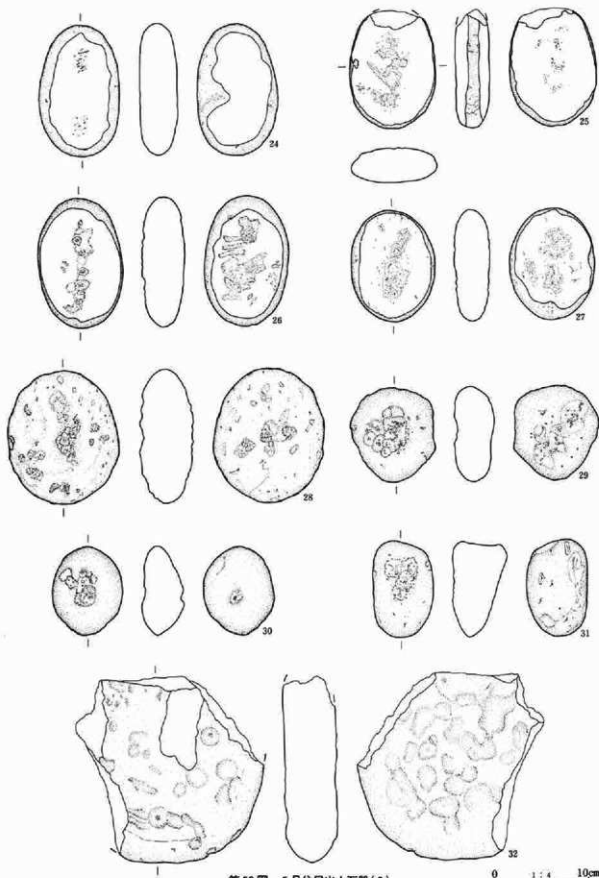
出土土器のうち、17点を第48図に示した。

1は波状口縁の深鉢で、胴上半部1/4の破片から復元した。おそらく尖底となるであろう。器内外面ともかろいナデ調整とともに、うっすらと横位の条痕が残っており、縄文の施文は認められない。波頂部を欠失するが、口唇部には刻みが施されている。器厚は1cm前後で胎土に多量の繊維を含んでおり、土器の作りは他と何ら変わらない。

2・3・5～8は口縁部文様帯をもつ一群である。いずれも掘糸圧痕で菱形文を構成し、菱形区画内に渦巻文を付すが、2・3・5ではR縄とL縄を合わせた矢羽根状掘糸を使用するのに対し、6～8は1本単位の掘糸を使用しており、7では掘糸間に刻みが施されている。掘糸は6がR縄、7・8はL縄で同個体であろう。5・7は口唇部下に隆帯をめぐらし、口唇部と一対化させて矢羽根状の刻み目を構成している。胴部縄文は2が羽状構成、3・8は菱形羽状構成で、いずれもRLとLRの2種類を使用している。2は縄文施文帯が狭く、薄手のタイプである。なお、2・8では口縁部文様帯下に刻みを施した隆帯で画している。

9・12は口縁部文様帯をもたない一群である。9はRLとLRを横位施文して、羽状縄文を構成する。12は口唇部に縄文を施文する土器で、原体はLR。

4は尖底の深鉢で、上半部は菱形羽状構成、底部付近の3帯は羽状構成となっている。縄文はいずれもRLとLRの横位施文である。



第50图 5号住居出土石器(2)

0 1:4 10cm

II 縄文時代の調査

器種別組成 (891点・1274.04g) 剥片石器

②	砕片 (834点)
---	-----------

①

①石鏃 (8点) 打斧 (1点) 削器 (1点)

石核 (3点) 加工砥 (4点) 使用砥 (5点)

②剥片 (35点)

石材別点数 (834点) 砕片

①	チャート (163点)	黒曜石 (632点)
---	-------------	------------

①黒頁 (30点)

②粗安・頁岩 (各2点) 珪頁 (3点)

珪燧・珪化木 (各1点)

石材別重量 (258.3g) 砕片

黒頁 (37g)	チャート (70g)	黒曜石 (144.4g)
----------	------------	--------------

①粗安 (0.2g) 頁岩 (2.7g) 珪頁 (1.1g)

珪燧 (1.5g) 珪化木 (1.4g)

石材別点数 (35点) 剥片

黒頁 (4点)	チャート (13点)	黒曜石 (9点)	石英 (4点)	珪化木 (3点)	①
---------	------------	----------	---------	----------	---

①黒安・黒片 (各1点)

石材別重量 (185.8g)

黒頁 (66.1g)	チャート (35.1g)	黒曜石 (37.4g)	石英 (31g)	①
------------	--------------	-------------	----------	---

①珪化木 (3.1g) 黒片 (9.6g) 黒安 (3.5g)

類別組成 (8点) 石鏃

A 1類 (1点)	B 1類 (4点)	B 2類 (1点)	I 類 (1点)	不明 (1点)
-----------	-----------	-----------	----------	---------

石材別点数 (8点) 石鏃

黒頁 (1点)	黒曜石 (7点)
---------	----------

類別組成 (1点) 打斧

D 類 (1点)

石材別点数 (1点) 打斧

粗安 (1点)

器種別組成 (52点・20842.3g)

磯 (41点)	凹石 (5点)	磨石 (4点)	①
---------	---------	---------	---

①白石・凹石台石 (各1点)

石材別点数 (11点) 磯石器

粗安 (11点)

石材別点数 (41点・12432.3g) 磯

①	粗安 (25点)	砕磯 (8点)	②	③
---	----------	---------	---	---

①チャート (3点)

②砂岩 (3点)

③石珪 (2点)

10・11・13～17は胴部破片である。10は無節RとLRで羽状縄文を構成、その他はいずれもRLとLRの2種類の原体を使用しており、11・13・17は菱形羽状縄文を構成している。

以上の土器のうち、1以外は花積下層式に含まれ、土器の作りや文様の特徴は他の住居出土土器と同様である。1は第1群に含まれる南関東系の土器であるが、器厚や胎土の特徴は第II群と近似しており、出土状況からも共伴関係にあると言つてよい。

出土した石器の総量は64ページに示した。このうち、石鏃4点(18～21)、使用痕ある剥片2点(22・23)、磨石4点(24～27)、凹石4点(28～31)、台石1点(32)を図示した。石鏃は8点出土しており、未製品(I類)1点と形態不明の1点以外はA・B類に限られる。砕片は先述のとおり、黒曜石を中心に834点出土しており、覆土中から床面にわたって住居の全域に認められた。土器や他の石器とともに、数次にわたって投棄されたものであろう。

6号住居

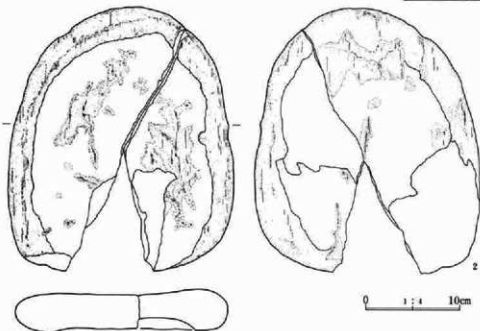
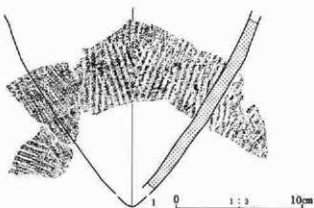
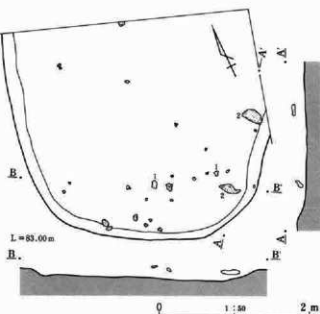
3区の北東隅、J-21-22グリッドにまたがって確認された。北側約半分は調査区外のため未調査であるが、西側約8mに位置する1号住居とほぼ同形態であろう。

確認面からの深さは10~14cmで、床面は不明確。戸・柱穴等も確認できなかった。

遺物の出土量は少なく、住居内南西寄りを中心に、花積下層式(第II群)に比定される土器片数点と石器数点・礫数点が出土している。このうち接合の認められた土器1点と石器1点を図示する。

1は尖底を呈する深鉢の底部付近の破片で、0段3条RLの同一原体を、方向を変えながら縦位施文して、縦位羽状縄文を構成している。器厚は1cm前後で、胎土に多量の繊維を含む。

2は大形の板状円礫を利用した石皿で、1mほど離れて出土した2石が接合した。両面に使用面が認められ、磨面作成時の敲打痕が残っている。



第51図 6号住居および出土遺物

3. 土 坑

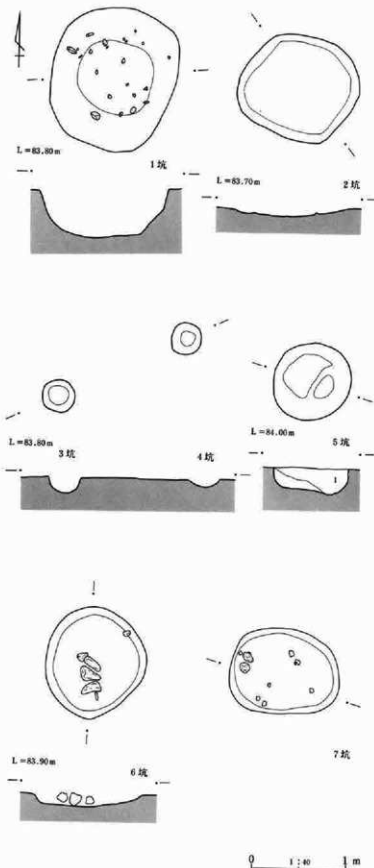
土坑は合計15基を確認した。このうち関山式土器が出土した15号土坑以外は全て花積下層式土器に属するものと思われる。分布は花積下層式土器の分布範囲と重なっており、その範囲内に散在した状態で分布している。

平面形状は大半が円形であるが、9号土坑は方形で規模が大きく、特異な存在である。また、掘り込みの深いものと浅いものがあるが、このうち浅いものは集石土坑の可能性もある。掘り込みの深いものうち、1号土坑と14号土坑からは多量の剥片・碎片が出土しており、14号土坑からは尖底土器一全体分が覆土層より出土している。

以下、個別に説明を行う。

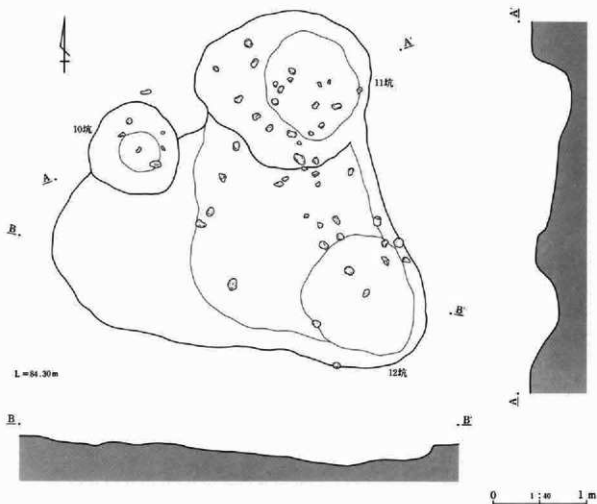
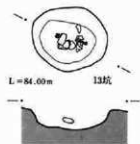
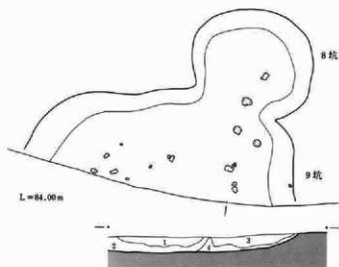
1号土坑 (202ページ参照)

3区微高地縁辺部、K-20グリッドに位置する。南側に2号土坑が近接する。平面形は直径1.4mのほぼ円形を呈し、確認面からの深土は50cmである。本土坑からはチャートを主体に多量の剥片類の出土が認められたため、埋土を水洗いしたところ、総数507点(4268g)の剥片類と530点(1438g)の礫が検出された。剥片類の内訳は剥片233点、碎片214点、石核14点、石鏃14点、使用痕ある剥片13点、加工痕ある剥片9点、削器8点、石匙1点、石錐1点である。これらを石質別に見ると、チャート425点(1074g)、黒色頁岩74点(336g)、黒曜石5点(5g)、黒色安山岩1点(11g)、珪質頁岩1点(1g)、頁岩1点(10g)である。これらは石器製作後あるいは調整後に出た剥片類



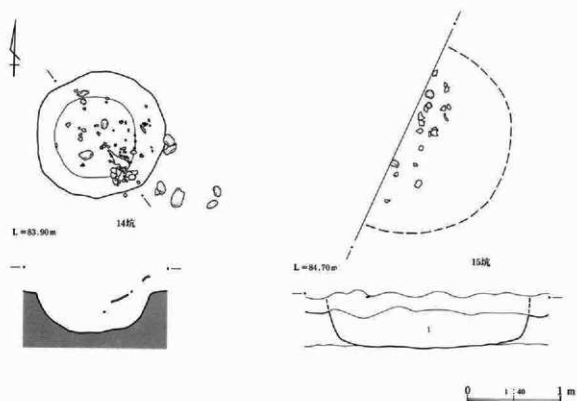
第52図 土坑(1)

3. 土坑



第53图 土坑(2)

II 縄文時代の調査



第54図 土坑(3)

を、不用となった石器や未製品(第56図11~13、16~18)とともに一括投棄したものと考えられる。礫は大半が地山に含まれる礫で、他に焼礫14点と磨石1点(第56図19)が含まれていた。土器は花積下層式土器の小破片が少量出土している。

2号土坑

1号土坑の南、3区K-20グリッドに位置する。平面形は直径1.1mのやや歪んだ円形を呈し、確認面からの深さは7mと浅い。覆土中から花積下層式土器の小破片が数点少量出土している。

3号土坑

1号住居の東側、3区J-21グリッドに位置する。直径34cm、確認面からの深さ17cmの、円形を呈する小型の土坑で、覆土上面から花積下層式土器の破片1点が少量出土している。

4号土坑

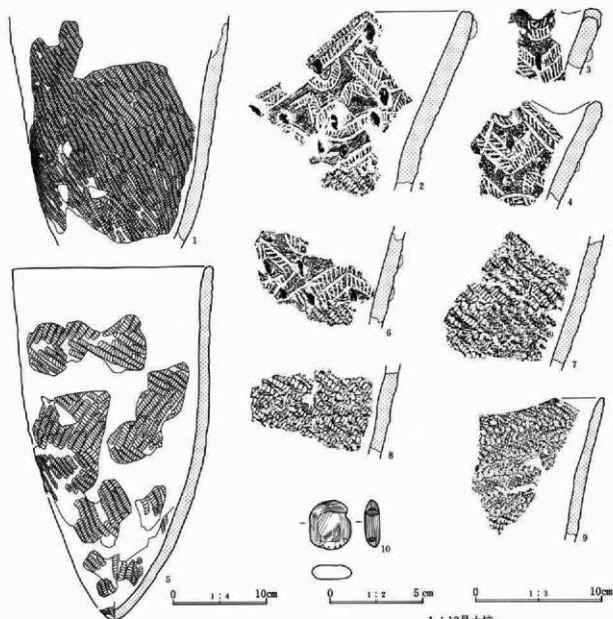
3号土坑の北西に近接し、J-21グリッドに位置する。直径32cm、確認面からの深さ10cmの、円形を呈する小型の土坑で、出土遺物は認められなかった。

5号土坑

3区調査区の北隅、I-21グリッドに位置する。直径80cmの円形を呈し、確認面からの深さは22cmである。出土遺物は認められなかった。

6号土坑

1号住居の北側の微高地縁辺、3区J-20グリッドに位置する。直径1.1mのやや歪んだ円形状を呈し、確認面の深さは10cmである。ほぼ中央部の底面から棒状礫が4点出土した以外は、遺物の出土は認められなかった。



1 : 13号土坑
2~4, 6~9 : 15号土坑
5・10 : 14号土坑

第55図 土坑出土土器

7号土坑

5号土坑の東側、3区1-21グリッドに位置する。長軸1.15m、短軸90cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは10cmである。覆土中からは花積下層式土器少量と礫2点が出土している。

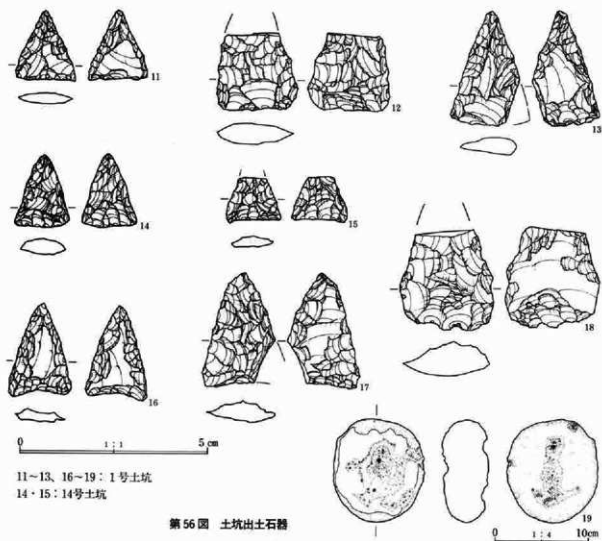
8号土坑

4区N-25グリッドに位置する。9号土坑と一部接しており、それに切られている。直径1.3mほどの円形を呈し、確認面からの深さは15cmである。覆土中から少量の花積下層式土器と礫が少量出土している。

9号土坑

8号土坑の南側に接し、それを切っている。南側を攪乱に切られており全景は不明であるが、東西幅3mほどの方形状を呈するものと思われる。確認面からの深さは15cmである。出土遺物は覆土中から花積下層式土器小破片と剥片類が少量出土している。

II 縄文時代の調査



11～13、16～19：1号土坑

14・15：14号土坑

第56図 土坑出土石器

10号・11号・12号土坑

4区L-26グリッドに位置する。地山礫が露出した風倒木状の攪乱部に伴って3カ所の窪地が検出された。10号以外は平面形が不定形で、確認面からの深さは10号・11号が30cm、12号は20cmほどである。出土遺物は花積下層式土器小破片数点と地山礫が少量出土している。

13号土坑

3号住居の北側、4区L-24グリッドに位置する。長軸80cm、短軸67cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは20cmである。遺物は数個の礫の下から斜縄文のみを施した尖頭の花積下層式土器（第55図1）が、つぶれた状態で出土した。

14号土坑（202ページ参照）

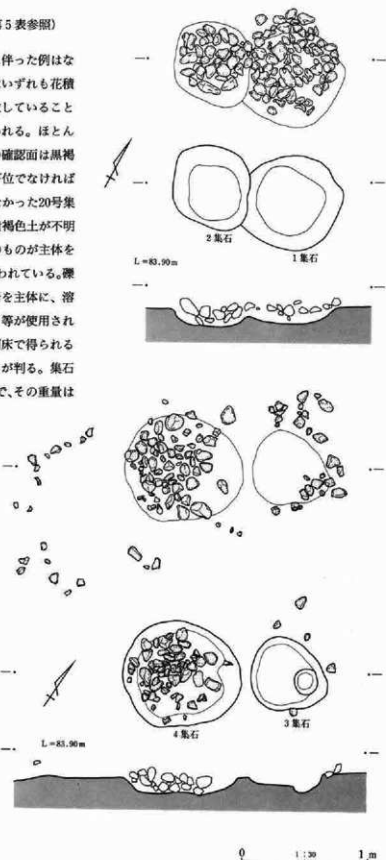
4号住居の北西、M-23グリッドに位置する。直径1.3mの円形を呈し、確認面からの深さは42cmである。土坑内から石籬2点（第56図14・15）、装身具未製品（第55図10）、羽状縄文を施した尖底深鉢（第55図5）の他に、黒曜石を中心とする剥片類635点が出土している。

15号土坑

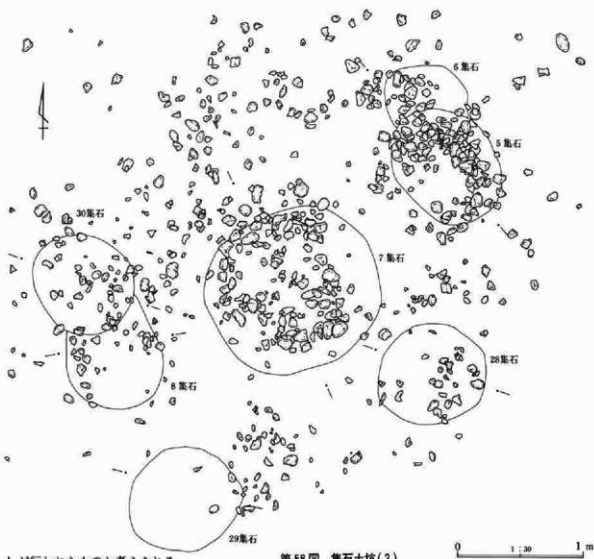
4区K-23グリッドに位置する。約半分が西壁にかかった状態で確認されたが、平面確認はできなかった。横幅2mほどの規模で、覆土中から関山式土器数片（第55図2～4・6～9）が出土している。

4. 集石土坑 (第4表、第5表参照)

合計22基を確認した。土器を明確に伴った例はないが、覆土中や周辺に散布する土器はいずれも花積下層式土器であり、分布もそれと一致していることから、全て花積下層式期の所産と思われる。ほとんどが土坑状の掘り込みを伴うが、礫の確認面は黒褐色土中であるため、掘り込みは礫の下位でなければ確認できない。掘り込みが確認できなかった20号集石土坑の位置する地点は、確認面の黄褐色土が不明瞭であった。礫はコブシ大の大きさのものが主体を占めるが、20cm以上の大形のものも使われている。礫はいずれも円礫で、石材は粗粒安山岩を主体に、溶結凝灰岩、砂岩、石英斑岩、チャート等が使用されているが、これらはいずれも船川の河床で得られる石材であり、手近で調達していることが判る。集石土坑に利用された礫の総量は1,261点で、その重量は461,119kgに達している。このうち円礫の形状をとどめているのは508点、欠損しているものは753点ある。また、全総量のうち被熱で表面が赤化あるいは変色しているものが996点あり、50%以上の欠損率と合わせて、礫の大半は被熱していると考えられる。また、これに伴って骨片等の伴出はまったく認められないことから、本遺跡検出の集石土坑は食糧調理に関わる遺構と考えたい。集石土坑内の礫のあり方には、掘り込み内にぎっしり詰まった状態のもの、上面に集積されたもの、周辺部に礫が散在するもの等がある。また遺構外包含層中にもこれらの礫と同じ被熱した礫が多数分布している。礫の接合関係では集石土坑内の接合例の他に、近接する集石土坑間、および包含層出土礫との接合例も認められることから、礫は必要に応じて使い回



第57回 集石土坑(1)



しが行われたものと考えられる。

第58図 集石土坑(2)

0 1:20 1 m

1号集石土坑

4区南西隅、N-22グリッドに位置する。2号集石土坑と一部を接しており、それに切られている。礫は合計85点が直径80cmほどの範囲にぎっしり密集していた。礫のうち、28点は欠損しており、被熱が認められたものは81点である。礫下土坑は直径75cmほどの円形を呈し、礫上面からの深さは18cmである。なお、本集石土坑では石皿破片1点、凹石3点が転用されている。

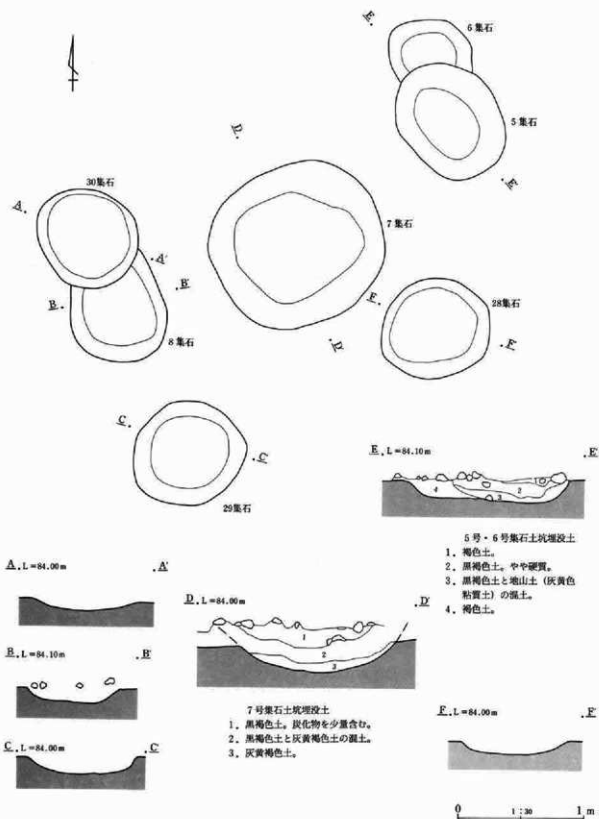
2号集石土坑

1号集石土坑の南側に接して確認された。重複関係は本集石土坑が切っている。直径60cmほどの不正円形形状の掘り込み内に、礫がぎっしり詰まった状態で確認された。礫上面からの深さは15cmである。礫は合計54個が使用されており、そのうち53個に被熱が認められたが、欠損した礫はなかった。

3号集石土坑

1号住居の南側、3区K-20グリッドに位置する。4号集石土坑とほぼ接する位置関係にあるが、切り合いの先後関係は不明である。合計32個の礫が散在した状態で確認され、その下に直径60cmほどの不正円形形状の掘り込みが確認された。確認面からの深さは8cmである。礫のうち24個に被熱度が認められ、28個の欠損品のうち2例4点が接合した。

4. 集石土坑



第59図 集石土坑(3)

II 縄文時代の調査

重量(g)	1号集石	2号集石	16号集石	17号集石	20号集石	21号集石
0～250	7	4	26	17	34	12
251～500	36	28	43	30	21	11
501～750	11	15	42	20	4	2
751～1,000	3	3	13		2	
1,001～1,250		2	3	1		
1,250～1,500		2	3			
合計	57	54	130	68	61	25

4号集石土坑

3号集石土坑の南西側にほぼ接する状態で確認された。合計139個の礫が直径80～90cmの円形を呈する掘り込み内にぎっしり詰まった状態で確認された。礫上面からの深さは20cmである。礫の個数が多いのは、欠損率が高いためである。139個の礫のうち116個が欠損しており、また125個に被熱痕跡が認められた。なお、本集石土坑では台石破片1点、剥片2点が転用されていた。

5号集石土坑

4号住居の東側、4区N-24グリッドに位置する。この地区は7基の集石土坑が密集する最も過密な地区である。本集石土坑は6号集石土坑と一部接しており、切り合い関係は6号を5号が切っている。直径1mほどの範囲で礫の集中画認められ、これを5号集石土坑として扱った。礫群下に長軸1m、短軸78cmの楕円状の掘り込みが確認され、礫集中部との整合性が認められた。礫は掘り込みの上面に集中する傾向があり、底面付近に伴うものは少ない。礫は合計124個を本集石土坑のものとして認定した。このうち118個が欠損しており、また92個に被熱痕跡が認められた。

6号集石土坑

5号集石土坑の北側に接して確認された。この地区では礫が周辺部にも散在するため、礫群の状態のみで集石土坑を特定することは難しい。本集石土坑では礫下の掘り込みとの整合性を考慮して、30個の礫を本集石土坑の礫として認定した。礫のうち28個は欠損しており、また20個に被熱痕跡が認められた。掘り込みは直径60cmほどの円形状を呈し、礫上面からの深さは18cmである。

7号集石土坑

4区N-24グリッド、集積群の中央で確認された。合計141点の礫が直径1mの円形状に分布し、その直下に直径1.3mのほぼ円形の掘り込みが確認できた。掘り込みの深さは礫群上面から34cmほどであるが、礫は大半が上面に平坦に分布している。礫は141点のうち117点が欠損しており、また120点に被熱痕跡が認められた。礫の接合例は13例30点認められたが、遺構外との接合はなかった。

8号集石土坑

7号集石土坑の西側に近接し、北側を9号集石土坑に切られている。礫は上面に少量散布する程度であるが、破砕した微小なものも多く、合計55点を数える。そのうち52点が破砕しており、また35点に被熱痕跡が認められた。掘り込みは短軸76cmの楕円形を呈し、礫上面からの深さは15cmである。礫の接合例は1礫2点である。

9号集石土坑

8号集石土坑の北側に接して確認された。礫は上面に少量散布する程度で、その下位に直径80cmほどのほぼ円形の掘り込みを確認した。掘り込みの深さは、礫上面から10cmほどである。礫は合計24点で、そのうち

4. 集石土坑

21点は破砕礫であった。

10号集石土坑

7号集石土坑の南東側に近接して確認された。本土坑も礫数は30点と少なく、そのうち23点が破砕礫で、20点に被熱痕が認められた。下位の掘り込みは直径80cmほどの円形を呈し、礫上面からの深さは17cmほどである。礫の接合例は1例2点である。

11号集石土坑

8号集石土坑の南側に近接して確認された。7号集石土坑の南側に礫が円形状に集中しており、これを11号集石土坑としたが、礫群下に掘り込みは確認できず、その西側にずれた位置で直径80cm、深さ12cmの円形の掘り込みを確認した。本地区では掘り込みの周辺に散布する礫も多く、これらは集石土坑の使用状況の一端を示しているものと考え、一遺構として扱うことにした。礫は合計25点で、そのうち24点が欠損、20点に被熱痕が認められる。接合例は1例2点であった。

12号集石土坑

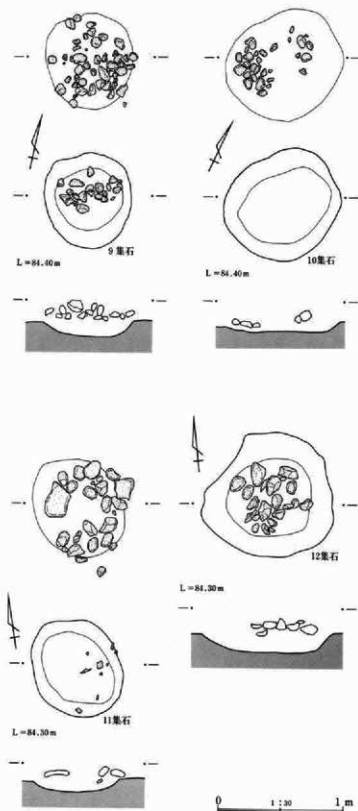
K-25グリッドに位置する。遺存状態は比較的良好で、71点の礫が円形状に集積し、その下位に直径70cmの円形の掘り込みが認められた。礫は64点に被熱痕が認められ、41点の欠損礫のうち7例16点が接合した。

13号集石土坑

12号集石土坑の南側に近接して確認された。長軸90cm、短軸82cmの楕円形を呈する浅い掘り込みの直上に、合計29点の礫が2ブロックに分かれて確認された。礫のうち23点に被熱痕が認められ、欠損品は6点で、接合例はない。

14号集石土坑

13号集石土坑の南西1mに位置する。やや大よりの礫37点を円形状に配置。その下位に長軸84cm、短軸70cm、礫上面からの深



第60図 集石土坑(4)

II 縄文時代の調査

き16cmの楕円形の掘り込みを確認した。使用されていた礫には、石皿被損品4点(第63図1~4)、磨石2点(同図5・6)、凹石2点(同図7・8)が転用されており、礫下で黒色頁岩などの石器用石材の剥片13点が検出された。これらも含め、礫は22点が欠損、12点に被熱痕跡が認められた。石器が多く転用されていること、礫のあり方が平面的であること、石器用石材剥片の出土などは、本遺跡の集石土坑のなかでは特異な存在であり、検討の余地を残している。

15号集石土坑

14号集石土坑の南5m、L-25グリッドに位置する。22点の礫が50cmほどの範囲にまとまった状態で確認。その下位に直径1mの不正円形状の掘り込みを検出した。礫上面からの深さは24cmである。礫は15点が欠損、18点に被熱痕跡が認められ、接合例は3礫6点である。

16号集石土坑

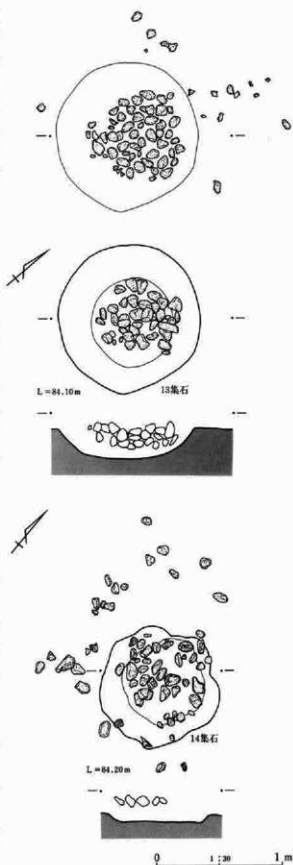
O-26グリッドに位置する。直径1.12m、深さ24cmの円形の掘り込み内上面に、131点の礫をぎっしり詰め込んだ状態で確認された。本遺跡では最も原形をとどめた例であろう。礫は118点に被熱痕跡が認められ、43点が欠損していたが、このうち5例12点が接合した。まお、礫の中に凹石2点が転用されていた。

17号集石土坑

N-26グリッドに位置する。掘り込み上面に分布する礫と周辺に散布する礫は出土レベルが一致し、性状も近似することから、本集石土坑の礫として扱った。掘り込みは直径95cmの不正円形状を呈し、礫上面からの深さは20cmである。礫は合計68点で、このうち53点に被熱痕跡が認められた。また、21点が欠損しているが、このうち2例5点が接合した。

18号集石土坑

M-26グリッドに位置する。本集石土坑も17号と同様の理由から周辺に散布する礫を含めて扱った。掘り込みは中央部の礫が集中する部分に認められ、直径90cm、深さ25cmの円形を呈す。礫は合計54点で、このうち34点に被熱痕跡が認められ、欠損品31点のうち5例11点が接合した。



第61図 集石土坑(5)

19号集石土坑

M-24グリッドに位置する。直径85cm、深さ15cmの円形状掘り込みの上面に、合計13個の礫が2カ所に分かれた状態で確認された。礫のうち9点に被熱痕跡が認められ、3点が欠損していた。

20号集石土坑

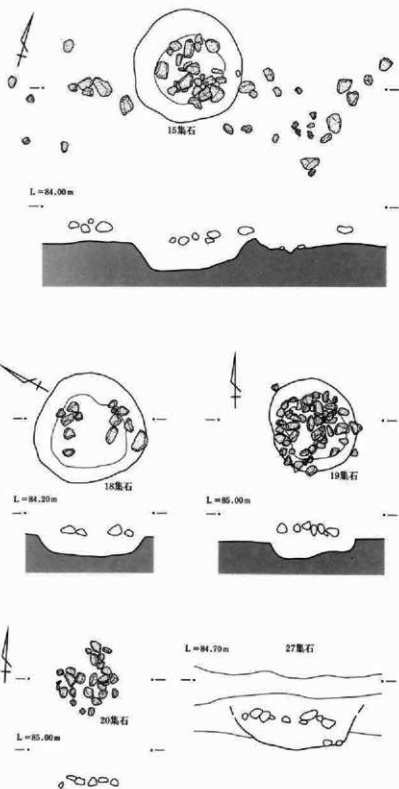
L-23グリッドに位置する。合計61個の礫が円形状に集積し、その下位に直径70cm、深さ13cmの円形の掘り込みを確認した。礫は45点に被熱痕跡が認められ、13点が欠損していた。接合関係はない。

21号集石土坑

L-24グリッドに位置する。合計25個の礫が直径50cmほどの円形状に集積した状態で確認されたが、礫の下位に掘り込みは検出できなかった。礫は25点のうち23点に被熱痕跡が認められ、3点が欠損していた。接合関係はない。

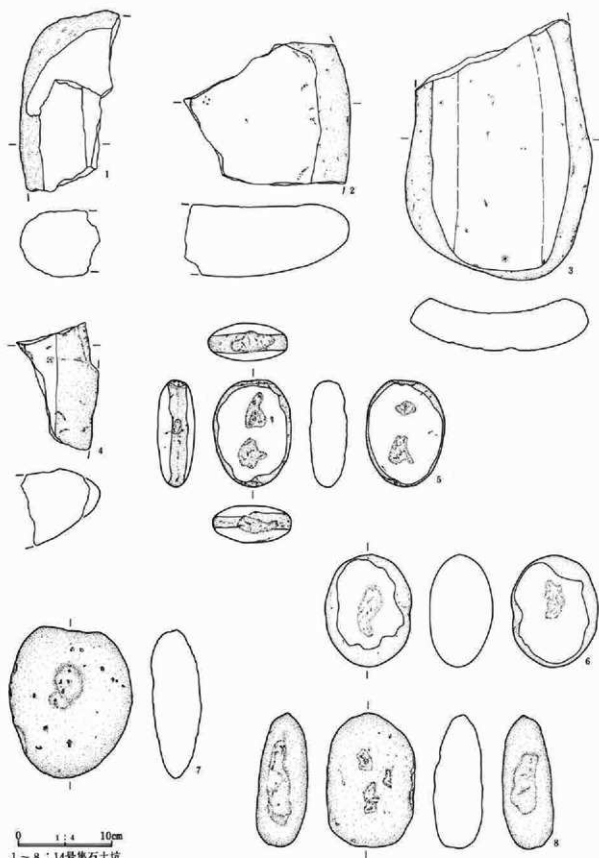
22号集石土坑

K-26グリッドに位置する。調査区北辺の断面にかかった状態で確認されたため、全形は不明である。掘り込み面は花積下層式土器が最も多く分布するⅡ層上半部であり、直径1m、深さ30cmほどの掘り込み内の上面を中心に、礫の集積が認められた。この形態は13号集石土坑の断面形と近似しており、本遺跡の集石土坑の本来の形態を示しているものと考えられる。



第62図 集石土坑(6)

II 縄文時代の調査



第63図 集石土坑出土遺物

5. 配石

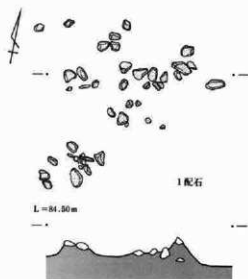
れきが集積された状態で認められるもののうち、集石土坑とは異なるものを配石として一括した。合計8基を配石と認定したが、礫の集積状況は一様ではなく、比較的広範囲に散在するもの、10個程度の礫が小範囲に集中するもの、列状をなすものなどがあり、土器を伴うものもある。集石土坑との違いは、基本的に礫下に土坑状の掘り込みを伴わないこと、被熱痕跡の認められる礫や欠損礫が著しく少ないこと、石器の転用例が多いことなどをあげることができる。使用石材は特に特異なものではなく、集石土坑の石材とほぼ一致するが、粗粒安山岩の使用頻度が高く、大形礫を伴う例があるなど、異なる点もある。分布は1号以外は集落中央部の遺物分布の少ないエリアに集中し、これらは墓域と関連する可能性を想定しておきたい。1号については集石土坑の可能性も考えられる。確認面は集石土坑とほぼ同レベルであり、いずれも花積下層式期に属するものとする。

1号配石

M-26グリッドに位置する。合計45個の礫が1.5mほどの範囲内に集中するが、配置は不定形である。礫は29点に被熱痕跡が認められ、欠損礫10点のうち2例5点が接合した。礫の下位に掘り込みが確認できないため配石としたが、配石のなかで接合関係が認められるのは本配石のみであり、被熱痕跡の比率が高い点や他の配石との分布の違いからも、集石土坑の可能性が高い。

2号配石

L-23グリッドに位置する。合計49個の礫が長軸3m、短軸1.5mの楕円形状にめくった状態で確認された。長軸はほぼ南北にとっており、南西部分の礫は欠落している。礫列と言えるほど明瞭ではないが、礫は20~30cmほどの帯状を成しており、東側部分には棒状礫や人頭大の大形礫が認められた。石材では集石土坑には認められなかった輝緑岩・輝緑凝灰岩・石英閃緑岩・雲母石英片岩などが使用されている。また、打製石斧1点、凹石1点、台石3点、石



第64図 配石(1)

II 縄文時代の調査

皿破片1点、石器の素材剥片類5点が持ち込まれている。礫のうち被熱痕跡が認められるのは10点で、欠損跡は13点である。

3号配石

L-23グリッドに位置する。長軸20cmほどの大形礫を中心に、10個の礫が集積された状態で確認された。礫のうち2点に被熱痕跡が認められ、欠損跡は1点である。

4号配石

K-23グリッドに位置する。磨石2点(第66図7・8)を含む8個の礫が集積された状態で確認された。このうち3個は5cm以下の小礫である。被熱痕跡の認められた礫は4点、欠損跡は1点である。

5号配石

K-23グリッドに位置する。南西側に6号配石が近接する。大小19個の礫が1mほどの長さにわたって、ほぼ南北方向に直線状に配置された状態で確認された。南側延長上にも3個の礫が並んでいるが、これらは確認レベルは10cmほど下位にあり、6号配石と同レベルに存在する。使用された礫はいずれも完形礫で、台石1点、凹石2点を含んでいる。なお、被熱痕跡が認められる礫は5点である。

6号配石

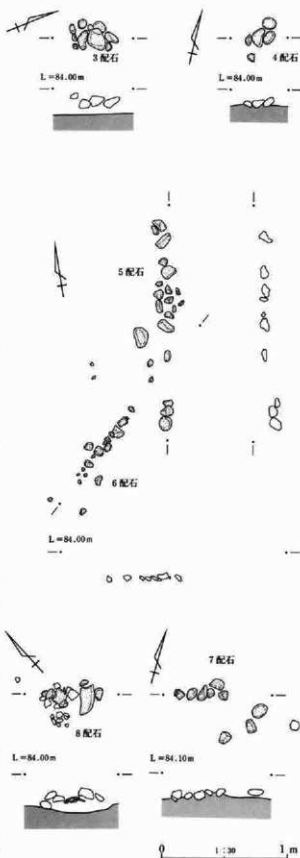
5号配石の南西に近接する。6号配石よりもやや小さな円礫19個を、長さ70cmにわたって直線状に配置している。確認面は6号配石よりも10cmほど下位にあり、被熱痕跡が認められる礫は3点である。

7号配石

K-23グリッドに位置する。直線状に配置された7個の礫と、それからやや離れた4個の礫を一括して7号とした。このうち後者には磨石2点(第66図9・10)と、やや大きな黒曜石核1点を含む。欠損跡は1点で、被熱痕跡が認められる礫は4点である。

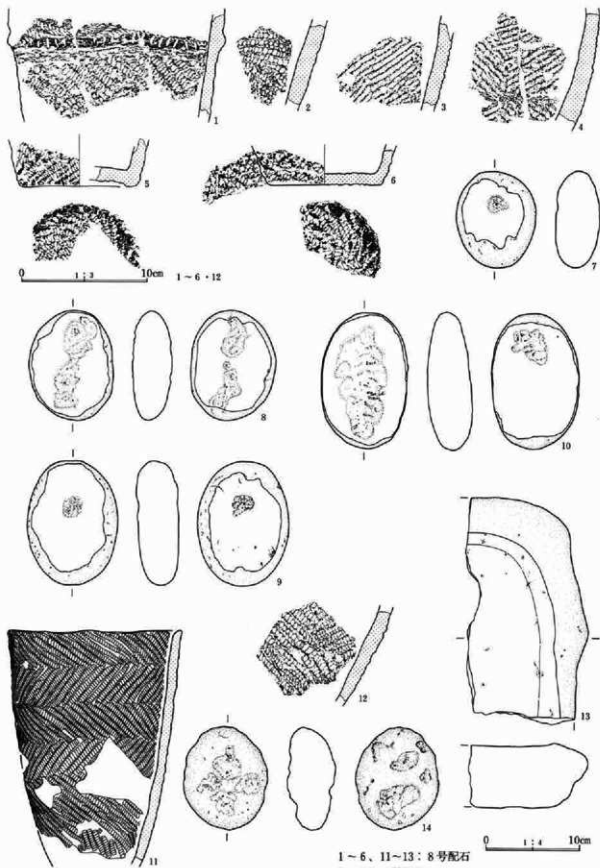
8号配石

K-24グリッドに位置する。石皿の大形破片1点(第66図13)と凹石1点(第66図14)を含む8個の礫と土器破片(第66図1～6)が集積された状態で



第65図 配石(2)

5. 配石



第66图 配石出土遺物

1-6、11-13: 8号配石

7-8: 4号配石

9-10: 7号配石

II 縄文時代の調査

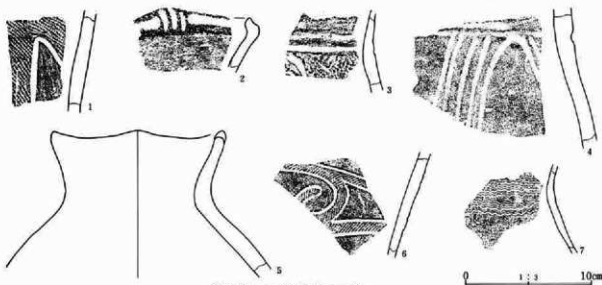
検出され、その下に底部を欠損する深鉢（第66図11）が横位でつぶれた状態で確認された。配石下は皿状にややくぼんでおり、浅い掘り込みが存在した可能性もある。礫は4点で被熱痕跡が認められ、4点は欠損礫である。上面に集積されていた土器は数点に接合関係が認められた。第66図1はR縄1種類の燃糸圧痕で口縁部文様帯を構成し、文様帯下を刻みを施した隆帯で画し、胴部にはRLとLRで羽状縄文を構成している。2は縄文RLを施した胴部破片である。3・4は無節LとRで菱形羽状縄文を構成する土器で、同個体である。5・6は底面に縄文を施した平底の土器である。11は配石下から出土した平縁の深鉢で、RLとLRで羽状縄文を構成している。胴部下半の斜縄文が縦走化しており、底部は尖底となるであろう。12は11と共に出土した破片で、菱形羽状縄文が施文された別個体の土器である。以上の土器はいずれも胎土に多量の繊維を含み、花積下層式に比定される。

6. 包含層出土遺物

ここでは3区から5区の微高地に形成された、いわゆる包含層から出土した土器について報告を行う。出土土器は前期初頭花積下層式から晩期安行3d式におよぶ各型式を含んでおり、若干の継続期間を含みながらもかなり長期にわたって本遺跡地が利用されていたと言える。ただし、今回の調査区で遺構が確認された花積下層式期と関山I式期のみであり、各期によって利用状況は当然異なっていた。出土土器は、前期条痕文系土器群、花積下層式、二ツ木式、関山I・II式、諸磯a・b式、中期五領ヶ台式、勝坂II・III式、加曾利E2・3・4式、後期称名寺I・II式、堀之内I・II式、加曾利B1・2・3式、曾谷式、安行II式、晩期安行IIIb式の各期に分類され、総量は6,000点を上回る。第3表（194ページ）に点上げた包含層出土土器の点数を示したが、総点数の約半分を花積下層式が占めている。なお、微高地は花積下層式以前の旧河道で二分されているが、その存在は遺跡のあり方とも関連するため、旧河道以西の微高地を3・4区、以東を5区として別に扱う。また、本遺跡西側のローム台地縁辺下にあたる1区低地でもわずかに土器の出土が認められた。これについても本項で扱うことにする。

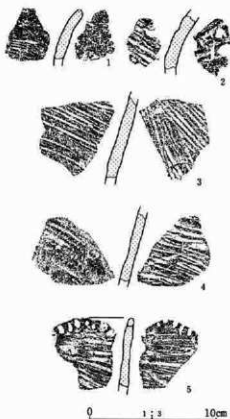
(1) 1区出土土器（第67図）

本遺跡西側のローム台地縁辺部直下にあたる1区で、少量の土器が破片状態で出土した。これらは西側ロー



第67図 1区包含層出土土器

ム台地に占地する遺跡からの流れ込みと判断されるが、ここに紹介しておく。第67図1～6はいずれも後期の土器である。1は太沈線による文様区画と充填縄文手法を特徴とする称名寺Ⅱ式土器で、縄文LR。2～4は口縁部が無文化された堀之内Ⅰ式土器で、2は口唇部に沈線がめぐり、3は縄文LRを地文に刷部文様が描かれる。5は4単位波状口縁の無文土器で、2～4に伴うものであろう。6は縄文LRを充填した帯縄文で渦巻文を構成する堀之内Ⅱ式土器で、沈線は細沈線が使用されている。7は頸部以上に櫛歯状施文具で波状文を施文する弥生時代後期終末樽Ⅲ式土器である。1～3区低地では弥生時代終末期から古墳時代前期の土器が出土しており、その項で扱うべきだが、1～6と同地点での出土であったため、敢えてここに示した。



第68図 3・4区包含層出土土器(1)

(2) 3・4区出土土器 (第68図～第103図)

先述のように、ここでは3区及び4区の旧河道以西の微高地を、便宜的に3・4区として扱う。この地点は花積下層式期の集落が形成された部分にあたり、包含層出土土器のうち花積下層式土器の大半は、この地点から出土している。以下、細別型式ごとに報告する。

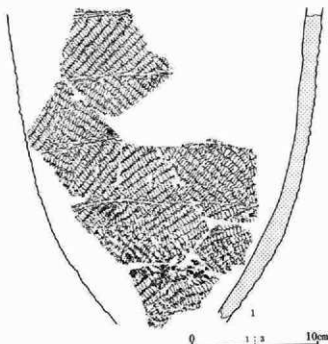
条痕文系土器群 (第68図)

今回の調査では12点出土しており、そのうち2点は1号住居および5号住居からの出土である。包含層出土のものはいずれも小破片で、そのうち5点を図化した。いずれも表裏に斜位あるいは横位の条痕が施文されるが、他の文様施文は認められない。1・5は口縁部破片で、5は波状口縁を呈し、口唇部に刻みが施されている。器形はいずれも口縁部が外反する単純な深鉢であろう。器厚は6～8mmで、胎土には多量の繊維を含む。焼成は良好で、硬質感がある。器厚がやや薄い点を除けば、胎土や混和物など土器の作りは花積下層式土器に近似している。

関東地方の条痕文系土器群は早期中葉から一部は前期初頭におよぶと言われているが、群馬県ではまだ該期土器群の実態は把握されていない。それは、該期遺跡の調査例が少ないこともさることながら、土器の文様要素が乏しいことにも起因しており、本遺跡出土土器もその例外ではない。ここでは、明確に早期に位置づけられる土器の出土がないこと、大型破片2点が花積下層式期の住居から出土していることを考慮して、一応前期初頭に含めておきたい。

花積下層式土器 (第69図～第84図)

本遺跡包含層の主体を占める土器群である。まずその特徴を列記してみよう。形態はいずれも深鉢で、浅鉢は1点も出土していない。底部は尖底が主体で平底が少なからず認められるが、その比率は2割程度であろう。ちなみに平底の全出土数は34個体で、全て底面に縄文の施文が認められた。器形は砲弾形の単純な深鉢を主に、胴部中位が若干くびれるタイプ、胴部下半がくの字状に突出するタイプ、底部から直線的に開くタイプなどがあり、後2者は平底に限られる。口縁部は平縁を基本とし、それに4つの山形状小突起が付く



第69図 3・4区包含層出土土器(2)

のと斜位のものがあり、後者は口唇部の刻みと組み合わせて、矢羽根状に構成するものが多い。また、口縁部文様帯幅の狭いものと広いものがあり、前者は胴部縄文一帯の幅にほぼ対応し、隆帯を伴わないタイプが多いのに対し、後者は数帯分の幅をとり、ほとんどが隆帯を伴う。

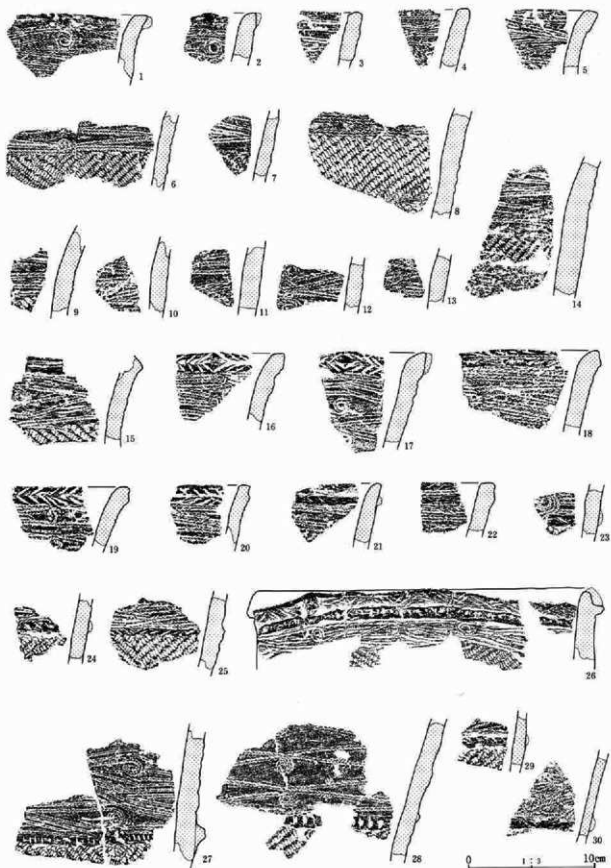
胴部文様は、菱形羽状縄文と羽状縄文がほぼ2対1の割合を占めており、僅かに斜位縄文も認められる。使用される原体はほとんどが0段3条縄で、単節を主体に僅かに無節が認められる。環付縄文、付加条などの装飾的な原体は一点もない。施文は菱形羽状・羽状とも2種類の原体を使用しており、菱形羽状縄文は尖底土器と、羽状縄文は平底土器と結び付く傾向が強い。菱形羽状縄文の場合、口縁部渦巻文の単位に合わせて器体を8分割するタイプが多いが、基本単位に合わせて4分割するものもある。いずれも横位帯状施文を基本とするが、尖底土器では底部付近の施文に特徴があり、斜位施文により縦走させるもの、2種類の原体を交互に縦位施文して縦羽状を構成するもの、1種類の原体を縦横に交互施文して縦羽状を構成するもの、羽状縄文を構成するもの、斜位施文により条を横走させるものなどのバラエティがある。このため、胴部下半の施文の変化により、尖底となるかどうかをある程度特定することが可能である。縄文一帯の施文幅は広いものが多く、一帯が4～5cmの場合は2～3回の施文で充填している。また施文幅の狭い一群もあり、これらは羽状構成の平底土器に限られるようである。なお、施文帯間に原体末端の結び目の圧痕が明瞭に認められるものが多い点も指摘しておきたい。

器厚は8～10mmほどの厚手のものが大半で、最も厚いものは15mmであった。胎土にはいずれも多量の繊維を含んでおり、焼成は良好で硬質感がある。他に軽石粒やチャート礫粒を含むものもある。内面に条痕を伴うものはなく、かるいナゲ調整で仕上げられている。

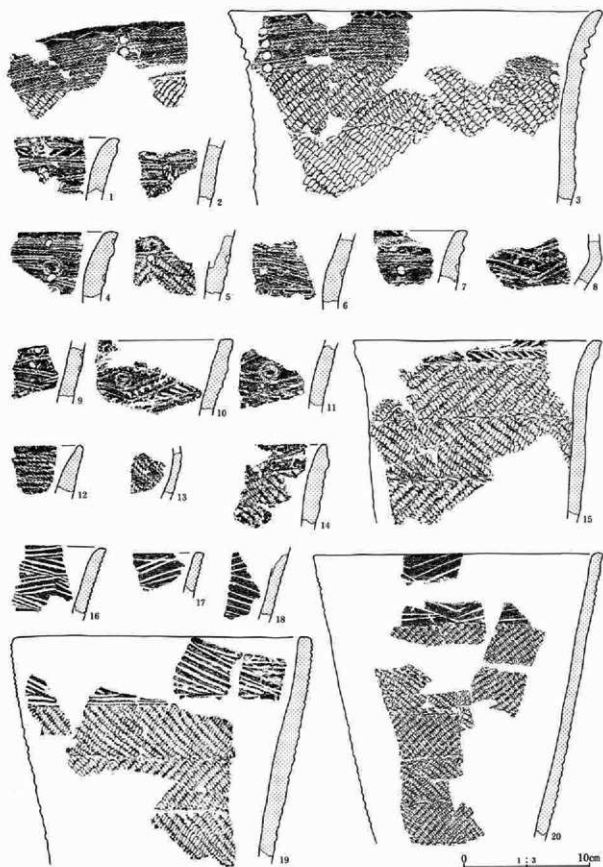
以上が本遺跡出土花積下層式土器の特徴である。県内では勢多郡赤城村三原田城遺跡(小野他 1986)や本遺跡西側のローム台地上に占地する五目牛南組遺跡(山口 1992)で、花積下層式土器のまとまった資料が得られているが、両遺跡とも折り返り状口縁、施文幅の狭い羽状縄文、平底を主体とする土器群である。

ものもある。また、波状口縁が僅かに存在する。

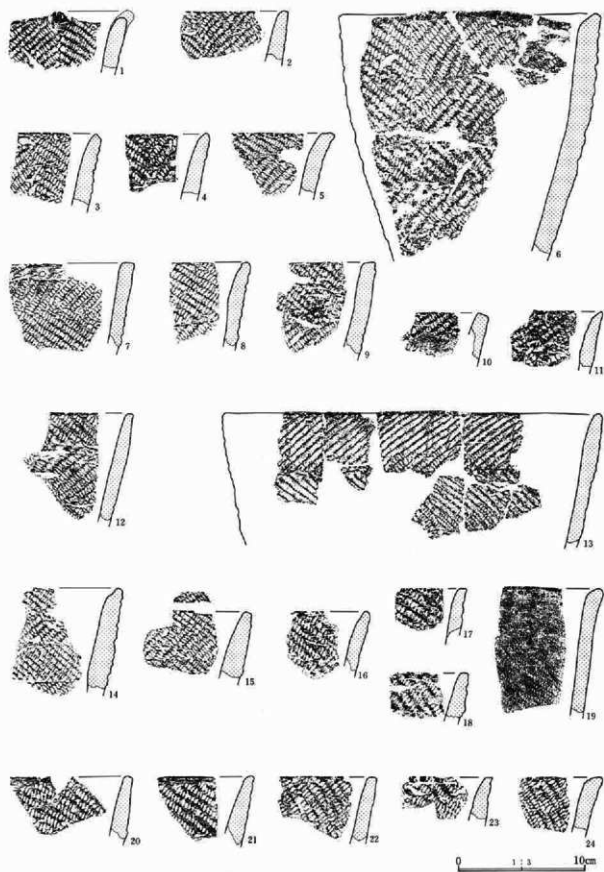
口縁部文様帯を持つものと持たないものがあり、その比率はほぼ6対4であった。口縁部文様は花積下層式土器の特徴である燃糸圧痕文で施文されるが、それを沈線に置換したタイプも数個体出土している。燃糸圧痕文はいずれも0段3条の1段縄を使用しており、RとLを合わせた矢羽根状のものを主体に、同右方向撚りの2本を合わせたものや1本単位のものも少数認められる。文様構成は菱形文がほとんどで、4単位で構成される。菱形文には必ず渦巻文が伴うが、縄文原体の端部側面圧痕や末端圧痕を代用するものや、渦巻文と併用するものもある。口縁部文様帯を隆帯で明確に区画するものも多く、隆帯には刻みや縄文の施文が伴う。刻みは縦位のも



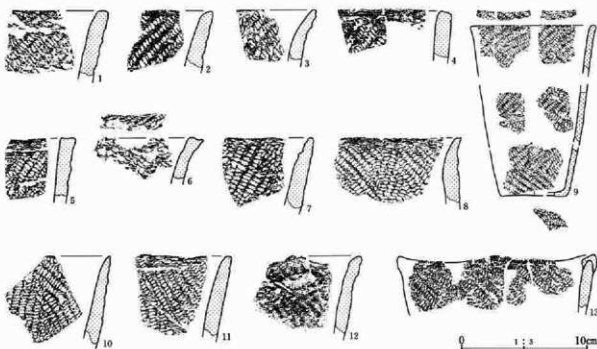
第70图 3·4区包含层出土器(3)



第71図 3・4区包含層出土土器(4)



第72图 3·4区包含層出土土器(5)



第73図 3・4区包含層出土土器(6)

それに対し、本遺跡出土土器群の主体は口縁部文様帯幅が狭く、菱形羽状縄文が施された尖底土器であり、古い様相を持つ一群とすることができよう。

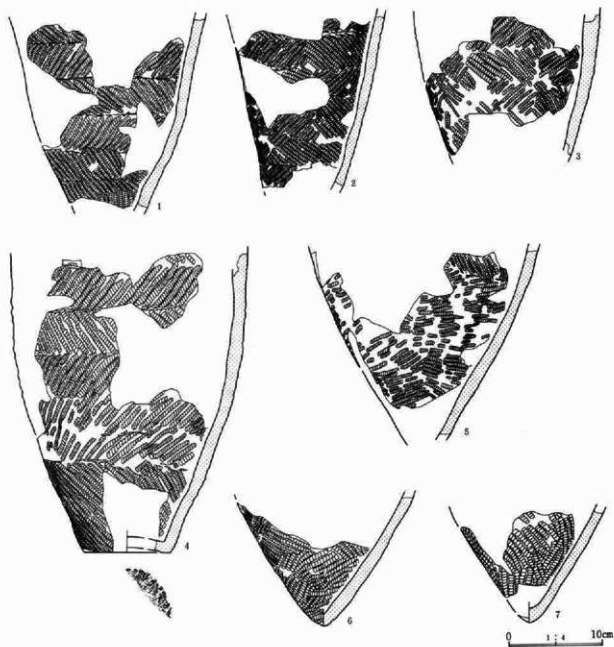
第69図～第71図は口縁部文様帯をもつ土器群である。第69図、第70図および第71図1～13は、燃糸圧痕で菱形文が構成される一群で、RとLを合わせた矢羽根状の構成を主体とするが、1本単位のもの(第71図11)や、同方向燃りの燃糸2本を単位とするもの(第71図12・13)もある。第69図1は上端にかろうじて燃糸圧痕が認められる。胴部中央までは菱形羽状縄文で構成されるが、下位は羽状構成であり、尖底となるであろう。第70図1・2は渦巻文に対応する口唇部直下に、文様単位を示す小突起が付く。第70図15～22・26は口唇部下に隆帯をめぐらす一群である。15はその間に燃糸圧痕を充填している。16～22は口唇部外面と隆帯に逆方向の刻みを施して、矢羽根状の文様を構成している。16・17は渦巻文上に突起状の突出があり、この部分で施文方向を変えている。26は文様の単位を示す渦巻文の上位に縦位の隆帯を貼り付け、口唇下降帯とともに燃糸で刻みが施される。口唇部と隆帯の間は燃糸圧痕による鋸歯状文が施され、隆帯下には幅の狭い口縁部文様帯が構成されている。第70図24・25・27～30は口縁部文様帯下を隆帯で囲む一群で、隆帯上には24・25では斜位、27・28は縦位、29・30は燃糸圧痕による刻みが各々施されている。第71図1・2は渦巻文のかわりに縄文原体の端部側面圧痕を代用した土器で、1は口唇直下に第70図16・17と同様の文様が構成される。第70図3～9は原体端部の刺突が施された一群である。3・7は渦巻文のかわりに刺突を使用したもので、3では口唇部直下に鋸歯状の刻みをめぐらしており、7では口唇部と直下の隆帯に矢羽根状の刻みを施している。4・5は渦巻文と刺突を併用したもので、4では口唇下に隆帯がめぐっている。8・9は燃糸圧痕間に原体端部を連続刺突するもので、これは斜位の刻みと同じ意識であろう。第70図17・27・28・30のように口縁部文様帯の広いタイプは、口唇下や口縁部文様帯下に隆帯を伴うものが多い。また27のように、燃糸圧痕を数条づつ集合施文するもの、このタイプの特徴の一つである。なお、第70図6・25・27、第71図3・5は、胴部縄文が菱形羽状構成となる。第71図10・11は1本単位の燃糸圧痕を施すタイプで、施文間隔をあけ

て2～3条を平行施文することを特徴としている。10では燃糸間に斜位の刻みが伴う。原体は10がL、11がR。第71図12・13は同方向撚りの燃糸2本を単位として施文するタイプで、いずれもR縄2本を使用している。第71図14・15は口縁部文様帯が省略された一群である。いずれも口唇部直下に隆帯をもち、14では燃糸圧痕による鋸歯状文を構成、15では矢羽根状の刻みが施される。胴部縄文は14が菱形羽状構成、15は羽状構成。第71図16～20は集合沈線帯で菱形文を構成する一群である。これは掘器終末の沈線文系の土器群の系譜を引く土器群と考えられるが、その実態はまだ解されていない。いずれも底部から直線的に開く器形を呈すると思われ、燃糸圧痕施文の一群とは形態が異なる。おそらく平底となるであろう。16・17・20は平縁であるが、19は波状口縁である。口唇部形態は燃糸圧痕の一群と共通するが、19位がいはやや薄手の作りで、器面調整は入念に行われている。16は菱形文を重畳施文する土器で、東北地方南部の日向前B式と呼ばれる土器群と類似している。19・20は大柄の菱形文1段で構成するタイプであろう。口縁部文様帯の幅は狭く、胴部縄文は19が羽状構成、20は菱形羽状構成である。

第72図、第73図は口縁部文様帯をもたない土器群である。口縁部文様帯をもつ土器群に較べて、土器の作りや縄文の施文がやや粗雑なものが多く、口唇部が先細りとなるものが目立つ。また、口唇部上面に縄文を施文するものがあるのも特徴の一つである。第72図1～4、第73図5は菱形羽状縄文であることが判る一群で、1は口唇部に文様単位を示す突起が付く。第72図6は胴部上半部を縦位羽状、下半部を横位羽状の縄文で構成する異色なタイプである。第72図5・7～15、第73図5は羽状構成が判る一群で、15は口唇上面にも縄文が施文される。14・15は縄文施文帯の幅が狭いタイプで、同個体の可能性が高い。また、口唇下一帯目の施文幅が特に狭く、12もその傾向がある。第73図9も羽状縄文で構成される土器である。数片の破片から図上復元したが、本遺跡出土土器下層式土器のなかで最も小形の土器である。底部から直線的に開く単純な深鉢で、安定感のある平底を呈する。器面は6帯の羽状縄文で構成され、口唇部上面及び底面にも縄文の施文が加えられている。第73図6も口唇部上面に縄文が施文される。第73図7・8・10・11は縦位羽状縄文を施文する一群である。いずれもRL撚りの1種類の縄文原体を、斜位及び縦位に交互に施文して、縦位羽状を構成している。この主の構成は本土器群よりも古い段階に多用された手法であり、8や10のようなやや外反する先細りの口唇部形態も、その段階の特徴の一つとなっている。第73図12・13は波状口縁を呈する一群である。13は波頂部に突起が付く。全体の構成は不明だが、13は斜縄文となるかもしれない。

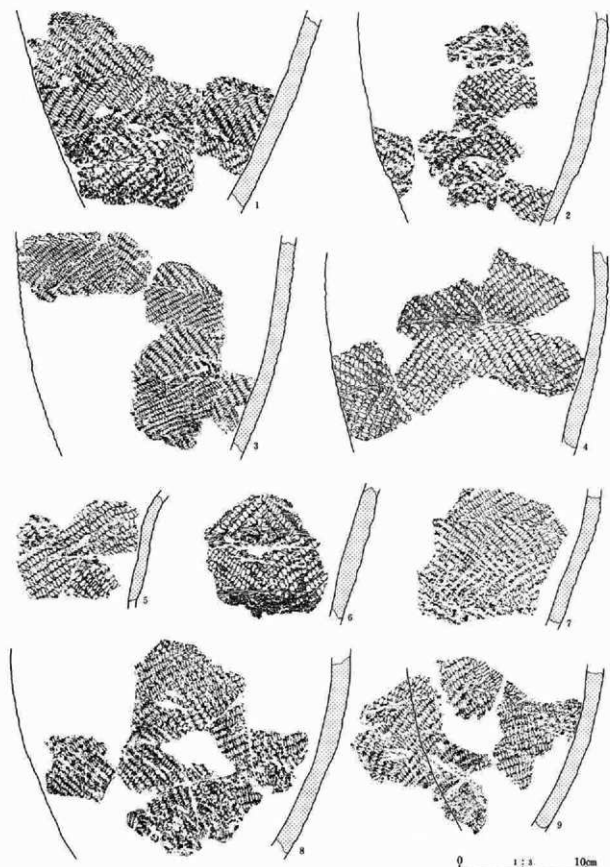
第74図～第84図に胴部以下を一括した。このうち第74図2・4、第82図、第83図、第84図は平底タイプ、その他は尖底タイプと考えられる一群である。平底タイプはほとんどが羽状城門構成で、施文帯に乱れがないが、尖底タイプは菱形羽状縄文を主体に、羽状縄文、斜縄文などがあり、特に胴部下半で施文を変化させるものが多く、この部分で施文に乱れが生じる場合が多い。

まず尖底タイプから見ていこう。第74図3、第75図1～9は、胴部が菱形羽状縄文で構成される一群である。第74図3・6、第75図1・7～9は下半部の施文が斜縄文へ変化しており、第74図6では施文方向に乱れが生じ、第75図7では重複施文が生じ、第75図8・9では条が縦位へ流れている。第74図1、第76図1～4・8・9は、胴部が羽状縄文で構成される一群である。下半部の施文が斜縄文化して乱れが生じるものが多く、第74図1、第76図1・3では縦位に流れる傾向が伺える。第76図5～7も同類であろう。第74図7、第77図1～12、第78図1～6は、底部付近の施文が縦走縄文化した一群である。施文は乱れるものが多く、斜向する部分も多く見られる。第78図5・6は胴部が菱形羽状縄文で構成される。第78図7～11、第79図1～16は、底部付近の施文が縦位となる一群である。この特異な縄文を構成するには、同一原体を横位・縦位に交互に施文する手法と、撚りの異なる2種類の原体を交互に縦位施文する手法とがある。第78図9・10は胴

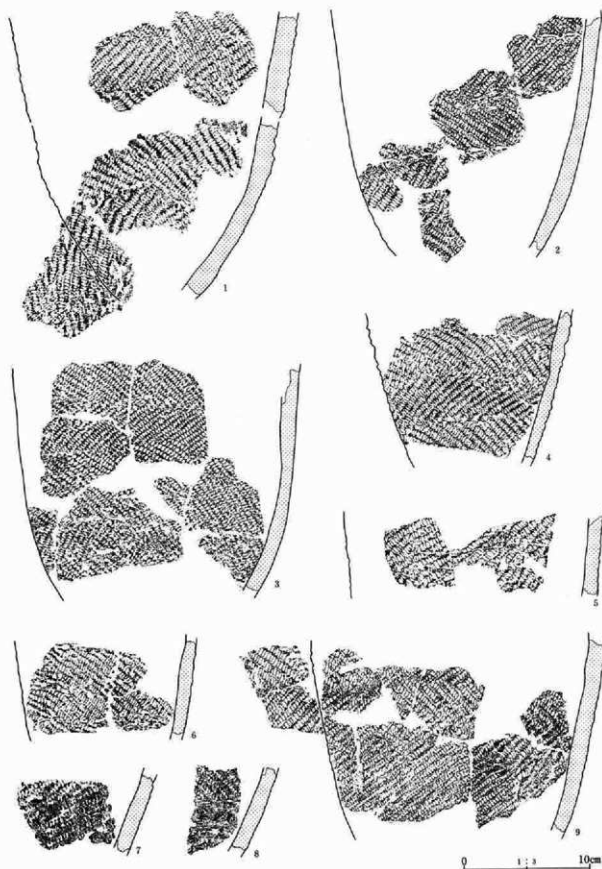


第74図 3・4区包含層出土土器(7)

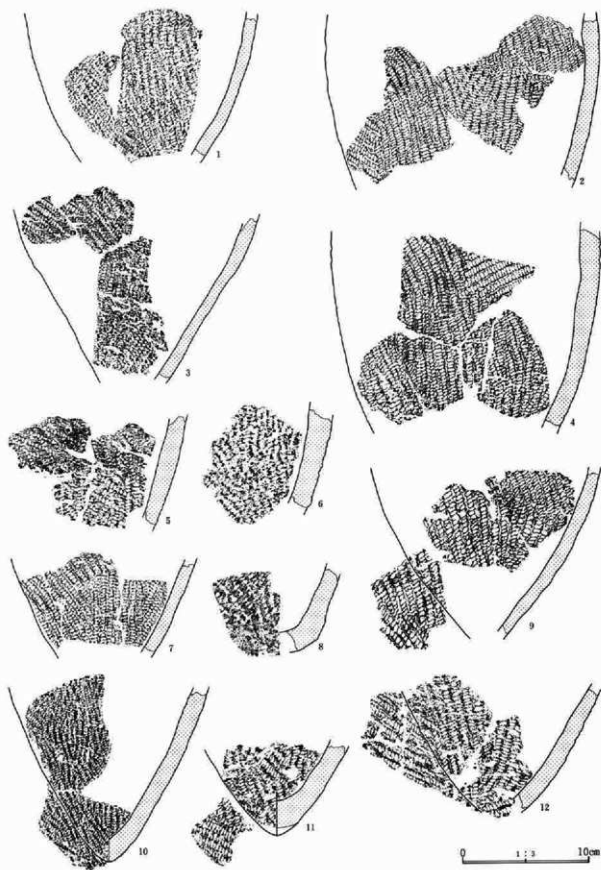
部縄文の構成がわかる例で、9は羽状、10は菱形羽状である。第79図17は器面全体を縦位施文のみで構成する特異なタイプである。器形は胴部中位が弱くくびれ、胴部下半までを2種類の原体による菱形羽状縄文で構成し、以下は縄文RLの縦位施文による斜縄文としている。第80図1～8は底部付近の施文が斜縄文となる一群である。胴部の構成が判るものは少ないが、5は羽状縄文で構成されるであろう。第74図5、第80図9～15は、底部付近の施文が横走する一群である。斜位施文という点では縦位縄文と共通するが、斜向する方向が逆になるため、条が横位走向となる。9は胴部が菱形羽状縄文で構成されている。第81図1～6は細い原体を使用した一群である。本道跡出土の花積下層式土器は、比較的太い原体を使用したものが多く、ここに示したような細い原体は数少ない。いずれも0段3条縄と思われるが、撚りも固く、節は細かい。それと



第75图 3·4区包含層出土土器(8)

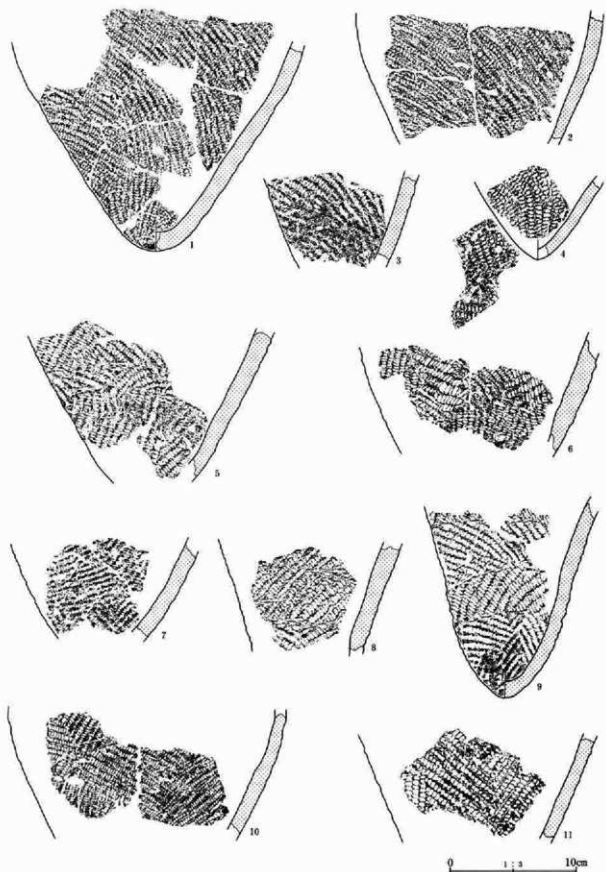


第76図 3・4区包含層出土土器(9)



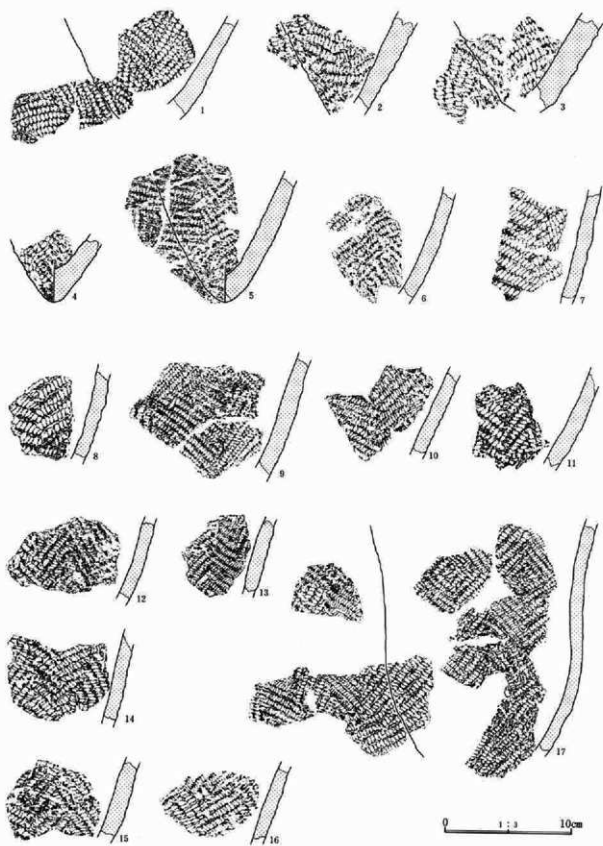
第77图 3·4区包含層出土土器(10)

II 縄文時代の調査

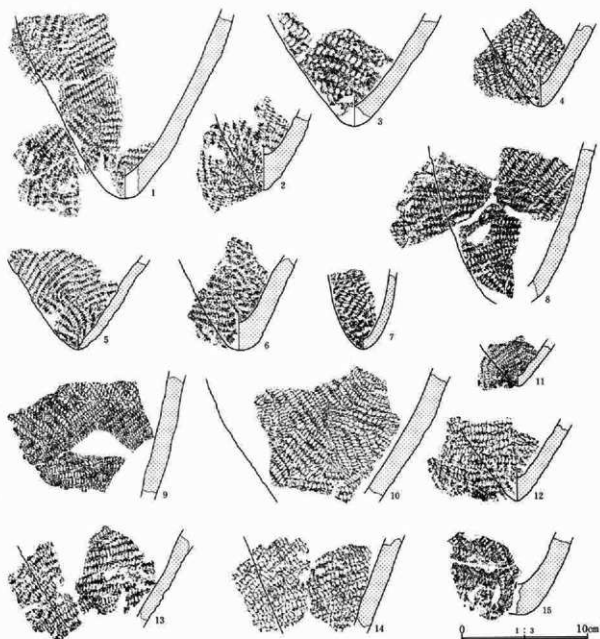


0 1:3 10cm

第78図 3・4区包含層出土土器(11)

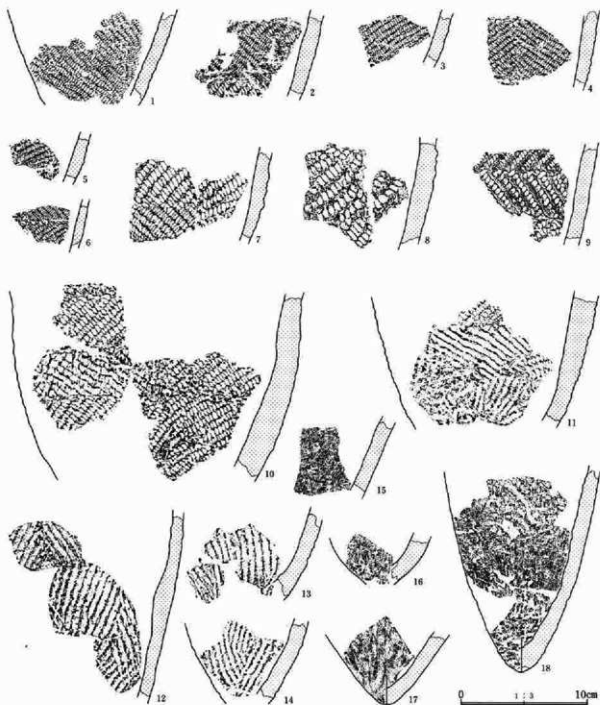


第79图 3·4区包含層出土土器(12)



第80図 3・4区包含層出土土器(13)

対に、太い原体を使用した一群を第81図7～9に示す。9の節はさほど大きくはないが、条間隔が広く、太い原体であることが判る。8・9は0段2条かもしれない。第81図10～14は無節縄文を使用した一群である。本遺跡出土の花壇下層式土器は、縄のパラエティがいたって少なく、無節の使用もごく稀である。10・11は無節Rと0段2条単位節LRで菱形羽状縄文を構成する土器で、同一個体の可能性が高い。異なった原体で器面に変化を与える手法は、2号住居の9（第21図）、3号住居の11（第31図）、4号住居の26～29（第41図）、5号住居の10（第48図）に類例がある。12は無節RとLを交互に斜位施文して、縦長の菱形を構成するもので、14もこのタイプであろう。縦長の菱形構成は、一段階古い段階に多用された手法で、本県をはじめ埼玉県東部、東京都北東部、長野県北西部に類例が知られている。第81図15～18は底部付近を無文化する一群で、15・16・18は縄文施文後に擦り消されている。

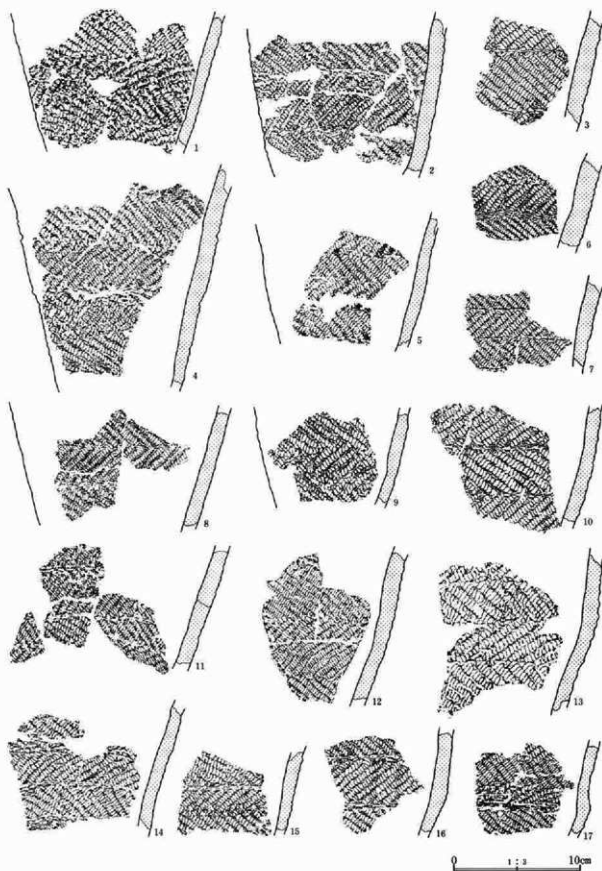


第 61 图 3·4 区包含層出土土器 (14)

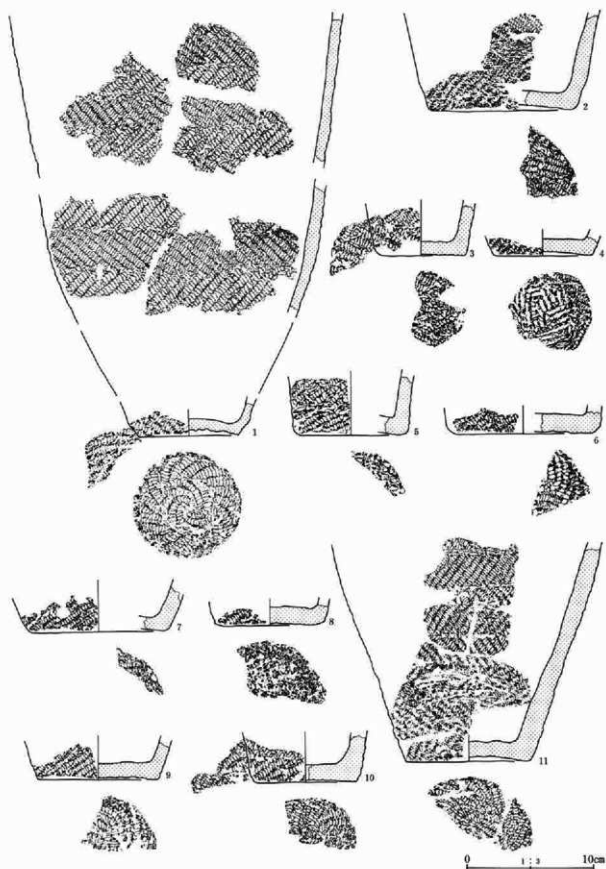
II 縄文時代の調査

以上のように、本遺跡出土の尖底土器は、胴部の構成が菱形羽状縄文となるものが多く、他に羽状縄文、斜縄文、縦走縄文などのバリエーションをもつ。いずれも胴部下半から底部にかけて、縄文の構成が変化する特徴があり、この部分を底部施文帯と呼んでおこう。底部施文帯の構成は、縦走縄文、横位羽状縄文を主体に、斜縄文、羽状縄文、横走縄文などのバリエーションがあり、稀に縦長の菱形構成のものや底部付近が無文化されるものもある。このうち、羽状縄文と斜縄文以外は尖底土器に特有の構成である。縦走縄文と縦長の菱形構成は、ともに斜位施文という特異な手法であり、早期終末の縄文系・燃氷文系土器群の系譜を引く一群と言えよう。横走縄文も斜位施文手法の一つの変化型と考えておきたい。縦位羽状縄文は、胴部施文帯が横位構成であるのに対し、底部施文帯が縦位構成を意図する点に対応した施文と考えたい。口縁部文様帯をもつ尖底土器は確実に存在するが、本遺跡では接合例が乏しく、各施文帯の対応関係等については今後の課題としておきたい。

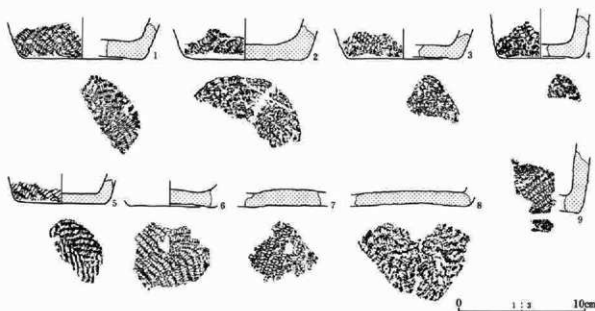
次に平底タイプの一群について見ていきたい。第82図は平底が付くと考えられる土器の胴部破片である。器形は、尖底タイプと同様の砲弾状のもの他に、底部から直線的に開くもの(1・4・8)や、胴部下半がくの字状に突出するもの(13・16・17)があり、後二者は平底との関連が指摘できる。縄文はいずれも0段3条縄を使用しており、捻りの異なる2種類の原体を交互に施文して、羽状縄文を構成している。尖底タイプのとうに、施文の乱れるものはない。また、施文帯幅の狭いものが多い点も、このタイプの特徴である。3・6・10・11・14~16では、施文帯間に縄原体端部の結び目の圧痕が明瞭に見られる。第83図、第84図は平底を集成した。底部はやや上げ底となるものが多く、いずれも安定感がある。底面には全て縄文の施文が認められる。施文は胴部と同様に、捻りの異なる2種の原体を円周に沿って交互に施文して羽状縄文を構成するものが多いが、1種類の原体で渦巻状に施文するもの(第83図9・10)や、円周に関係なく平行に施文するもの(第84図6・7)等もある。胴部縄文は底部端に至るまで横位帯状施文が一貫しており、尖底タイプに見られるような底部施文帯は認められない。



第 82 图 3・4 区包含層出土土器(15)



第83図 3・4区包含層出土土器(16)



第84図 3・4区包含層出土土器(17)

二ツ木式土器 (第85図)

口縁部文様の単位化が認められることから二ツ木式に比定したが、この段階の資料は県内でもまだ類例に乏しく、その位置づけは明確とはなっていない。花積下層式の最も新しい段階に含まれる可能性もあるが、前記の花積下層式土器とは明らかに異なった段階の一群であり、ここではそれと明確に区別しておきたい。いずれも胎土に多量の繊維を含み、器厚は花積下層式に較べてやや薄手のものが目立つ。

1は胴部下半がふくらみ、口縁部が大きく外反する深鉢である。折り返し状を呈する口唇部外面には、3本の沈線による鋸歯状文が施されている。胴部上位のくびれ部に、鋸歯状の刻みを施した隆帯を2本めぐらし、隆帯上には文様の単位を示す突起が付けられる。2本の隆帯で画された口縁部と胴部には、RLとLRによつて結束第1種羽状縄文が横位に帯状施文されている。底部は平底であろう。

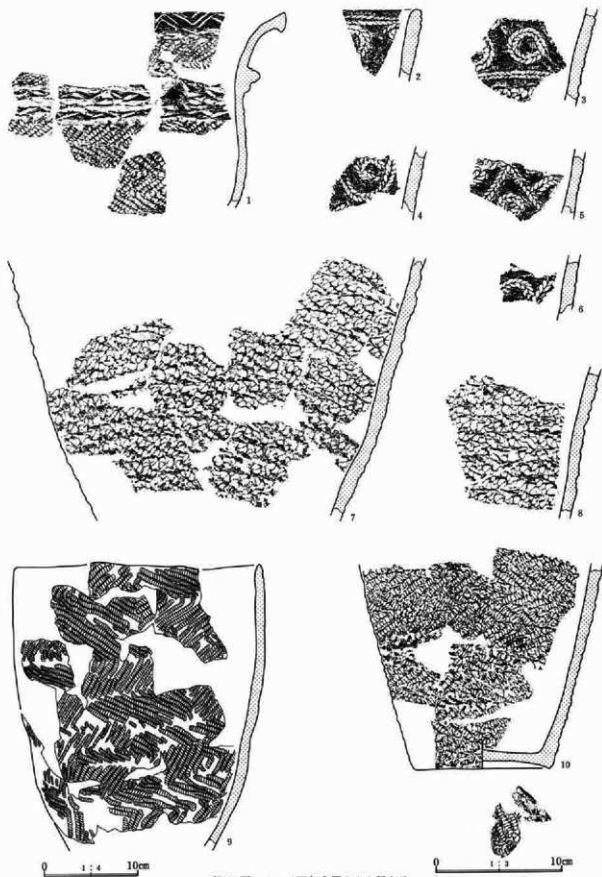
2～6は燃糸丘痕で口縁部文様帯を構成される土器の口縁部破片で、同一個体の可能性が高い。口縁部は直線的に開く形態である。燃糸は花積下層式と同様に、燃りの異なった1段縄2本を合わせた矢羽根状の構成をとるが、燃糸原体はやや太く、また0段2条縄を使用する点は、花積下層式とは異なっている。文様構成は、文様帯の上下を横位の燃糸丘痕で区画し、その間を鋸歯状あるいは波状の区画と、渦巻文から変化した円形文を組み合わせた文様で構成している。小破片のため全体の構図ははっきりしないが、各文様は単位文化している。なお、3では口縁部文様帯下を区画する横位の燃糸丘痕下に、胴部に施文された環付縄文の一部が見える。

7・8は環付縄文の頸部分のみを全面に施文した土器で、同個体と思われる。原体は0段2条RLで、同方向の頸を2連で付けたものを使用しているようである。器形は口縁部に向かって大きく開く形態で、胴部下半に若干張り出す部分がある。底部は平底であろう。なお、原体の太さや胎土の類似性から、2～6はこの土器の口縁部になる可能性が高い。

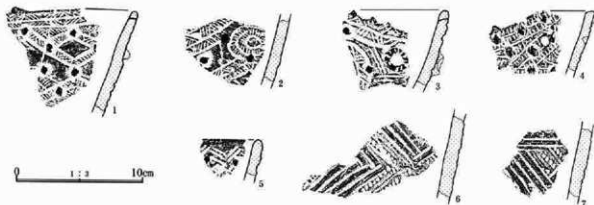
9は砲弾状を呈する深鉢で、平底となるであろう。器面は全面に0段2条縄のRLとLRで菱形羽状縄文が構成されるが、施文帯の幅や施文の変換部はかなり乱れている。

10は底部から直線的に開く深鉢の胴部で、大形で安定感のある平底が付く。器面には0段3条燃りの環付

II 縄文時代の調査



第85図 3・4区包倉層出土土器(18)



第86図 3・4区包含層出土土器(19)

縄文RLとLRで、施文帯幅の狭い羽状縄文が構成される。なお、上げ底となる底面にも縄文が施文されている。2の土器は関山I式に含まれる可能性もある。

この段階の土器は出土量も少なく、土器群の全容は把握できないが、縄文は結束や環付などの変化をもつ原体多用し、施文帯幅の狭いものが主流となっている。また、熊手庄産による口縁部文様は単位文化の傾向が何え、1のような折曲のある器形が出現している。

関山式土器 (第86図)

花積下層式期以外で唯一遺構が確認された時期にしては、出土量が少ない。関山I式と同II式が出土しており、出土量はI式が多い。

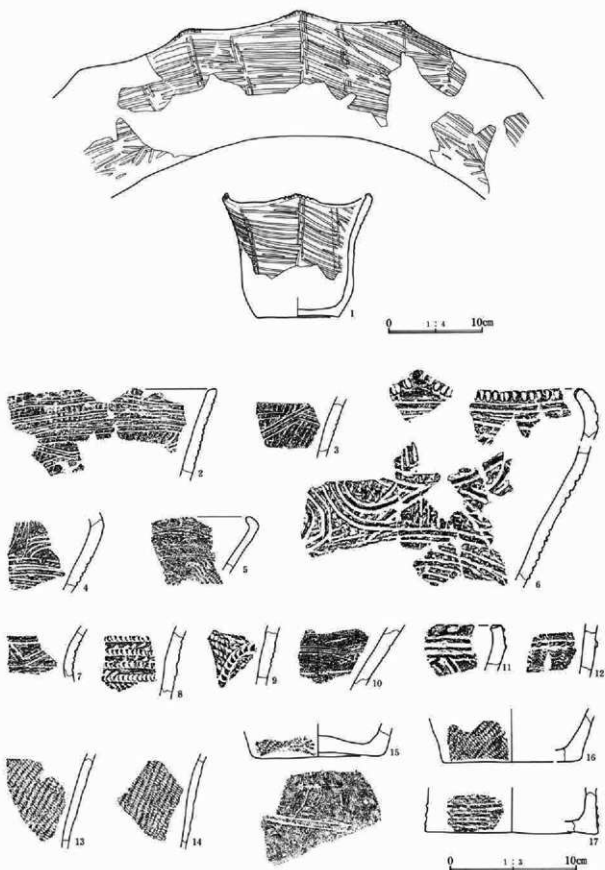
1～5は関山I式土器である。いずれも口縁部の破片で、1・2は同一個体であろう。口縁部は直線的に開口し、3・4のように大波状口縁となるものが多い。1～4は口唇部が外削ぎ状を呈し、波頂部や波底部など、文様の単位を示す位置に、山形状の小突起が数個付けられている。文様帯は刻み目を伴う平行沈線で、菱形文と渦巻文から変化した円形文を組み合わせた文様で構成され、文様の好転を中心に瘤状の貼付文が配置されている。平行沈線に伴う刻み目は、1～3では鋸歯状に施されるが、4では梯子状となっている。なお、3では刻み目を伴う円形の隆帯貼付文が、4では円形の小盲孔が施されている。5は口唇部が円頭状を呈する。文様は口唇部下に3本の鋸歯状沈線をめぐらし、瘤状の貼付文を配置している。

6・7は関山II式土器で、同一個体であろう。文様は、撚りの異なった2種類の正反の合撚り縄文(0段多糸)で菱形縄文を構成し、その糸の傾きに合わせて半截竹管による集合沈線を施文して、縄文と同じ菱形文を構成している。

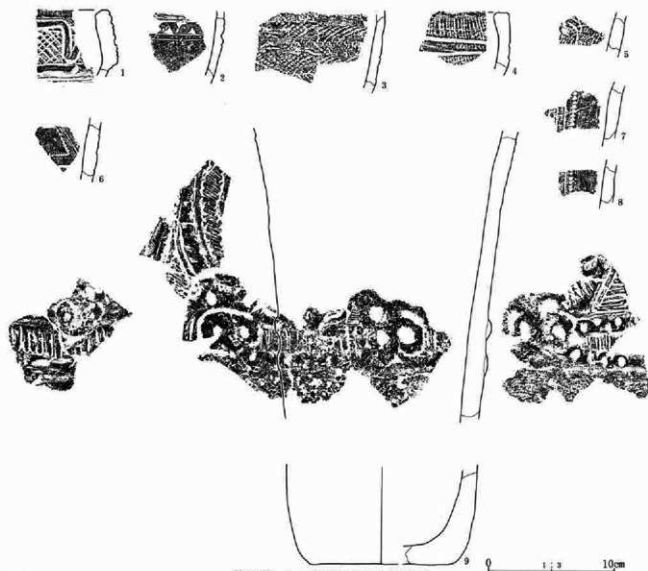
諸磯式土器 (第87図)

諸磯a式と同b式とが出土しており、出土量はb式が圧倒的に多い。出土総量は少ないが、b式は微高地のほぼ全域に分布が認められた。

1は諸磯a式土器で、分散して出土した破片が接合し、ほぼ全容が理解できる。器形は胴部中位が弱くくびれ、口縁部が開く、4単位波状口縁の鉢形を呈する。口唇部は外削ぎ状を呈し、各波頂部には一定の間に刻みが施されている。文様は、各波頂部下および波底部下に、半截竹管による平行沈線を垂下させ、その間に同平行沈線を横間に重点施文して構成している。文様施文は底部付近まで及ぶが、下端部の一部に羽状の



第67図 3・4区包含層出土土器(20)



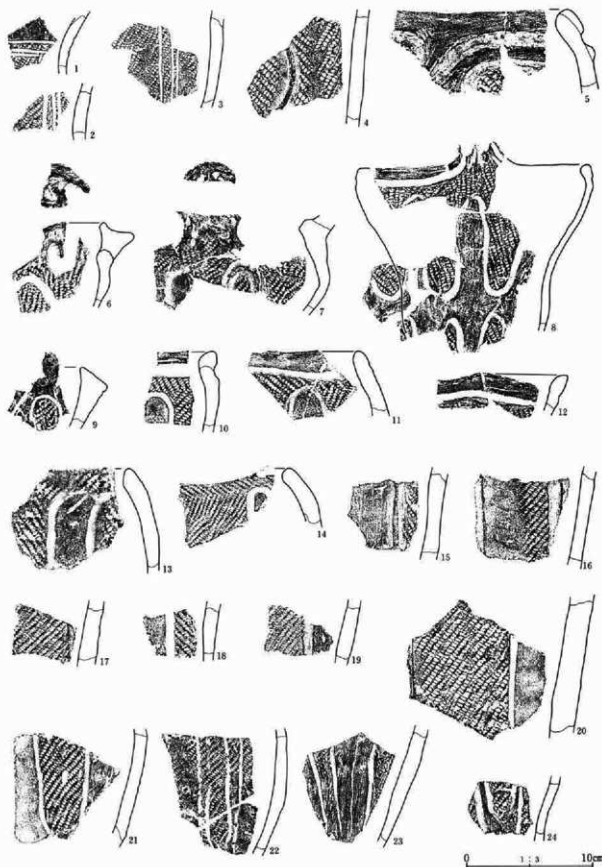
第88図 3・4区包含層出土土器(21)

構成が認められる。

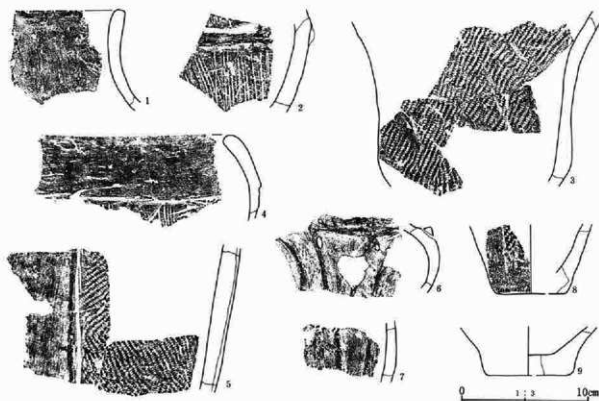
2～12・17は諸磯b式土器である。2～7は半截竹管による集合沈線で文様を施す一群である。2は口縁部が直線的に開くタイプで、横位の集合沈線とその間の鋸歯文で文様が構成される。3・7も同類であろう。4～6は口縁部がくの字状に内折するタイプで、口縁部に大柄の渦巻状の文様が施される。6は波状口縁の土器で、口唇部には刻みが施されている。8・9は爪形文で文様を施す一群で、8では横位爪形文間に斜めの刻みが施されている。10は条線で文様を施す土器である。11・12・17は浮線文で文様を施す一群で、浮線中には11・12では縄文が、17では斜めの刻みが施されている。器形や文様構成は集合沈線の一群と共通しており、11では口唇部に指頭状圧痕が施されている。以上の土器のうち、7・10以外は地文に縄文が施されており、2～4・6・12・17はLR、5・8・9・11はRLである。

13～16は諸磯式土器の胴部および底部で、いずれもLRの斜縄文が施されている。

II 縄文時代の調査



第89图 3・4区包含層出土土器(22)



第90図 3・4区包含層出土土器(23)

五領ヶ台式土器(第88図1~3)

3・4区から数片が出土している。1はくの字状に内折する口縁部破片で、半截竹管による区画内に斜格子沈線で充填している。2は平行沈線の上に三角形の印刻を交互に施し、歯歯文を構成している。3はRLとLRによる結束第1種羽状縄文を横位に施す土器で、施文帯間に結節の回転施文が付加されている。

勝坂式土器(第88図4~9)

大半が3・4区から出土しているが、量的には少ない。4・5はいわゆる結節沈線を充填する一群で、5では玉抱三叉文が施されている。6~8は平行沈線に沿ってペン先状の押し文を施す一群である。9は胴部に隆帯で三角形および渦巻状の文様を構成し、その下に楕円区画文を施す深鉢で、隆帯の交点には眼鏡状の突起が付けられている。各区画内は集合沈線で充填され、底部付近は無文化される。以上の土器は、いずれも勝坂2式に比定されるであろう。なお、これらに平行する阿玉台式土器の出土は、認められなかった。

加曾利E式土器(第89図、第90図)

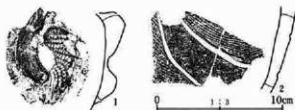
花覆下層式以外では加曾利B式に次いで出土量が多く、分布は微高地の全域に及んでいる。加曾利E1式からE4式まで出土しているが、その8割をE3式が占めている。

第89図1~4は加曾利E2式土器である。1~3は同個体で、胴部に縄文RLを縦位施文し、その上から3本の沈線による懸垂文を施す。4も胴部破片で、縄文RLを縦位に施文し縦位羽状縄文を地文に、蛇行隆帯による懸垂文を施す。

第89図5~24、第90図1~4・8・9は、加曾利E3式土器である。5は口縁部文様帯をもつ土器の口縁

II 縄文時代の調査

部破片で、文様は渦巻文と楕円区画文で構成される。区画内を充填する縄文はRL。第89図6～14は口縁部文様帯を消失した一群の口縁部破片である。6～9は口縁部に突起が付くタイプで、6では突起下に丁字状文が施される。12・14は波状口縁のタイプである。胴部文様は、上半部の波状区画文と下半部の逆U字状懸垂文で構成されるが、



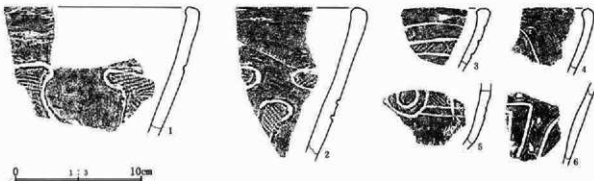
第91図 3・4区包含層出土土器(24)

7のように上下の文様が入り組み状を呈するものと、8のように胴部中位で分かれるものがある。文様区画はやや太い沈線を使用し、区画内は縄文で充填される。縄文は6・7・9～11・14がRL、8・12・13がLRで、いずれも縦位施文で充填されるが、6・10・11・13・14では口唇下の一帯のみを横位施文としている。なお、8～12は口唇下に沈線をめぐらして、無文帯を形成している。第89図15～24は胴部破片で、いずれも懸垂沈線間に縄文を充填する。縄文は16・17・19～24がRL、15・18がLRで、16～19では直前段反摺りの原体が使用されている。第90図1・2は壺形を呈する浅鉢で、1は無文の口縁部破片である。2は胴部上位に深鉢の口縁部文様が付くタイプで、隆帯区画内及び胴部下半に縦位条線が施される。同図3は全面に縄文RLを縦位施文した深鉢である。同図4は口縁部が内湾する鉢の口縁部で、やや肥厚する口縁部を無文とし、胴部には縦位の条線を施す。同図8は深鉢、9は浅鉢の底部である。

第90図5～7は加曾利E4式土器である。5は深鉢の胴部破片で、微隆帯の懸垂文間に縄文LRを充填するが、上半は横位施文、下半は縦位施文となっている。6・7は壺形を呈する浅鉢の胴部破片である。文様は胴部に隆帯で大柄の渦巻文を施し、口縁部下をめぐる隆帯には円孔が施される。

称名寺式土器 (第91図、第92図)

称名寺II式土器が圧倒的に多く、分布は4区東半部に集中している。第91図1・2は称名寺I式期の一群である。1は口縁部に付けられたS字状隆帯が剥落したもので、隆帯上には縄文RLが施されている。2は沈線で区画された無文帯で文様が構成される土器であろう。区画内は細かな縄文RLで充填されている。以上の土器はいずれも加曾利E式系の一群であろう。第92図1～6は称名寺II式土器である。いずれも口縁部は外傾し、口唇部内面が突出する特徴をもつ。1～5は縄文帯で文様を構成する一群で、沈線間に充填する縄文は1～4がLR、5はRL。6は沈線間に列点刺突を施すタイプである。



第92図 3・4区包含層出土土器(25)

堀之内式土器（第93図、第94図、第95図8・9）

堀之内1式・2式とも出土量は比較的多く、分布は微高地の全域に認められた。

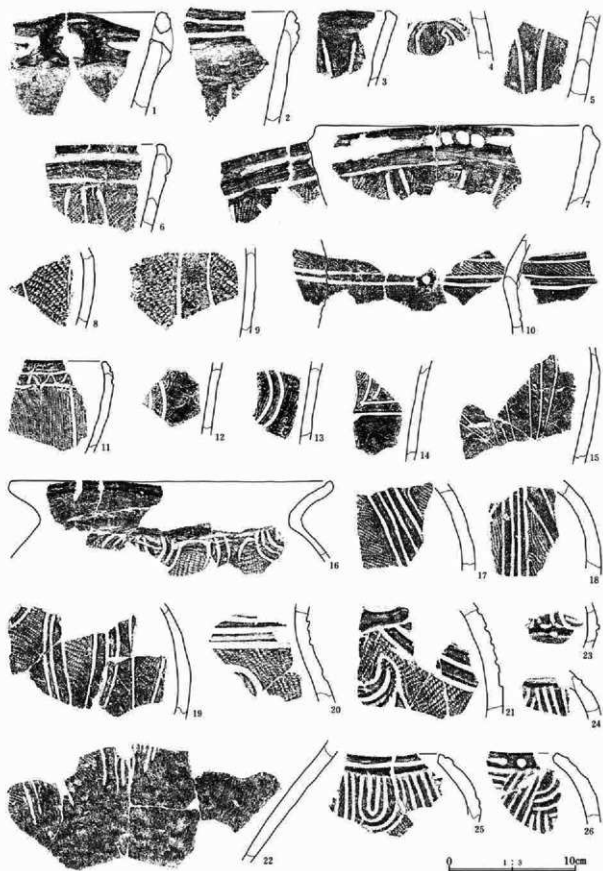
第93図1～26、第95図8は堀之内1式土器である。1～9は胴部上位が弱くびれる深鉢で、称名寺式の系統を引く文様が体部に描かれるタイプである。口唇部直下に1～2本の沈線をめぐらすものが多く、1では円形の貼付文と円孔、7では4つの円形押圧を施して、文様単位を示している。また、口唇部下には幅の狭い無文部が形成されるが、6・7ではその下端に沈線をめぐらして、文様帯を明確にしている。体部文様は2本の沈線での構成を基本とし、沈線のみで構成するもの（2～5）と区画外を縄文で充填するもの（6～9）がある。6～9の縄文はいずれもLRである。10は胴部のくびれ部に縄文帯をめぐらすもので、刺突を伴う円形の貼付文が付く。縄文はLR。11は内湾する口縁部破片で、口唇部下に歯文を伴う沈線をめぐらし、胴部には縦糸線を地文にパネル状の区画文が構成される。12～14はいわゆる朝顔鉢形の小形深鉢で、同個体であろう。胴部には結節を伴う縄文LRを地文に、2～3本の沈線で弧状の文様が描かれる。15～21は胴部が大きく膨らみ、頸部がくの字状にくびれて、口縁部が外傾する深鉢である。口縁部は無文化し、文様は胴部上半に集中する。頸部に3～4条の沈線をめぐらすものも多い。胴部文様は3～4本単位の沈線で描かれ、J字状文あるいは弧状文を中心に、弧をえがく懸垂文や斜行する沈線で構成される。15以外は無文部に縄文LRを充填する。24～26は15～21の口縁部を取りさった曇形の土器で、文様構成も同じである。23は小形の壺形土器で、胴部中に隆帯を巡らし、その上位に文様が施されている。第95図8は胴部が大きく膨らむ小形の土器で、楕円形を呈する口縁部の長軸に橋状把手が付く。把手の正面と上方へのびる突起上には、両端に刺突を伴う沈線が施されるが、これは称名寺式のC字状文から変化したものである。また、把手が体部に接合する両端にも刺突が付く。口唇部直下に1本の沈線を巡らし、体部文様も沈線のみで描かれる。

第94図1～12、第95図9は堀之内2式土器である。1～8は底部から直線的に開く深鉢で、文様帯は胴部上半に限定される。1・2は口唇部がくの字状に内折するが、3～8では口唇部内面に1本の沈線をめぐらしている。1・2・5・6は口縁部に押圧を伴う2～3条の隆帯を施し、文様の単位に合わせて円形の刺突を伴う隆帯で区切っている。胴部文様は磨消縄文手法による幾何学的な文様で構成されるものが多く、1は2段構成の楕円形区画文、2は交互に連続する三角形区画文で構成されている。縄文はいずれもLR。3は胴部上半に縄文LRを施し、2本の沈線間に交互に連続する弧状区画文を施すが、区画内は磨り消されない。4は全面に縄文LRが施される。7・8は縄文LRを地文に、口縁部に3条、胴部にも数条の平行沈線を施している。9・10は胴部が屈曲する鉢の破片であろう。胴部には1・2の口縁部と同様の隆帯が施されている。11・12は丸い胴部に大きく外反する口縁部が付く鉢である。口唇部は1・2と同ようにくの字状に内折し、口縁部は無文化される。11は頸部に1・2の口縁部と同様の隆帯を施しており、12では同隆帯が口縁部の懸垂文として使用されている。第95図9は胴部がくの字状に突出する注口付土器である。長く延びる注口部と口縁部は小さな橋状把手でつながれ、把手上面には第95図8と同様の円形刺突を伴う沈線が施されている。また注口部下にも刺突を伴う円形貼付文が付く。体部上半には3本の平行沈線を施し、注口部の両側に沈線を連結している。

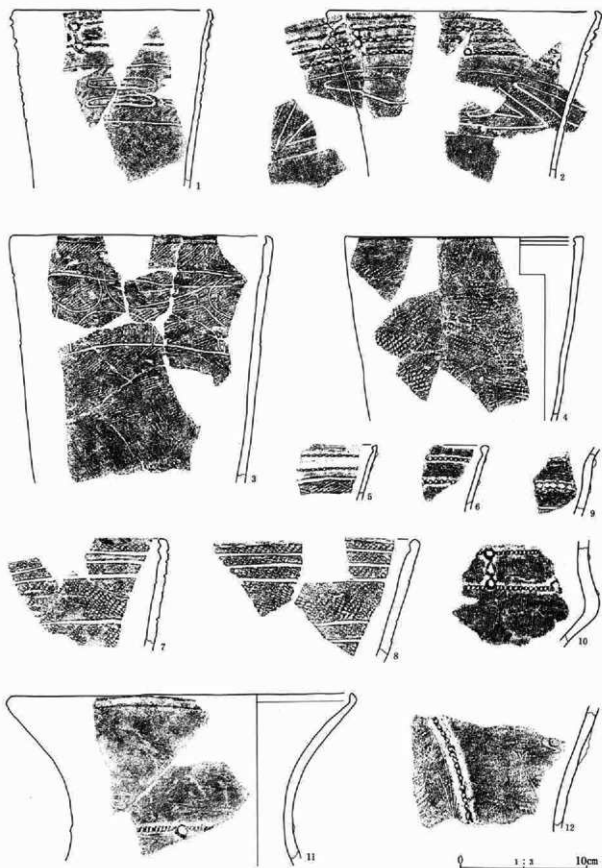
加曾利B式土器（第95図1～7、第96図、第97図）

花積下層式以外で最も出土量が多く、分布は微高地の全域に及んでいる。加曾利B1式、同2式、同3式が出土しており、標準的な良好な資料が得られている。かなりの両の粗製土器も伴出しているが、型式比定がわずかしいため、それらは別に一括した。

II 縄文時代の調査

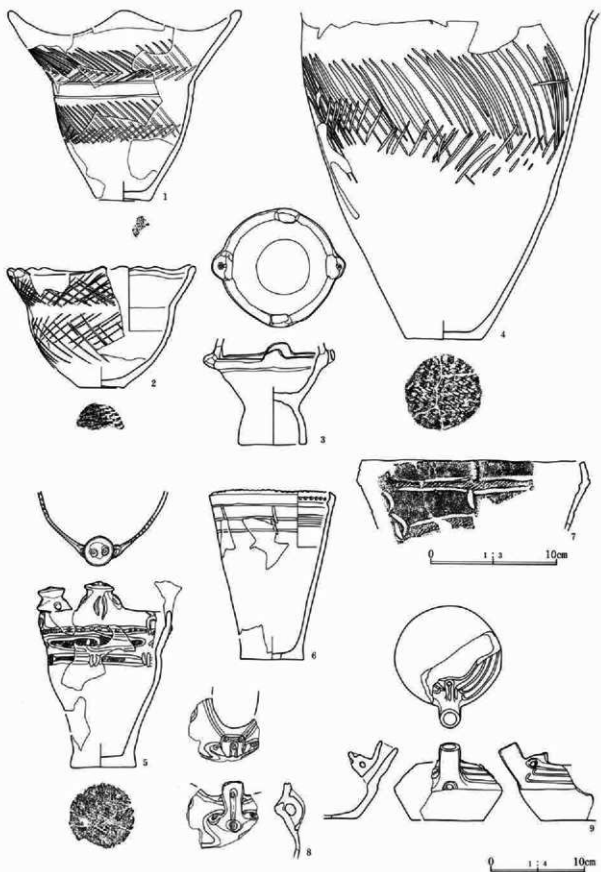


第93図 3・4区包含層出土土器(26)

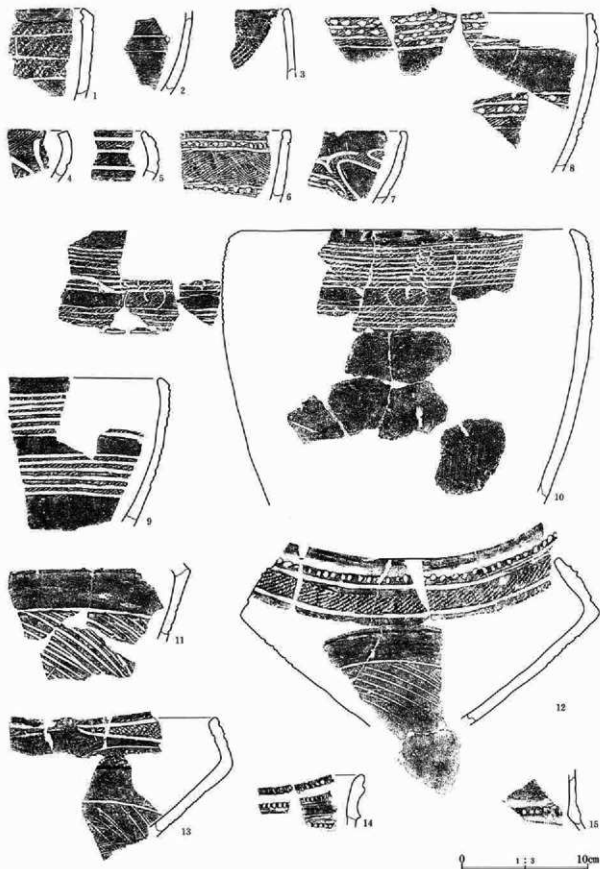


第94图 3·4区包含层出土土器(27)

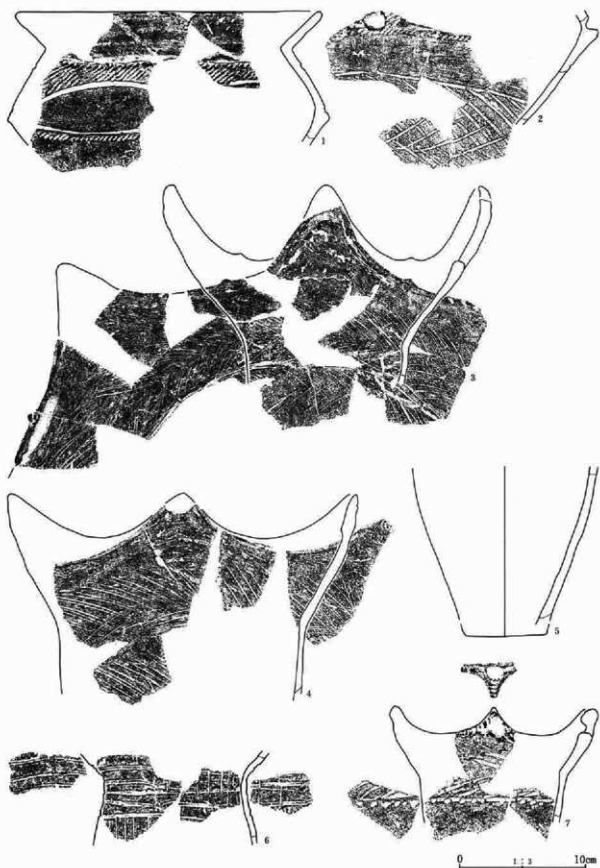
II 縄文時代の調査



第95図 3・4区包含層出土土器(28)



第96图 3·4区包含層出土土器(29)



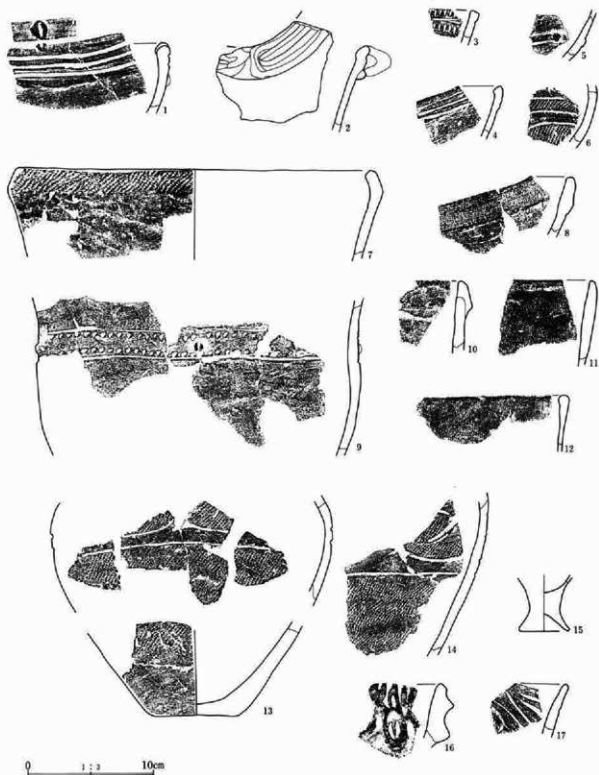
第97図 3・4区包含層出土土器(30)

第95図6、第96図1～3・5～9は加曾利B 1式土器である。第95図6は底部から直線的に開く深鉢で、口唇部は外削ぎ状を呈し、内面端部には刻みが施される。口縁部には3本の平行沈線を施し、その間を縦位沈線で等間隔に区切る。口縁部内面にも文様が付けられており、口唇下をめぐる断面三角形の隆線の上端に円形の連続刺突を施し、隆線下には3本の沈線をめぐらせている。なお、内外面とも入念に研磨されている。第96図1も同様の土器であるが、外面には地文に縄文LRが施され、内面は口唇下をめぐる1本の沈線のみである。第96図3はやや内湾する口縁部破片で、内面口唇下に1本の沈線をめぐらし、外面には縄文LRを施す。第96図5は内湾する口縁部破片で、おそらく小形の鉢であろう。縄文LRを地文に、口縁部に数本の平行沈線を施している。第96図6は直立ぎみの口縁部破片で、口唇下と胴部上位に刺突を伴う平行沈線を施し、その間を縄文LRで充填している。第96図7は弱く内湾しながら開く鉢の口縁部破片で、文様は縄文LRを充填した幅の狭い縄文帯で、曲線的な文様が構成される。縄文帯の一部には刺突を伴う部分も見られる。第96図8～10は弱く内湾しながら開く大形の鉢で、いずれも平縁だが、8は小突起が付く。口唇部は9・10が外削ぎ状を呈するが、8は角頭状となっている。文様はいずれも状もLRが充填された数条の集合沈線を、間隔をおいて2帯施す。8は2帯の集合沈線の上位2列に、連続刺突を施している。10は集合沈線間の無文部に逆「の」の字状文を施し、その上位集合沈線間に2列の斜行刻みが認められる。なお、いずれも無文部と内面は入念に研磨されている。第96図2もこれらと同様の土器であろう。

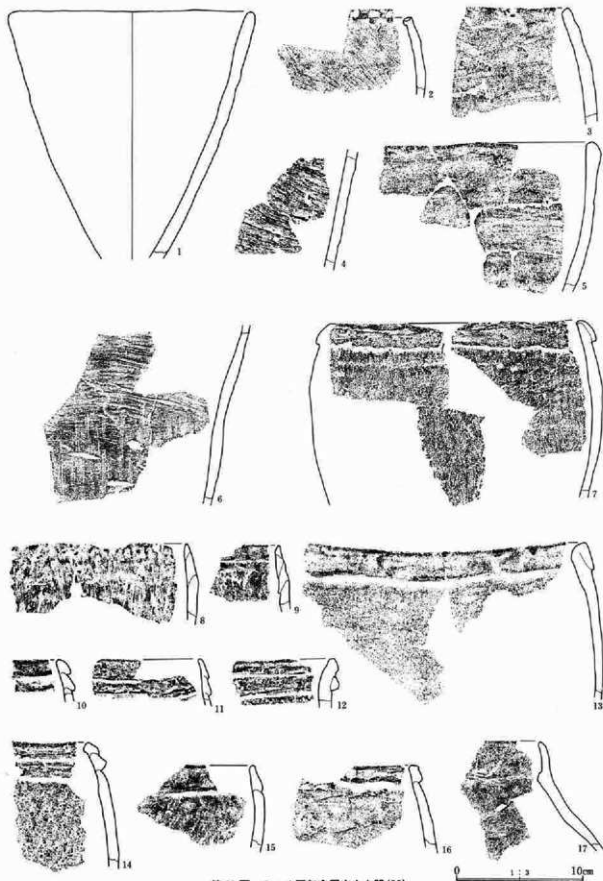
第95図2・5・7、第96図4・11～15は加曾利B 2式土器である。第95図2は頸部がくの字状にくびれ、口縁部が開く鉢で、底部に網代痕を残す。二山の突起をもつ5単位の小波状口縁を呈し、内面口唇下に浅い沈線がめぐらされる。文様は口縁部と胴部に斜格子沈線を施し、頸部には若干の無文部を設ける。なお、内外面とも入念に研磨されている。第95図5は頸部が弱くくびれ、口縁部上端が内折する深鉢で、底部には網代痕を残す。口縁部は平縁で、上端が円盤状の把手が3個付けられている。把手には上端に2個、両側面に1個ずつ、内面に1個の円形刺突が各々付けられ、外面には対弧文が施される。また、把手右側の口唇部には、一定間隔で刻みが施される。口唇部下には若干の無文部が形成されるが、各把手間のこの部分には馬蹄形の隆線が貼付される。文様帯は上端に刺突が伴う平行沈線で、下端を6単位の対弧文を伴う縄文帯で各々区画し、その間に入組み文を伴う菱形区画文を3単位施している。区画内を充填する縄文はLRで、無文部と内面は入念に研磨されている。第95図7も同形態の深鉢で、口縁部には把手が付くであろう。各把手間の口唇下無文部には縦位の隆線が貼付される。くの字状に折れる口縁部および頸部には縄文LRを充填した縄文帯を施し、把手下と縦位隆線下には縦位対弧文が施される。なお、無文部と内面は入念に研磨されている。第96図4はボール状を呈する鉢の口縁部破片である。口縁部をめぐる弧状沈線の間に対弧文を施し、口唇下区画内に縄文LRを充填している。同図12・13はそろばん玉状の鉢形土器である。12は口唇部下をめぐる刺突を伴う平行沈線と胴部沈線間に縄文LRを充填し、胴部下半に斜行沈線帯を施している。13は口縁部上位に三角形区画文、下位に弧状区画文を施し、胴部下半に羽状沈線帯を施している。口縁部区画内を充填する縄文はLR。同図14・15は刻みや刺突を伴う隆線を施す土器で、器種は不明である。

第95図1・3・4、第96図11、第97図1～7は加曾利B 3式土器である。第95図1・4、第97図3～7は頸部はくの字状に折れ、口縁部が内湾しながら大きく開口する深鉢で、いずれも4単位の波状口縁を呈する。第97図3は波底部口縁に山形の小突起が付く。第95図1、第97図3・4は胴部上半と下半に羽状沈線帯を施すタイプで、1・3にはくびれ部に沈線区画無文帯が認められる。第95図4も同タイプの土器であろう。第97図6はくびれ部に数条の沈線をめぐらし、その上下に縦位の沈線帯を施している。第97図7は胴部下半が無文のタイプで、胴部上半に羽状沈線帯を施し、くびれ部に刺突を伴う沈線をめぐらしている。また、口縁

II 縄文時代の調査

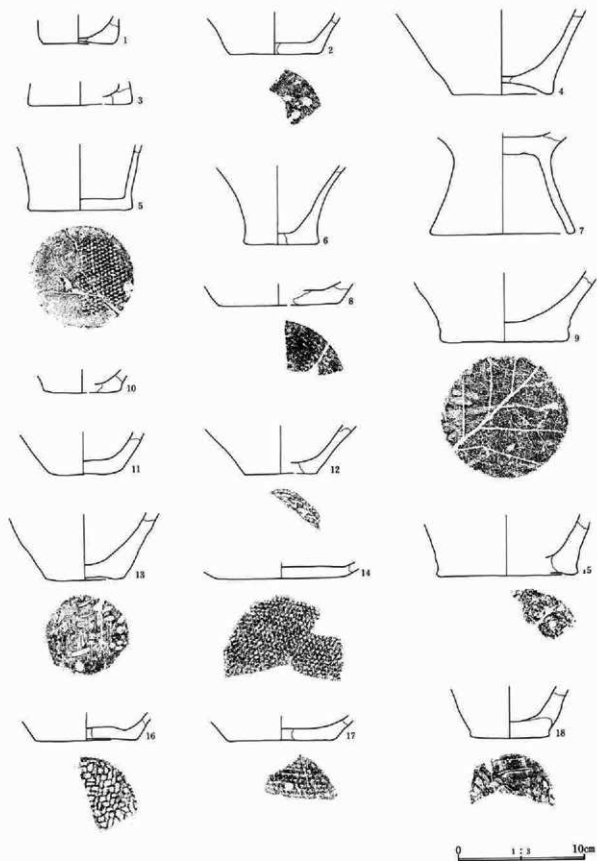


第98図 3・4区包含層出土土器(31)

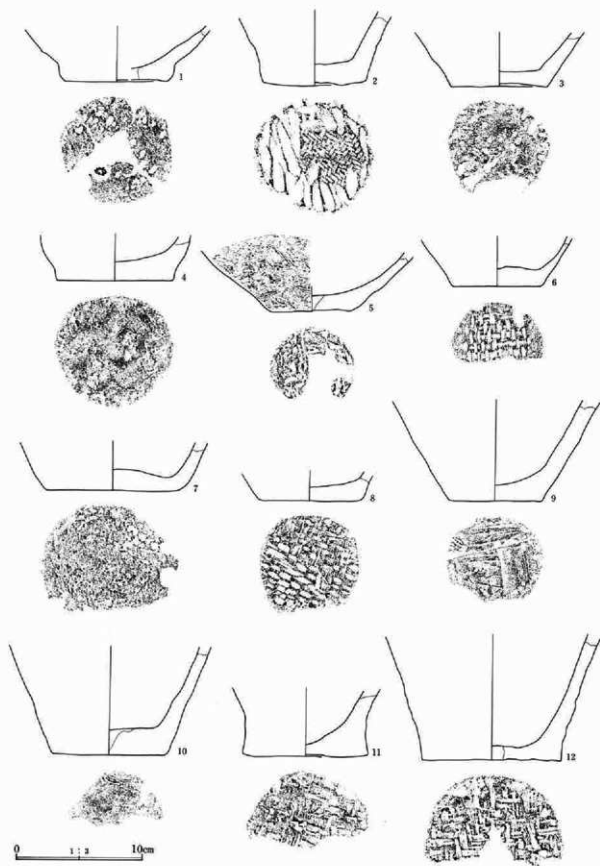


第99圖 3・4区包含層出土土器(32)

II 縄文時代の調査

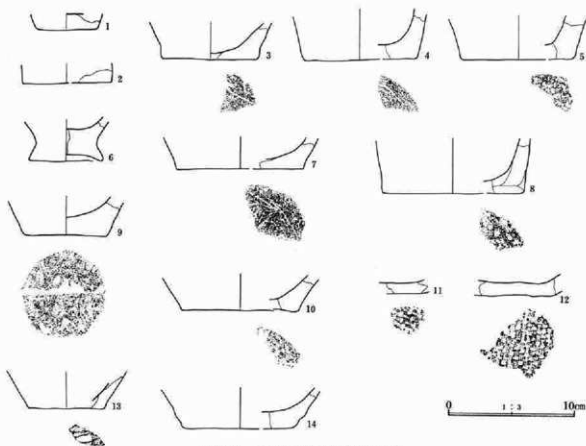


第100図 3・4区包含層出土土器(33)



第101图 3·4区包含層出土土器(34)

II 縄文時代の調査



第102図 3・4期包舎層出土土器(35)

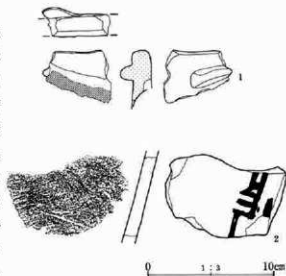
波頂部の表裏に円形の押瓦を施し、波頂部上面と口唇部には刻みを施している。第97図5はこのタイプの胴部であろう。第95図3は台付の香炉形土器である。釣手部分は欠損しているが、その端部に一對の紐懸け部が付けられている。口唇直下に突帯がめぐる以外は無文であり、時期の比定は難しいが、一応ここに紹介しておく。第97図1はそろばん玉状の胴部に外傾する口縁部が付く鉢形土器である。口縁部は無文で、胴部上半に弧状区画文を施し、区画外に縄文LRを充填している。胴部下半は無文である。第96図11、第97図2も同タイプの土器で、胴部下半に斜行沈線帯あるいは斜格子沈線帯を施している。なお、2では弧状区画文に伴う円形の押瓦が認められる。

高井東式土器 (第98図1・2・4・5・7~10)

1・2・4・8は波状口縁を呈する深鉢の口縁部破片である。いずれも口唇部下と口縁部に隆帯をめぐらす。4・6は肥厚口縁化している。1・2・4は隆帯間に3本の平行沈線を施すタイプで、1では波底部口唇上に刻みを伴う瘤状貼付が、2では波底部口縁に橋状把手が各々付けられる。5は平行沈線上に瘤状貼付が施された胴部破片である。7は口縁部がくの字状に内折する平縁の深鉢で、内折する口縁に縄文LRが施される。9は胴部中位が弱くくびれる深鉢で、くびれ部に刺突を伴う平行沈線をめぐらし、その中央に1と同様の刻みを伴う瘤状貼付が施されている。10は4・8と同様の肥厚口縁を呈する口縁部破片である。なお、5・9は新潟・東北地方南部に分布する新地式と関連する土器であろう。

安行式土器 (第98図3・6・11~17)

3は平行沈線間に刺突状の刻み目が施された口縁部破片で、新形式に含まれるであろう。6は縄文LRを充填した縄文帯で文様構成している。11・12は無文の口縁部破片で、12は口縁が肥厚している。いずれも外面には研磨が施されている。13・14は胴部上位が張る深鉢で、同個体であろう。器面に縄文LRを施し、胴部上位に三叉文を伴う入組文を構成し、その下に沈線をめぐらして区画外の縄文を磨り消している。15は台付の小形土器で、文様は認められない。16は波状口縁深鉢の口縁部破片で、波頂部には刻み目を施した魚尾状の突起が付き、その直下に豚鼻状の特記を貼付している。17は三叉文を中心に沈線による三角形の区画文で構成される口縁部破片である。以上のうち、16は安行2式、13・14は安行3a式、17は安行3b式に各々比定されるであろう。



第103図 3・4区包含層出土土器(36)

その他の土器 (第99図~第103図)

無文土器、底部、特殊な土器を一括してここに紹介しておくたい。

第99図1~17は無文土器類である。いずれも器面に整形痕を残す粗製土器の類で、後・晩期に属するであろう。2は口唇部に刺突が施されている。7・13は折り返し口縁の一群である。12は口縁部に突帯をめぐらせている。10・11・14~16は口縁部に明瞭な輪積み痕を残す一群で、15・16は1段、10・11・14は2段認められる。17は胴部が大きく張る器形の土器で、直立する口縁部下内面に突出部が認められる。

第100図~第102図は底部を一括した。大半が後・晩期に属するものと思われる。底面に網代痕を残すものが多く、他に木葉痕を残すもの(第100図9)や、木の実状の圧痕を残すもの(第100図2、第101図7)もある。大半が深鉢・鉢の底部であるが、第100図14・17は浅鉢であろう。第100図7は台付土器である。

第103図1・2は特殊な土器である。1は直立する口縁部破片で、口唇部は角頭状を呈する。外面に文様は認められず、内面に片割が突出する横長の粘土帯が付けられている。また、欠損部の一部に円弧状の剝落面があり、この面には光沢が認められる。胎土には多量の繊維を含んでおり、器厚や土器の作りから花積下層式に含まれると考えている。器体に湾曲が少なく、あるいは土製品かもしれない。2は無文の胴部破片で、外面には整形痕が認められる。内面は入念に研磨されており、その上に深紅の漆で図のような文様(?)が描かれている。時期は加曾利B式期に属すと思われる。

(3) 5区出土土器 (第104図~第107図)

本地区は縄文時代の堆積土が3・4区に較べて薄く、包含層の分層はできなかった。出土土器は3・4区に較べて欠落する時期があり、特に前期前半期と中期中葉期の土器の出土はほとんど認められない。出土土器は前後後半から晩期までを含んでおり、なかでも中期後半の加曾利E3式が主体を占め、加曾利B式以降の土器群がこれに次いでいる。

第104図1~7・11・13は諸磯a式土器である。1は口縁部に横位平行沈線を重ねて施文し、その上から

II 縄文時代の調査

円形竹管文を縦位一列に施している。2は縄文LRを地文に平行沈線で三角形の磨消区画文を施すもので、地文部には2個一対の円形竹管文が施される。3～6は縄文を地文に爪形文を伴う平行沈線を横位に数条施す一群である。地文は3・4・6がRL、5はLR。7は条線を横位に数条施すもので、条線下には縄文LRが施文される。11はRLの斜縄文が施された、外反する口縁部破片である。13はRLの斜縄文が施された浅鉢の胴下半部で、6と同個体であろう。

第104図8～10・12は諸磯Ⅱ式土器である。8は幅広の連続爪形文を横位に数条施している。9は内傾する口縁部破片で、口唇部下に平行沈線を2条施し、いかに同平行沈線による三角形の区画文が施される。10は頸部がくの字状に折れる口縁部破片で、口唇部に刻みを伴う浮線文が縦位に施される。文様は3条単位の刻みを伴う浮線文で構成される。12は口唇下に円孔が施される浅鉢の口縁部破片で、内外面とも念に研磨されている。

第104図14・15は加曾利E2式土器で、同個体であろう。口縁部に燃糸文Lを充填した隆帯区画の楕円区画文を施し、幅広の頸部無文帯をおいて、胴部文様帯上位を沈線で画している。

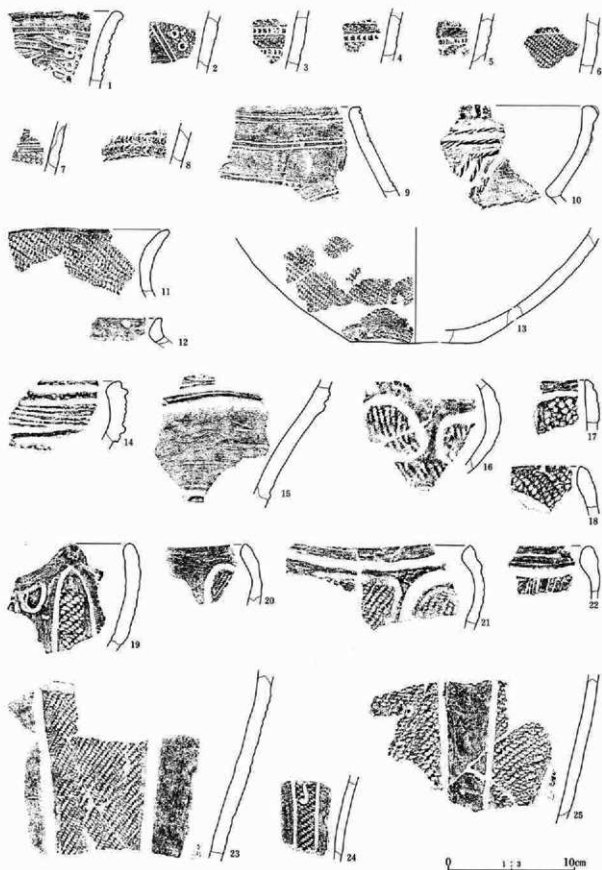
第104図16～25、第105図1～14は加曾利E3式土器である。16・17・21～25は口縁部文様帯をもつ一群である。口縁部文様は渦巻文あるいは円形文と楕円区画文で構成し、胴部には無文懸垂帯が施される。文様区画は偏平化した隆帯と幅広の沈線で施される。区画内を充填する縄文はいずれもRL、22は縦位沈線が使用されている。なお、24では縄文帯に蛇行沈線の懸垂文が施されている。18～20、第105図2～7・9は口縁部文様帯が消失した一群である。文様は沈線で区画され、区画内は縄文で充填される。縄文はRLが多用されている。第105図1・8・10・11は、2本の平行隆帯で大柄の渦巻文を基調とする文様が構成される一群である。1は胴部下半に施された懸垂文で、縄文はRL。第105図12～14は条線が施される一群である。12・14は縦位、13は波状の条線が使用される。12は口縁部波頂下に腕手を伴う懸垂沈線が施されている。

第105図15・16は加曾利E4式土器である。加曾利E3式に較べて細い沈線が使用されるようになり、文様は大柄になる傾向が認められる。15の縄文はLR。

第105図17・19・20は称名寺Ⅱ式土器である。17はやや内湾する口縁部破片で、口縁部をめぐる断面三角形の隆線上に円形の刺突文が加えられている。胴部は無文である。19・20は平行沈線で文様が構成される一群である。19は平行沈線区画内に条線文を充填するタイプで、口縁部に連点状刺突文をめぐるさせている。20は区画内に列点刺突文を施すタイプである。

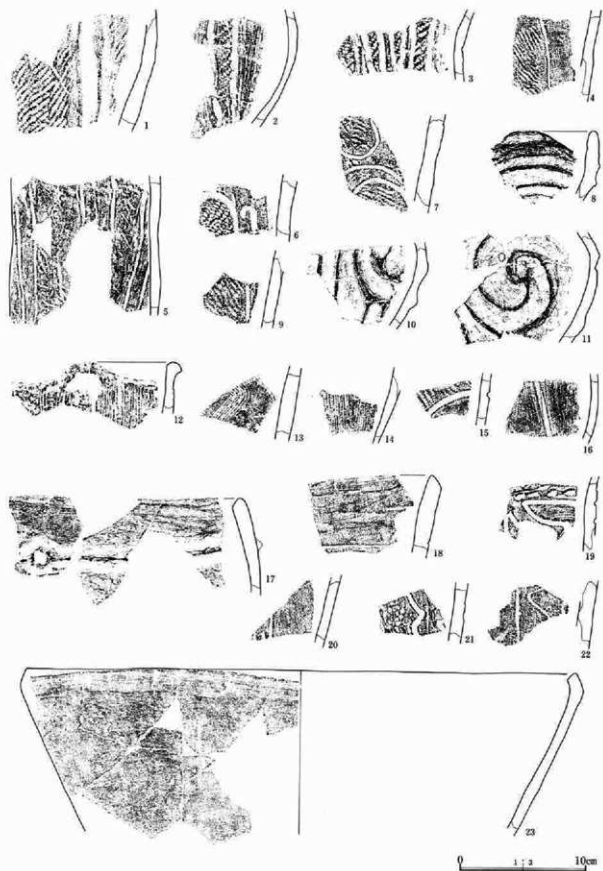
第105図18・21～23は堀之内Ⅱ式土器である。18は弱く外反する口縁部破片で、外削ぎ状の口唇部下に幅広の無文帯を設け、1本の沈線をめぐるさせている。21は充填縄文帯で文様構成する土器である。22は縦位の平行沈線間に蛇行沈線を施している。23は口縁部がくの字状に内傾する無文の鉢であろう。器内外面は研磨されている。以上の土器は、18・21・22が堀之内1式に、23が堀之内2式に比定されるであろう。

第106図1～15は加曾利B式土器である。1は胴部中位がくの字状に折れて、口縁部が大きく開く半粗製の深鉢で、細い平行沈線による懸垂文が数単位施されている。器面は比較的丁寧に調整されている。2～4・7は無文土器の一群である。7は削り痕を残すが、その他は比較的丁寧に器面に調整されている。2は小型の碗であろうか。3は口縁部が内傾する肥厚口縁の深鉢であろう。4は頸部がくの字状に折れて口縁部が外傾する深鉢である。5・6・8～11・13～15は羽状沈線が施される一群である。6・8は弱く内折する口縁部に刻みを施した低い隆帯をめぐるタイプで、口縁部には山形の突起が付き、突起下には縦位の沈線を伴う棒状貼付文が施される。また、口縁部内面にも1～2条の沈線が施されている。12は胴部上位が張る壺状を呈する土器で、胴部中位をめぐる沈線で画された文様帯には、平行沈線による弧状の文様が施されている。

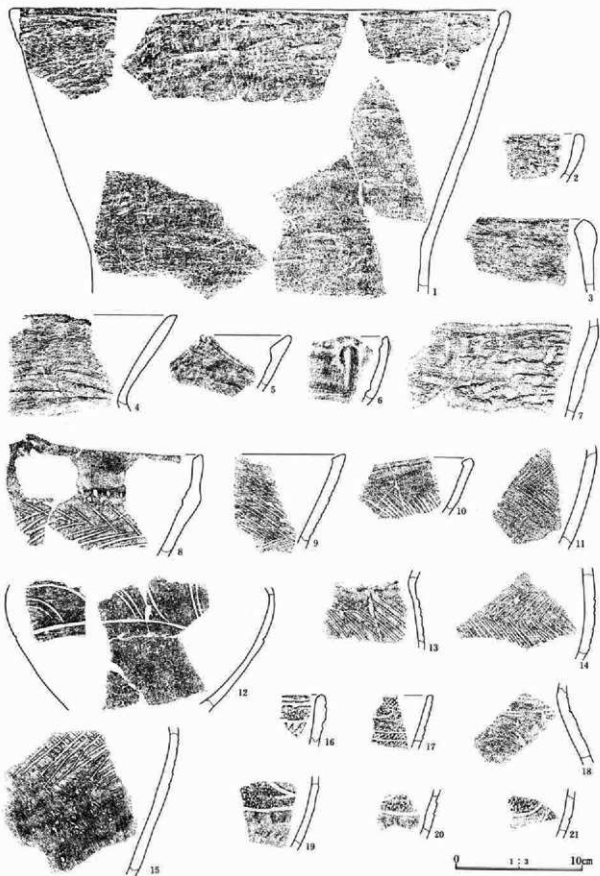


第104图 5区包含層出土土器(1)

II 縄文時代の調査

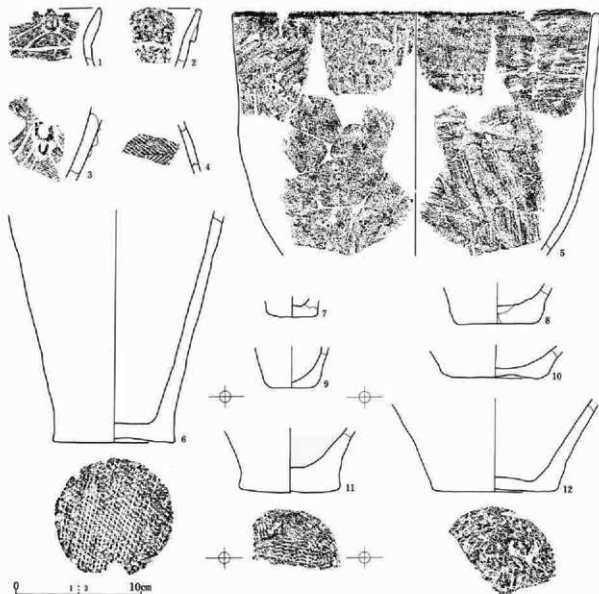


第105図 5区包含層出土土器(2)



第106圖 5区包含層出土土器(3)

II 縄文時代の調査



第107図 5区包含層出土土器(4)

以上の土器は加曾利B 2～3式に比定されよう。なお、12は新地式との関連が考えられる。

第106図16～21、第107図1・3は安行式土器である。16は口縁部に2本の平行沈線を施し、その間を刺突で充填している。17は口唇下と口縁下に縄文帯を施し、その間に入組状の文様を施している。縄文はLR。18はくびれ部に2条の沈線をめぐらせている。19～21は沈線区画内を刺突で充填する一群である。1は波頂部に三山の突起が付く波状口縁の土器で、口縁部には2本の沈線で波状口縁に沿った三角形の区画文を構成し、頸部に沈線をめぐらせている。なお、波頂下には豚鼻状の突起が付けられている。3は波頂部に魚尾状の突起が付く波状口縁の土器で、口縁部には口唇部に沿って3本の沈線をめぐらし、波頂下に刺突を伴う突起2個を付けている。口縁部の縄文はLR。以上の土器は3が安行1式、1が安行3 a式、19～21が安行3 c式に各々比定される。

第107図2・5は無文の粗製土器、6～12は深鉢の底部で、いずれも後・晩期に比定される。なお、4は羽状縄文が施された古墳時代前期の赤井戸式土器である。

II 縄文時代の調査

有蓋 (2点)

黒 頁 (2点)

石鏃 (12点)

黒 頁 (5点)	チャート (5点)	黒曜石 (2点)
----------	-----------	----------

石匙 (10点)

黒 頁 (8点)	①	②
----------	---	---

①チャート (1点) ②黒安 (1点)

礎石 (1点)

ホ ル ン (1点)

石核 (167点)

黒 頁 (25点)	チャート (86点)	黒曜石 (34点)	①	②	③
-----------	------------	-----------	---	---	---

①黒安 (7点) ②ホルン (6点) ③頁岩 (4点) 粗安 (3点) 細安・点頁 (各1点)

衝器 (208点)

黒 頁 (161点)	チャート (38点)	①
------------	------------	---

①黒曜石 (4点) 黒安 (3点) 珪頁 (2点) 頁岩・灰安・細安 (各1点)

加刷 (494点)

黒 頁 (274点)	チャート (120点)	①	②
------------	-------------	---	---

①黒曜石 (56点) ②黒安 (17点) 頁岩 (10点) 粗安 (7点) 変質支・柱化木 (各2点) 珪頁・灰安・ホルン・点頁・黄埴・紫安 (各1点)

使用例 (320点)

黒 頁 (196点)	チャート (93点)	①	②
------------	------------	---	---

①黒曜石 (11点) ②頁岩 (5点) 黒安 (4点) 珪頁・変質支 (各3点) 粗安 (2点) 灰安・ホルン・流礎 (各1点)

第109図 3・4区出土石器種別石材組成

磨石 (133点)・石皿 (27点)・敲石 (27点) が加わる。このほか、出土資料には加工痕或使用痕の著しい剝片 (814点) や石核 (167点) も多出している。このうち、石鏃は平縁な基部形状を呈す例や若干基部を抉る例が、打製石斧は側縁加工に特徴を持つ例が多出しており、特定形態に偏る傾向が著しい。また、他の周辺遺跡に比べ、石鏃や打製石斧の出土量は圧倒的に多く異質にも思える。一方、石器石材は26種に及び、石材構成は多様性に富む。通常、周辺の縄文遺跡では旧石器時代に多い黒色安山岩は減り、黒色頁岩が石器製作の主たる役割を担う例が多い。が、第108図の通り、黒色頁岩の構成比は相対的に減り、一見周辺の縄文遺跡とは異なるようにも見える。一方、石器と石材の関係は他の縄文遺跡と同様で、黒曜石や珪頁類は石鏃や石匙・石鏃など小形石器に、黒色頁岩は石鏃から打製石斧まで幅広く用いており、大きな差は見られない。以上の対応関係から考えて、黒色頁岩の示す相対的減少は石鏃など小形石器の量産に基づく現象、と理解されよう。

複数石器型式の出土が示す通り石器も各時期の累積的な姿を示しているわけだが、石鏃や打製石斧に限り見れば、遺構出土資料は平縁な基部や若干基部を抉る石鏃や両側縁に特徴的な加工を施す打製石斧に限られ、他の形態は含まれない。石鏃や打製石斧が特定形態に偏る状態、石器と石材の関係、及び、遺構出土の資料 (石鏃や打製石斧) の形態的一致は、石器の製作時期を暗示するにも思えるのである。

石鏃 (第112～114図)

形態分類

石鏃は242点が出土している。出土資料には未製品も多く約1割が分類不能だが、出土資料には茎の有無や基部の「抉り」に著しい多様性が見られ、ここでは以下の通り分類した。

- A類 基部形状が平縁状を呈す平基無茎鏡。長幅比が1:1に近い例(A-1類、第112図1~3・5)と、長幅比が2:1に近い例(A-2類、第112図6~8)の両者からなる。
- B類 基部に緩い「抉り」を持つ凹基無茎鏡。A類の石鏡と同様に長幅比が1:1に近い例(B-1類、第112図9~14)と、長幅比が2:1に近い例(B-2類、第112図15~17)からなる。
- C類 基部に明瞭な深い「抉り」を持つ凹基無茎鏡。本類の石鏡にも長幅比が1:1に近い例(C-1類、第113図5~7)と、長幅比が2:1に近い例(第113図8~10)からなる。
- D類 典型的な長脚鏡(D-1類、第113図11)で、身の1/2にも及ぶ深い「抉り」と丸味の強い側縁形状を呈す。
- E類 やや鈍角な先端部分を持つ例(第113図13)で、C類に近い基部形状を呈す。
- F類 菱形に近い形状を呈す有茎鏡(第113図14)で、身と茎の比は1:1に近い。茎は三角形形状を呈す。

A 1類 (22点)

黒 頁 (4点)	チャート (11点)	黒曜石 (7点)
-------------	---------------	-------------

F類 (3点)

黒 頁 (1点)	チャート (1点)	黒曜石 (1点)
----------	-----------	----------

A 2類 (6点)

黒 頁 (2点)	チャート (1点)	黒曜石 (2点)	黒安 (1点)
----------	-----------	----------	---------

G 1類 (7点)

黒 頁 (2点)	チャート (4点)	珪 礫 (1点)
----------	-----------	----------

B 1類 (42点)

①	チャート (15点)	黒曜石 (22点)	②
---	------------	-----------	---

G 2類 (6点)

黒 頁 (2点)	チャート (4点)
----------	-----------

①黒頁 (3点)

②黒安・珪礫 (各1点)

B 2類 (18点)

黒 頁 (4点)	チャート (5点)	黒曜石 (8点)	①
-------------	--------------	----------	---

G 3類 (2点)

黒 頁 (2点)

①黒安 (1点)

C 1類 (5点)

黒曜石 (2点)	珪 頁 (2点)	黒 安 (1点)
----------	----------	----------

H類 (2点)

黒 頁 (1点)	チャート (1点)
----------	-----------

C 2類 (9点)

チャート (5点)	黒曜石 (3点)	玉 髓 (1点)
-----------	----------	----------

I類 (96点)

①	チャート (48点)	黒曜石 (36点)	②
---	------------	-----------	---

①黒頁 (8点)

②黒安 (2点)

珪化木・珪礫 (各1点)

D類 (2点)

チャート (1点)	黒曜石 (1点)
-----------	----------

分類不明

チャート (4点)	黒曜石 (16点)	①
-----------	-----------	---

①黒安 (1点)

E類 (1点)

チャート (1点)

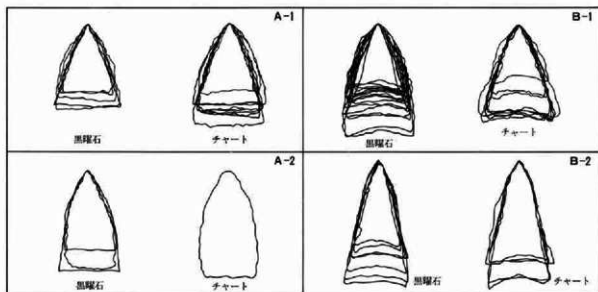
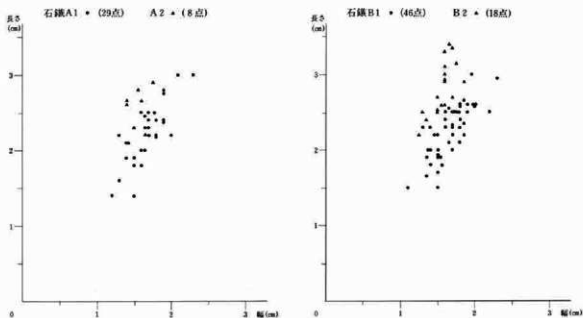
II 縄文時代の調査

G類 明瞭な基を持つ凸基有基鎌で、三角形の基を持つ。やや鈍角な「返し」を持つ例(G-1類、第114図1~3)、器体の長軸に直交する「返し」を持つ例(G-2類、第114図5~7)、鋭角な「返し」を持つ例(G-3類、第114図4)に細分されよう。

H類 平縁な基部形状を呈す無基鎌(第114図4)。基部両端には微細な剝離を加え、〔状に形状を整えている。長幅比は3:1に近い。

長さ・幅・重さ(第111図)

G-1類を除き、類型別に見た長幅比は概ね1:1~2:1の範囲に収まる。A類やB類の石鎌、G類の一部以外は資料的にも乏しいため、より完成状態に近い例を取り上げ、無基鎌と有基鎌に分け傾向のみ雑駁に記しておく。



第111図 石鎌A・B類の長幅比と形状

無茎鍬（A類～E類） D類とE類の石鍬は資料的に乏しいためここでは検討から外し、A類～C類に限り検討する。A類の石鍬は三角形を呈す例と二等辺三角形に近い例からなる。A-1類は長さ1.8cm～2.6cm・幅1.4cm～2.0cmを測る例が、A-2類は長さ2.0cm～3.0cm・幅1.4cm～1.8cmを測る例が主体を占める。B-1類は長さ1.6cm～2.6cm・幅1.4cm～2.0cmを測る例が、B-2類は長さ2.2cm～3.4cm・幅1.4cm～1.8cmを測る例が主体を占める。一方、C類の石鍬は資料的にも10点に満たず同等な比較は難しい。が、現状ではC-1類は長さ・幅とも1.2cm～2.4cmを、C-2類は長さ2.4cm～2.8cm・幅1.4cm～2.0cmを測る。

有茎鍬（F類～H類） F類とH類の石鍬は資料的に乏しいためここでは検討から外し、G類に限り検討する。G類の石鍬は二等辺三角形に近い形状を呈し、基本的に長幅比は2:1～3:1の中に収まる。G-1類は長さ3.4cm～3.6cm・幅1.2cm～1.6cmを、G-2類は長さ2.2cm～4.0cm・幅1.2cm～1.8cmを測る。G-3類は資料点数が乏しく明確ではない。出土資料（2点）に限り見れば、長さ2.0cm～2.2cm・幅1.4cm～1.6cmを測る。類型別の長幅比は以下の傾向を示す。

長幅比が1:1前後を示す石鍬……C-1類・D類(?)・E類(?)

長幅比が2:1～1:1に収まる石鍬……A-1類・A-2類・B-1類・B-2類・C-2類・G-3類

長幅比が2:1前後を示す石鍬……F類(?)・G-2類

長幅比が3:1～2:1に収まる石鍬……G-1類

石鍬の重量は概ね1g前後の数値を示し、2gを超える例は見られない。分析に耐える計測可能な資料数量の確保できない類型も多く、また、完成品と未製品の厳密な区別も難しい。ここではより完成状態に近い例のデータを以下に示しておきたい。

A-1類（チャート・資料点数11点、平均重量1.12g）（黒曜石・資料点数5点、平均重量0.91g）

A-2類（チャート・資料点数2点、平均重量1.27g）（黒曜石・資料点数2点、平均重量0.98g）（黒色頁岩・資料点数2点、平均重量1.20g）

B-1類（チャート・資料点数9点、平均重量1.08g）（黒曜石・資料点数14点、平均重量0.68g）（黒色頁岩・資料点数3点、平均重量1.18g）

B-2類（チャート・資料点数3点、平均重量1.29g）（黒曜石・資料点数8点、平均重量0.91g）（黒色頁岩・資料点数4点、平均重量0.94g）

C-2類（チャート・資料点数4点、平均重量1.42g）（黒曜石・資料点数3点、平均重量0.83g）

G-1類（チャート・資料点数3点、平均重量1.38g）

G-2類（チャート・資料点数4点、平均重量1.65g）

他の石材に比べ、黒曜石の平均的なデータは概して低い数値を示している。更に詳しく見れば、資料数量の多いB類の石鍬の場合、黒曜石を用いる例では 0.50 ± 0.20 gの石鍬は8点/14点（最小0.31g・最大1.17g）を占める一方、チャートを用いる例では 0.50 ± 0.20 gの石鍬は僅か1例に留まり、 0.70 ± 0.20 gの石鍬が5点/9点（最小0.63g・最大1.68g）と若干だが異なる。また、平面形状も黒曜石の例は長さ1.5cm～2.0cmの間にピークが、チャートの例は2.2cm～2.4cmの間にピークが見られ、ある種の相関関係を暗示するようになる。以上の通り、出土資料の示す平面形状や重量にピークの差の指摘は可能だが、両者の在り方は基本的に漸移的で明確な差は見られないのであり、また、ひとまわり大きい黒曜石の例も重量では逆に低い数値を示す（例えば、第112図9は0.99gを測り、同10の1.08gより1割ほど軽い）。また、同程度の平面形を示す例でも黒曜石の例の示す数値は低い。より完成状態に近い石鍬（B-1類）の示す最大厚の平均値は、

II 縄文時代の調査

黒曜石の例（資料点数10点）では3.11mm、チャートの例（資料点数5点）では3.86mm、と黒曜石の最大厚の方が薄く、総合的に見て石材を異に作り分けているわけではない。より薄味の整形が可能か否か、の石材性状に起因するピーク差と判断されよう。

無基礫に比べ、有基礫は大形化の傾向を示す。一般的に石礫の形状は正三角形や二等辺三角形を呈し、形状の変化は極めて乏しく、類型別の長短比も数値的に大きな変化は見られない。出現時点から石礫の形状は極めて安定的で機能的に完成状態を示している、と言える。

素材と調整加工

完成状態に近い石礫（第112図7、第113図14、第114図1）や、未製品（第114図12・14）の中に素材の形状を窺い知る例が存在する程度だが、面的加工を施す例が多く、素材の形状は不明瞭である。面的な加工を達成する以前の資料に見る背面構成も、剥片の剝離方向と異なる背面構成を示す例や同じ方向を示す例も見られ、多様性に富む。また、打面の位置関係も側縁部分に位置する例や先端部分に位置する例が主体だが、中には基部に位置する例も若干ある。第110図に示す通り、未製品の占める率は極めて高い。即ち、石礫は遺跡製作の石器ともいえ、この意味では後述する石核の分析を要する。

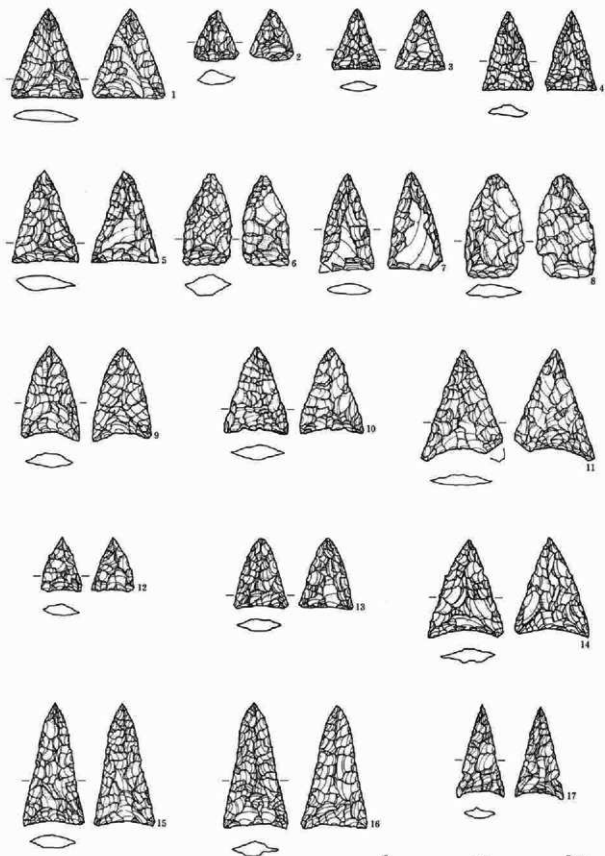
調整加工は面的な加工が主体で、周辺加工の例は極めて少ない。調整加工は通常の押圧剝離が多用され、「錯交剝離」は少なく、また、明確な「両極剝離」を採る例も見られない。未製品に見る調整加工も通常の押圧剝離で、表裏両面の加工には明確な剝離の前後関係が見られ、「両極剝離」は見られない。一般に加工は剥片形状に即して多様な在り方を示す可能性が強く、実際出土資料に見る加工の在り方も多様だが、第114図12・14の未製品は先端部分に集中的加工を施しており、機能部を極めて強く意識する石礫製作の在り方を示唆するようにも思える。

石材構成（第110図）

未製品や欠損例を除く分類可能な石礫は125点を数え、50%を少し越える程である。各種石礫の示す割合も22%がA類、48%がB類、11%がC類と3種類で総量の70%を越え、D類～H類の占める割合は数%と少ない。量的にも豊富なA類～C類を例に石材の使用頻度を見た場合、黒色頁岩（13%）・チャート（36%）・黒曜石（44%）・黒色安山岩（4%）・珪質凝灰岩（1%）・玉髄（1%）と石材の使用傾向を良く示している。類型別に見た場合、石材の使用傾向は若干変動するわけだが、基本的には大きな差は見られないのであり、同様な傾向は未製品にも当て嵌まる。一方、上記石礫（A類～C類）以外では、G類の石礫に黒曜石が見られない点は特徴的である。

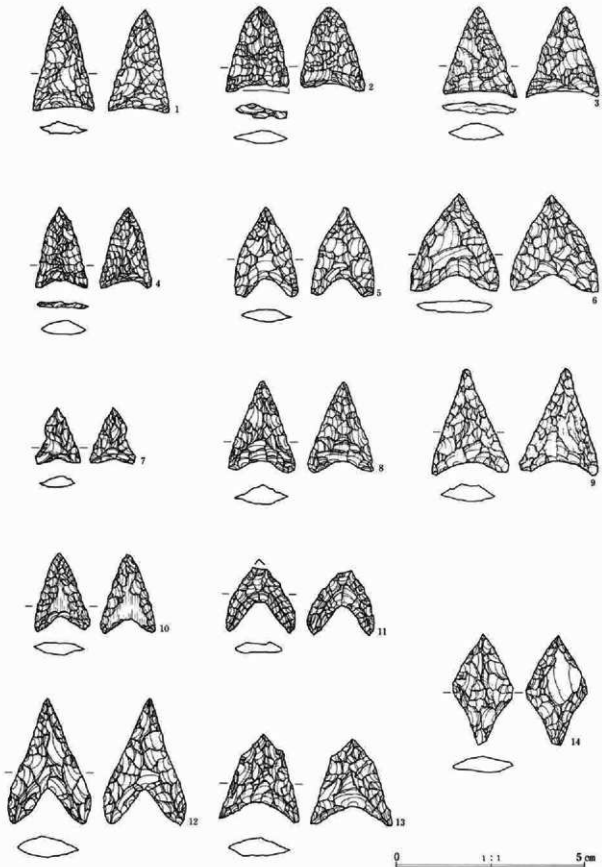
有蓋尖頭器（第115図）

2点が出土している。1は先端部と茎を欠損している。概ね、側縁は平行するようだが、少し外に膨らむようにも見える。「返し部」は軸心に直交する。身に比べ茎は小さく、棒状を呈す。調整加工は全面を覆い、より完成状態に近い。なお、左側縁は先端方向から加撃され、大きく形状を逸しており、また、表裏両面には先端の欠損部分より微細な剝離を施す。黒色頁岩。全般に珪化が著しいため断定は困難だが、見た目には新鮮で分類が妥当か検討を要す。2は鋸歯状に近い側縁形状を呈す。先端部と茎を欠損するため全体の形状は不明だが、概して小さく、若干だが外に膨らむ側縁形状は1に近い。「返し部」は明確ではなく、茎は小さい。黒色頁岩。

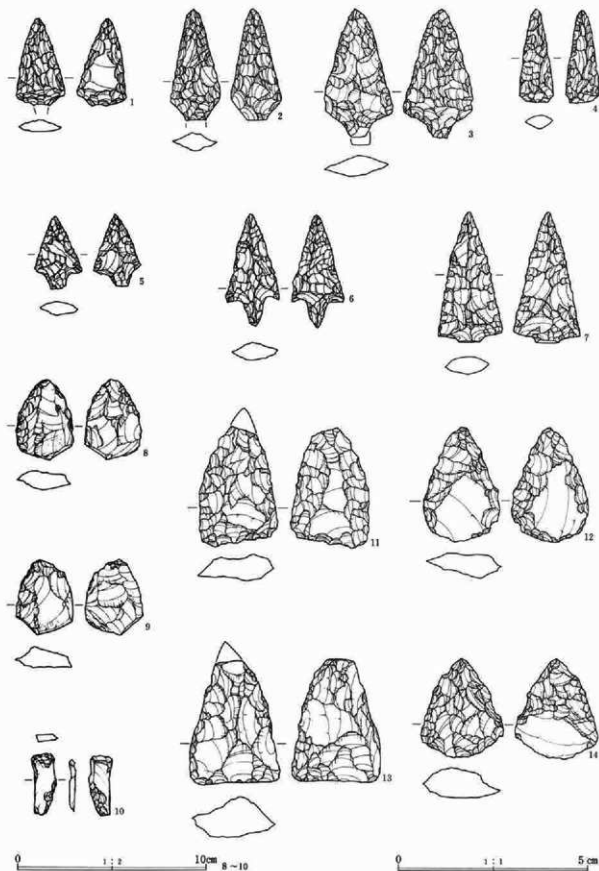


第112图 3·4区包含层出土石器(1)

II 縄文時代の調査



第113図 3・4区包含層出土石器(2)



第114圖 3・4区包含層出土石器(3)

石鏃 (第115図3~10)

12点が出土している。「つまみ部」の作出を多少なりとも意図する例(3・4)と棒状を呈す例(5)、剥片の一端に機能部を作出する例(7~10)の他にも、「雁又鏃」に近い例(6)が見られ、多様性に富む。3・4は幅の広い剥片の一端に微細な剝離を加え機能部を作出する例である。つまみ部は機能部の作出に伴い結果的に作出され、また、機能部も未加工の剝離面を残し、全面に剝離を加えるわけではない。5は全面に剝離が覆う典型的な例である。先端部分には摩耗が著しい。7~10は製作過程で生じる剥片を用い、形状の良好な剥片の一端を選び機能部を作出する例である。形状も一定ではなく器種認定は困難だが、7の先端部分には明瞭な摩耗痕が残る。6は上辺にも機能部と認定の可能な部分を有するわけだが、下辺とは異なり薄い。機能部は厚く作出され、摩耗も著しい。

石匙 (第115図11~18)

10点が出土している。横刃形のタイプが7例(14~18)と多く、欠損資料は概して少ない。1例(12)を除き、「つまみ部」を剥片の打面側に置く例が多く、また、調整加工も周辺部分に限られ、剥片形状を明確に意識している。器体全面に剝離が覆う例は見られない。黒色頁岩が8点と圧倒的に多く、他の石材の使用頻度は概して低い。11・12は縦刃形のタイプで、11は長さ3.9cm・12は長さ7.1cmを測り、差が著しい。14~18は横刃形のタイプで、刃部幅は4cm~8cmとバラツキが大きい。13は中間的なタイプで、縦長の剥片を用いる。「つまみ部」と刃部の関係を重視するなら、横刃形のタイプに近い例と思える。

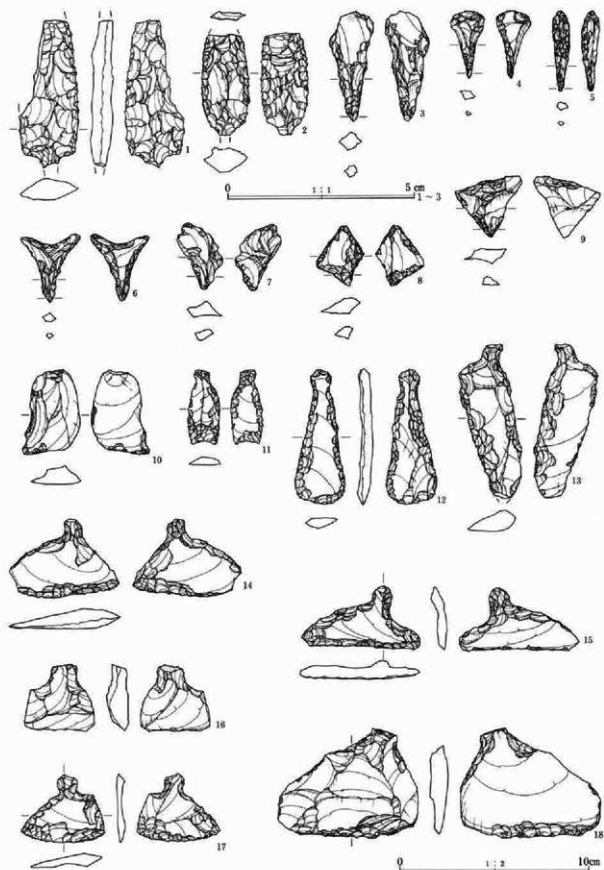
削器 (第116~121図)

削器は石鏃や打製石斧に並ぶ出土点数(208点)を数える。縦長剥片を用いる場合には側縁に、横長剥片を用いる場合には剥片端部に刃部を作出する例が多い。剥片形状と刃部の位置は明確な関連を示しており、作出剥片の形状を強く意識して剥片を剝離・選択している。石材は黒色頁岩が77%(161点)と多く、石鏃とは異なる石材の使用傾向を示している。ここでは剝離の連続性や斉一性を重要視し、分類する際の基準に据えた。

第116~118図は縦長剥片を用いる例である。第116図1~6・10・11・15・18は小形の例で、5・6が典型的な例だが、先端部分の加工状態は石鏃に近い。石鏃の製作初期を示す資料とも思える反面で、厚さ10mmを超える剥片(3)から石鏃を作出する状況は技術的に難しく想定できないこと、面的な加工を施す例(5)に乏しく大部分は周辺部の加工に留まること、先端の加工側縁部分の加工を重視すること、仮に石鏃の作出を意図するなら製作を放棄する適当な理由が想定できないことなどから、ここでは便宜的に削器に分類した。第116図13・14・16は剥片端部に刃部を持つ例で、平面形状は撥状を呈し後述する打製石斧のA類に似る。が、形状こそ類するとはいえ、石器の重量は最大で25gと軽く、側縁加工も打製石斧のA類と大きく異なるため刃部を剥片端部に持つ削器と考えた。その他の資料では、より大形の削器には鎌面を大きく残す剝離初期の剥片を用いる傾向が強い。

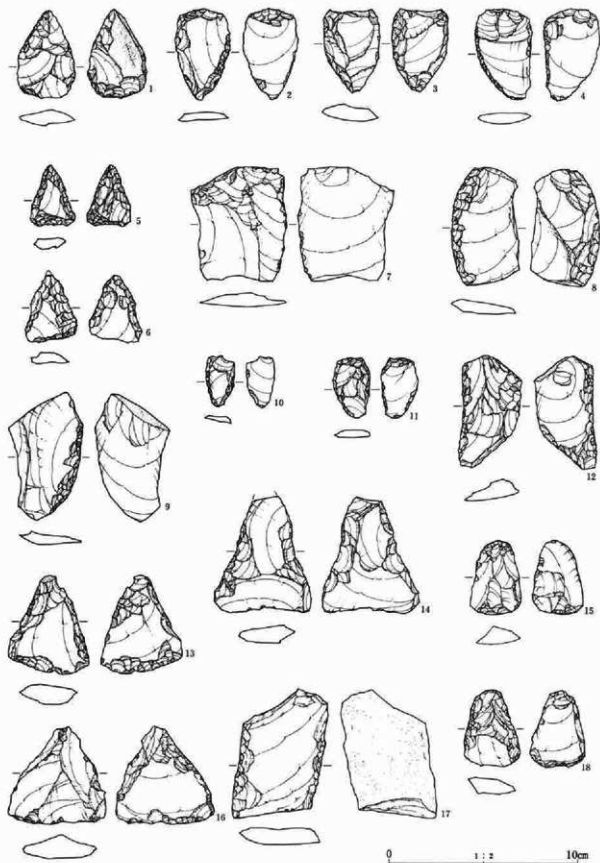
第119~121図は横長剥片を用いる例である。第119図1~5は小形の例で、ここにも石鏃の製作初期を示す例(4)が存在する。既に述べた通り、剥片も厚く周辺加工に留まり、製作を途中で止める適当な理由も想定できない。刃部は剥片端部に位置する例が多い。その他の資料は大形の削器で、剥片端部に刃部が位置する。剥片端部に剝離を加え刃部を作出する例や、側縁に加工を施し、加工を加えることなく剥片端部を刃部に使う例の両者が存在する。

6. 包含層出土遺物



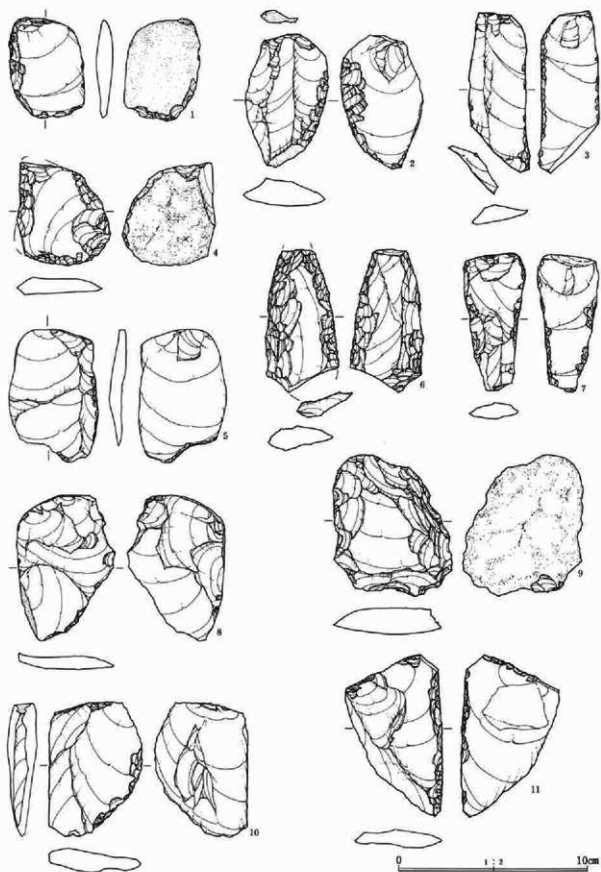
第115圖 3・4区包含層出土石器(4)

II 縄文時代の調査



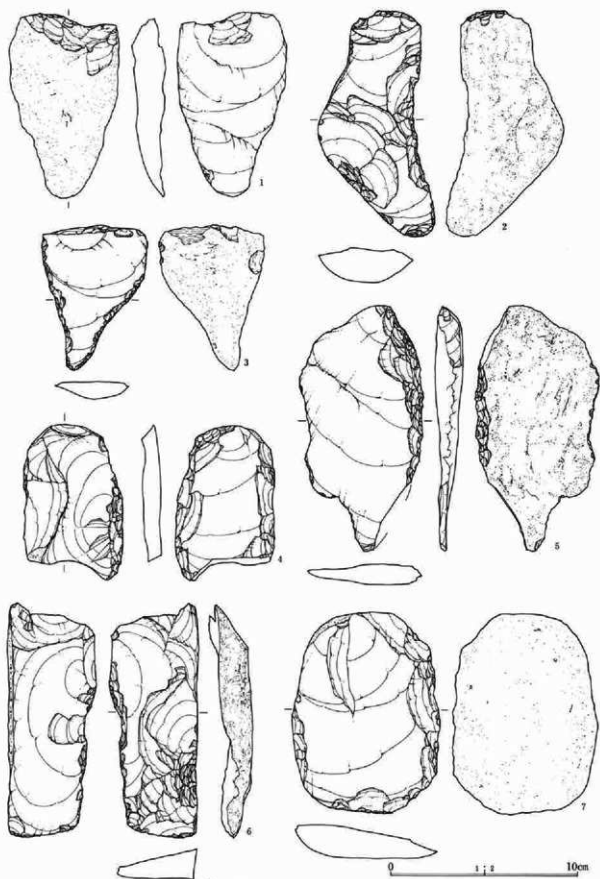
第116図 3・4区包倉層出土石器(5)

6. 包含層出土遺物

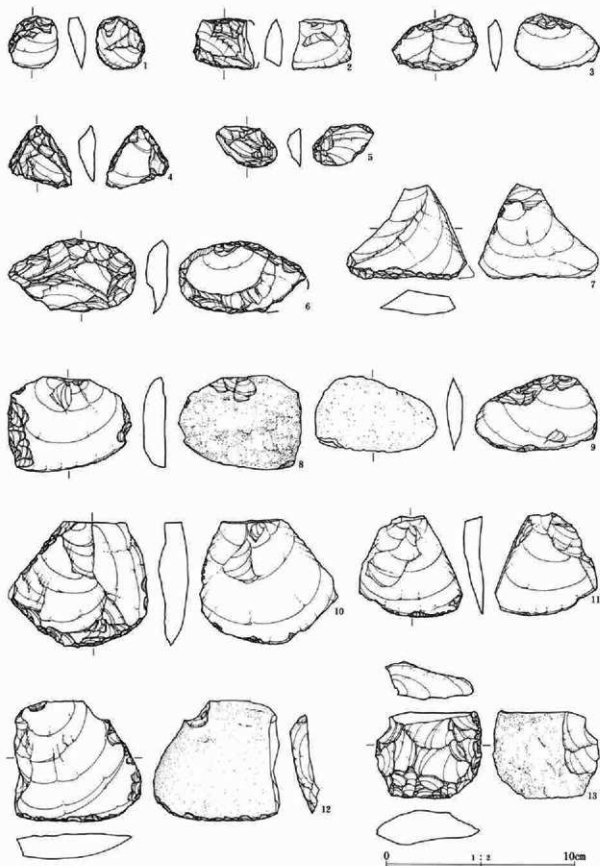


第117圖 3・4区包含層出土石器(6)

II 縄文時代の調査

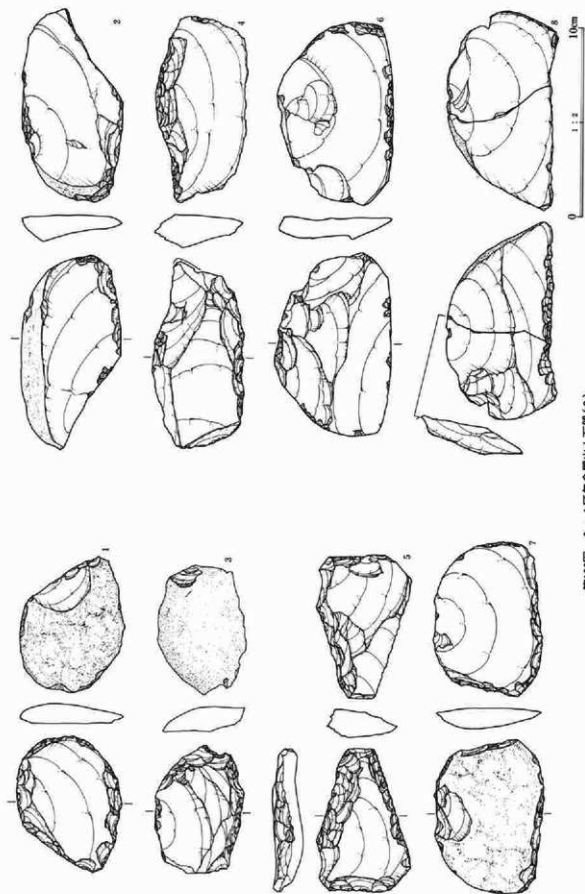


第116図 3・4区包含層出土石器(7)



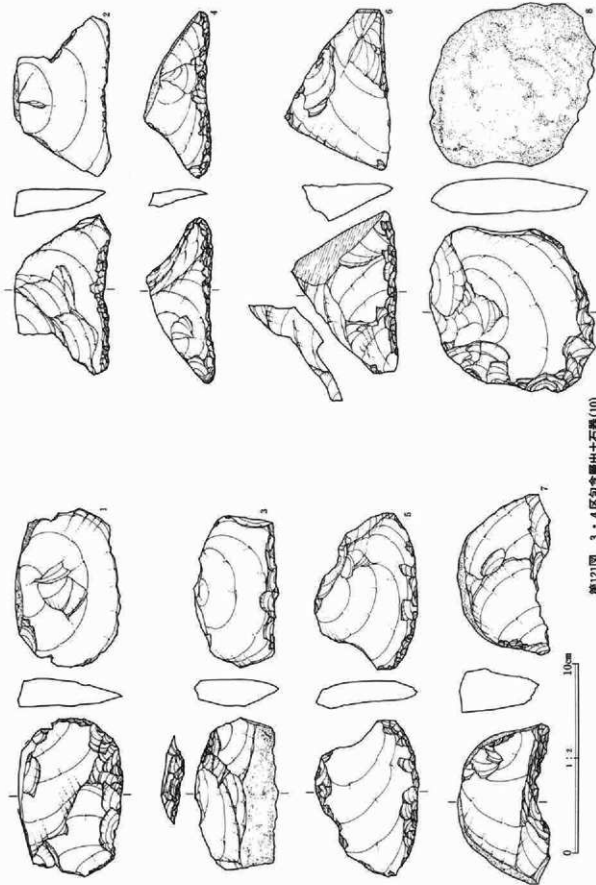
第119图 3·4区包含層出土石器(8)

II 縄文時代の調査



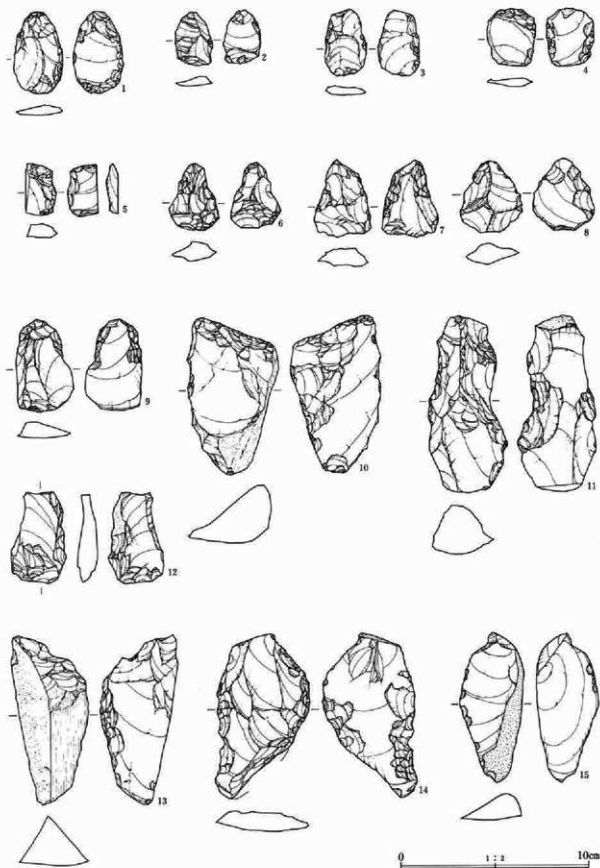
第120図 3・4区包含層出土石器(9)

6. 包含層出土遺物

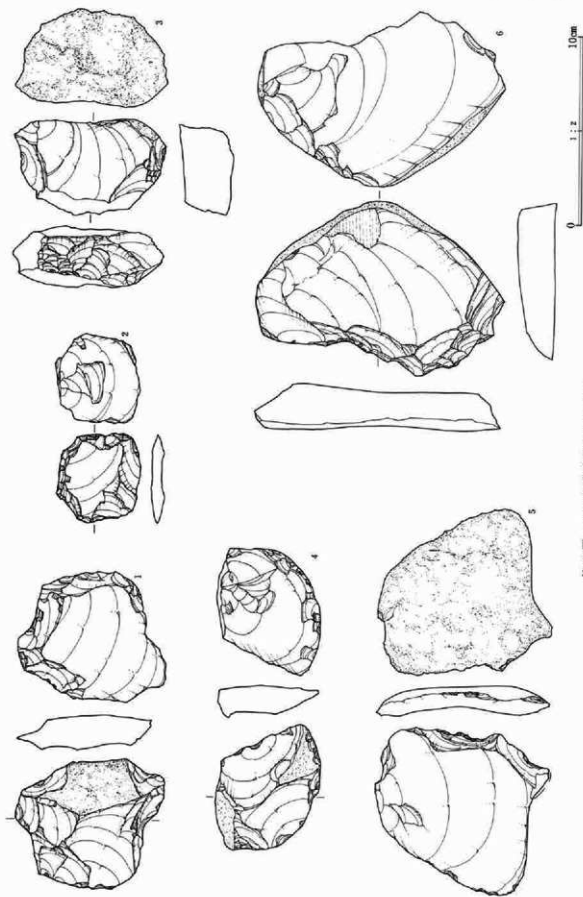


第121圖 3・4区包含層出土石器(10)

II 縄文時代の調査

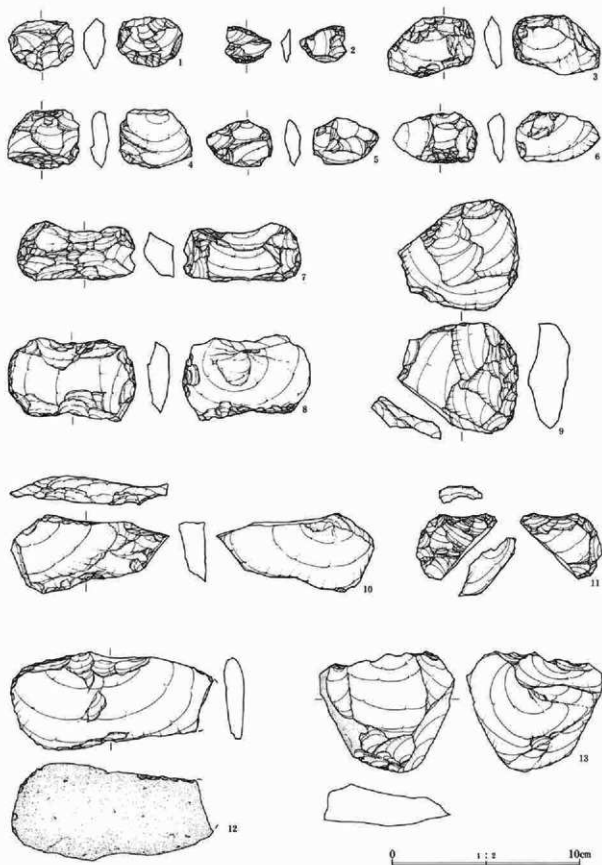


第122図 3・4区包含層出土石器(11)

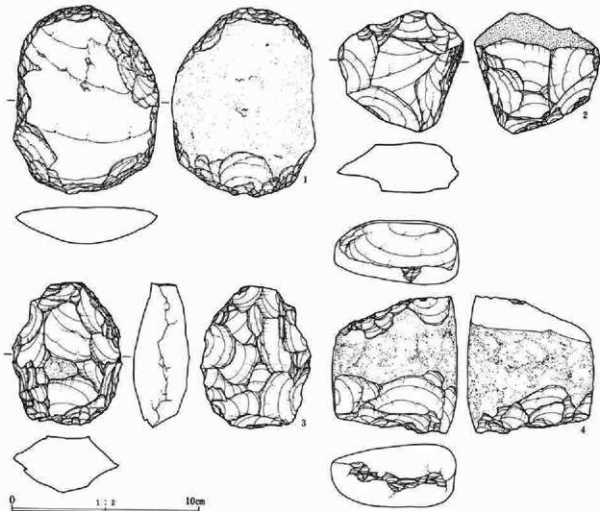


第123図 3・4区包含層出土石器(12)

II 縄文時代の調査



第124図 3・4区包含層出土石器(13)



第125図 3・4区包含層出土石器(14)

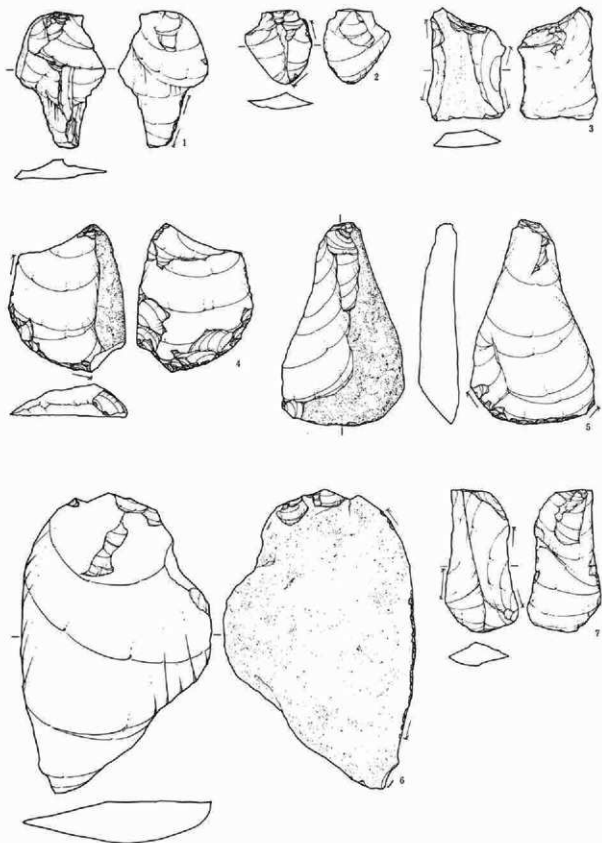
加工痕ある剥片 (第122～125図)

494点が出土している。組成率は全器種(剥片・砕片を除く)の約30%に及ぶ。縦長の剥片を用いる場合には側縁に、横長の剥片を用いる場合には剥片端部に加工部位の位置する例が多く、削器と同様な傾向を示している。この種の石器には剝離に明確な意図の乏しい例が総て含まれ、更には石鏝や削器に分類可能な例を含む点も否定できない。石材は黒色頁岩を多く用い、半数以上(274点)を占める。

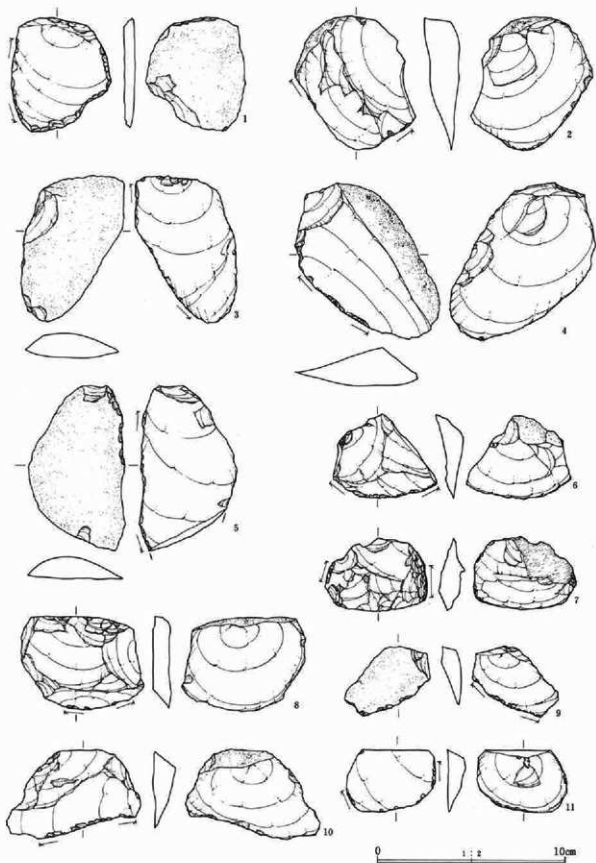
第122～123図は縦長剥片を用いる例である。第122図1～9は小形の例である。1は周辺に加工を加え形状の整う資料でもあり、削器に分類が可能とも言える。同様に、3・7も側縁の加工状態は削器と見た資料(第116図13・14・16)に、また6・8の資料も石鏝の製作初期を示す例とも言える。10～15は大形の縦長剥片の側縁に加工を施す例である。加工状態は様々だが裏面に浅く粗い加工を施す例が多い。第123図1～6は大形剥片の側縁に加工を施す例である。浅く粗い加工を加える例(5・6)が多い。1は剥片の端部と裏面側の両側縁に浅く粗い加工を施す例である。作出意図は不明だが、裏面・右側の側縁部分と剥片端部には風化の異なる剝離が施され、再生を試みている。

第124図は横長剥片を用いる例である。1～6は小形の剥片、7・8は中形の剥片、10・12は大形の剥片、9・13は幅広の大形剥片を用いる例で、剥片端部に加工を加える例が多い。

II 縄文時代の調査



第126図 3・4区包含層出土石器(15)



第127图 3·4区包含层出土石器(16)

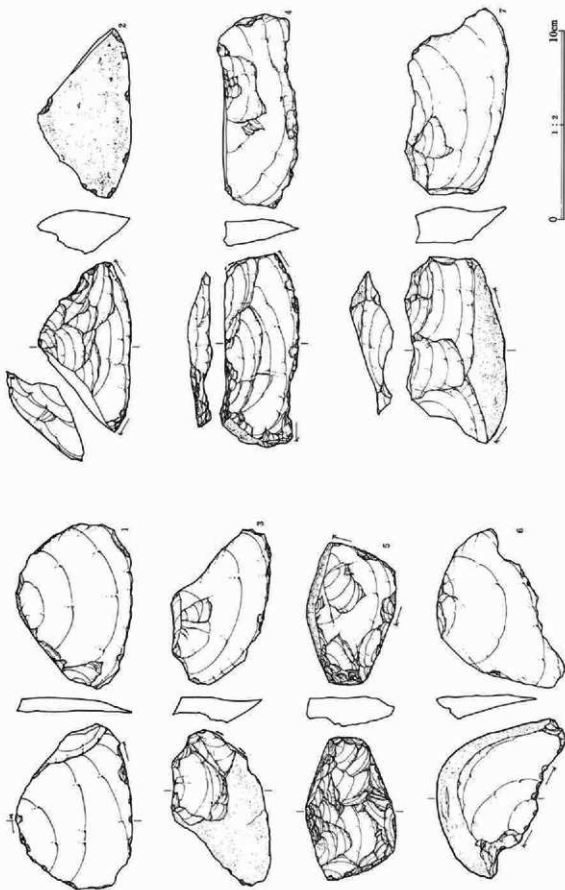


圖128 3・4区包含層出土石器(17)

第125図は周辺加工を施す例（1～3）と棒状を呈す礫の上下両端に加工を施す例（4）である。1は剥片端部に軌状な剥離を加えており、この部分が主たる機能部と思える。4は棒状の礫を用いること、欠損の後に上端の加工を加え再生を試みることから判断して礫器の再生資料とも思える反面、下端の加工状態は刃部の形状とは大きく異なり、明確ではない。

使用痕ある剥片（第126～128図）

320点が出土している。組成率は全器種（剥片・砕片を除く）の約18%に及ぶ。縦長の剥片を用いる場合には左右の側縁に、横長の剥片を用いる場合には剥片端部に使用痕が見られ、両者は比較的明確な相関性を有する。使用石材は黒色頁岩が約60%を占める。概して小形剥片を用いる例は少ない。

第126図・第127図1～5は縦長剥片を用いる例である。礫面を大きく残す例が多く、剥離初期に生じる剥片を意図的に選ぶ傾向が指摘されよう。

第128図・第127図6～11は横長剥片を用いる例である。縦長剥片を用いる例とは異なり、打面や側縁に礫面を残す例（第127図6・8・10、第128図1・3～7）が多い。剥片の表面に残る剥離の方向は剥片の剥離方向に一致しており、組織的・連続的な剥離が想定されよう。

打製石斧（第131～145図）

形態分類

272点が出土している。出土資料には未製品も多く約1割が分類不能だが、出土資料は基本的に短冊形・楕形・分銅形の範疇に取まる。ここでは更に細分して5群に把えた。

A類 楕状を呈す小形の打製石斧（第131～138図）。本類の打製石斧は刃部加工の有無で細分が可能と思える。

B類 短冊状を呈す打製石斧（第139～142図）。

C類 上半部に若干の「抉り」を持ち、下半部が大きく膨らむ打製石斧（第143図）。形態的には短冊形の打製石斧に近い。

A1・A2類（97点）

黒頁(91点)	①
---------	---

①珪頁・頁岩・灰安・細安・ひん岩・ホルン（各1点）

C2類（15点）

黒頁(10点)	ホルン (3点)	①
---------	-------------	---

①細安・砂岩（各1点）

B類（96点）

黒頁(72点)	①	②	③	④
---------	---	---	---	---

①細安（5点）

②頁岩・ホルン（各4点）

③灰安・実質支（各2点）

④珪頁・雲石（各1点）

C3類（23点）

黒頁(14点)	ホルン (3点)	①	②	③
---------	-------------	---	---	---

①珪頁（2点）

②細安（2点）

③頁岩・粗安（各1点）

C1類（9点）

黒頁(8点)	①
--------	---

①細安（1点）

その他（33点）

黒頁(27点)	①	②
---------	---	---

①ホルン（3点）

②灰安・砂岩・実質支（各1点）

第129図 打製石斧分類別石材組成

II 縄文時代の調査

D類 分銅状を呈す打製石斧（第144図）。「抉り」は浅く、側縁形状は緩いカーブを描く。

E類 分銅状を呈す打製石斧（第145図）。「抉り」は深く部分的であり、側縁形状はノッチ状を呈す。

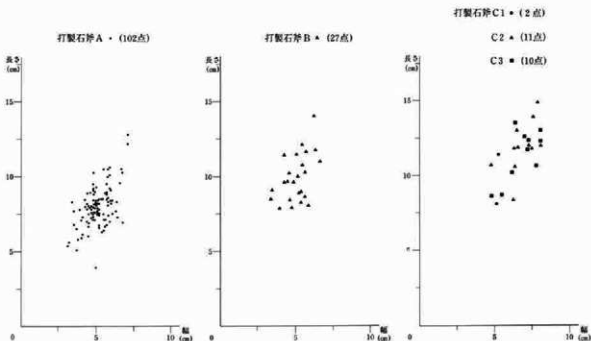
長さ・幅・重さ（第130図）

A類の打製石斧は長さ5cm～10cm・幅3cm～6cmを測る例が、B類の打製石斧は長さ7cm～13cm・幅3cm～6cmを測る例が多い。A類の打製石斧に比べB類の打製石斧は若干細身で、長幅比は2：1の前後に集中する。概ね最大幅は刃部幅とも一致しており、この点では両者に大きな差は見られない。C類～E類の打製石斧は欠損例が多く、数値的把握は難しい。現状ではC類は長さ12cm～20cm・幅6cm～9cm、D類・E類の打製石斧は長さ8cm～16cm・幅5cm～9cmを測る例が多い。概してC類はパラツキが大きく、D類・E類は10cmを越える例が多い。

打製石斧の重量は、A類の打製石斧が平均76g（最大387g・最小13g）、B類の打製石斧が平均179g（最大876g・最小43g）を測る。C類～E類の打製石斧は完形例が少なく、製作上の欠損を示す例が多い。現状ではC類の打製石斧は量的にも乏しく不明だが、D類の打製石斧は100g未満の例が1点、101g～150gを測る例が1点、151g～200gを測る例が5点、201g～250gを測る例が1点、251g～300gを測る例が3点、301gを越える重量を測る例が1点、また、E類の打製石斧も100g未満の例が2点、101g～150gを測る例が5点、151g～200gを測る例が2点、201g～250gを測る例が1点、251g～300gを測る例が3点、301gを越える例が1点と多様性に富む。以上は製作時の欠損例を含む値でもあり制約も著しいわけだが、両者には各々大小の形状差が想定可能ともいえよう。

素材と調整加工

素材には幅の広い大形剥片、なかでも端面を大きく残す大形剥片を多く用いる傾向が強い。剥片を横位に用いる例が圧倒的に多い。調整加工は側縁加工を重視する傾向が窺われ、全く加工することなく形状の良好



第130図 打製石斧の類別長幅比

な剥片の縁辺に刃部を設定する例も多い。刃部加工を施す例も形状を整える程度か、刃部再生を示す程度に留まり、取り立てて論じる程の技術的な差は見られない。が、A類の打製石斧には他の打製石斧とは異なる点も看取され、ここではA類の打製石斧を他の打製石斧と対照し、調整加工に関する若干の相違を以下に記す。技術的に見れば概ねA類の打製石斧は、加工量は全般的に少なく周縁の加工が主で特に側縁加工を重視すること、既に述べた通り刃部は全く加工することなく形状の良好な剥片縁辺に刃部を設定する例が多く、また、刃部加工を施す例も形状を整える程度か刃部の再生を示す程度に留まること、に特徴づけられよう。このほかにも礫面を大きく残す剥片を多用すること、A類の打製石斧に見る側縁加工には「潰れ」が乏しい点も、出土資料に限り見れば決して異質ではなく、寧ろ技術的な類似性を示しているとも思える。が、より詳細に見れば、A類の打製石斧には側縁加工、及び、側縁加工を反映した側縁部（エッジ）の在り方に他の打製石斧とは異なる点が指摘されよう。まず側縁の加工に関して言えば、側縁加工は片側のみ施す例と表裏両面とも施す例が見られ、量的には後者の例が圧倒的に多い。この点では他の打製石斧とも変わらないわけだが、A類の打製石斧の場合は片側にはより平坦な剝離を加え、また、逆の面にはより急峻な剝離を加える特徴を有する。即ち、この剝離作業の結果、側縁部（エッジ）は裏面側に偏り、必然的に台形状の断面形状を呈するのである。通常、他の打製石斧では側縁部（エッジ）が器体中央に位置するよう調整加工を施す例が圧倒的に多く、A類の打製石斧と同様な状態は見られない。

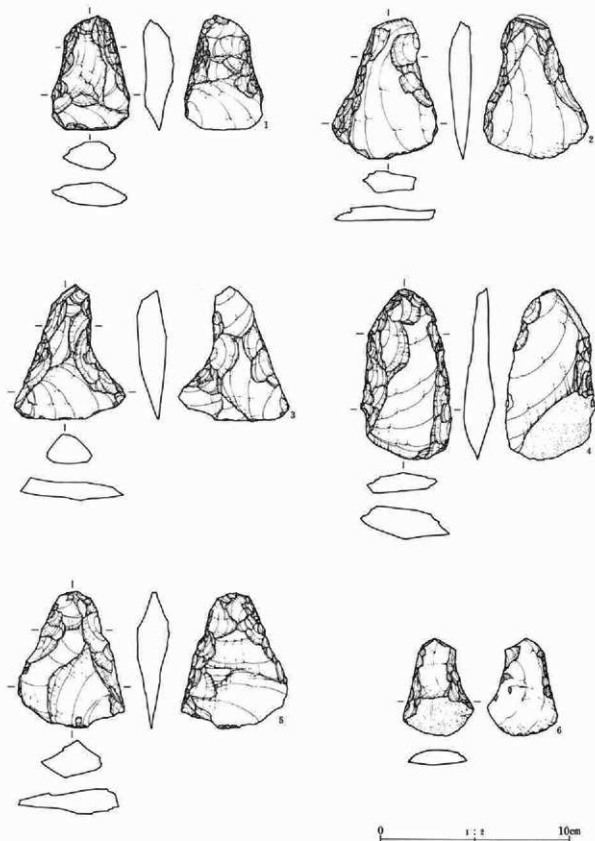
欠損部と使用痕

出土資料には使用状況を示す例の他にも製作段階の欠損を示す例も多い。打製石斧の使用状況を想定するためには製作段階に欠損する例を除外してみるべきだが、明確な基準の設定も難しいため、ここでは欠損部と摩耗痕の在り方に関して概要を述べる。

欠損例はA類の打製石斧には概して少なく、他の打製石斧の欠損状況とは大きく異なる。以下、類型別に見た欠損状況を記す。A類の欠損資料は僅か2点で、欠損率は極めて低い。2例とも器体の上半部分を欠損しており、使用段階の欠損とは思われない。B類の欠損資料は52点を数え、欠損率は極めて高い。欠損部位は器体の中央付近で欠損する例が24例と最も多く、刃部破片（12例）、頭部破片（9例）、胴部破片（7例）と続く。C類～E類の打製石斧は各々3点/9点、5点/15点、10点/23点に欠損が確認され、C類やD類では33%の、E類では44%の欠損率を示す。類型別に見た欠損部位の在り方は多様で、C類では上半部を欠く例が1例、下半部を欠く例が2例、D類では上半部欠損1、下半部欠損1、刃部欠損2、上下両端を欠損する胴部破片1、E類では器体の中央付近から欠損する例が5例と最も多く、上下両端を欠損するもの2例、刃部を欠損するもの1例と続く。

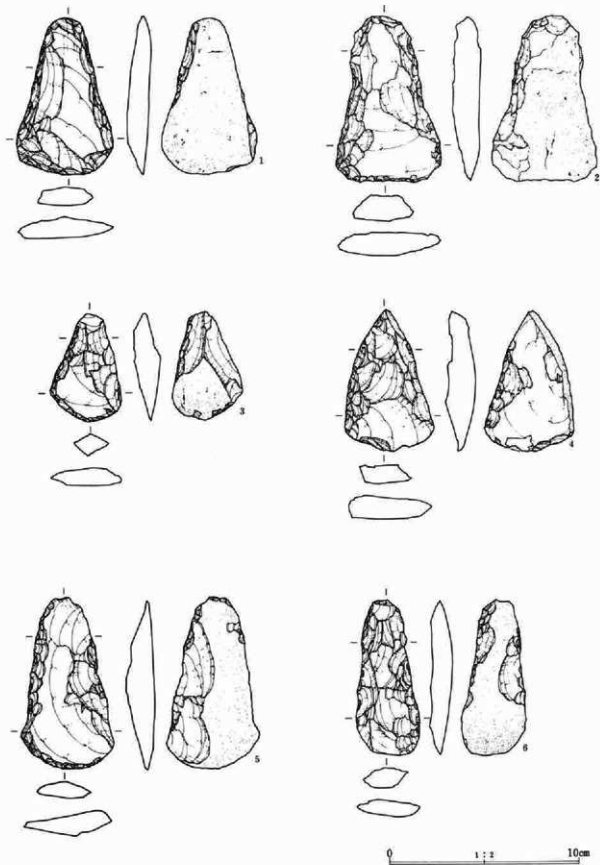
摩耗痕はA類の打製石斧には概して少なく、摩耗痕の著しい他の打製石斧に比べ対照的な在り方を示している。以下に類型別に見た摩耗痕の在り方を示す。A類の打製石斧には摩耗痕の付着する例は極めて乏しく、寧ろ極く小さな刃こぼれ状を呈する剝離痕の付着する例が圧倒的に多い。摩耗痕の著しい例は1点に留まる。B類の打製石斧には摩耗痕の著しい例が多い。約50%の資料に摩耗痕が見られ、特に刃部には摩耗痕を切る新しい剝離が施され、刃部の再生を示す例が多い。一方、C類～E類の打製石斧には摩耗痕の著しい例は少ない。摩耗痕はC類に2例、D類に1例、E類に4例が確認され、更には全般的に「作り」が荒々しいことからみて、使用状態、或は、刃部の再生資料を示す例より製作段階を示す例が多い、と思える。なお、C類の打製石斧には側縁（挟り部分）の摩耗が著しい例が出土している。他の資料には同様な状態は見られないものでもあり、頻繁な使用状況は窺われない。

II 縄文時代の調査



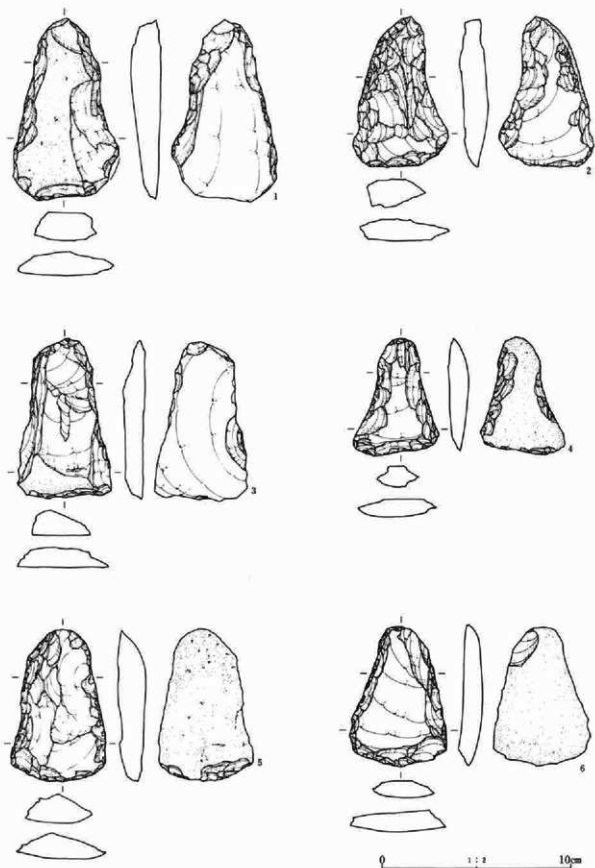
第131図 3・4区包含層出土石器(18)

6. 包含層出土遺物



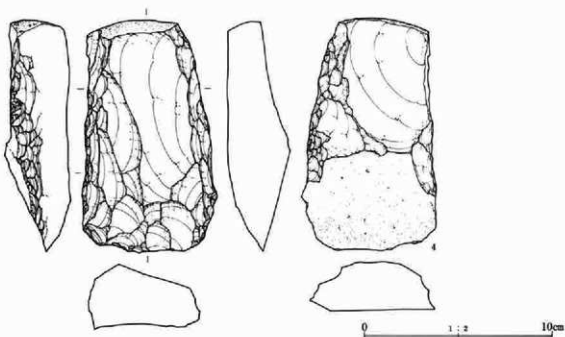
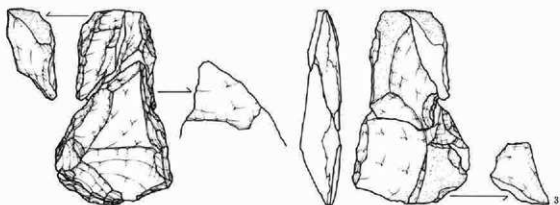
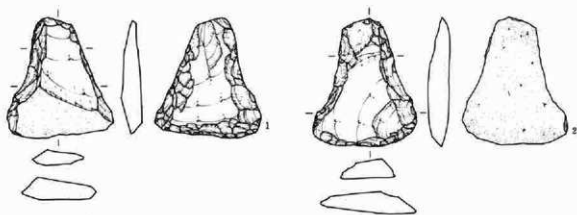
第132圖 3・4区包含層出土石器(19)

II 縄文時代の調査



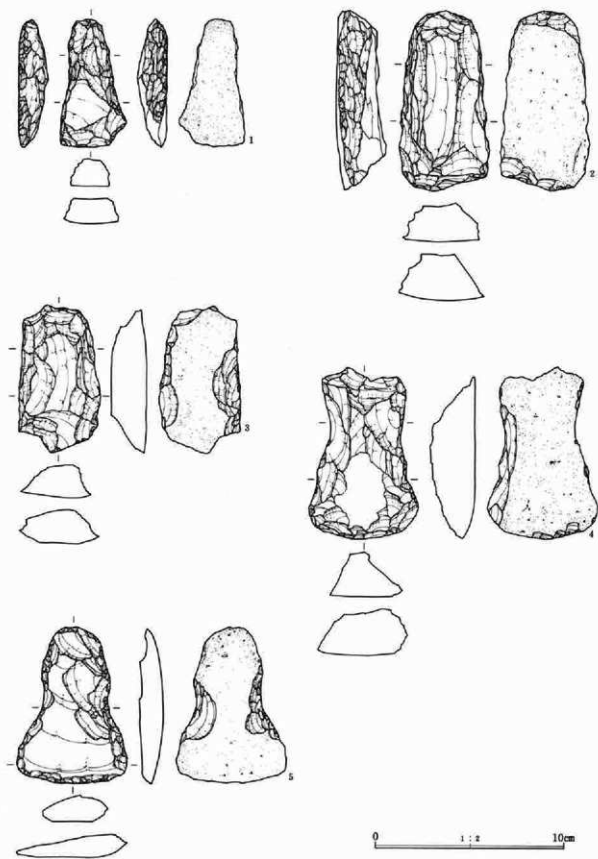
第133図 3・4区包含層出土石器(20)

6. 包含層出土遺物

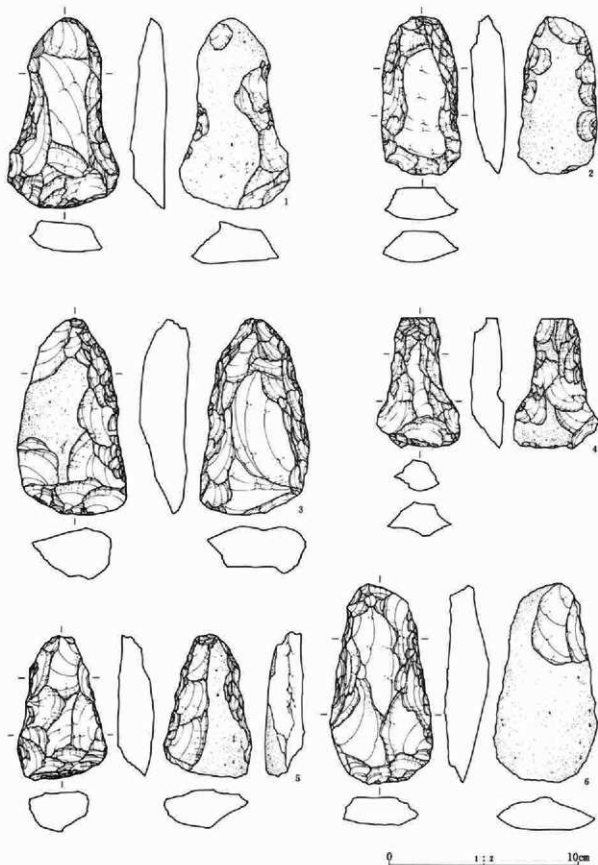


第134图 3·4区包含層出土石器(21)

II 縄文時代の調査

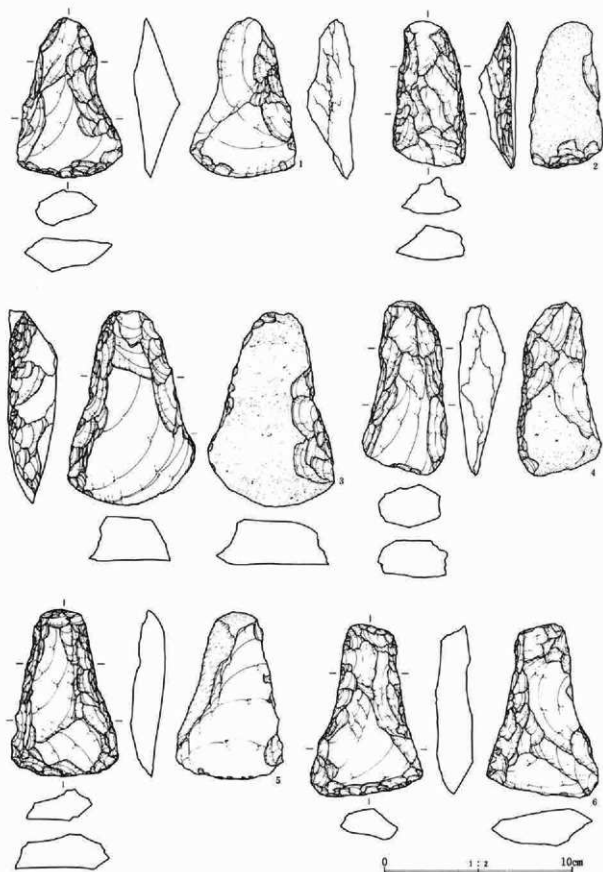


第135図 3・4区包含層出土石器(22)



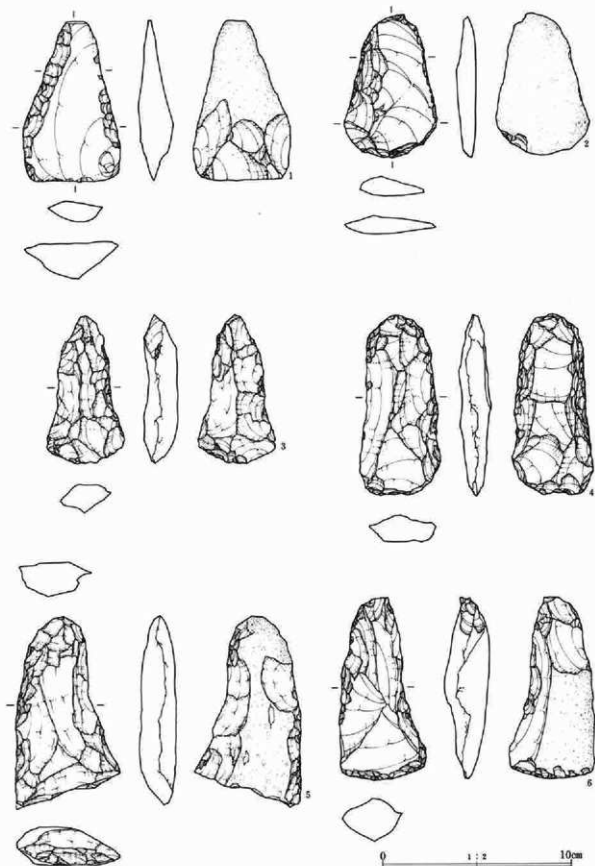
第136图 3·4区包含層出土石器(23)

II 縄文時代の調査



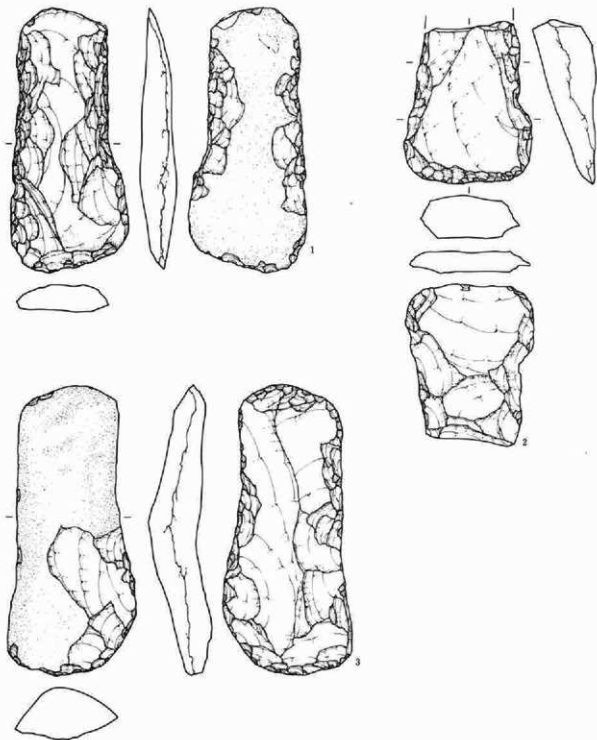
第137図 3・4区包含層出土石器(24)

6. 包含層出土遺物



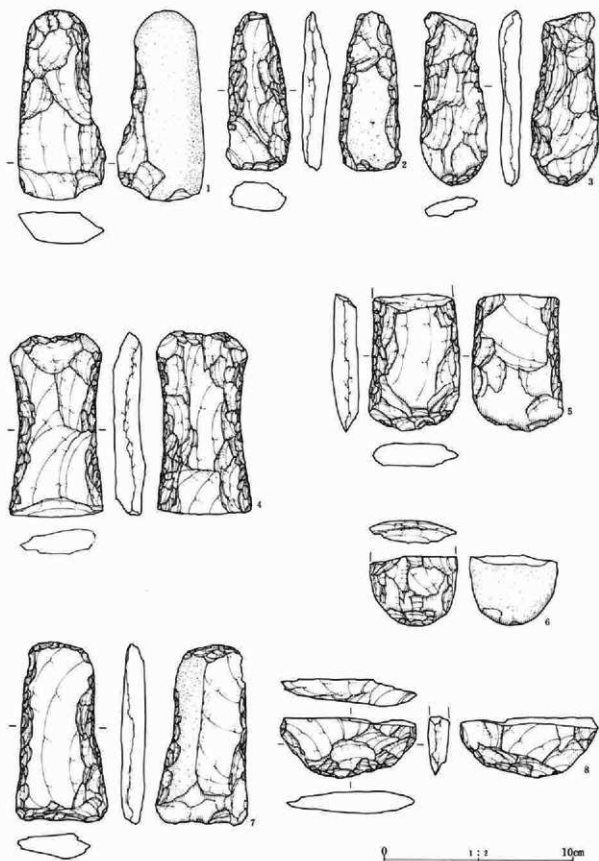
第138圖 3・4区包含層出土石器(25)

II 縄文時代の調査



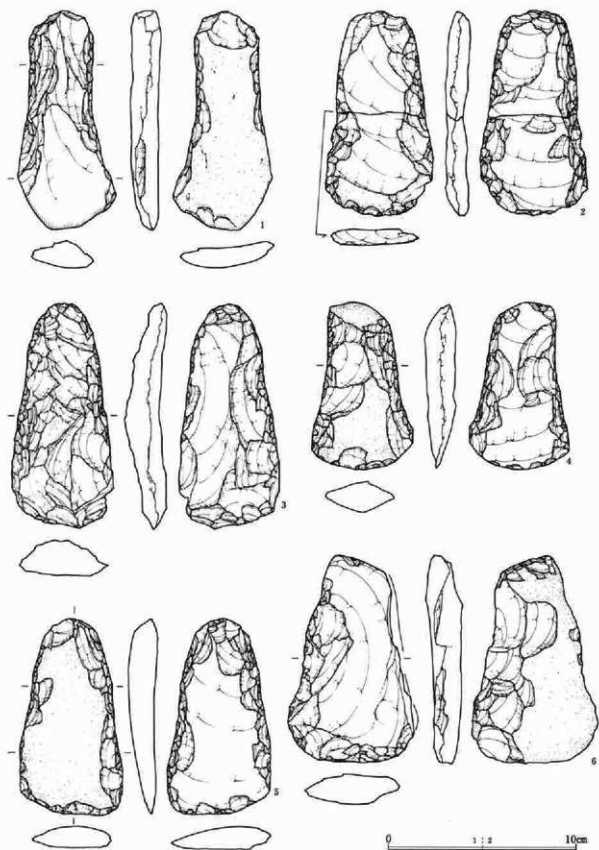
0 1:2 10cm

第139図 3・4区包含層出土石器(26)

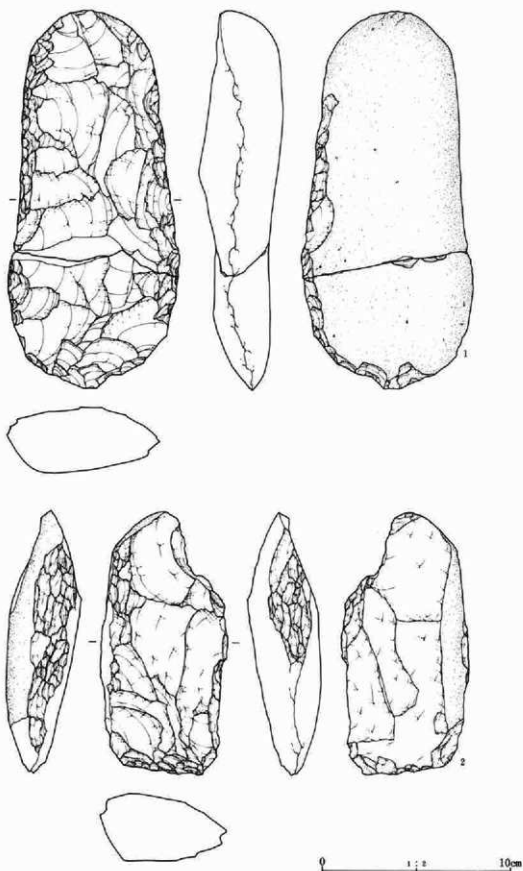


第140图 3·4区包含層出土石器(27)

II 縄文時代の調査

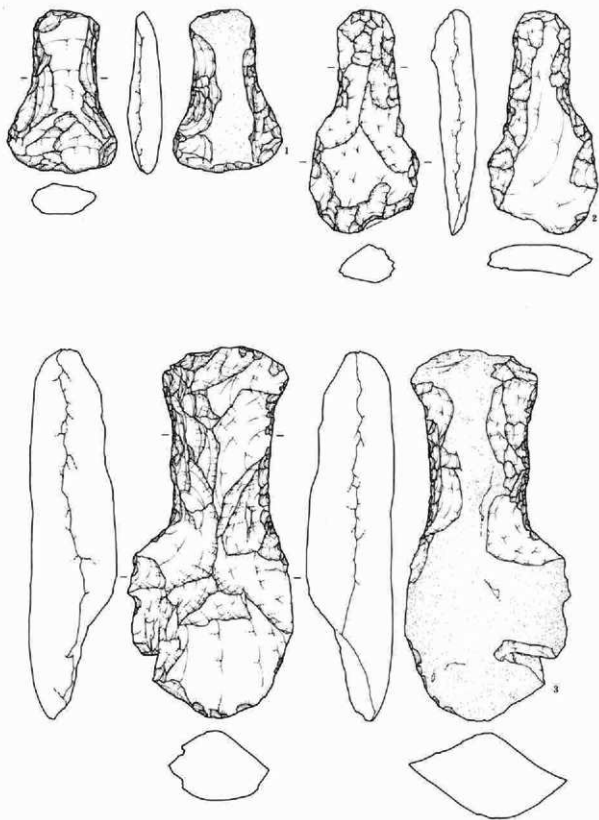


第141図 3・4区包含層出土石器(28)



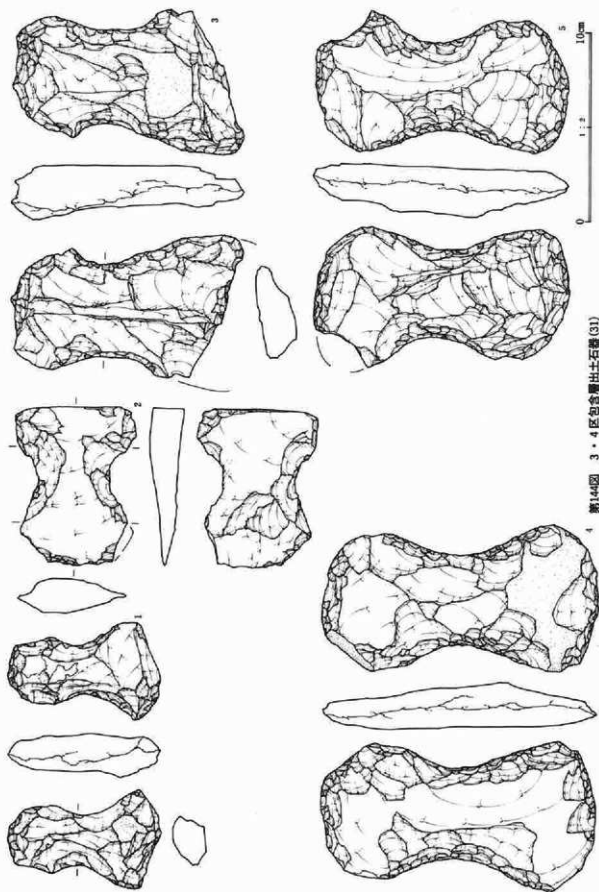
第142圖 3・4区包含層出土石器(29)

II 縄文時代の調査



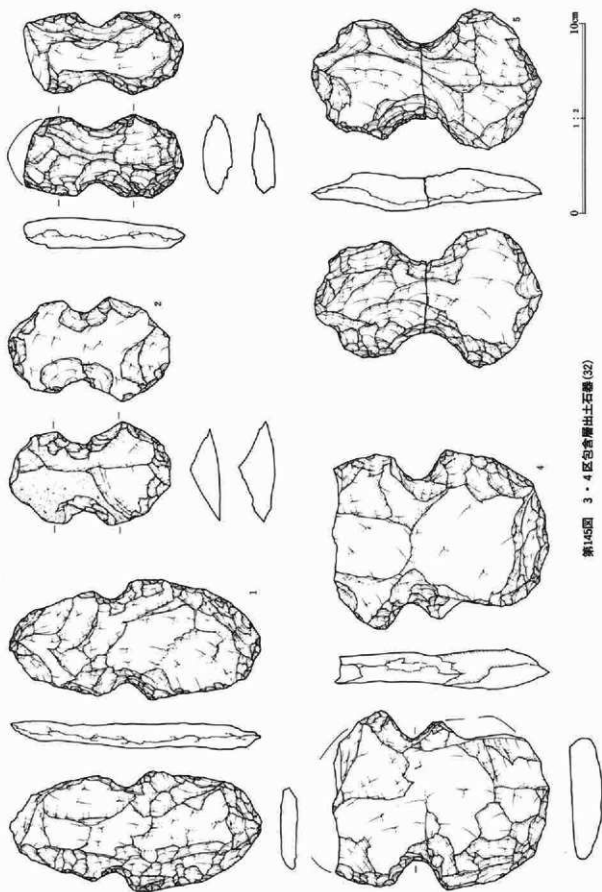
第143図 3・4区包含層出土石器(30)

0 1:1 10cm

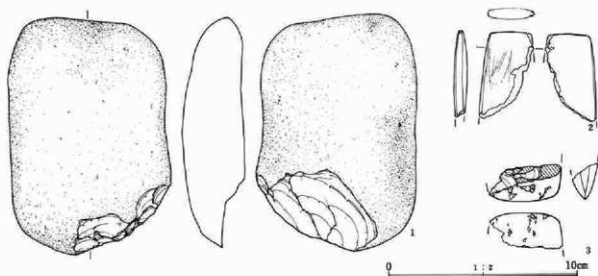


第144回 3・4区包含層出土石器(31)

II 縄文時代の調査



第145図 3・4区包倉層出土石器(32)



第146図 3・4区包含層出土石核(33)

石材構成 (第129図)

各類とも黒色頁岩を最も多く用いる点では一致しており、大きな差は見られない。黒色頁岩の他に珉質頁岩(3点)、頁岩(6点)、灰色安山岩(4点)、細粒安山岩(5点)、ホルンフェルス(14点)、粗粒安山岩(6点)、変質玄武岩(2点)、雲母石英片岩(1点)、砂岩(2点)、変質安山岩(1点)、ひん岩(1点)が出土している。資料点数の不足から断言は困難だが、A類やB類の打製石斧に比べC類～E類の打製石斧は黒色頁岩を多用する一方で、他の石材を使用する割合も相当量に上る傾向が指摘されよう。

礫器 (第146図1)

1点のみ出土している。扁平な礫の一端を粗く打ち欠き刃部を作出している。加工は中央より右側に偏り、未製品の可能性が高い。ホルンフェルス製。

磨製石斧 (第146図2・3)

2点のみ出土している。2は側縁に平坦な面を持つ磨製石斧で、定角式に近い形状を呈する。欠損状況は不明だが、この部分には平坦な面が見られ、欠損の後に他器種に転用を試みたものかもしれない。3は側縁に平坦面を持つ刃部破片で、節理部分から欠損している。2は蛇紋岩を、3は変質玄武岩を用いている。

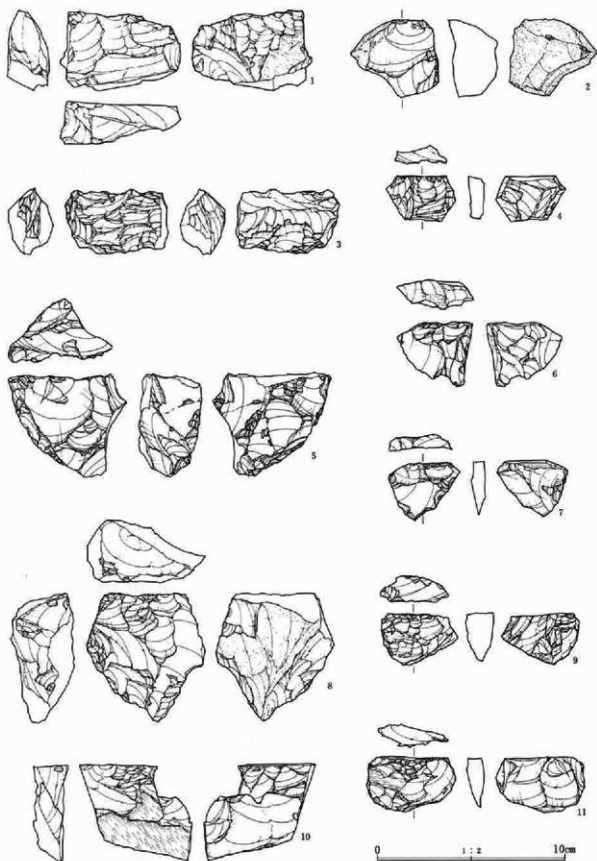
石核 (第147～149図)

167点が出土している。多種多様な形状の石核が出土しているうえ、これ以上剥離できないほど剥離作業の進む例も多く、また本来的に石核が小さいため不明な点も多々ある。なお、ここでは黒曜石と珉岩類に限り資料を掲載している。他の石材では黒色頁岩を用いる例が31点と最も多く、ホルンフェルスの9点、頁岩の4点と続く。ここでは以下の分類に従い記述する。

A類 風化の著しい角柱状の素材、節理の著しい角柱状の素材などやや大形の部類に属す石核 (第147図1～3・5・8)

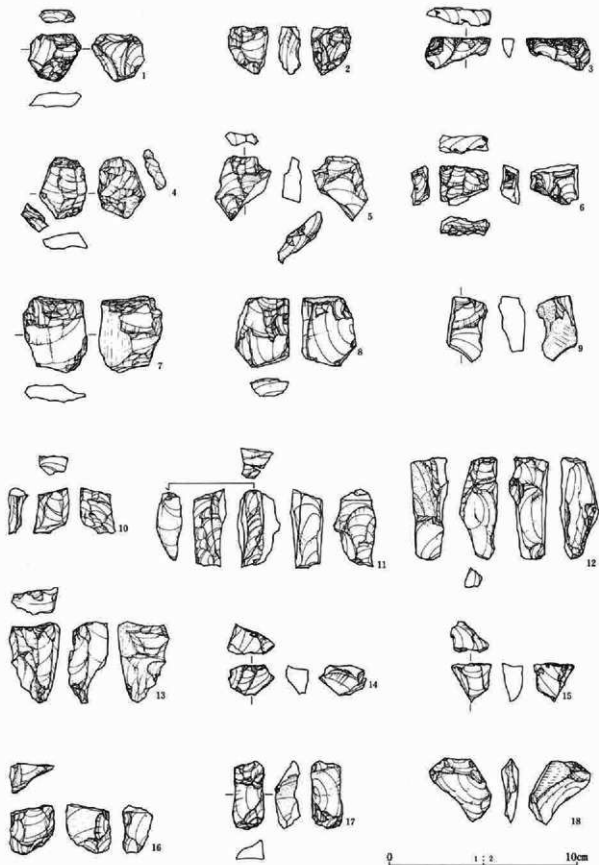
B類 剝片を用い、上端部の平坦面から剥離を行う石核 (第148図2・4・6・7・10・11、第149図1～8)

II 縄文時代の調査



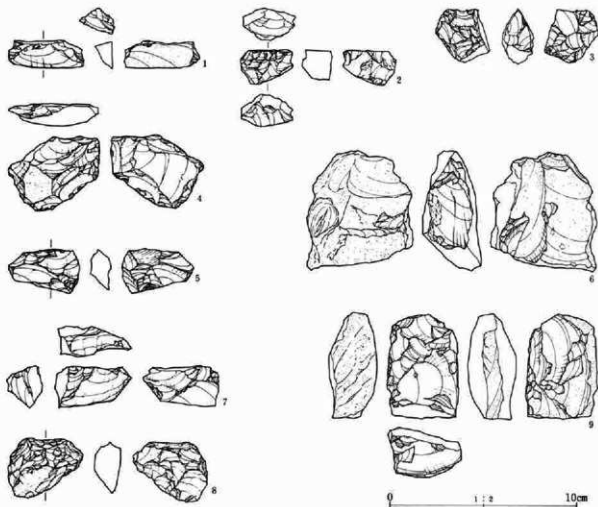
第147图 3・4区包含層出土石器(34)

6. 包含層出土遺物



第148图 3·4区包含層出土石器(35)

II 縄文時代の調査



第149図 3・4区包含層出土石器(36)

C類 角柱状を呈す小形の石核(第148図9~13)

D類 諸々の剥離段階で生じる厚い不良剥片を用い、多面に互り剥片剥離を試みる石核(第148図14・15、第149図2・3)

E類 諸々の剥離段階で生じる厚い不良剥片を用い、上部部の平坦面から剥離を行う石核(第148図16~18、第149図1・7)

F類 剥片を石核に用いる例だが、周辺部分には微細な剥離が著しく、石核から石鏃の作出を試みることも思える石核(第148図4・5・8)

以上の通り石核はA類~F類に分類が可能だが、D類やE類と見た石核は厚く、C類の石核に近い形状を呈すること、F類と見た石核もB類の石核の特徴でもある上部部の平坦面を部分的に残しており、B類の石核の最終的な姿とも言えること、から各類の石核はA類~C類の石核に大別されよう。量的にはB類の石核が最も多い。B類の石核に見る基本的な剥離作業の在り方は、上部部の平坦面に打面を置き、表面、或は表裏両面で剥離を行う例が多い。このほかには上下両端に打面を置く例、その他の平坦面に打面を置く例も散見され、剥離の在り方は多様性に富む。「両極剥離」的な剥離は見られない。一方、A類やC類では石核形状に即した剥離が行われ、節理面を取り込む板状の石核形状を呈するA類の石核(特に珪岩類に多い)では、錯交剥離に近い状態で剥離が進み、また、角柱状を呈するC類の石核では長軸方向に剥離を行う例が多い。

A類の石核では小形・横長剥片、C類の石核では小形・縦長剥片の作出が想定されよう。D類～F類の石核も同様な技術的背景の下に位置づけられ、剥離の多様な在り方は原石の効率的消費の実態を良く示している、と判断されよう。

第149図の通り石器と石材の対応関係からみて、基本的に各類の石核は石籤その他の小形石器の作出に伴う可能性が高い。多様な形状を呈する各種石核は原石の効率的消費を行う剥離の実態を示しており、これから剥離を行う原石（第159図6・9）を含む、組織的剥離を示唆するものでもある。

磨石（第150～151図、152図1・2）

72点が出土している。偏平な円礫や楕円形状を呈する礫を用いる例が多い。表裏両面が摩耗する例が圧倒的に多く、また、一部表面には敲打痕が著しい例（第151図5）や側縁部に敲打痕が著しい例（第151図7）、小口部分に打痕の著しい例（第150図4・8）がある。第150図4は棒状礫を用いており、下半部分を欠損している。石材は粗粒安山岩を用いる例が圧倒的に多い。

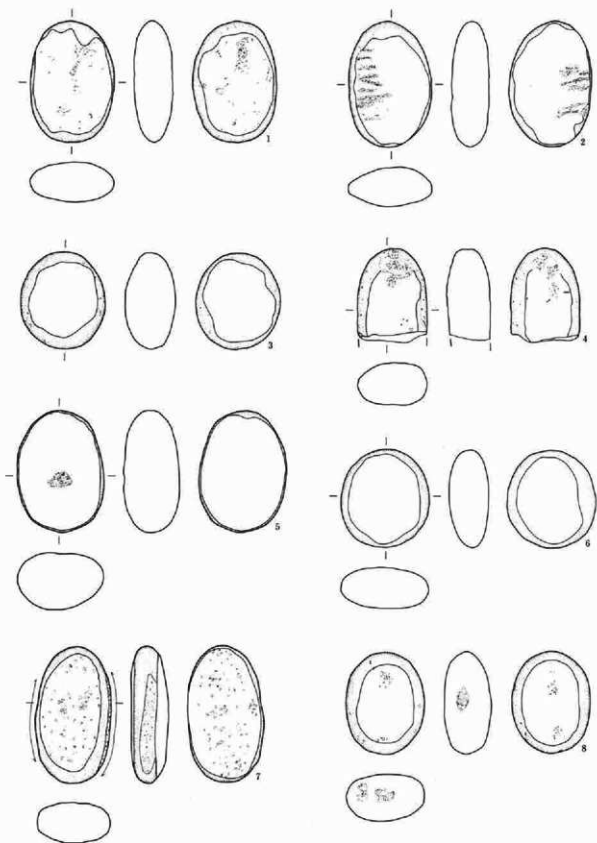
凹石（第152図3～8、第153～154図）

324点が出土している。一般的に、凹石は掌に入る程度の略円形の礫を用い、表裏両面の著しい敲打痕に特徴づけられよう。通常、敲打痕は礫中央よりやや外れた所に位置する例が圧倒的に多く、打痕が一点に集中せず、所謂「集合打点」の状態を呈する。即ち、集合打点は打点が微妙に振れるため生じるものでもあり、凹石の主たる使用状況を良く示している。敲打痕の他にも表裏両面の礫面が著しく摩耗する例や、側縁にも打痕の著しい例が見られ、多様な使用方法を示唆している。ここでも、上記認識の下に器種認定を試みたわけだが、出土資料にはアバタ状の凹み部を形成する例と、漏斗状の凹み部を形成する例が存在している。前者は度重なる打撃が加わる「集合打痕」で、凹み部は浅く明瞭な打痕の集中は見られない。一方、後者の例は凹み部も深く、また、漏斗状を呈する部分の摩耗が著しい。両者の凹み部の在り方は大きく相違しており、そこには単なる使用頻度の相違とはいえない人為的意図が見い出せるようにも思えるのであり、所謂「第二の道具」の性格を与え得る可能性も否定できない。

第152～154図には、所謂「集合打痕」の著しい例を一括した。出土資料には、敲打痕が少し残る程度の使用頻度の低い凹石（第154図4）や、表裏両面で8ヶ所の凹み部を持つ例（第152図5）、さらには側面や小口部分にも凹み部が付く例（第152図8）が見られ、凹み部の在り方は多様性に富む。概して小形の礫を用いる例には凹み部の数も少なく、側面に凹み部の残る例も多い。一方、やや大形の部類に入る例では凹み部の数も多く、側面には敲打痕の著しい例（第152図5・8）が多く、形状に即した凹み部の在り方を示している。凹石の計測値は、平均値で長さ14.2cm・幅8.3cm・重さ449gを示す。概して礫の選択基準は厳密で、偏平礫（厚さ4cm）を用いる例が多い。一方、小形の例は厚さ6cmを測る例が多く、より円礫に近い礫を用いる傾向が強い。

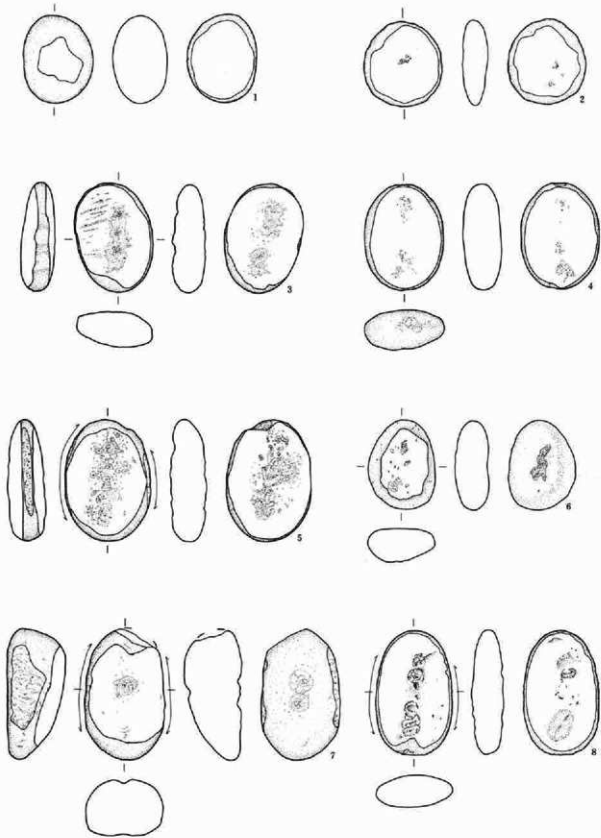
第155～157図には、漏斗状の凹み部を持つ例を一括した。集合打痕の著しい例に比べ、概して礫の断面形状は厚い。凹み部も礫の中央部分に付く例（第155図5～7）が多く、また、礫の長軸方向に付く例が圧倒的に多い凹み部が礫の短軸方向に外れる例（第155図2）も若干だが出土している。漏斗状を呈す凹石の計測値は、平均値で長さ12.0cm・幅10.4cm・重さ564gと集合打痕の著しい例と大きな差は見られない。が、欠損例の中には1,000gを越える例（第155図1、第156図2・3）が含まれ、この種の欠損例を含めるなら、現状でも平均重量は768gと跳ね上がり、検討を要す。

II 縄文時代の調査



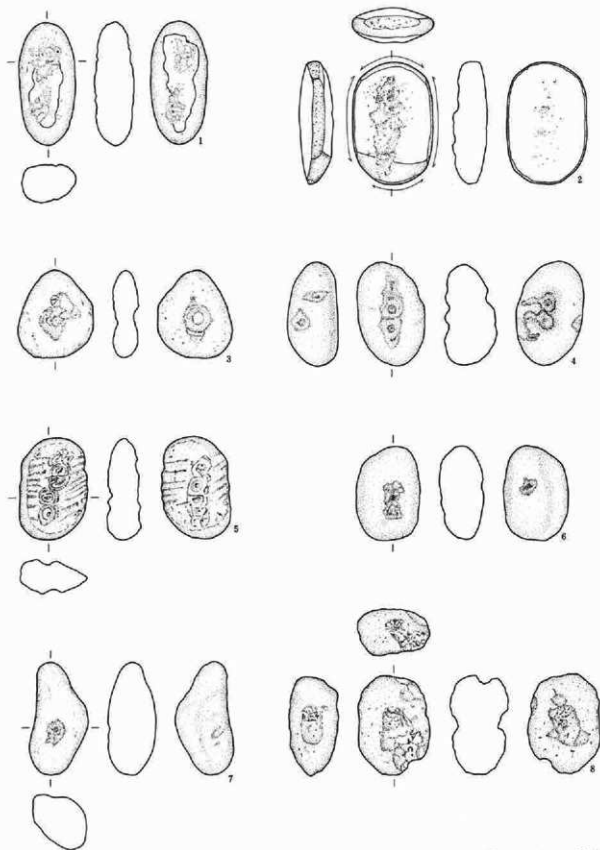
第150図 3・4区包含層出土石器(37)

6. 包含層出土遺物



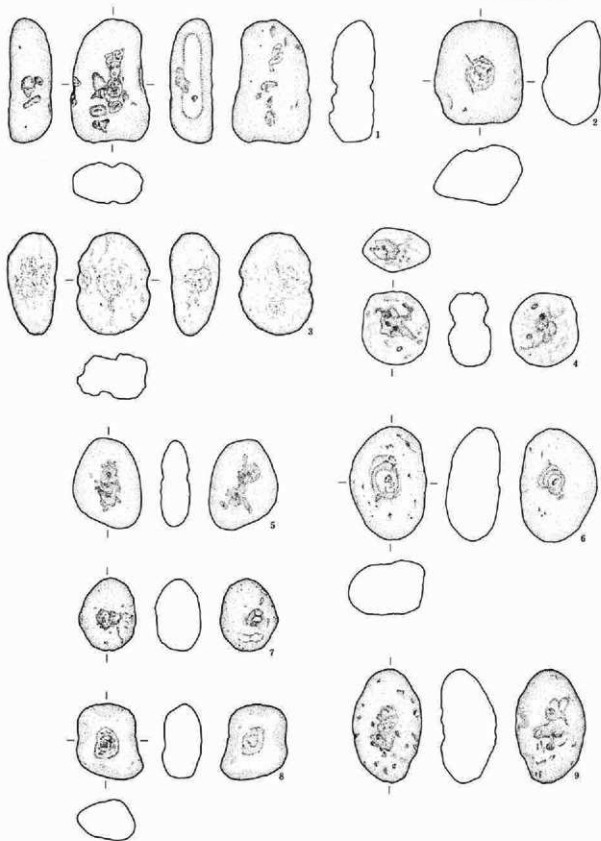
第151圖 3・4区包含層出土石器(38)

II 縄文時代の調査



第152図 3・4区包含層出土石器(39)

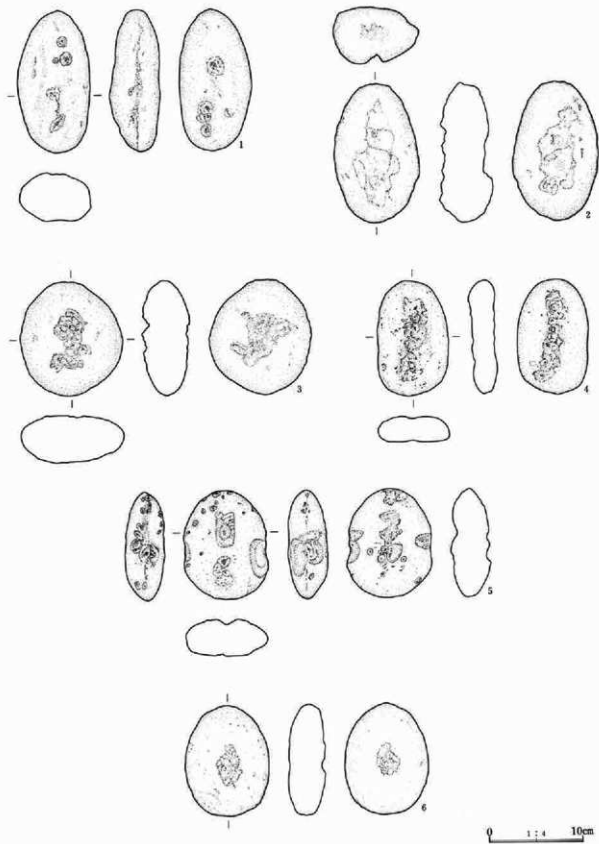
6. 包含層出土遺物



0 1:4 10cm

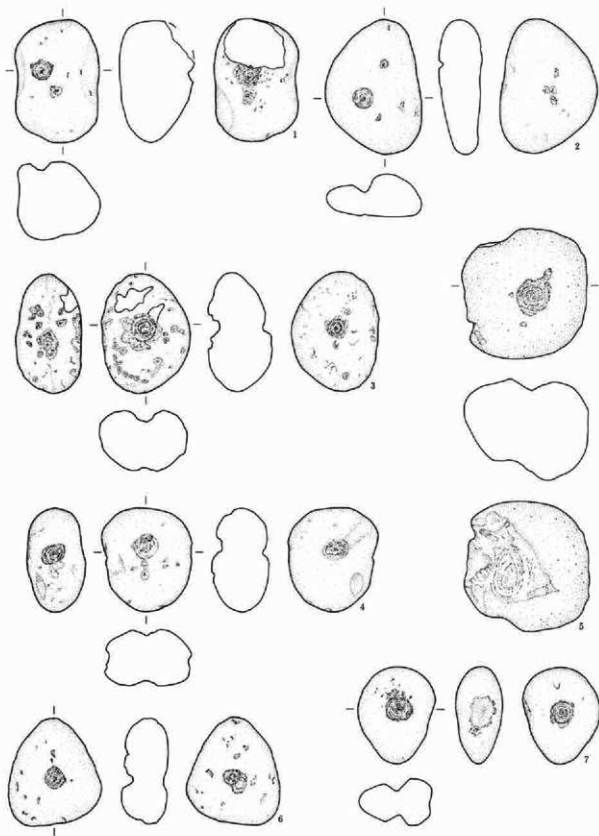
第153图 3·4区包含層出土石器(40)

II 縄文時代の調査



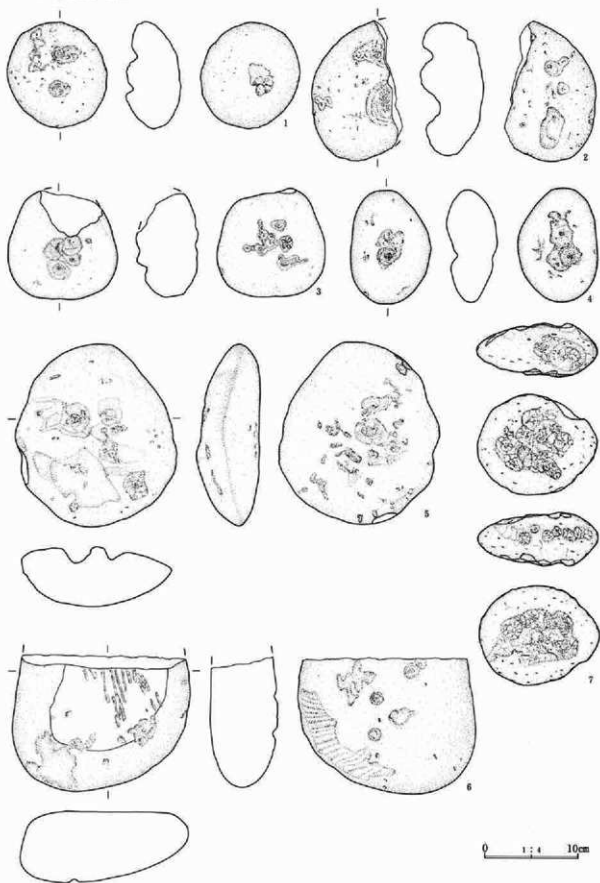
第154図 3・4区包含層出土石器(41)

6. 包含層出土遺物

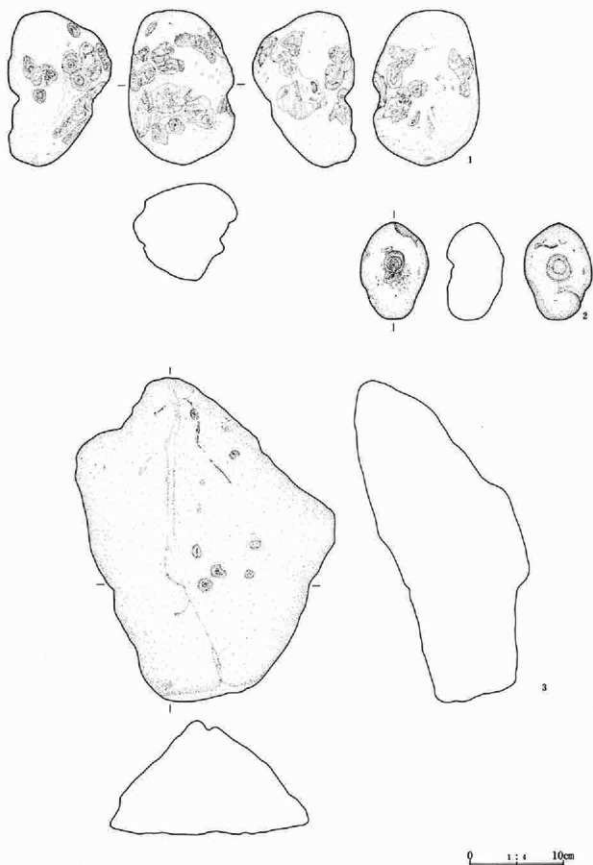


第155图 3·4区包含層出土石器(42)

II 縄文時代の調査

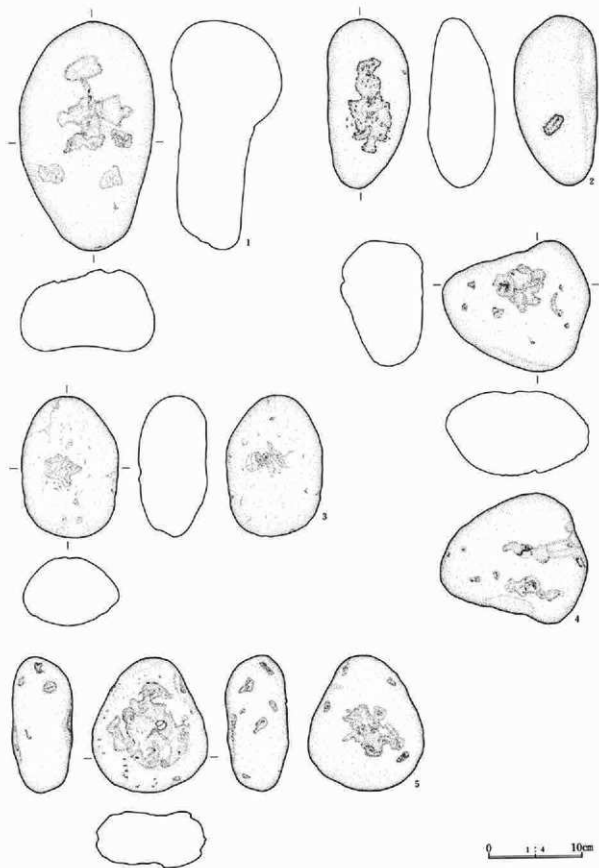


第156図 3・4区包含層出土石器(43)

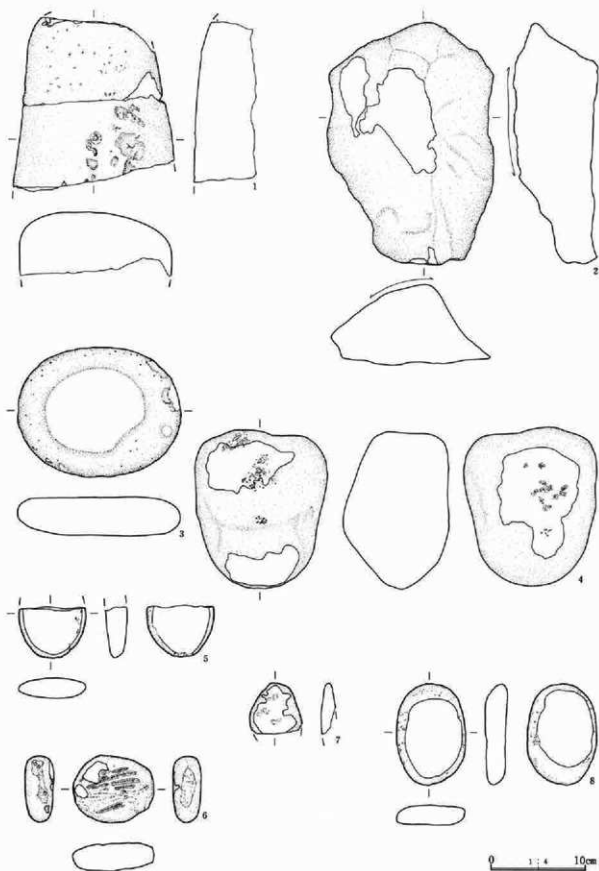


第157図 3・4区包含層出土石器(44)

II 縄文時代の調査

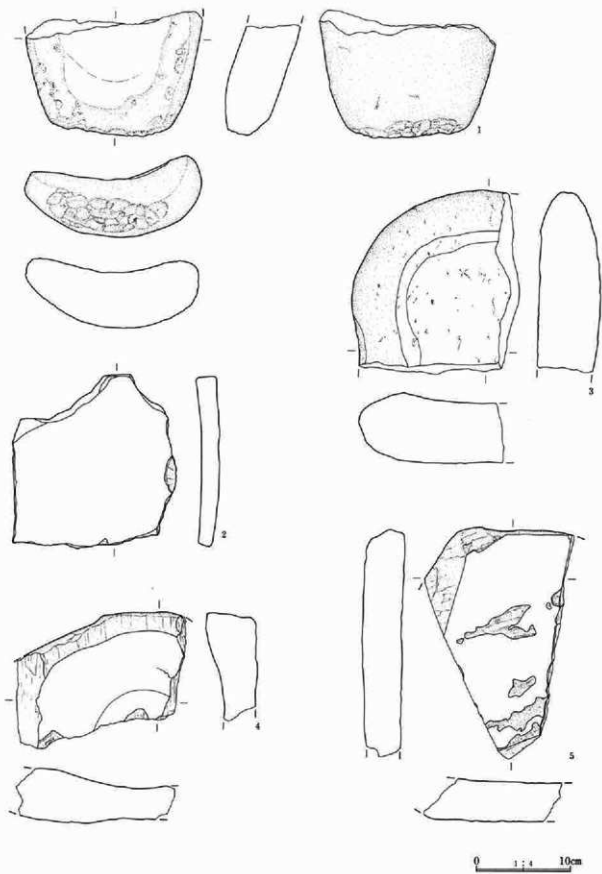


第158図 3・4区包含層出土石器(45)

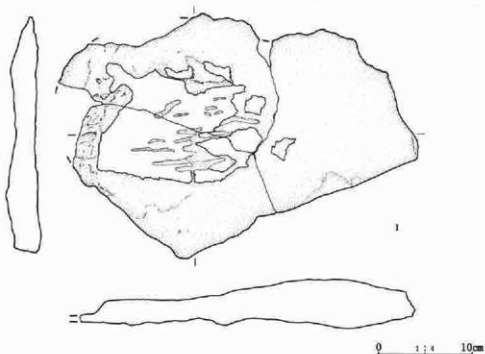


第159图 3・4区包含層出土石器(46)

II 縄文時代の調査



第160図 3・4区包含層出土石器(47)



第161図 3・4区包含層出土石器(48)

多孔石 (第156図5・6、第157図1・3)

4点を図示した。偏平な円礫を用いる例が圧倒的に多い。このほかには垂角礫を用いる例も若干だが出土している。この種の石材は遺跡周辺に位置する独立丘陵の基盤を形成しており、比較的容易に入手が可能で、集石などにも頻繁に利用している。図に示した通り、多孔石と見た孔と凹石に付く漏斗状の凹み部とは大きな差の指摘は難しい。

第157図5は偏平な礫を用い、表裏両面に孔を穿つ。6は上半部分を欠損するため不明だが、片側のみ孔を穿つ。第157図1は表裏両面の他、左右の側面にも孔を穿つ例、3は表面のみ孔を穿つ例である。

台石 (第158図、第159図1～4)

27点が出土している。多様な形状の礫を用いており、著しい敲打痕(第158図5)や摩耗痕(第159図3)の付く例が多い。重量も1,000gを越え、なかには4,000gに近い例も出土している。

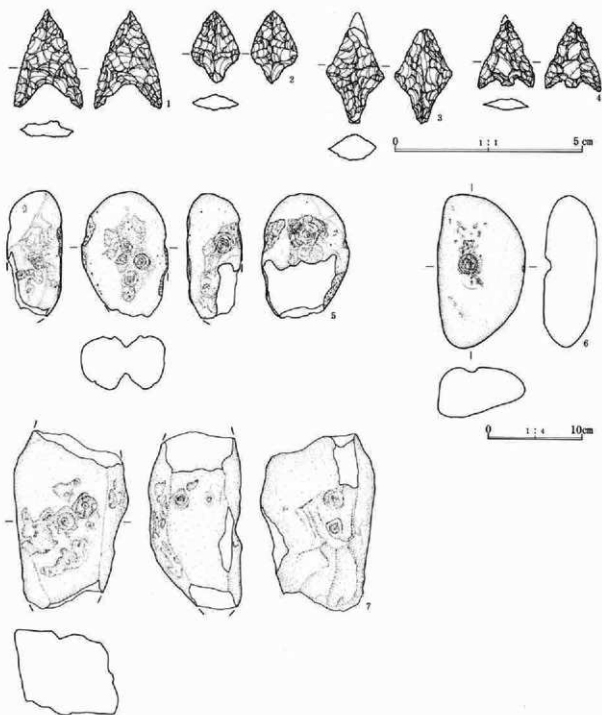
砥石 (第157図5～8)

5点が出土している。偏平な小形の円礫を用いる例が多い。表裏両面とも摩耗が著しく、このほかには礫の小口部分が摩耗する例(第157図7)や、条痕の著しい例(第157図6)が出土している。

石皿 (第160～161図)

27点が出土している。完形状態で出土している例は皆無で、総て破損状態で出土している。出土資料には明確な凹み部を持つ典型的な例(第160図1・3・4)の他、偏平礫を用いる例(第160図2・5、第161図1)の両者が見られ、便宜的な使用実態を示している。

II 縄文時代の調査



第162図 5区包含層出土石器類

(5) その他の出土遺物 (第163図、第2表)

ここでは、土器・石器とともに出土した装身具類、土製品、石製品、および粘土塊について報告する。

第163図1～6はいずれも葉巻石製の装身具である。1・2は珠状耳飾りで、2は欠損品であるが、欠損部は再加工されている。いずれも小形肉厚な作りで、平面形は直径2.5cmの円形を呈する。このような形態は、珠状耳飾りのなかでも最も古い形態と言われている。1は完形品で11.2g、2は2.7g。3は一端に大きな円孔が付く棒状の垂飾りで、断面形は楕円形を呈する。長さ4.7cmの完形品で、重さは9.2g。4・5は幅広の環状を呈する形態のもので、いずれも欠損品である。4は一端に切れ目が認められ、平面形は珠状耳飾りと類似する。5も同形態かもしれない。4は4.3g、5は3.1g。7は管玉状のもので、直径0.9cm、長さ2cmの完形品である。重量は2.0g。以上のうち、1～3・5・6は黄土色、4は黒色で、いずれも入念に研磨されており、器面は光沢をもつ。

同図7～9は土製の耳飾りである。7・9は滑車形のタイプで、9は両平坦面に平行沈線による三叉状構図の弧線文が施されている。7は直径2cm、厚さ1.6cmの完形品で、重さは8.1gである。9は直径3.5cm、厚さ3cmのはほぼ完形品で、弁左減45.2gである。8は裏面が凹面化した滑車形のタイプで、表面には中央の円形突起を中心に沈線による同心円が施される。直径3cm、厚さ2.5cmの完形品で、重さは11.2g。

同図10は、楕円形の扁平な円礫の長軸の一端に、弧状の沈線と直径1.2cmの円形の凹穴を施した岩板である。全形の約半分と端部の一部を欠損している。石室は粗粒安山岩で、重さは現状で80.9g。

同図11は土偶である。四肢と顔面等の一部を欠失するが、形態の特徴はほぼ把握できる。頭頂部には小突起、前頭部と後頭部には鉢巻状の隆帯が付き、両耳の位置には頭髪を表現した突起が認められる。顔の輪郭は突帯で表現し、目は沈線、口は円穴、耳は小円孔で表現している。胸には円形の乳房を貼り付け、下腹にも楕円形の粘土を貼付して妊娠を表現している。腰部は両側に強く張り出している。文様は背面の肩位に2本の沈線を横位に施し、その片側からのびる弧線に臀部付近で分かれる沈線を加えている。

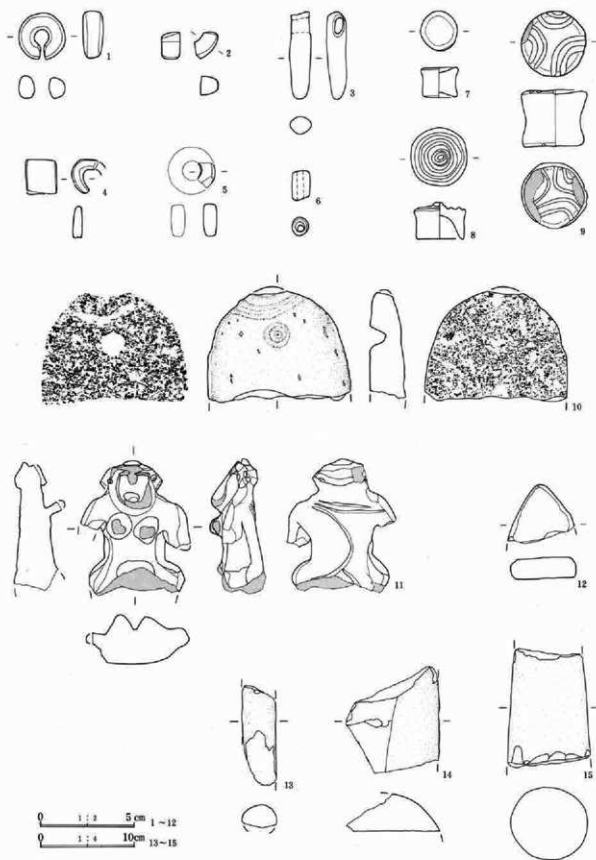
同図12は、土器片を木の葉形に調整した土製品で、3分の2を欠損している。

同図13～15は石棒で、いずれも欠損している。13は断面形が長軸3.6cmのやや楕円形を呈する細身のもので、重さは現状で125.2gである。14・15は大形の石棒で、15は断面形が直径8cmの円形を呈する。石材は13が流紋岩、14・15は石英安山岩(デイサイト)である。

以上の遺物はいずれも3・4区包含層出土であり、1～6は花積下層式土器と同一層から出土していることから、該期に含まれよう。7～15は中・後期包含層からの出土であるが、形態や文様等の特徴から、7・9・14・15は中期に、8・10～13は後期に各々該当するであろう。

粘土塊は総数178点出土している。P L 110～P L 112に総量と主なものを写真で示し、観察結果を第2表(189～190ページ)にまとめた。大半は無繊維の焼成された粘土塊であるが、粘土クズ状のもの、繊維を苦粘土クズ、小円礫に付着したものも少数あり、他に未焼成のものも2点出土している。出土範囲は3・4区微高地上に集中しており、出土層位および分布状況は花積下層式と一致している(付図17)。また、花積下層式期の住居・土坑からも出土していることから、いずれも該期に属すと考えられる。住居では3軒から12点が出土しているが、性状は包含層出土のものと同様変わらない。土坑では3基から35点出土しているが、粘土クズ状のもの、繊維を含む粘土クズ、小円礫に付着したものは全て1号土坑からの出土であり、これは特殊なケースとして、その他の土坑や住居および包含層出土の一群と分けておきたい。というのは、1号土坑出土遺物の大半は埋土の水洗によって得られたもので、粘土クズも1cm前後のものが多く、通常の発掘調査では得られない遺物であろう。つまり、住居や包含層に粘土クズはなかったと言いつてもいいのである。粘土

II 縄文時代の調査



第163図 3・4区包含層出土遺物

第2表 粘土観察表

A: 砂含まず B: 軽石少量含む C: 軽石・岩粒少量含む D: 軽石・岩粒多量に含む

No.	出土位置	分期	重量(g)	特徴・備考
1	3区・1住	A	14.8	欠損 指のナデ痕多数
2	4区・2住	A	28.7	指のナデ痕あり 欠損部分は軟質
3	4区・3住	B	64.3	剥落 幅3mmの工具痕 指ナデ痕あり (胎土分析資料No.23)
4	4区・4住	A	33.6	亀裂多数
5	4区・4住	A	54.3	欠損
6	4区・4住	A	91.5	欠損あり 植物茎圧痕 直径2mm穿孔 2カ所
7	4区・4住	A	2.3	欠損した小片
8	4区・4住	B	6.1	破損
9	4区・4住	B	5.5	軟質 厚さ17mm板状の破片
10	4区・4住	B	82.7	一部欠損 平坦面有 幅1mmの工具痕
11	4区・4住	D	49.5	破損 直径2・4・10mm竹管状の痕跡
12	4区・4住	D	15.2	破損 直径4mmの円孔あり 軟質

No.	出土位置	分期	重量(g)	特徴・備考
48	3区・点上	A	22.6	折り重ねたものの剥落片 亀裂有
49	3区・点上	A	19.2	破損 折り重ねた状態明確 亀裂あり No.76と接合
50	3区・点上	A	4.6	欠損した小片
51	3区・点上	A	26.7	幅10mmの竹管状痕跡・直径5mmの穿孔
52	3区・点上	A	18.7	折り重ねたものの剥落片
53	3区・点上	A	6.7	欠損した小片
54	3区・点上	A	16.5	欠損した小片
55	3区・点上	A	8.0	欠損した小片
56	3区・点上	A	7.1	欠損した小片
57	3区・点上	A	7.9	粘土牌状 直径10mm竹管状痕跡あり
58	3区・点上	A	2.0	粘土牌状
59	3区・点上	A	9.6	粘土牌状
60	3区・点上	A	4.9	折り重ねたものの剥落片
61	3区・点上	A	4.9	粘土牌状
62	3区・点上	A	8.6	板状破片 亀裂あり
63	3区・点上	A	6.1	直径26mmボタン状 片面平坦
64	3区・点上	A	24.5	破損 亀裂あり
65	3区・点上	A	22.7	破損 折り重ねた状態明確
66	3区・点上	A	18.1	幅15mm調整板・直径10mm竹管状痕跡 亀裂あり
67	3区・点上	A	8.0	欠損した小片 軽質
68	3区・点上	A	26.6	折り重ねた状態明確 欠損
69	3区・点上	A	89.5	割代板明確 指痕あり
70	3区・点上	A	32.4	欠損 直径10mm竹管状痕跡 亀裂多数
71	3区・点上	A	7.0	欠損 指痕あり 軽質
72	3区・点上	A	70.9	工具痕多数 直径10mmの竹管状痕跡
73	3区・点上	A	30.5	折り重ねた状態明確 幅10mm工具痕
74	3区・点上	A	37.1	直径10mm竹管状痕跡ほか工具痕多数
75	3区・点上	A	2.4	折り重ねたものの剥落片
76	3区・点上	A	17.4	折り重ねたものの剥落片 No.49と接合
77	3区・点上	A	18.2	粘土牌状 (胎土分析資料No.22)
78	3区・点上	A	21.1	欠損した小片 亀裂多数
79	3区・点上	A	61.1	平坦面あり
80	3区・点上	A	17.1	欠損した小片 表面細かなひび割れ有
81	3区・点上	A	23.5	破損 亀裂多数 表面ナデ痕あり
82	3区・点上	A	13.2	粘土牌状 一部にターナル状の付着物
83	3区・点上	A	28.2	折り重ねた状態明確 No.84と接合
84	3区・点上	A	9.5	欠損した小片 No.83と接合
85	3区・点上	A	15.9	欠損 亀裂あり
86	3区・点上	A	22.5	欠損 工具痕あり
87	3区・点上	A	38.0	折り重ねた状態明確 直径10mmの竹管状痕跡 亀裂あり
88	3区・点上	A	7.2	欠損した小片 指のナデ痕あり
89	3区・点上	A	7.8	ナデ痕あり
90	3区・点上	A	11.5	粘土牌状 工具痕多数
91	3区・点上	A	6.2	粘土牌状 軽質
92	3区	A	105.9	欠損 工具痕多数 亀裂あり
93	3区・点上	A	22.8	棒状の欠損品 表面に調整痕
94	3区	A	6.0	欠損した小片 軽質
95	3区	A	4.1	欠損した小片 軽質

塊は胎土の特徴からA~Dの4タイプに分類でき、このうちAタイプが主体を占める。いずれも構成は良好で色調は黄褐色、灰褐色、黒褐色、黒色などがある。これらの特徴は花貫下層式土器の胎土と近似しており、胎土分析の結果もそれを指示している。形状は様々であるが、欠損あるいは剥落痕状の痕跡をもつものがほとんどで、本来の形状は示していないとも考えられる。原形面には指や工具状の痕跡、植物の茎状の痕跡を

II 縄文時代の調査

No.	出土位置	分類	重量(g)	特徴・備考
96	3区	A	22.7	折り重ねたものの刺落片
97	3区・点A	A	10.3	欠損した小片
98	3区・点A	A	3.9	折り重ねたものの刺落片
99	3区・点A	A	4.3	折り重ねたものの刺落片
100	4区・点A	A	19.4	指のナゲ痕あり 亀裂あり
101	4区・点A	A	6.8	軟質 欠損
102	4区・点A	A	20.2	欠損
103	4区・点A	A	30.0	表面の一部熱で赤化 亀裂あり
104	4区・点A	A	28.2	
105	4区	A	17.4	
106	4区・点A	A	18.1	直径8mm棒状痕あり 亀裂あり
107	4区・点A	A	13.1	指のナゲ痕あり
108	4区・点A	A	6.0	
109	4区・点A	A	33.2	欠損 指のナゲ痕あり 亀裂あり
110	4区・点A	A	9.6	欠損 糸痕状の擦痕あり
111	4区・点A	A	18.3	欠損
112	4区	A	18.9	欠損 指のナゲ痕あり 亀裂あり
113	4区・点A	A	30.5	亀裂あり
114	4区・点A	A	30.2	欠損 亀裂あり
115	4区・点A	A	3.4	折り重ねたものの刺落片
116	4区・点A	A	2.4	刺落片
117	4区・点A	A	16.8	欠損 糸痕状の擦痕あり
118	4区・点A	A	1.6	軟質
119	4区・点A	A	42.8	亀裂多数
120	4区・点A	A	23.0	直径14mm竹管状の痕跡
121	4区・点A	A	55.3	欠損あり 植物茎圧痕 亀裂あり
122	4区・点A	A	16.3	亀裂あり
123	4区・点A	A	83.0	刺落 亀裂あり
124	4区・点A	A	6.3	欠損した小片
125	4区・点A	A	46.3	指のナゲ痕あり
126	4区・点A	A	51.7	軟質 破損
127	4区・点A	A	78.5	表面はほぼ平らに調整
128	4区・点A	A	13.1	欠損 亀裂あり
129	4区・点A	A	37.1	欠損 亀裂あり
130	4区	A	9.0	欠損した小片
131	4区・点A	A	110.6	未焼成 破損 亀裂あり
132	4区・点A	A	15.5	未焼成 破損 亀裂あり
133	4区	A	2.5	欠損した小片
134	4区・点A	A	9.2	欠損 指のナゲ痕あり 亀裂あり
135	4区・点A	A	3.4	欠損した小片
136	4区・点A	A	2.2	欠損した小片 軽質
137	4区	A	2.7	欠損した小片
138	4区・点A	A	16.3	直径10mm竹管状の痕跡有 亀裂有
139	4区・点A	A	1.3	刺落片

No.	出土位置	分類	重量(g)	特徴・備考
140	4区・点A	A	6.9	欠損
141	4区・点A	A	4.7	欠損した小片
142	4区・点A	A	4.4	欠損した小片 幅5mm工具板あり
143	5区	A	13.3	刺落 表面あばた状
144	3区・点B	B	19.8	亀裂多数
145	3区・点B	B	12.6	軽質 亀裂あり
146	3区・点B	B	8.4	粘土質状
147	3区・点B	B	6.1	欠損した小片 表面細かなひび割れ
148	3区・点B	B	31.9	直径10mm竹管状痕跡 幅2mm工具板
149	3区・点B	B	64.9	破損 工具板多数
150	3区・点B	B	37.0	幅15mmの調整痕あり 亀裂あり
151	3区・点B	B	4.2	欠損した小片 軽質
152	3区・点B	B	215.5	表面凹凸 亀裂あり
153	3区・点B	B	34.6	軽質
154	4区・点B	B	20.1	破損 硬質 亀裂あり
155	4区・点B	B	53.7	表面あばた状 亀裂あり
156	4区・点B	B	32.5	欠損 指のナゲ痕あり 亀裂あり
157	4区・点B	B	54.3	破損 表面に指痕痕多数 破損部は軟質 亀裂あり
158	4区	B	34.8	破損 表面に面収り状の工具板あり 欠損部は軟質
159	4区・点B	B	8.3	欠損 幅10mmの板状 表面ナゲ 植物茎圧痕あり
160	3区・点C	C	37.7	幅20mm板状 表面調整あり 亀裂多数
161	3区・点C	C	127.0	一部欠損 表面凹凸 亀裂あり
162	3区	C	34.1	破損 平面面あり 直径10mm竹管状痕跡数カ所
163	4区・点C	C	2.8	欠損した小片 幅7mm工具板あり
164	3区・点D	D	88.9	破損 指痕明瞭
165	3区・点D	D	29.7	指痕・工具板あり
166	3区・点D	D	21.7	指痕数カ所
167	4区・点D	D	22.8	軟質 指痕あり 破損
168	4区・点D	D	4.6	破損 軟質
169	4区・点D	D	1.1	軟質 破損
170	4区・点D	D	99.5	新時代 圧痕あり 破損
171	4区・点D	D	63.6	破損
172	4区・点D	D	70.0	チャート多く含む 硬質
173	4区・点D	D	38.5	破損 指痕あり
174	4区・点D	D	41.4	破損
175	4区・点D	D	138.5	チャート片含む 破損 直径10mm竹管状の痕跡
176	4区・点D	D	235.1	破損 軟質 植物茎圧痕あり
177	4区・点D	D	11.4	破損 植物茎圧痕
178	4区	D	33.0	破損 直径10mm竹管状の痕跡

とどめるものも多く、折り重ねたようなものもある。また、網代状の圧痕が付くものも認められた(170)。胎土のタイプによる形状あるいは痕跡の違いはほとんどないが、C・Dタイプは大形のものが目につく。最も大きなものはDタイプの235.1gであった(176)。また、いずれのタイプも焼熱によると思われる細かな亀裂の認められるものが多い。用途については、土器の焼成に伴うもの、集石土坑の使用に伴うものの2案が考えられるが、集石土坑からの出土は認められなかった。近年、この種の遺物は出土例が増加しつつあり、それらも含めて再考を願いたい。なお、未焼成粘土塊は4区包含層から2点(131・132)出土しており、このうち131はほぼ原形をとどめている。

7. 包含層の遺物分布 (付図1～21)

付図1の通り、縄文時代の遺物分布は東西の水田部分を除く全域に及ぶ。包含層は東西の両端を水田で大きく欠き、更には住居や古墳その他の遺構で一部を逸失(付図1、下段の図を参照)している。そのため、遺物分布の全容は不明だが、概ね遺物は西側に濃く東側に薄く分布している。分布状況から見て両者とも更に北へ分布が広がる様相を呈している。

出土資料は多時期に互り前期から晩期に及ぶ。量的にも極めて多く、土器6064点・石器5786点の他、竃3018点(このほか、集石に伴う礫が1316点)が出土している。各々の時期の土器は微妙に地点を異に分布しており、埋没谷を挟む西側の台地には前期から晩期の土器が、東側の台地には前期後半以後の土器が分布する傾向を示している。出土資料は明瞭な層別的出土は示さず混在出土する。が、河川に臨む遺跡の立地条件にも恵まれ土壌の供給も著しく、一部の地点ではより上層にはより新しい時期の土器が出土する(付図6を参照)傾向も指摘され、前期初頭(花積下層段階)の土器がⅡ層上半に、中期・後期の土器がⅩ層下半からⅪ層に出土する。

水性堆積を示すシルト層と粘質土の互層や、2枚の氾濫水田の検出が示す通り、遺跡には河川氾濫の痕跡が著しい。さきにも述べた埋没谷(付図21の柱状図Dの地点)は遺跡を南北に縦断している。基盤の礫層は一部を除き不明だが、埋没谷に限り二次堆積のローム(Ⅲ層)や砂壤土(Ⅳ層)が堆積しており、上層のⅩ層～Ⅺ層が中期・後期段階の遺物を包含することから見て、谷の埋没過程と遺物の分布は密接に関係する、と言える。

(1) 土器の分布

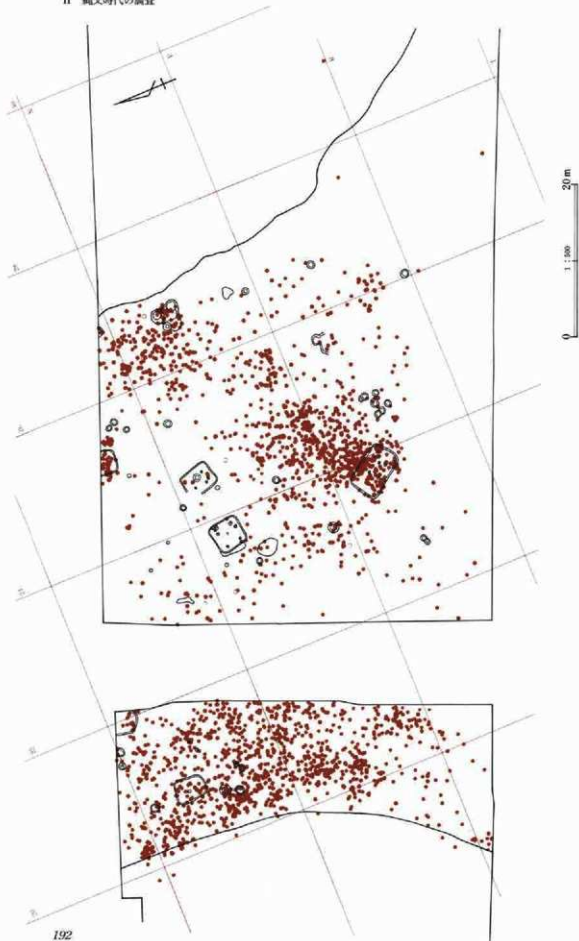
型式判定の可能な資料は6131点に上る。量的にも一様ではなく分布状況も様々だが、前期から後期・晩期に至る各種型式の土器(第3表)が出土している。以下に接合関係に留意して各々の型式の土器分布の概要を記す。なお、ここでは便宜的に埋没谷より東の微高地を東側台地、埋没谷より西の微高地を西側台地と呼び、記載する。

前期初頭 花積下層土器が出土している。主たる分布域は西側の台地に集中しており、東側台地の分布は極めて薄く、分布(付図2)は一様ではない。西側の低地に接する3区では一部を水田開削に伴い包含層を欠く可能性も否定できないわけだが、概ね台地の縁辺に濃く分布する傾向が強い。一方、4区ではN-24やL-26の周辺に集中分布が見られ、これより外れる周辺の分布は薄い。第164図には住居や土坑・集石など各種遺構確認以前の土器分布と遺構の位置関係を示した。図からみる限り遺構と土器分布の関係は一様ではなく、遺構上面に多量の土器が分布する例と分布の希薄な例の両者からなる。付図2に示す通り、接合資料は各々の集中地点に分布するのではなく、地点間に互る接合関係を有している。

前期前半 ニツ木式土器が出土している。西側の台地に限り分布しており、分布範囲は狭く概ね台地の中央より西側(J・K・L-22G・23G・24G)に集中分布する。このほか、東西の台地縁辺にも少量分布している。接合資料は集中地点だけではなく、台地縁辺の資料とも接合している(付図3を参照)。

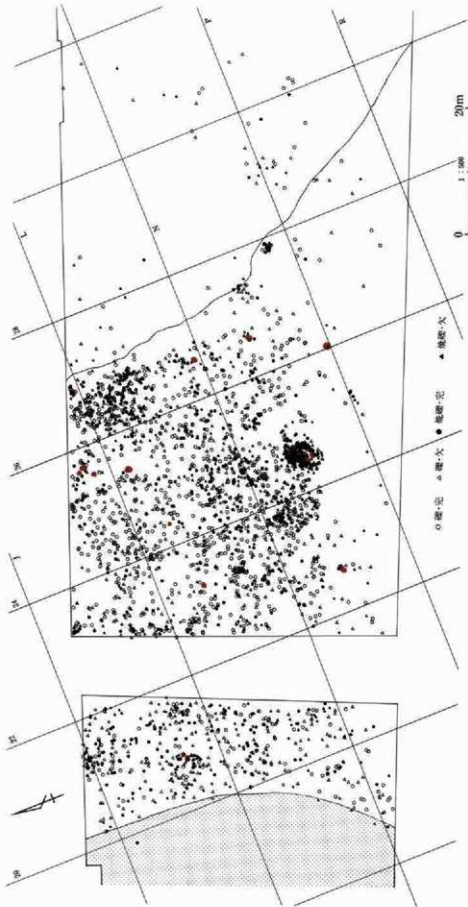
前期後半 諸磯a・b式土器が出土している。諸磯a式土器は量的には少なく、西側の台地中央(K-21G・L-23G)に散漫な状態で分布している。6点が接合しており、出土資料の10点は総て同一個体の可能性が強い。一方、諸磯b式土器は東側の台地に2ヶ所(O-25G、P-34G・35G)、埋没谷に1ヶ所(Q-30G)に分布するほか、西側の台地にも分布している。東側の台地や埋没谷に比べ、西側の台地の分布は粗い。

II 縄文時代の調査



第164図 花積下層式土器の分布と遺構

7. 包含層の遺物分布



第165図 土器・土器の分布と集石土坑

接合資料は東側台地では地点間の接合例が存在するほか、埋没谷と西側の台地に出土する資料の接合例も見られ、やや乱れた感が強い(付図3を参照)。

中期 前半段階の土器は西側の台地のみ分布している。五領ケ台式土器は量的にも少なく集中性に欠ける。主たる分布域は台地西側の縁辺部分だが、東側縁辺にも1点が分布している。勝板式土器は台地の中央付近が主たる分布域で、特にLラインを前後する付近に多く分布する。後半段階の土器は東側台地にも分布が見られ、型式別に見た分布域は大きく異なる。加曾利E1式土器は西側の台地中央付近に散漫に分布する。一方、加曾利E2～E4式土器は集中分布の傾向が著しく、E2式土器は西側台地のK-22Gや東側台地のO-35Gに、E3式土器は東側台地の34ライン・36ラインを前後する付近に、E4式土器は西側台地のL-25Gや東側台地のN-32Gに集中分布する。なお、接合資料は台地の内部で完結しており、東西の台地を跨ぐ接合資料は見られない(付図4を参照)。

後・晩期 称名寺I・II、堀之内1・2、加曾利B式以降の土器が出土している。称名寺I式土器は西側の台地に分布している。僅か2点の出土でもあり、これ以上言及できない。称名寺II式土器は西側の台地に多く分布している。概ね台地中央より東に分布する傾向が見られ、集中性に欠ける。堀之内1式土器は東西の台地とも分布している。全般に分布は散漫だが、西側台地の中央付近と東側縁辺に密に分布している。接合資料は集中分布する地点に多い一方、東西の台地を跨ぐ接合資料・1例を確認している。堀之内2式土器は西側の台地に多く分布するほか、以前まで土器分布の見られない埋没谷にも集中分布している。西側の台地では分布は散漫だが、埋没谷の分布域は集中分布する傾向も指摘されよう。接合資料は集中分布する地点で完結する例が多い一方で、西側台地と埋没谷を跨ぐ接合資料・1例を確認している。加曾利B式以降の土器は全域に分布している。西側台地の中央では概して分布は散漫だが、西側台地の縁辺や東側の台地では集中分布する傾向が著しい。同様な状態は埋没谷の分布域にも当て嵌まる。

(2) 礫の分布

ここでは、使用痕の見られない礫の分布を取り上げる。付図7に示す通り、礫の分布は西側の台地に偏り、埋没谷の礫分布は散在的で、量的にも極めて少ない。また、東側の台地には殆ど分布は見られないのであり、以下には西側台地の礫の分布状況を主に取り上げ、分布の在り方を記していきたい。礫の形状その他の属性は集石を構成する礫と何ら変わる点は見られない。

第3表 出土土器一覧

	3区	4区 西半	小計	4区 東半	小計 3・4区	5区	合計
総数	1787	2682	4469	719	5188	943	6131
花根下層	1216	1701	2917	59	2976	11	2987
二ツ木 関山	106 4	25	131 4	131 1	131 5		131 5
諸磯 a	1	9	10		10		10
諸磯 b	69	11	80	31	111	43	154
五領ケ台	4	1	5		5		5
勝板	2	44	46	1	47		47
加曾利E1	1	6	7		7		7
加曾利E2	17		17		17	6	23
加曾利E3	44	132	176	9	185	695	880
加曾利E4	6	11	17	6	23	4	27
称名寺I		2	2		2		2
称名寺II	3	15	18	130	148	2	150
堀之内1	14	171	185	115	300	43	343
堀之内2	35	65	100	103	203		203
加曾利B	231	457	688	263	951	139	1090
粘土塊	34	32	66	1	67		67

※加曾利B式以降の土器を、全て加曾利B式に含めた。

西側の台地では礫の分布は概して全域に及ぶ。分布には粗密が見られ、部分的に集中性の高い分布状況を呈している。先に述べた通り礫は基本的に集石礫と何ら変わらないわけだが、第165図に示す通り礫の密集分布と集石の位置関係は全く一致するものではない。現状で言えば礫はNラインを前後する台地中央付近や台地の東側縁辺に密に分布する。このほかにも礫は地点的に密な分布域を形成するようだが、複数土器型式の存在を考えるなら以下の理由で即断は難しい。なぜなら、付図8に示す通り垂直方向で見た礫の出土状態は複数土器型式の混在する土器の出土状態（付図6を参照）と概ね一致しており、長期に亘る累積的な姿を示している可能性が強く、特定型式（前期初頭段階の住居・集石）に伴う礫の分離は極めて難しいためもある。一方、集石は台地の中央より東側、特に4号住居の周辺部（K-26G）と5号住居の周辺（N・O-25G）に集中しており、配石と称した礫の集中部（一部には単に掘り込み不明の集石と考えるべき例も存在する）も台地中央の2号住居や3号住居の周辺に集中している。このほかにも住居や土坑の覆土には多量の礫が出土している。既に述べた通り、現状では特定型式に伴う礫の分離は極めて難しいわけだが、それでも前期初頭の土器の垂直分布に似た出土状態を示す礫の大部分は集石に伴う可能性が極めて強く無視できない存在でもある。各種遺構と礫の分布は一律ではなく、集石が密集分布する4号住居の周辺部は包含層の礫分布と一致する一方で、同じ集石の密集分布する5号住居の周辺部は包含層の礫分布は薄く、両者の関係は大きく異なる。また、住居を例に採れば、上面より多量の礫が出土する例（1号住・4号住）と礫の乏しい例（2号住）も見られ、遺跡形成の複雑な過程を如実に示している。概ね、礫は約40%が焼成を受けており、うち約60%が破損している。

(3) 石器の分布

石器の分布傾向は石核・剝片・碎片の分布を示した付図12に見て取れる。分布は西側の台地に偏り、埋没谷や東側の台地では概して薄い。付図12に示す通り、石器の製作に伴い生じる剝片や碎片の分布には明確な集中分布の状態が見られ、特に西側の台地中央付近や台地東側縁辺に濃く分布している。この地点は前項で述べた礫の密集分布する地点でもあり、この点は場の機能を考える上で極めて重要と思える。ここでは剝片石器と礫石器に分け、分布状況を記していきたい。

剝片石器 ここでは石鏃や打製石斧など器種名称の付く資料を取り上げる。付図9に示す通り、各々は台地中央付近と台地東側縁辺の2ヶ所に集中分布する一方で、台地全域に分布する傾向も指摘され、付図12に示す石器製作に伴い生じる資料の分布傾向と何ら変わらない。石鏃や打製石斧にはある程度時期判定の可能な特徴的形態を示す資料が含まれ、分布の解釈にヒントを与え得る可能性を秘めている。ここでは石鏃や打製石斧に限り類型別に分布の在り方を記し、その他の資料は一括して分布状態を把握していきたい。本文では、石鏃をA類～H類に、打製石斧をA類～E類に分けている。

石鏃A・Bは西側台地の全域に分布する。付図12の2ヶ所の集中部に特に集中するわけではなく、他の地点にも分布している。同様に石鏃C～Fも散漫に分布しており、2ヶ所の集中部に関係なく分布する。一方、石鏃G・Hは2ヶ所の集中部や周辺域に分布する傾向を若干が見られよう。一般的に茎を有する石鏃Gは後期以後に多く、2ヶ所の集中部は石鏃の未製品の分布と強く結び付き、と判断されよう。

打製石斧A・Bは西側台地の全域に分布する。付図12の2ヶ所の集中部に特に集中するわけではなく、他の地点にも分布している。打製石斧Aは西側の台地に分布が限られ、一方打製石斧Bは東側の台地にも分布しており、この点で大きく異なる。打製石斧Cは西側台地・中央より東側に、打製石斧Dは西側台地・中央より西側に散漫に分布しており、2ヶ所の集中部に関係なく分布している。また、打製石斧Eは西側の台地

II 縄文時代の調査

全域に散漫に分布するほか、1点のみ東側の台地にも分布している。なお、未製品は西側の台地縁辺に分布する傾向が指摘されよう。

削器の類は、基本的に付図12に示す石核や剥片、碎片の分布と何ら変わらないのであり、2ヶ所の集中部には完形品も欠損品も混在出土している。

礫石器 西側の台地に多く分布しており、東側の台地には少ない。西側の台地の分布も散漫で、特に礫石器の多い地点は見られない。が、これまでみてきた通り、土器や石器の分布には全域に分布する一方で、ある地点に集中分布する傾向も示していた。ここでは、以下に器種別に見た礫石器の分布の在り方を記す。

磨石や凹石は、概ね全域に散漫な状態で分布するほか、先にも述べた石器製作に伴い生じる石核その他の資料が集中する台地中央付近と台地東側縁辺の2ヶ所にはより多く集中分布する傾向を示している。一方、石皿や台石は、台地中央付近だけではなく台地西側の縁辺にも多く分布している。石皿や台石の分布と磨石や凹石の分布は全く一致しているわけではなく、前者の分布は集中地点以外の地点には殆ど分布が見られない点で特徴的で、石皿に限れば出土資料は全て欠損例が占めている。礫石器の示す分布の在り方は磨石・凹石と石皿・台石では若干相違しており、後者は前者に比べ集中性が高い分布の在り方を示している(付図10)。

(4) 石材の分布

出土資料を構成する石材は約30種(剥片石器のみ)に及ぶ。量的には約90%を3種類の石材が占め、他の石材の使用頻度は低い。以下に石材別に見た各種石材の分布傾向を記す。

黒曜石 西側の台地に分布する。分布には粗密が見られ、台地中央付近と台地東側縁辺の2ヶ所に集中分布するほか、何地点か局所的に集中する地点(K-25G、N-28G)が存在している。主な器種と石器の製作段階に生じる資料の分布には概ね一致する傾向が指摘されよう(付図13)。

チャート 西側の台地に分布する。分布状況は概ね黒曜石の分布域に一致しており、何地点か局所的に集中分布する在り方も黒曜石の在り方に一致している。が、台地西側の縁辺にもより多く分布する点で、黒曜石の分布域とは異なる。主な器種と製作段階に生じる資料は概ね一致する(付図14)。

黒色頁岩 西側の台地に分布するほか、東側の台地にも少量分布する。分布には粗密が見られ、台地の中央付近と台地東側の縁辺に集中分布する。また、台地西側縁辺の分布も濃く、特に台地西側縁辺の北側(J-22G)に局所的な集中部が存在している。概して特定器種の分布は石器の製作に伴い生じる資料の分布とは一致せず、両者の関係は明瞭ではない(付図15)。

その他の石材 概ね西側の台地に多く分布しており、東側の台地に分布する例は少ない。概して、集中分布することなく分布しており、散漫な分布状況を呈する。このうち、変質玄武岩は東側の台地(P-37G)に集中分布しており、特異な在り方を示している(付図16・17)。

(5) 粘土塊の分布

西側の台地に分布している。分布状態は全般に散漫だが、台地中央付近や台地東側縁辺に集中するほか、台地西側の縁辺にも多く分布している。粘土塊は住居や土坑覆土(第2表)にも出土しており、前期初頭の住居・構築段階に伴う可能性が高く、胎土分析の結果も前期初頭段階の土器胎土に近い特徴を示している。第2表に示す通り、粘土塊は胎土も微妙に異なり、円孔を穿つ例や指ナド・工具痕(刺突痕を含む)その他の整形痕も見られ、形状も折り重ねたもの・塊状・瘤状と多様性に富む。また、粘土塊の大部分は焼成を受けており、小片で出土する例が圧倒的に多く、パン状の表面形状を残す例も多い等々の特徴を有している。

粘土塊の具体的な用途は不明だが、粘土塊は前期初頭の遺構の周辺、或は、該期土器の密集分布する地点に出土する傾向は指摘されよう。

(6) 垂直分布からみた遺物の出土状態

既に述べた通り、早期から晩期に及ぶ複数型式の土器は量的にも差が著しく、微妙に分布域を違えて分布している。整理作業では一部だが遺物の垂直分布（付図6・7、ここでは横軸と縦軸の縮尺を変えており、縦軸は1/40に縮尺した）を検討しており、以下に若干傾向を述べていきたい。遺跡を東西に横断する断面分布A・Bの土器分布（付図6）が示す通り、まずより上層にはより新しい土器が出土すること、概ね中期や後期の土器はレベル的に見て同一層位から出土すること、が指摘されよう。更に付け加えて言えば、断面分布A・Bには中期や後期の土器が落ち込む状態が見られ、この地点にはこの段階まで凹地が残存した、と判断されよう。以上の状態は礫の分布状態（付図7）にも当て嵌まり、部分的に遺物の薄い層を挟み上下に分離可能とも思える状態を示している。以上は、河川の影響を受け易い遺跡の立地条件が深く関与している可能性を示している。先にも述べた通り検討は一部に限られ、僅か数ヶ所の断面分布のみから断定するわけにはいかない。実際、各々の土器型式は明瞭な層位的出土は示さず混在出土しており、各種型式に伴う石器の分離は極めて難しい。とはいえ、垂直分布の示す先の状態は、分析の対象を全域に広げ更には接合状況や母岩分類を踏まえれば、主たる住居や土坑の構築時期でもある前期初頭段階の石器分布の実態にもより近付ける可能性を残している。ここでは、4号住を例に垂直方向で見た住居、及び、周辺遺物の出土状態の概要を以下に記す。

住居周辺の各種型式の土器分布は、既に述べた通り、ここでもより上層にはより新しい段階の土器が出土する傾向（付図18）を示している。遺物は攪拌状態で出土する一方、前期初頭の土器は下層に多く出土しており、生活面・旧地形を示唆している。住居出土の遺物は前期初頭の土器が床面よりやや浮いた状態で多出するほか、周辺より流れ込んだ状態で出土している。また、住居上面では土器の出土が極端に減少している。住居出土の土器には28例に及ぶ接合資料を確認している。接合資料は大部分が住居外に及び、3区（台地・西側縁辺）出土の土器と接合するもの4例、4区（台地の中央より東側）出土の土器と接合するもの15例が存在するほか、両地点に互る接合資料も2例が存在している。接合資料は広い範囲に分布しているのであり、遺跡の複雑な形成過程を示している。接合作業や母岩分類は充分ではなく、断定できない点も多々あり推測の域を出ないわけだが、同様な傾向は礫や石器の示す垂直分布にも指摘されよう。特に、住居上面では遺物の出土が極めて減少していること、住居周辺の礫の出土状態（付図19）は下層に多く出土していること、は前期初頭の土器分布に類似している点でもあり、前期初頭段階の遺跡復元に有利な材料と言える。が、石器の垂直分布（付図20）には単に分布からだけでは判断できないほど複雑な様相を呈している。微細遺物も多く、より激しく動いている。

(7) 前期初頭段階の遺物分布

該期遺物分布の詳細は不明だが、各種遺構出土の遺物の在り方を踏まえ、以下に分布の概要を記す。なお、ここでは前期土器の集中する台地の西側縁辺を集中地点No1、台地の中央付近を集中地点No2、台地の東側縁辺の集中地点No3と便宜的に呼ぶ。

これまで述べた通り、各種遺構には使用状態や残置状態を示す資料の出土は極めて少ない。土器に関して言えば、大部分が覆土中に出土しており、住居内外で接合（第164図、付図2を併せて参照されたい）する資

料も多い。土器に限らず各種遺物は住居覆土に混在出土する傾向が強く、同様な状態は土坑にも著しい。また、住居覆土より出土する石鏃や打製石斧に例を採れば特定形態に偏る状況が見られ、個別資料では時期判定の難しい石器にも当該石器と判断可能な状況さえ示している。以上の通り、遺構出土の遺物には「一括廃棄」の性格と、概ね該期資料に位置づけ可能と判断されよう。

一方、前期初頭の遺物に限定した礫や石器分布の提示は厳密な意味では難しい。該期に限定した礫の分布は不明だが集石に伴う例と単に包含層を形成する例に大きく分かれよう。両者とも礫の「一括廃棄」と見る想定も可能な一方、集石には上面より礫が出土する例と出土が見られない例の両者が見られ、使用状況の差を反映する可能性も残り、複雑な様相を呈している。また、同様に該期石器の分布も不明だが(4)の項で述べた通り、黒曜石の集中部は土器集中地点No.2やNo.3に重なる。これ以外にも局所的に集中部が見られ、上記地点では使用可能な石鏃の他にも、未製品を含む石鏃の製作に伴い生じる多量の剥片や破片が出土しており、「一括廃棄」を示す可能性が高い。石鏃を例に採れば、住居や土坑出土の石鏃はA類とB類に限られ、県内にはない黒曜石を量的に確保した上で石鏃を製作していること、同じ黒曜石を用いる石鏃でも他の類型の石鏃は完成状態を呈することなど、現状では黒曜石は前期初頭の集落に伴う可能性が高い。石材の入手や適応器種の広さ・石材の性状を考えた場合には前期初頭段階以外の資料も確実に含まれ、前期初頭の所産とはいえないわけだが、チャートや黒色頁岩には黒曜石と同じ地点に局所的な集中部が見られ、一部資料を除き該期資料に位置づく可能性が高い。言わば状況証拠だが該期石器の分布を考える上でも黒曜石は重要な鍵を握る石材ともいえよう。

個別には時期判定が難しいとはいえ、基本的に黒曜石その他の一部石材は前期初頭の土器分布に一致しており、単なる偶然とは思われない。そこにはある程度「場」を意識した廃棄行為も想定され、更に言えば、より広い分布域と局所的な集中部（未製品を含む多量の剥片や破片を出土した土坑を含む）では廃棄の長ささえ想定されよう。出土資料は使用不能なものだけではなく未だ使用可能な資料も多く、また、遺構の有無を問わず各種遺物が混在することから、ここでは「一括廃棄」と扱った。母岩分類が難しいため、石材単位で見た記述に終わり、また、完形状態で以て機能する土器が地点を違えて出土する理由など不明な点も多い。ここでは極めて単純に「一括廃棄」と扱えたわけだが、微視的分析を欠き当然存在した石器製作の場も明確ではない。概して包含層は雑に扱われがちだが、そこには精神的・呪術的な側面の他に石材の入手形態など様々な情報を秘めている。即ち、石器製作の在り方の分析を通じ、石材入手など物資の流通に係わる部分で集落に差を見出し得る可能性も否定できないのである。実験的成果と対話するためにも、単に分布の状態を提示するだけでなく、検討に耐え得るデータの提示を要している。

第4表 集石土坑石材別個数

集石	総数	完	欠	焼成	風頁	頁岩	粗安	溶凝	石斑	チャート	砂岩	ホルン	ひん岩	その他の石材	備考
1	85	57	28	81	1		61	9	3	8	1	2			石皿片1 凹石3
2	54	54	0	53			50	3	1						
3	32	4	28	24	1		8	12	9	1			1		打製石片1
4	139	23	116	125	1	2	47	62	13	3	7	3	1		石器1 割片2 台石1
5	124	6	118	92			34	52	13	3	20	2			
6	30	2	28	20			6	11		2	4	2	3	アブライト1 角安1	
7	145	28	117	120			61	34	12	15	13	9		観石1	
8	55	3	52	35			22	11	7	3	11	1			
9	24	3	21	—			4	5	1		13	1			
10	38	7	23	28			9	8	3	5	4	1			
11	25	1	24	20		1	5	7	4	1	3	4			
12	71	30	41	64			53	9		8		1			
13	29	23	6	23			25	1		2	1				
14	37	15	22	12	11	1	23	1						流紋岩1	
15	22	7	15	18			9	5	2		6				
16	131	88	43	118			100	14	4	3	2	7		観石1	凹石2 割片1
17	68	47	21	53			53	10	1	1	2	1			
18	54	23	31	34			36	13	1		3	1			
19	13	10	3	9			11	1			1				
20	61	48	13	45	2		55			1			1	黒安1 かこう岩1	割片3
21	25	22	3	23		1	21	1	1			1			
22	7	7	0	7			7								
合計	1261	508	753	996	16	5	700	269	75	56	91	36	6	7	

II 縄文時代の調査

第5表 集石土坑石材別重量

単位：g

集石	総重量	黒頁	頁岩	粗安	滑瀧	石斑	チャート	砂岩	ホルン	ひん岩	その他の石材
1	31,400	260		24,920	3,950	810	900	320	240		
2	33,900			30,790	3,050	60					
3	9,950	40		2,840	4,515	2,525	10			20	
4	70,330	10	110	36,755	24,490	6,640	190	950	725	460	
5	33,125			10,540	16,225	2,340	220	3,110	690		
6	7,145			1,820	2,900		170	380	545	720	アブライト 570 粗安 40
7	45,338			28,525	8,995	2,590	1,435	1,303	2,445		軽石 45
8	8,400			4,835	1,625	715	210	995	20		
9	2,850			930	490	40		1,170	220		
10	3,625			1,265	1,305	295	235	425	100		
11	2,190		30	430	500	370	50	180	630		
12	17,165			14,825	2,005		320		15		
13	7,160			6,140	560		405	55			
14	19,515	460	3	18,230	820						流紋岩 2
15	16,155			9,195	4,530	615		1,815			
16	67,533			58,467	5,165	1,785	446	215	1,300		軽石 175
17	26,305			21,145	2,930	740	550	240	700		
18	25,950			18,035	5,865	1,330		660	60		
19	5,890			4,990	250			650			
20	16,638	75		15,153			30			440	かこう岩 920 粗安 20
21	7,620		360	6,360	320	270			310		
22	2,915			2,915							
合計	461,119	845	503	319,105	90,490	21,125	5,171	12,468	8,000	1,640	1,772

第6表 配石石材別個数・重量

配石	総数	完	欠	焼成	黒頁	頁岩	粗安	溶凝	石炭	チャート	砂岩	ホルン	ひん岩	その他の石材	備考
1	45	35	10	29			35	1	1	5	3				
2	49	36	13	10	3		35	3		3			1	輝巖1 雲石1 輝緑岩1 石閃1	新片4 打斧1 素材制片1 凹石1 台石1 石炭制片1
3	10	9	1	2			6	4							
4	8	7	1	4			8								磨石2 凹石2
5・6	41	41	0	8			36	3	1		1				台石1 凹石2
7	11	10	1	4			10							黒曜石1	磨石2
8	8	4	4	4			6				1			かこう岩1	
合計	172	142	30	61	3		136	11	2	8	5		1	6	

単位：g

配石	総重量	黒頁	頁岩	粗安	溶凝	石炭	チャート	砂岩	ホルン	ひん岩	その他の石材
1	17,050			15,605	380	190	710	165			
2	29,025	575		15,675	3,175		360			3,030	輝巖40 輝緑岩120 雲石1,735 石閃4,315
3	6,610			2,800	3,810						
4	5,090			5,090							
5・6	14,555			12,970	700	740		145			
7	5,965			5,965							黒曜石0.01
8	5,835			5,295				20			かこう岩520
合計	84,130	575		63,400	8,065	930	1,070	330		3,030	6,730

II 縄文時代の調査

1号土坑出土石器

器種別組成 (507点・1438.02g) 刮片石器

①	②	③	刮片 (233点)	砕片 (214点)
---	---	---	-----------	-----------

①②③

①石鏃 (14点)

②石核 (14点)

③使用痕 (13点)

④削器 (8点) 石匙 (1点) 石鏃 (1点) 加工痕 (9点)

石材別点数 (214点) 砕片

黒頁 (49点)	チャート (161点・165.9g)
----------	--------------------

①黒曜石 (4点・4.7g)

石材別点数 (233点) 刮片

①	チャート (214点・579.6g)	②
---	--------------------	---

①黒頁 (18点・101g)

②黒安 (1点・11g)

器種別組成 (14点) 石鏃

A1類 (3点)	B1類 (4点)	I類 (7点)
----------	----------	---------

石材別点数 (14点) 石鏃

チャート (12点)	①	②
------------	---	---

①黒曜石 (1点)

②珪頁 (1点)

石材別点数 (14点) 石核

チャート (14点・150.9g)

石材別点数 (32点) 石匙・石鏃・削器・使用痕・加工痕

黒頁 (7点)	チャート (24点)
---------	------------

①頁岩 (1点)

14号土坑出土石器

器種別組成 (635点・338.04g) 刮片石器

砕片 (603点)

①②

①石鏃 (2点) 石核 (1点) 加工痕 (6点)

②剝片 (23点)

石材別点数 (603点・104.7g) 砕片

①	チャート (183点・17.3g)	黒曜石 (368点・56.4g)
---	-------------------	------------------

①黒頁 (52点・31g)

石材別点数 (23点・158.3g) 刮片

黒頁 (6点・108.1g)	チャート (7点・22.5g)	黒曜石 (10点・27.7g)
----------------	-----------------	-----------------

石材別点数 (1点) 石核

チャート (1点・35.2g)

器種別組成 (2点) 石鏃

A1類 (1点)	B1類 (1点)
----------	----------

石材別点数 (2点) 石鏃

チャート (1点)	黒曜石 (1点)
-----------	----------

石材別点数 (6点) 加工痕

黒頁 (1点)	チャート (2点)	黒曜石 (2点)	黒安 (1点)
---------	-----------	----------	---------

出土石器一覽

凡 例

1. 長さ・幅は、小数点第2位を四捨五入し、cm単位で表示した。
2. 遺物重量の計測には電磁式はかり（EY-2200A）を使用し、小数点第3位を四捨五入しg単位で表示した。
3. 「器種」の欄の略号は次の事を示す。

加剝：加工痕ある剝片 磨斧：磨製石斧
使剝：使用痕ある剝片 打斧：打製石斧
凹台：凹石台石 石核素：石核素材
有尖：有茎尖頭器

4. 本文中のグラフ及び一覧表中の「石材」の略号は次の事を示す。

黒安：黒色安山岩	黒頁：黒色頁岩
粗安：粗粒安山岩	珪頁：珪質頁岩
石閃：石英閃緑岩	点頁：点紋頁岩
灰安：灰色安山岩	変玄：変玄武岩
変安：変質安山岩	溶凝：溶結凝灰岩
輝凝：輝綠凝灰岩	角安：角閃石安山岩
石斑：石英斑岩	雲石：雲母石英片岩
変質玄：変質玄武岩	変安：変質安山岩
赤珪：赤色珪質岩	珪凝：珪質凝灰岩
黄珪：黄褐色珪質岩	流凝：流紋岩質凝灰岩
凝砂：凝灰岩質砂岩	硬泥：硬質泥岩椽岩石
ホルン：ホルンフェルス	細安：細粒安山岩
緑片：綠色片岩	

住居出土の石器

押洞番号	出土位置 (プロット)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	押洞番号	出土位置 (プロット)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材		
第14図	20	1号住居 石	2.7	1.7	2.33	黒頁	第32図	23	3号住居 石	3.8	2.6	(8.56)	珉化木		
	21	1号住居 石	2.2	1.7	1.25	チャート		24	3号住居 石	3.6	4.9	(3.17)	黒頁		
	22	1号住居 加	2.9	1.7	2.78	黒曜石		25	3号住居 削	6.6	4.9	40.5	黒頁		
	23	1号住居 削	5.0	3.7	12.50	黒頁		26	3号住居 削	3.7	3.0	8.66	チャート		
	24	1号住居 削	6.9	6.5	62	黒頁		27	3号住居 打	8.4	4.8	60.3	黒頁		
	25	1号住居 打	8.6	5.2	71	黒頁		28	3号住居 打	8.2	4.4	50.1	黒頁		
	26	1号住居 打	10.3	4.8	75	黒頁		29	3号住居 打	8.9	4.6	90.7	黒頁		
	27	1号住居 打	7.1	4.0	57	黒頁		30	3号住居 使	10.3	7.7	146.9	黒頁		
	28	1号住居 打	8.2	4.9	65	黒頁		第33図	31	3号住居 使	6.1	6.8	(54.3)	黒頁	
	29	1号住居 打	10.0	5.8	102	黒頁			32	3号住居 石	11.0	5.3	203.9	黒頁	
第15図	30	1号住居 磨	10.2	7.7	525	粗安	第34図	34	3号住居 磨	10.5	9.2	580	粗安		
	31	1号住居 磨	石(12.3)	10.7	(760)	粗安		35	3号住居 磨	12.0	9.9	750	粗安		
	32	1号住居 磨	石	13.0	9.6	830		粗安	36	3号住居 凹	石	9.8	7.5	300	粗安
	33	1号住居 磨	石	13.0	8.9	585		粗安	37	3号住居 凹	石	12.0	9.5	675	粗安
	34	1号住居 凹	石	11.3	8.0	565		粗安	38	3号住居 石	皿(27.4)	35.9	(4,140)	緑片	
	35	1号住居 凹	石	10.9	9.4	585		粗安	39	3号住居 台	石(26.7)	(19.2)	(8,430)	粗安	
	36	1号住居 台	石	21.9	9.3	(3,675)		粗安	第43図	44	4号住居 石	2.4	1.4	1.72	チャート
	37	1号住居 台	石	(20.7)	17.8	(2,300)		粗安		45	4号住居 石	2.0	2.0	(1.62)	黒頁
	第16図	38	1号住居 台	石	23.1	17.8		4,150	粗安	46	4号住居 石	(1.9)	1.7	(1.10)	チャート
		39	1号住居 凹	石	10.2	5.4		250	粗安	47	4号住居 石	2.7	1.6	1.16	黒曜石
40		1号住居 台	石	18.8	12.3	1,965	粗安	48	4号住居 石	2.4	1.5	1.05	黒頁		
41		1号住居 石	皿	26.2	(15.5)	(1,465)	粗安	49	4号住居 石	2.5	1.3	1.01	チャート		
42		1号住居 石	皿	20.8	24.0	3,150	粗安	50	4号住居 石	2.0	1.6	(1.02)	チャート		
第22図		15	2号住居 石	2.0	1.3	0.69	黒曜石	51	4号住居 石	2.3	1.9	1.10	黒曜石		
	16	2号住居 石	(1.6)	1.5	(0.77)	黒頁	52	4号住居 石	3.3	1.5	3.18	チャート			
	17	2号住居 石	(1.5)	1.7	(1.05)	黒曜石	53	4号住居 削	4.1	7.5	60	黒頁			
	18	2号住居 石	2.3	1.4	1.27	黒曜石	54	4号住居 削	2.4	3.0	2.47	黒頁			
	19	2号住居 石	2.3	1.3	0.82	チャート	55	4号住居 削	3.6	2.3	6.36	チャート			
	20	2号住居 石	2.9	1.6	1.37	黒頁	56	4号住居 削	4.1	6.7	51	黒頁			
	21	2号住居 削	3.9	4.9	12.58	黒頁	57	4号住居 削	8.9	6.5	91	黒頁			
	22	2号住居 削	2.3	4.1	6.41	黒頁	58	4号住居 打	9.6	6.6	169	頁岩			
	23	2号住居 削	2.9	8.8	22	黒頁	第44図	59	4号住居 打	7.7	6.3	79	黒頁		
	24	2号住居 削	2.8	8.5	24	黒頁		60	4号住居 打	7.4	5.8	69	黒頁		
	25	2号住居 削	4.7	9.0	(50)	黒頁		61	4号住居 打	16.8	7.5	684	黒頁		
	26	2号住居 加	8.5	7.9	87	黒頁		62	4号住居 使	8.9	6.6	95	黒頁		
	27	2号住居 加	6.0	7.2	(43)	黒頁	63	4号住居 使	10.8	4.7	78	粗安			
	28	2号住居 使	5.9	9.5	69	黒頁	第45図	65	4号住居 磨	石	8.2	6.3	210	粗安	
	第23図	29	2号住居 削	11.2	6.9	113		黒頁	66	4号住居 磨	石	10.5	9.5	635	粗安
		30	2号住居 打	10.8	(4.6)	(95)		黒頁	67	4号住居 凹	石	7.4	5.4	130	粗安
31		2号住居 打	7.2	4.7	45	黒頁		68	4号住居 凹	石	9.7	5.8	185	粗安	
32		2号住居 打	3.9	5.0	83	黒頁	69	4号住居 凹	石	11.5	8.7	560	粗安		
第24図	33	2号住居 打	12.8	7.1	245	粗安	70	4号住居 凹	石	9.0	7.4	270	粗安		
	34	2号住居 打	7.0	4.4	35	黒頁	71	4号住居 凹	石	11.1	6.5	270	粗安		
	35	2号住居 磨	石	10.6	7.4	440	粗安	72	4号住居 凹	石	10.0	8.1	340	粗安	
	36	2号住居 磨	石	13.2	10.1	650	粗安	73	4号住居 凹	石	10.8	5.7	385	粗安	
	37	2号住居 磨	石	12.9	8.9	745	粗安	74	4号住居 凹	石	11.6	6.9	435	粗安	
	38	2号住居 磨	石	13.5	9.6	650	粗安	75	4号住居 凹	石	(11.5)	8.5	(380)	粗安	
	39	2号住居 凹	石	9.7	7.8	520	粗安	第49図	18	5号住居 石	1.4	1.3	0.37	黒曜石	
	40	2号住居 凹	石	12.6	7.7	470	粗安		19	5号住居 石	1.6	1.8	0.39	黒曜石	
	41	2号住居 凹	石	12.8	10.5	865	粗安		20	5号住居 石	(1.5)	1.7	(0.98)	黒曜石	
	42	2号住居 凹	台	(11.5)	11.9	(1,130.5)	粗安		21	5号住居 石	3.0	(1.7)	(1.07)	黒頁	
43	2号住居 台	石	(19.0)	17.7	(1,126)	粗安	22		5号住居 使	8.8	7.4	94.9	黒頁		
44	2号住居 凹	台	20.7	13.5	2,385	粗安	23	5号住居 使	7.9	6.2	75.5	ホルン			
45	2号住居 石	皿	(24.3)	(18.4)	(2,660)	粗安	第50図	24	5号住居 磨	石	13.8	8.2	665	粗安	
46	2号住居 石	皿	(18.5)	(18.8)	(2,465)	粗安		25	5号住居 磨	石	(12.5)	9.3	(595)	粗安	
第32図	21	3号住居 石	(2.0)	1.7	0.92	黒曜石		26	5号住居 磨	石	13.7	9.0	775	粗安	
	22	3号住居 石	2.1	1.7	0.91	黒曜石	27	5号住居 磨	石	11.8	9.1	540	粗安		

押戻番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第50図-28	5号住居	凹台	14.1	11.8	845	粗安
	29 5号住居	凹石	10.0	9.3	390	粗安
	30 5号住居	凹石	9.4	7.5	315	粗安

押戻番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第50図-31	5号住居	凹石	10.1	6.7	400	粗安
	32 5号住居	凹石	(19.8)	(20.0)	(2,895)	粗安
第51図-2	6号住居	石皿	28.0	24.1	(4,560)	緑片

土坑・集石土坑・配石出土の石器

押戻番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	
第56図-11	1号土坑	石鏃	1.8	1.6	0.74	チャート	
	12 1号土坑	石鏃	(2.0)	2.1	(2.89)	チャート	
	13 1号土坑	石鏃	3.0	(1.7)	(1.89)	チャート	
	14 1号土坑	石鏃	1.9	1.4	0.86	チャート	
	15 14号土坑	石鏃	(1.1)	1.4	(0.38)	黒曜石	
	16 1号土坑	石鏃	2.4	1.7	1.22	珪頁	
	17 1号土坑	石鏃	2.9	(2.0)	(2.54)	チャート	
	18 1号土坑	石鏃	(2.7)	2.5	(6.23)	チャート	
	19 7号土坑	磨石	10.9	9.7	470	粗安	
	第63図-1	14号集石	石皿	(9.1)	(8.5)	(1,700)	粗安
		2 14号集石	石皿	(15.4)	(18.0)	(3,000)	粗安
		3 14号集石	石皿	(28.5)	19.5	(2,600)	粗安

押戻番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第63図-4	14号集石	石皿	(13.5)	(9.3)	(960)	粗安
	5 14号集石	磨石	11.3	8.3	540	粗安
	6 14号集石	磨石	11.7	9.5	1,000	粗安
	7 14号集石	凹石	15.0	13.2	1,000	粗安
第66図-7	8 14号集石	凹石	14.0	9.2	860	粗安
	7 2号配石	磨石	10.2	8.5	510	粗安
	8 2号配石	磨石	11.6	9.2	600	粗安
	9 2号配石	磨石	13.2	9.8	850	粗安
	10 2号配石	磨石	14.2	9.2	850	粗安
	13 7号配石	石皿	(24.2)	(12.9)	(3,300)	粗安
	14 3号配石	多孔石	11.0	9.2	430	粗安

包含層出土の石器 (3・4区)

押戻番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第112図-1	1 包含層	石鏃	2.3	1.9	1.12	チャート
	2 包含層	石鏃	1.5	1.1	0.56	黒曜石
	3 包含層	石鏃	1.6	1.3	0.40	チャート
	4 包含層	石鏃	2.0	1.3	0.62	チャート
	5 包含層	石鏃	2.4	1.7	1.26	黒頁
	6 包含層	石鏃	2.4	1.2	1.36	黒曜石
	7 包含層	石鏃	2.5	(1.4)	(1.15)	黒頁
	8 包含層	石鏃	2.8	1.5	1.92	チャート
	9 包含層	石鏃	2.5	1.6	0.99	黒曜石
	10 包含層	石鏃	2.3	1.7	1.08	チャート
	11 包含層	石鏃	2.9	2.2	(1.37)	チャート
	12 包含層	石鏃	1.4	1.0	0.31	黒曜石
	13 包含層	石鏃	1.9	1.5	0.74	チャート
	14 包含層	石鏃	2.5	2.0	1.50	黒頁
	15 包含層	石鏃	3.1	1.6	1.34	チャート
	16 包含層	石鏃	3.3	1.7	1.39	黒曜石
	17 包含層	石鏃	2.4	1.2	0.50	黒曜石
第113図-1	1 包含層	石鏃	2.7	1.6	1.05	チャート
	2 包含層	石鏃	2.2	(1.7)	(1.06)	黒曜石
	3 包含層	石鏃	(2.4)	1.9	(1.23)	黒曜石
	4 包含層	石鏃	2.1	1.4	(0.54)	黒曜石
	5 包含層	石鏃	2.4	1.6	0.87	珪頁
	6 包含層	石鏃	2.6	2.3	1.60	黒安
	7 包含層	石鏃	1.5	1.2	0.32	黒曜石
	8 包含層	石鏃	2.4	1.7	1.11	チャート
	9 包含層	石鏃	2.8	2.0	1.81	チャート
	10 包含層	石鏃	2.0	1.4	0.66	黒曜石
	11 包含層	石鏃	(1.6)	1.8	(0.48)	黒曜石

押戻番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第113図-12	12 包含層	石鏃	3.3	2.2	2.05	チャート
	13 包含層	石鏃	2.3	2.1	1.51	チャート
	14 包含層	石鏃	2.3	1.6	1.54	チャート
第114図-1	1 包含層	石鏃	(2.3)	1.3	(0.79)	チャート
	2 包含層	石鏃	(2.9)	1.3	(1.43)	珪頁
	3 包含層	石鏃	(3.3)	1.8	(2.47)	チャート
	4 包含層	石鏃	2.5	1.4	0.82	黒頁
	5 包含層	石鏃	(1.9)	1.2	(0.57)	チャート
	6 包含層	石鏃	2.9	1.4	1.56	チャート
	7 包含層	石鏃	(3.4)	1.7	(2.28)	黒頁
	8 包含層	石鏃	4.4	3.0	13.3	黒曜石
	9 包含層	石鏃	3.8	3.0	12.07	黒曜石
	10 包含層	石鏃	(3.2)	(1.4)	(1.56)	黒曜石
第115図-1	11 包含層	石鏃	(3.1)	2.0	(4.24)	チャート
	12 包含層	石鏃	3.0	2.0	3.89	チャート
	13 包含層	石鏃	(3.4)	2.4	(6.94)	チャート
	14 包含層	石鏃	2.5	2.1	3.52	チャート
	1 包含層	有尖	(3.9)	1.6	(3.89)	黒頁
	2 包含層	有尖	(2.7)	1.3	(2.06)	黒頁
	3 包含層	石鏃	2.8	1.2	1.30	黒曜石
	4 包含層	石鏃	3.5	1.8	2.68	黒頁
	5 包含層	石鏃	4.2	0.9	2.07	黒頁
	6 包含層	石鏃	3.6	3.2	3.40	黒頁
	7 包含層	石鏃	3.5	2.6	3.90	黒曜石
8 包含層	石鏃	3.2	2.6	4.89	チャート	
9 包含層	石鏃	3.3	3.1	7.62	チャート	
10 包含層	石鏃	4.5	3.1	13.48	黒頁	
11 包含層	石鏃	3.9	1.7	3.58	チャート	

挿入番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第115図-12	包含層	石 靴	7.1	2.7	10.92	黒 頁
13	包含層	石 靴	3.0	8.0	24.65	黒 頁
14	包含層	石 靴	4.1 (5.9)		(18.90)	黒 安
15	包含層	石 靴	3.3	6.4	12.62	黒 頁
16	包含層	石 靴	3.5	3.6	11.8	黒 頁
17	包含層	石 靴	3.6	4.4	7.46	黒 頁
18	包含層	石 靴	5.8	7.5	46.58	黒 頁
第116図-1	包含層	削 器	4.6	3.2	12.71	チャート
2	包含層	削 器	4.8	2.9	9.08	黒 頁
3	包含層	削 器	4.3	3.0	14.5	珪 頁
4	包含層	削 器	4.8	3.1	11.66	黒 頁
5	包含層	削 器	3.2	2.3	4.86	チャート
6	包含層	削 器	3.5	2.8	4.89	黒 頁
7	包含層	削 器	6.0	5.1	30.9	黒 頁
8	包含層	削 器	3.6	6.2	23.1	黒 頁
9	包含層	削 器	6.9	4.1	16.5	黒 頁
10	包含層	削 器	2.7	1.5	1.5	黒 曜石
11	包含層	削 器	3.2	1.9	3.7	チャート
12	包含層	削 器	5.7	4.2	18.1	黒 頁
13	包含層	削 器	5.2	4.3	17.7	黒 頁
14	包含層	削 器	6.1	5.2	25.7	黒 頁
15	包含層	削 器	3.9	2.8	10.59	黒 頁
16	包含層	削 器	5.0	5.2	25.0	黒 頁
17	包含層	削 器	(6.8)	5.3	(43.5)	黒 頁
18	包含層	削 器	4.0	3.0	11.2	黒 頁
第117図-1	包含層	削 器	5.2	4.0	21.5	黒 頁
2	包含層	削 器	7.0	4.4	39.9	黒 頁
3	包含層	削 器	(8.5)	3.2	(30.4)	黒 頁
4	包含層	削 器	(5.4)	5.0	(32.2)	黒 頁
5	包含層	削 器	4.8	7.1	37.7	黒 頁
6	包含層	削 器	(7.5)	3.8	(40.6)	黒 安
7	包含層	削 器	7.2	3.2	23.1	黒 頁
8	包含層	削 器	5.5	7.8	48.4	黒 頁
9	包含層	削 器	7.5	6.5	82.4	黒 頁
10	包含層	削 器	7.0	5.0	55.5	黒 頁
11	包含層	削 器	5.0	8.5	35.7	黒 頁
第118図-1	包含層	削 器	9.8	5.8	92.8	黒 頁
2	包含層	削 器	11.9	6.8	159.7	黒 頁
3	包含層	削 器	7.6	5.6	47.4	黒 頁
4	包含層	削 器	(8.1)	5.4	(59.7)	黒 頁
5	包含層	削 器	13.0	6.5	(110.1)	黒 頁
6	包含層	削 器	4.5	12.4	109.2	黒 頁
7	包含層	削 器	10.7	7.9	189.4	黒 頁
第119図-1	包含層	削 器	2.7	2.5	6.3	チャート
2	包含層	削 器	2.6 (3.2)		(9.6)	チャート
3	包含層	削 器	2.9	4.5	9.9	黒 頁
4	包含層	削 器	3.3	3.4	7.7	チャート
5	包含層	削 器	2.2	3.2	5.6	チャート
6	包含層	削 器	3.8	6.7	31.7	チャート
7	包含層	削 器	4.9	6.4	32.7	黒 頁
8	包含層	削 器	5.0	6.6	54.2	黒 頁
9	包含層	削 器	4.0	6.5	25.9	黒 頁
10	包含層	削 器	6.5	7.3	69.2	黒 頁
11	包含層	削 器	5.2	5.4	23.8	黒 頁
12	包含層	削 器	6.2 (6.8)		(73.0)	黒 頁
13	包含層	削 器	(4.5)	5.7	(57.2)	黒 頁
第120図-1	包含層	削 器	5.6	7.1	45.2	黒 頁
2	包含層	削 器	10.2	5.4	82.5	黒 頁
3	包含層	削 器	4.7	6.1	56.5	黒 頁

挿入番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第120図-4	包含層	削 器	10.0	4.8	82.6	黒 頁
5	包含層	削 器	7.5	4.9	60.2	黒 頁
6	包含層	削 器	6.2	9.8	76.0	黒 頁
7	包含層	削 器	5.1	8.2	63.7	黒 頁
8	包含層	削 器	5.9	10.5	95.1	黒 頁
第121図-1	包含層	削 器	5.5	8.3	75.3	黒 頁
2	包含層	削 器	5.0	8.5	46.3	黒 頁
3	包含層	削 器	4.4	7.9	52.5	黒 頁
4	包含層	削 器	3.5	8.8	19.4	黒 頁
5	包含層	削 器	5.5	8.3	56.8	黒 安
6	包含層	削 器	5.6	8.5	63.1	黒 頁
7	包含層	削 器	4.9	8.5	111.5	黒 頁
8	包含層	削 器	3.9	2.8	10.59	黒 頁
第122図-1	包含層	加 刺	4.3	2.7	8.74	黒 頁
2	包含層	加 刺	2.8	2.0	2.7	黒 曜石
3	包含層	加 刺	3.5	2.2	4.73	黒 安
4	包含層	加 刺	3.0	2.5	5.7	黒 頁
5	包含層	加 刺	2.7 (1.6)		(4.4)	黒 頁
6	包含層	加 刺	3.5	2.7	8.04	黒 頁
7	包含層	加 刺	4.1	3.0	10.68	黒 頁
8	包含層	加 刺	3.8	3.3	10.24	黒 頁
9	包含層	加 刺	4.8	3.0	15.0	黒 頁
10	包含層	加 刺	7.8	5.0	102.4	黒 頁
11	包含層	加 刺	4.1	9.4	93.4	黒 頁
12	包含層	加 刺	4.9	3.0	17.9	黒 頁
13	包含層	加 刺	8.9	4.1	76.8	黒 頁
14	包含層	加 刺	8.7	5.0	56.4	黒 頁
15	包含層	加 刺	8.6	6.2	32.9	黒 頁
第123図-1	包含層	加 刺	6.8	8.0	111.3	黒 頁
2	包含層	加 刺	4.3	4.8	20.9	黒 頁
3	包含層	加 刺	8.2	5.2	164.3	黒 頁
4	包含層	加 刺	5.6	6.7	55.7	黒 頁
5	包含層	加 刺	9.3	8.8	115.6	黒 頁
6	包含層	加 刺	13.2	9.0	265.0	黒 頁
第124図-1	包含層	加 刺	2.7	3.5	11.1	チャート
2	包含層	加 刺	2.0	2.4	1.8	黒 曜石
3	包含層	加 刺	3.2	4.6	15.67	黒 安
4	包含層	加 刺	3.2	3.8	11.8	チャート
5	包含層	加 刺	2.5	3.5	7.7	黒 頁
6	包含層	加 刺	2.6	4.5	8.8	黒 頁
7	包含層	加 刺	3.1	6.2	31.3	黒 頁
8	包含層	加 刺	4.5	6.9	46.3	黒 頁
9	包含層	加 刺	6.4	5.9	71.3	黒 安
10	包含層	加 刺	4.1	8.4	44.4	黒 安
11	包含層	加 刺	3.5	4.2	19.5	黒 頁
12	包含層	加 刺	5.2 (10.8)		(70.0)	黒 頁
13	包含層	加 刺	6.4	7.3	99.6	黒 頁
第125図-1	包含層	加 刺	9.9	7.8	209.8	黒 頁
2	包含層	加 刺	6.3	6.2	115.4	黒 頁
3	包含層	加 刺	7.5	5.7	146.0	黒 頁
4	包含層	加 刺	7.3	6.7	218.9	黒 頁
第126図-1	包含層	使 刺	7.1	4.8	24.8	黒 頁
2	包含層	使 刺	3.8	3.6	10.1	黒 頁
3	包含層	使 刺	4.2	6.0	28.7	黒 頁
4	包含層	使 刺	7.8	6.2	87.5	黒 頁
5	包含層	使 刺	10.8	6.6	43.3	流 巖
6	包含層	使 刺	15.9	10.3	401.6	黒 頁
7	包含層	使 刺	7.5	3.9	38.3	黒 頁
第127図-1	包含層	使 刺	6.0	5.4	26.8	黒 頁

挿入番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	
第127図	2	包含層	使 刺	7.0	6.6	71.6	黒 頁
	3	包含層	使 刺	7.7	5.5	53.4	黒 頁
	4	包含層	使 刺	9.7	5.9	119.2	黒 頁
	5	包含層	使 刺	8.7	5.1	61.6	黒 頁
	6	包含層	使 刺	4.2	5.6	23.1	黒 頁
	7	包含層	使 刺	3.8	5.5	30.8	黒 頁
	8	包含層	使 刺	5.0	6.5	47.6	黒 頁
	9	包含層	使 刺	3.6	4.6	11.8	黒 頁
	10	包含層	使 刺	4.7	7.2	28.9	黒 頁
	11	包含層	使 刺	3.3	4.8	12.8	黒 頁
	第128図	1	包含層	使 刺	6.3	8.7	52.5
2		包含層	使 刺	4.9	9.0	83.7	黒 頁
3		包含層	使 刺	5.3	8.3	47.6	黒 頁
4		包含層	使 刺	4.1	10.3	64.0	黒 頁
5		包含層	使 刺	4.7	7.6	63.4	黒 頁
6		包含層	使 刺	6.9	8.4	57.4	頁 岩
7		包含層	使 刺	5.4	9.9	102.9	組 安
第131図	1	包含層	打 弁	6.1	4.1	37.6	黒 頁
	2	包含層	打 弁	7.5	5.5	44.9	黒 頁
	3	包含層	打 弁	7.0	5.9	45.6	黒 頁
	4	包含層	打 弁	9.0	4.9	69.7	黒 頁
	5	包含層	打 弁	7.6	4.7	51.8	黒 頁
第132図	6	包含層	打 弁	5.1	3.7	13.44	黒 頁
	1	包含層	打 弁	8.4	5.1	53.6	黒 頁
	2	包含層	打 弁	8.9	5.6	74.7	黒 頁
第133図	3	包含層	打 弁	5.8	3.8	24.7	黒 頁
	4	包含層	打 弁	7.1	5.6	57.7	黒 頁
	5	包含層	打 弁	9.1	4.8	55.7	黒 頁
	6	包含層	打 弁	8.3	3.4	33.2	黒 頁
	1	包含層	打 弁	9.5	5.7	84.6	黒 頁
	2	包含層	打 弁	7.9	5.1	60.8	黒 頁
第134図	3	包含層	打 弁	8.4	5.0	60.5	黒 頁
	4	包含層	打 弁	6.0	4.5	27.9	黒 頁
	5	包含層	打 弁	8.1	5.0	67.5	黒 頁
	6	包含層	打 弁	7.5	5.2	44.3	黒 頁
	1	包含層	打 弁	6.4	5.5	39.5	黒 頁
	2	包含層	打 弁	6.8	5.7	44.4	黒 頁
第135図	3	包含層	打 弁	10.5	6.4	(115.5)	黒 頁
	4	包含層	打 弁	12.2	7.1	387.0	黒 頁
	1	包含層	打 弁	6.8	3.5	41.2	黒 頁
	2	包含層	打 弁	9.5	4.8	159.6	灰 安
	3	包含層	打 弁	7.8	4.4	85.5	黒 頁
第136図	4	包含層	打 弁	9.2	5.9	136.7	黒 頁
	5	包含層	打 弁	8.3	5.8	66.1	黒 頁
	1	包含層	打 弁	10.1	5.9	123.2	黒 頁
	2	包含層	打 弁	8.5	4.2	76.4	黒 頁
	3	包含層	打 弁	10.5	5.8	174.2	黒 頁
第137図	4	包含層	打 弁	6.9	4.5	48.9	黒 頁
	5	包含層	打 弁	7.5	4.5	69.4	黒 頁
	6	包含層	打 弁	10.5	5.5	130.0	黒 頁
	1	包含層	打 弁	8.5	5.7	82.8	黒 頁
	2	包含層	打 弁	7.8	3.9	59.1	黒 頁
	3	包含層	打 弁	10.3	6.8	179.6	黒 頁
第138図	4	包含層	打 弁	8.9	4.4	109.0	黒 頁
	5	包含層	打 弁	8.8	5.7	98.1	黒 頁
	6	包含層	打 弁	9.1	6.0	101.8	黒 頁
	1	包含層	打 弁	8.5	5.2	69.0	黒 頁
	2	包含層	打 弁	7.6	4.9	44.1	黒 頁
3	包含層	打 弁	7.9	4.0	46.9	黒 頁	

挿入番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	
第138図	4	包含層	打 弁	9.6	4.3	78.7	黒 頁
	5	包含層	打 弁	9.3	5.0	117.4	黒 頁
	6	包含層	打 弁	9.7	4.5	89.3	黒 頁
	1	包含層	打 弁	14.0	6.3	201.9	黒 頁
	2	包含層	打 弁	(8.7)	6.8	(161.4)	黒 頁
第139図	3	包含層	打 弁	15.6	17.0	332.6	黒 頁
	1	包含層	打 弁	10.2	4.6	99.8	黒 頁
	2	包含層	打 弁	8.5	3.4	56.4	黒 頁
	3	包含層	打 弁	9.1	3.5	43.6	黒 頁
	4	包含層	打 弁	(9.8)	5.0	(94.2)	黒 頁
	5	包含層	打 弁	(7.3)	4.9	(67.7)	黒 頁
	6	包含層	打 弁	(3.8)	4.7	(29.8)	灰 安
	7	包含層	打 弁	9.6	4.9	71.9	頁 岩
第140図	8	包含層	打 弁	(3.3)	7.3	(37.1)	黒 頁
	1	包含層	打 弁	11.5	5.1	101.8	黒 頁
	2	包含層	打 弁	10.8	5.5	89.7	黒 頁
	3	包含層	打 弁	12.1	5.5	134.8	黒 頁
	4	包含層	打 弁	8.9	5.3	84.9	黒 頁
	5	包含層	打 弁	10.4	5.7	107.4	黒 頁
第141図	6	包含層	打 弁	11.0	6.7	134.9	黒 頁
	1	包含層	打 弁	20.2	9.4	876.0	黒 頁
	2	包含層	打 弁	14.0	6.7	394.8	黒 頁
第142図	1	包含層	打 弁	8.6	5.7	90.1	黒 頁
	2	包含層	打 弁	11.7	5.8	111.8	黒 頁
	3	包含層	打 弁	19.9	8.9	706.7	黒 頁
第143図	1	包含層	打 弁	8.1	5.1	83.9	黒 頁
	2	包含層	打 弁	8.4	6.3	104.1	黒 頁
	3	包含層	打 弁	(12.4)	(7.7)	(232.8)	黒 頁
	4	包含層	打 弁	14.9	7.9	295.5	黒 頁
	5	包含層	打 弁	13.9	(7.6)	(285.1)	組 安
第144図	1	包含層	打 弁	13.5	6.4	126.7	黒 頁
	2	包含層	打 弁	8.7	5.5	84.5	組 安
	3	包含層	打 弁	(8.3)	4.9	(69.4)	組 安
	4	包含層	打 弁	(11.8)	9.4	(286.4)	黒 頁
	5	包含層	打 弁	12.4	7.3	143.7	黒 頁
第145図	1	包含層	礫 器	12.5	8.8	573.6	ホルン
	2	包含層	磨 弁	(4.6)	(2.8)	(10.0)	蛇 紋 岩
	3	包含層	磨 弁	(2.0)	(4.3)	(9.2)	灰 玄
第146図	1	包含層	石 核	4.3	6.5	66	チャート
	2	包含層	石 核	4.1	4.7	50.6	黒曜石
	3	包含層	石 核	3.4	5.2	47.2	チャート
	4	包含層	石 核	2.4	3.7	9.1	チャート
	5	包含層	石 核	5.4	6.3	83.9	黒曜石
	6	包含層	石 核	3.4	4.1	16.3	チャート
	7	包含層	石 核	3.7	2.9	8.9	チャート
	8	包含層	石 核	6.8	6.4	120.1	チャート
	9	包含層	石 核	2.7	4.1	17.2	チャート
	10	包含層	石 核	5.1	6.0	49.3	チャート
	11	包含層	石 核	2.9	4.7	18.5	チャート
第147図	1	包含層	石 核	2.4	2.8	6.5	黒曜石
	2	包含層	石 核	2.5	2.1	5.9	黒曜石
	3	包含層	石 核	1.7	3.5	4.0	黒曜石
	4	包含層	石 核	3.3	2.5	10.0	チャート
	5	包含層	石 核	3.4	3.0	8.9	チャート
	6	包含層	石 核	2.1	2.6	5.3	黒曜石
	7	包含層	石 核	4.0	3.4	15.7	チャート
	8	包含層	石 核	3.7	2.9	14.0	チャート
	9	包含層	石 核	3.4	2.2	9.9	黒曜石
10	包含層	石 核	2.4	1.9	1.1	黒曜石	

採掘番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	
第148図	11	包含層	石核	4.1	2.3	15.9	チャート
	12	包含層	石核	5.4	2.0	27.2	チャート
	13	包含層	石核	4.3	2.7	20.5	チャート
	14	包含層	石核	1.6	2.5	4.7	黒曜石
	15	包含層	石核	2.1	2.1	3.9	黒曜石
	16	包含層	石核	2.4	2.7	7.0	黒曜石
	17	包含層	石核	3.6	1.7	7.0	黒曜石
	18	包含層	石核	3.3	3.3	6.6	黒曜石
第149図	1	包含層	石核	4.0	1.4	7.0	黒曜石
	2	包含層	石核	1.9	2.8	8.9	チャート
	3	包含層	石核	2.9	2.9	12.1	チャート
	4	包含層	石核	3.9	4.9	20.5	チャート
	5	包含層	石核	2.3	3.8	9.9	チャート
	6	包含層	石核	6.3	5.7	100	黒曜石
	7	包含層	石核	2.2	4.1	13.3	チャート
	8	包含層	石核	3.0	4.2	17.5	チャート
	9	包含層	石核	5.4	3.3	59.7	黒曜石
第150図	1	包含層	磨石	12.8	9.0	880	粗安
	2	包含層	磨石	13.4	8.8	650	粗安
	3	包含層	磨石	10.2	9.1	600	粗安
	4	包含層	磨石	(10.0)	7.4	(500)	粗安
	5	包含層	磨石	9.9	9.3	1,060	石閃
	6	包含層	磨石	10.5	9.6	830	粗安
	7	包含層	磨石	14.6	8.1	700	粗安
	8	包含層	磨石	10.9	8.4	630	粗安
第151図	1	包含層	磨石	9.3	7.5	540	粗安
	2	包含層	磨石	9.0	8.4	250	粗安
	3	包含層	磨石	11.7	8.3	470	粗安
	4	包含層	磨石	11.5	8.5	595	粗安
	5	包含層	磨石	12.9	9.3	610	粗安
	6	包含層	磨石	9.6	7.1	270	粗安
	7	包含層	磨石	(13.8)	8.5	(830)	粗安
	8	包含層	磨石	13.4	8.3	470	粗安
第152図	1	包含層	磨石	12.9	6.0	410	粗安
	2	包含層	磨石	12.9	8.7	520	粗安
	3	包含層	凹石	9.4	7.8	250	粗安
	4	包含層	凹石	11.3	7.2	470	粗安
	5	包含層	凹石	10.9	7.5	320	粗安
	6	包含層	凹石	10.1	7.1	410	角安
	7	包含層	凹石	11.8	7.0	460	粗安
	8	包含層	凹石	10.9	7.9	400	粗安
第153図	1	包含層	凹石	13.1	8.5	620	粗安
	2	包含層	凹石	10.0	9.1	760	粗安
	3	包含層	凹石	10.6	8.0	380	粗安
	4	包含層	凹石	7.9	7.4	250	粗安
	5	包含層	凹石	9.9	7.8	280	粗安

採掘番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	
第153図	6	包含層	凹石	12.0	8.5	680	粗安
	7	包含層	凹石	7.6	6.1	220	粗安
	8	包含層	凹石	8.8	7.9	300	粗安
	9	包含層	凹石	11.9	7.4	500	粗安
第154図	1	包含層	凹石	15.1	8.0	680	粗安
	2	包含層	凹石	9.7	9.0	640	粗安
	3	包含層	凹石	12.1	11.1	640	粗安
	4	包含層	凹石	12.2	7.6	320	粗安
	5	包含層	凹石	11.6	7.3	440	粗安
	6	包含層	凹石	11.6	9.1	410	粗安
第155図	1	包含層	多孔石	13.0	9.0	(1,130)	粗安
	2	包含層	多孔石	14.2	10.3	540	粗安
	3	包含層	多孔石	12.6	9.7	820	粗安
第155図	4	包含層	多孔石	11.2	9.6	520	粗安
	5	包含層	多孔石	13.9	13.8	1,660	粗安
	6	包含層	多孔石	11.0	10.0	460	粗安
	7	包含層	多孔石	10.1	7.9	440	粗安
第156図	1	包含層	多孔石	11.3	10.5	630	粗安
	2	包含層	多孔石	(11.9)	(14.1)	(780)	粗安
	3	包含層	多孔石	(11.4)	11.1	(930)	粗安
	4	包含層	多孔石	11.9	8.4	540	粗安
	5	包含層	多孔石	19.1	17.3	1,520	粗安
	6	包含層	多孔石	(14.7)	19.0	(3,250)	粗安
	7	包含層	多孔石	13.0	11.1	640	粗安
第157図	1	包含層	多孔石	17.0	10.5	1,670	粗安
	2	包含層	多孔石	10.1	7.1	480	粗安
	3	包含層	凹石	34.7	27.5	12,500	粗安
第158図	1	包含層	凹石	23.5	14.9	4,820	粗安
	2	包含層	凹石	18.0	14.0	1,240	粗安
	3	包含層	凹石	15.1	10.1	1,280	粗安
	4	包含層	凹石	15.4	13.8	1,680	粗安
	5	包含層	凹石	14.7	12.7	920	粗安
第159図	1	包含層	台石	(18.3)	17.7	(3,155)	石閃
	2	包含層	台石	25.8	18.1	4,220	粗安
	3	包含層	台石	19.8	21.1	1,650	粗安
	4	包含層	台石	17.0	14.5	3,955	粗安
	5	包含層	砥石	(5.3)	7.2	(110)	粗安
	6	包含層	砥石	8.5	7.2	190	粗安
	7	包含層	砥石	(5.4)	5.7	(50)	粗安
	8	包含層	砥石	10.7	7.5	185	粗安
第160図	1	包含層	石皿	(13.0)	19.5	(1,590)	粗安
	2	包含層	石皿	18.5	17.6	(1,135)	粗安
	3	包含層	石皿	(20.0)	(18.2)	(3,745)	粗安
	4	包含層	石皿	(20.0)	(12.6)	(2,965)	緑片
	5	包含層	石皿	(24.5)	(17.3)	(2,190)	緑片
第161図	1	包含層	石皿	34.7	25.1	(4,310)	粗安

包含層出土の石器（5区）

押戻番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第162図-1	包含層	石 鏃	2.6	1.8	1.06	チャート
2	包含層	石 鏃	1.8	1.7	0.65	黒曜石
3	包含層	石 鏃	(2.5)	1.5	(1.68)	黒 頁
4	包含層	石 鏃	(1.8)	1.5	(0.52)	黒 頁
押戻番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第162図-5	包含層	多孔石	(13.5)	9.4	(700)	粗 安
6	包含層	多孔石	16.3	6.5	1,000	粗 安
7	包含層	多孔石	(19.4)	12.0	(2,560)	粗 安

写 真 图 版







1 遺跡遺景 (上空から)



2 遺跡遺景 (南から洞山を望む)



3 洞山の東縁にある「牛石」



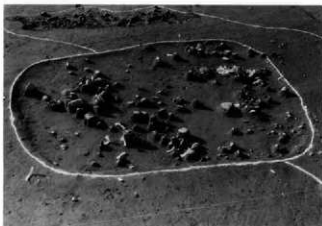
4 試掘調査状況



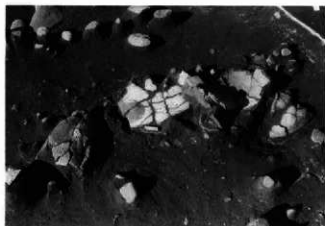
5 同4



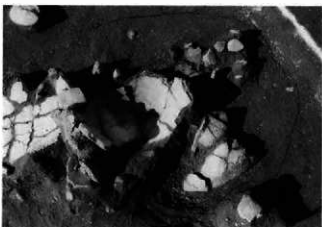
1 1号住居全景



2 同1 全遺物の出土状況



3 同 主要土器出土状況



4 同3



5 同3

PL 4 縄文時代



1 1号住居 炉南側遺物出土状況



2 同 炉の確認状況



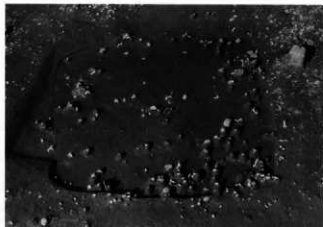
3 同 炉完掘状況



4 同 炉埋設土器



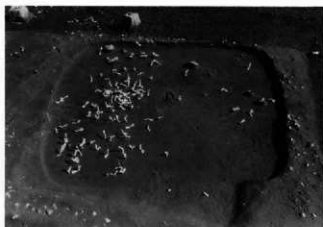
5 2号住居全景



1 2号住居 全遺物の出土状況



2 同1 南東隅



3 同床面 黒曜石碎片の出土状況



4 同炉 埋設土器の確認状況



5 同炉 埋設状況



6 同炉 断面



7 3号住居 全遺物の出土状況



8 同7 地山礫を取りさった状況



1 3号住居全景



2 同 主要土器の出土状況



3 同2



4 同2



5 同 石皿の出土状況



1 4号住居 遺物出土状況



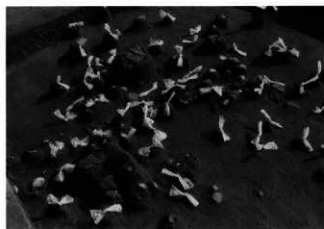
2 同 確認状況



3 同 完掘状況



4 同 埋土の状態



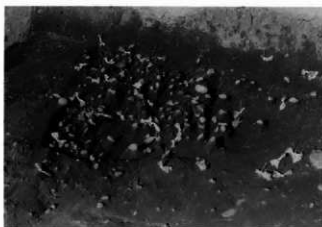
5 同 土器の出土状況



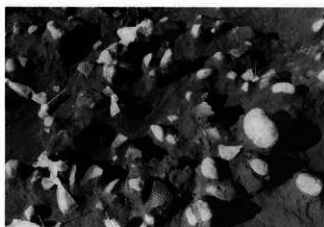
1 4号住居 主要土器の出土状況



2 同1



3 5号住居 全遺物の出土状況



4 同 部分



5 同 黒曜石砕片出土状況



6 同 完備状況



7 6号住居 遺物出土状況



8 同7



1 1号土坑 確認状況



2 同 遺物出土状況



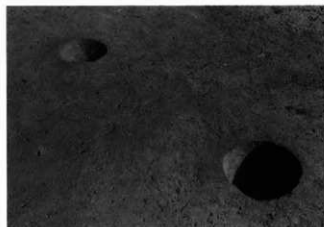
3 同 完掘状況



4 2号土坑 確認状況



5 同 完掘状況



6 3号・4号土坑



7 3号土坑 確認状況



8 4号土坑 確認状況



1 5号土坑 確認状況



2 同 完掘状況



3 6号土坑 確認状況



4 同 完掘状況



5 7号土坑 確認状況



6 同 完掘状況



7 8号・9号土坑 確認状況



8 同 完掘状況



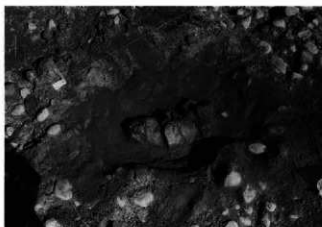
1 10号・11号・12号土坑 完掘状況



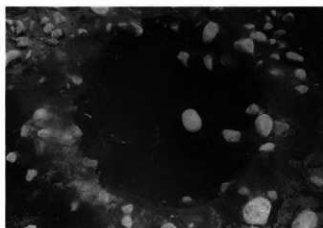
2 10号土坑 確認状況



3 同 埋土の状態



4 13号土坑 土器の出土状態



5 同 完掘状況



6 14号土坑 遺物の出土状態



7 同 完掘状況



8 15号土坑 遺物の出土状態



1 1号・2号集石土坑 周辺の遺物出土状況



2 1号・2号集石土坑 上面の確認状況



3 同 断面の状況



4 同 完掘状況



5 3号・4号集石土坑確認状況



6 同 上面の確認状況



7 同 断面の状況

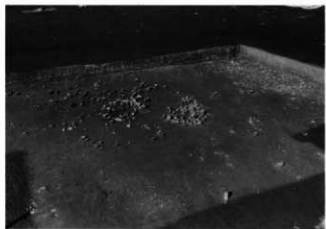


8 同 完掘状況

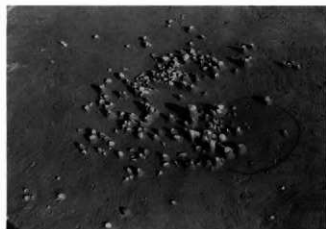


1 5～11号集石土坑 確認作業

2



3 同 様の分布状況



4 11号集石土坑 上面の確認状況



5 5～8号集石土坑 全景



6 同 完掘状況



1 5号・6号集石土坑 上面の確認状況



2 同 完掘状況



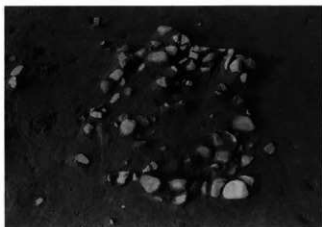
3 5号集石土坑 下面の確



4 同 埋土の状況



5 7号・8号集石土坑 完掘状況



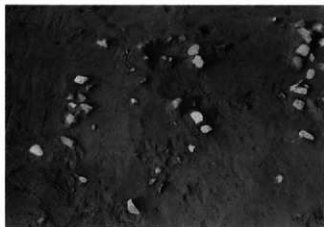
6 7号集石土坑 上面の確認状況



7 同 埋土の状況



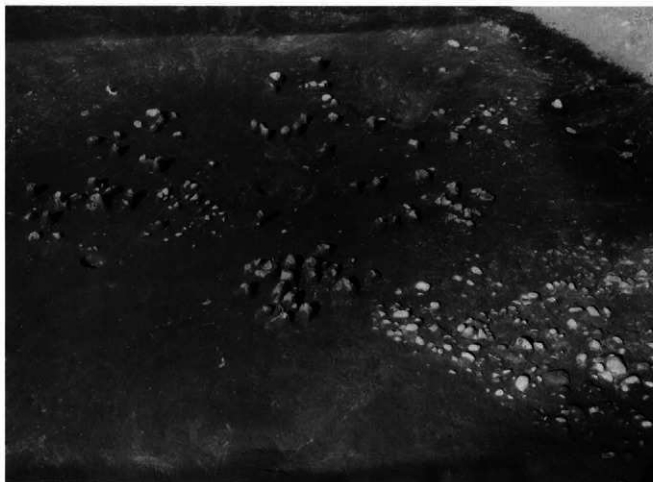
8 同 完掘状況



1 8号集石土坑 上面の標確認状況



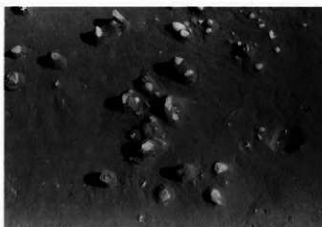
2 同 完掘状況



3 9号・10号・11号集石土坑 確認状況



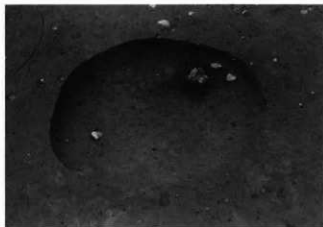
4 同 完掘状況



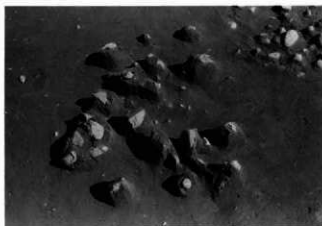
5 9号集石土坑 上面の標確認状況



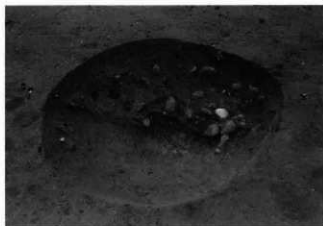
1 10号集石土坑 上面の確認状況



2 同 完掘状況



3 11号集石土坑 上面の確認状況



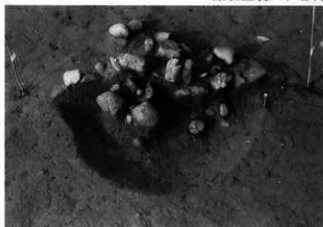
4 同 完掘状況



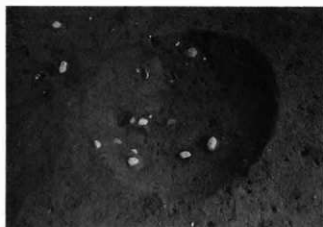
5 12号・13号・14号集石土坑 確認状況



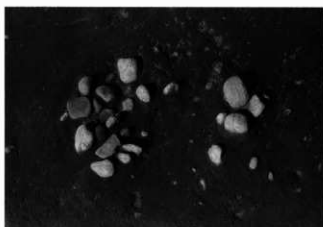
1 12号集石土坑 上面の概確認状況



同 断面



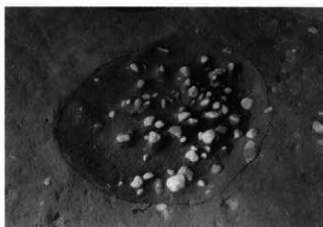
3 同 完掘状況



4 13号集石土坑 上面の概確認状況



5 同 断面



6 同 下面出土の地山礫



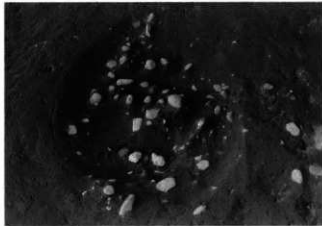
7 同 完掘状況



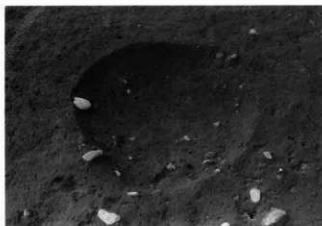
8 14号集石土坑 上面の概確認状況



1 14号集石土坑断面



2 同 下面出土の地山礫



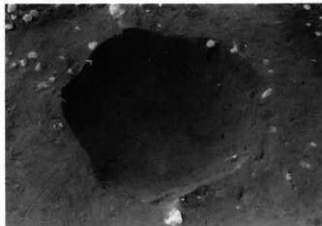
3 同 完掘状況



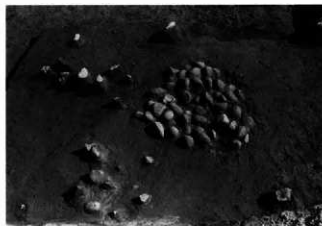
4 15号集石土坑 確認状況



5 同 断面



6 同 完掘状況



7 16号集石土坑 上面の礫



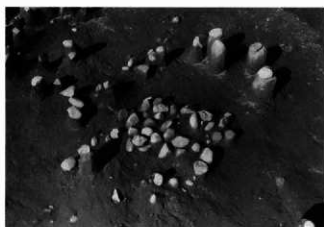
8 同 下面の礫確認状況



1 16号集石土坑 断面



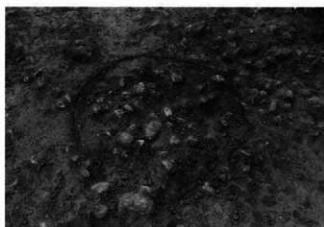
2 同 発掘状況



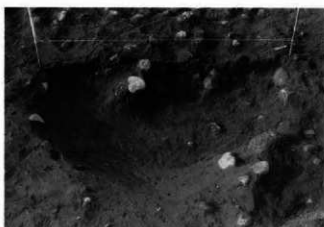
3 17号集石土坑 確認状況



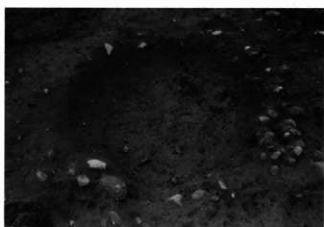
4 同 断面



5 同 集石下土坑の確認状況



6 同 断面



7 同 発掘状況



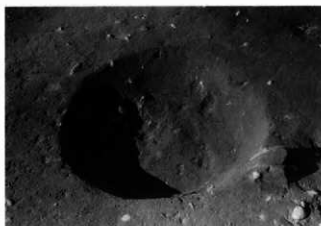
8 18号集石土坑 確認状況



1 18号集石土坑 上面の概確認状況



2 同 下面の概の状態



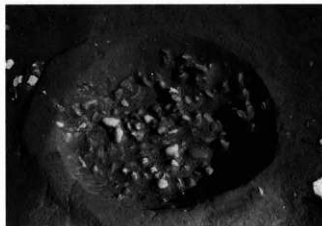
3 同 完掘状況



4 19号集石土坑 上面の概確認状況



5 同 断面



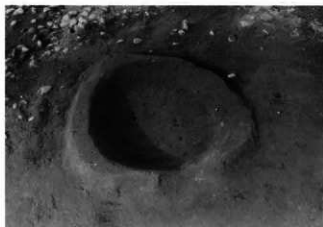
6 同 完掘状況



7 20号集石土坑 上面の概確認状況



8 同 断面



1 20号集石土坑 完掘状況



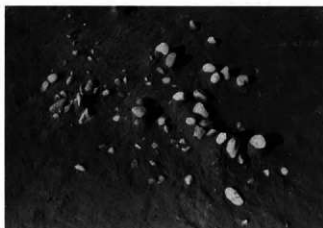
2 21号集石土坑 上面の礫確認状況



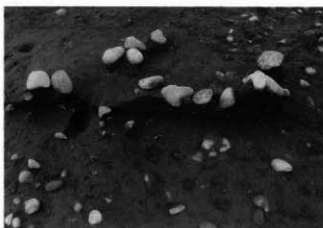
3 22号集石土坑 断面の確認状況



4 同2 下面の状況



5 1号配石 確認状況



6 同 部分



7 2号配石 確認状況



8 同 大型礫の出土状況



1 3号配石 確認状況



2 4号配石 確認状況



3 5号・6号配石 確認状況



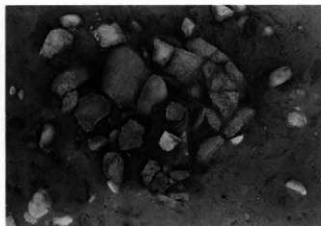
4 5号配石 全景



5 6号配石 全景



6 7号配石 確認状況



7 同 縄下出土土器の状態



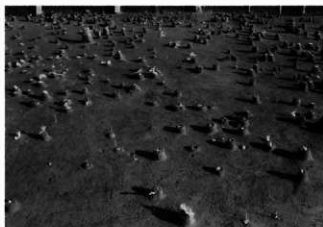
8 同 7



1 3区 遺物の出土状況（南から）



2 同1（西から）



3 同1（部分）



4 同1（部分）



5 同1（部分）



6 同1（部分）



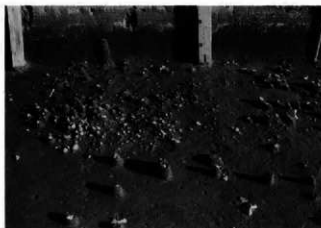
7 3区 遺構の確認状況



8 3区 雪中での作業風景



1 3区 遺構確認面下 地山礫の状況



2 同1 (部分)



3 同1 地山礫サンプル採取地点



4 同1 (部分)



5 同1 地山礫下土層の堆積状況



1 3区 遺物包含層の状況 (南から)



2 4区南側北半部 遺物の出土状況



1 4区東半部 遺物包含層の調査状況(上面)



2 岡1 石棒の出土状況



3 岡2 土偶の出土状況



4 岡3



5 岡1 遺物の取り上げ作業



1 4区東半部 遺物包含層の調査状況



2 同1 (西から)



3 同1 (東から)



4 同1 遺物出土状況



5 同4



1 4区東半部 遺物包含層 大型礫の出土状況



2 同1 遺物出土状況



3 4区東半部 遺物包含層最下面の調査



4 同3 垂玉の出土状況



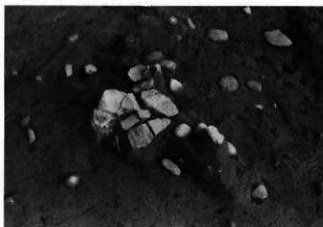
5 同4



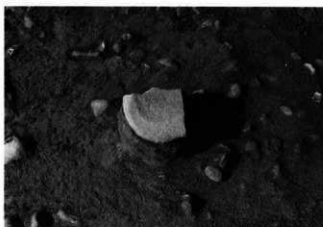
1 4区西半部 遺物包含層下面 (K-23グリッド付近)



2 同1 (K-25グリッド付近)



3 同1 一括土器出土状況



4 同2 石皿出土状況



5 同1 鱗片出土状況



6 同5



7 同1 黒曜石核出土状況 (P-28グリッド)



8 同7



1 4区西半部 遺構確認状況



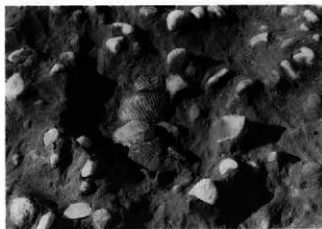
2 同1 地山礫の状況



3 同2



4 同2



5 同4 地山礫に落ち込んだ遺物



1 4区中央部 旧河道の確認状況



2 4区西半部遺物の出土状況と旧河道



1 4区中央部 旧河道の調査状況



2 図1 旧河道の埋没状況



3 図2



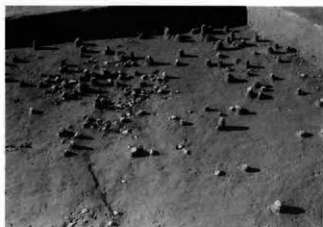
4 図2 最下層に砂礫層が見られる



1 4区東半部南側の遺物出土状況(東から)



2 同1



3 同1



4 同1 台付香炉形土器出土状況



5 4区東半部 旧河道上面の調査



1 4区東半部 旧河道上面 遺物の出土状況



2 同1



3 同1



4 同1



5 同1



1 4区西半部 遺構面下の確認調査



2 4区 深掘り断面 (J-23グリッド)



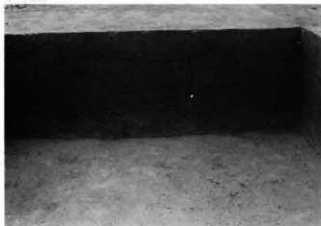
3 同2



4 同1 (L-25グリッド)



5 同4 断面



1 4区西中部 遺構面下の確認調査 (P-26グリッド断面)



2 同1 (M-23グリッド)



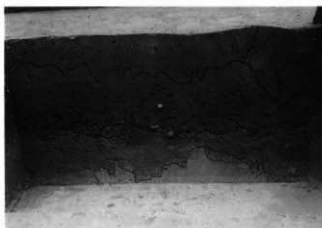
3 同1 (L-24グリッド)



4 同3 断面



5 同1 (O-24グリッド)



6 同5 断面



7 同1 (M-24グリッド)



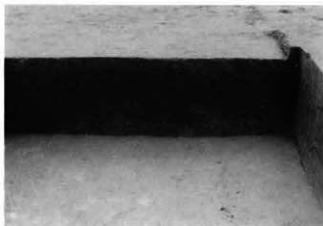
8 同1 (P-26グリッド)



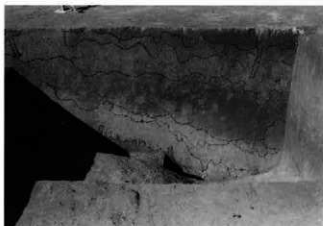
1 4区西半部 遺構面下の確認調査 (P-27グリッド)



2 同1 (P-26グリッド断面)



3 同1 (R-28グリッド断面)



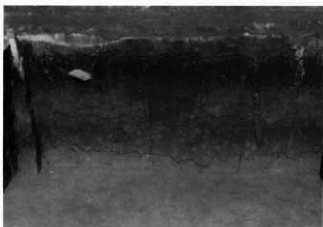
4 同1 (R-29グリッド断面)



5 4区東半部 遺物包含層確認調査



6 同5 (Q-31グリッド)



7 同5 (P-31グリッド断面)



8 同5 (O-31グリッド断面)



1 5区 遺物包含層の状況 (西から)



2 同1 (Q-34グリッド周辺)



3 同2

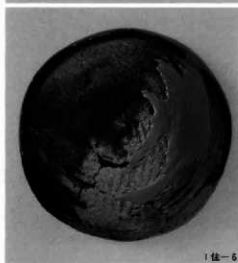
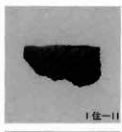
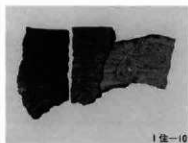


4 同1



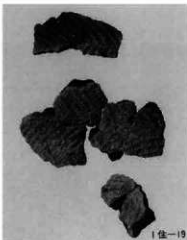
5 同1



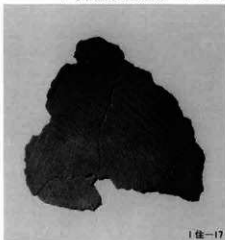




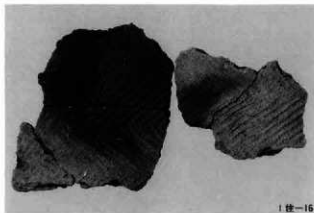
I住-18



I住-19



I住-17



I住-16



I住-21



I住-20



I住-28



I住-22



I住-23



I住-24



I住-29



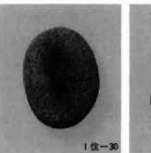
I住-25



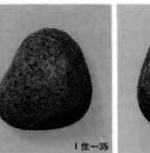
I住-26



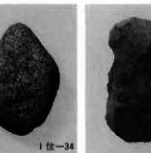
I住-33



I住-30



I住-35



I住-34



I住-27



I住-31



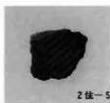
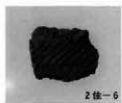
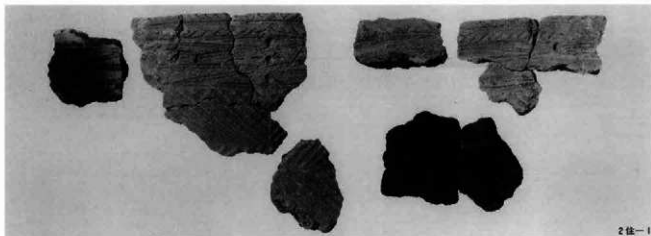
I住-32

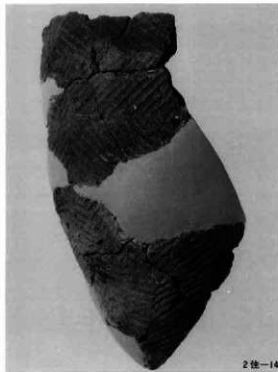
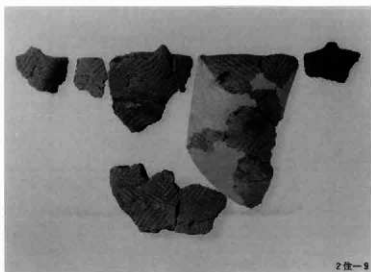
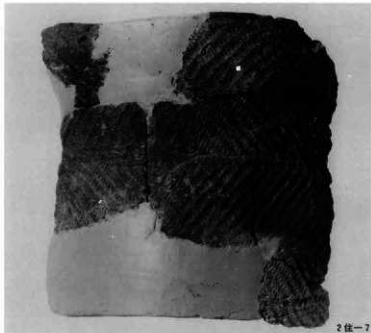


I住-39

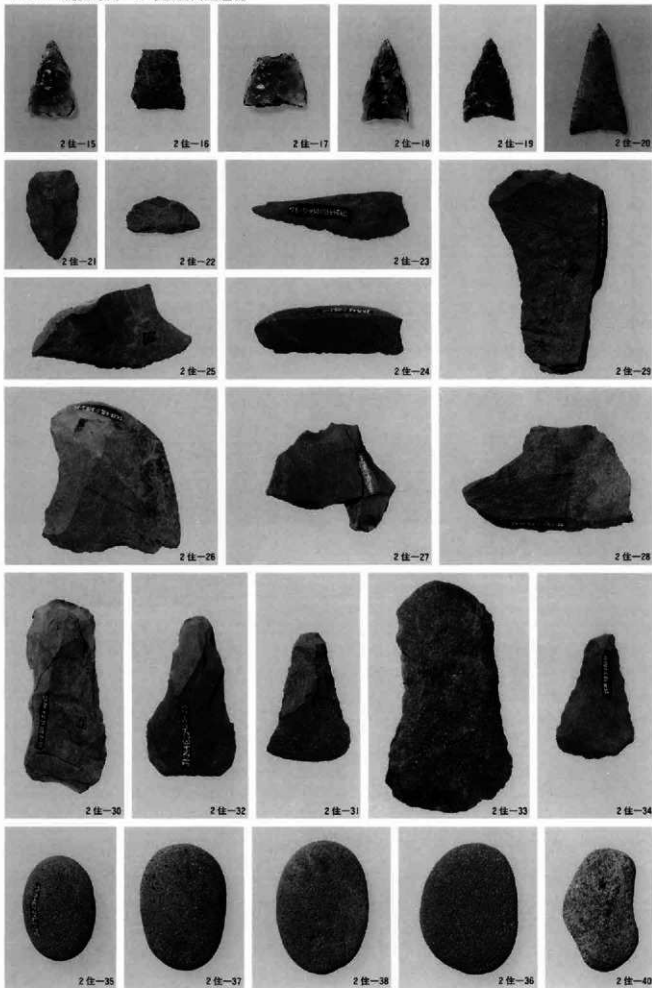


I住-37





PL 44 縄文時代 2号住居出土遺物





2位-39



2位-42



2位-41



2位-43



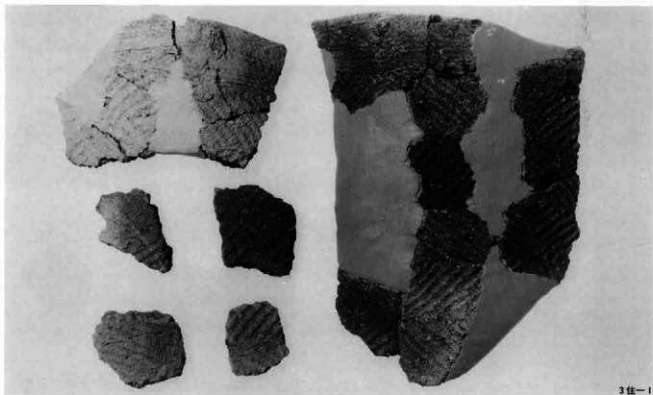
2位-44



2位-46



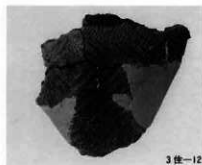
2位-45



3位-1



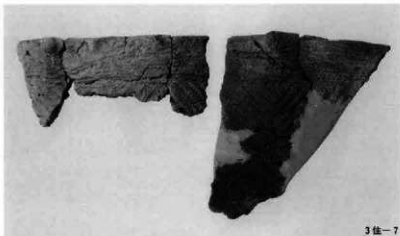
3位-13



3位-12



3位-14



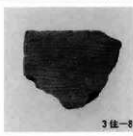
3住-7



3住-3



3住-2



3住-8



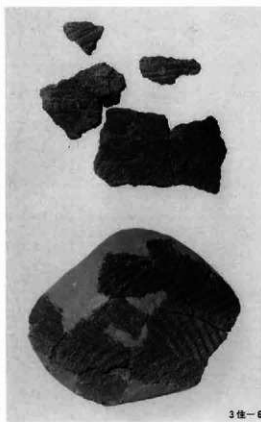
3住-15



3住-20



3住-4



3住-6



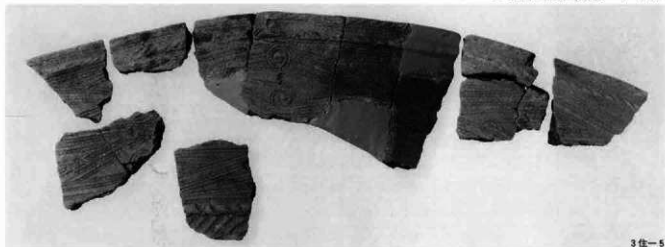
3住-19



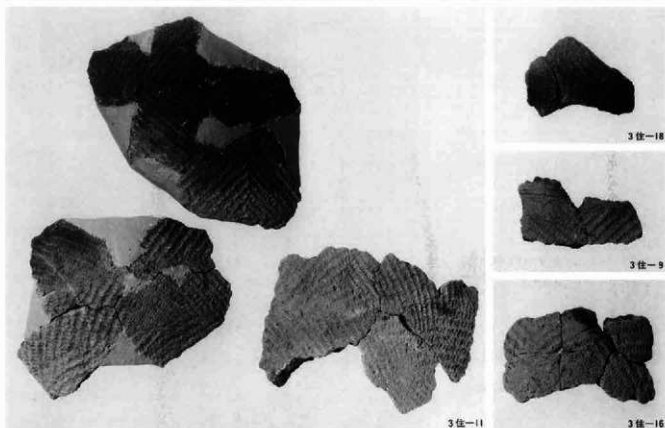
3住-10



3住-17



3 位-5



3 位-18

3 位-9

3 位-11

3 位-16



3 位-24

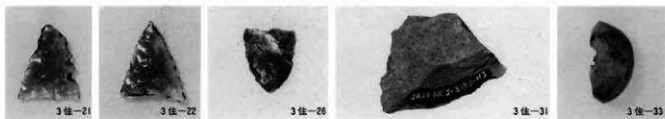
3 位-25

3 位-23

3 位-27

3 位-28

3 位-29



3 位-21

3 位-22

3 位-26

3 位-31

3 位-33



3位-34



3位-35



3位-36



3位-37



3位-38



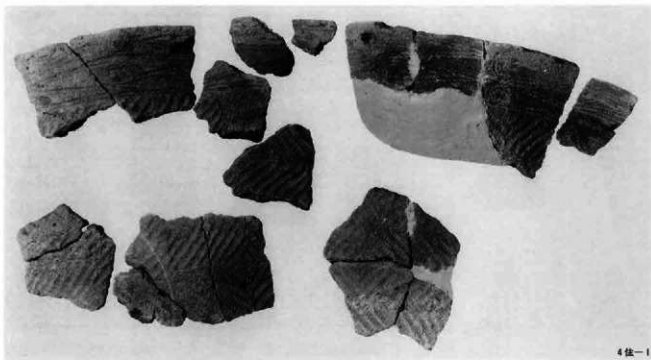
3位-30



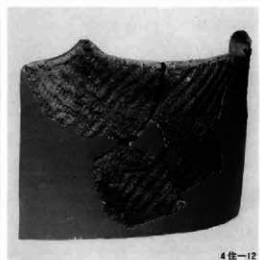
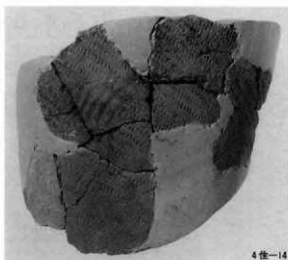
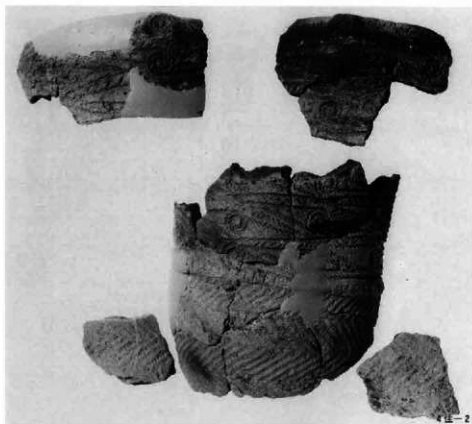
3位-32

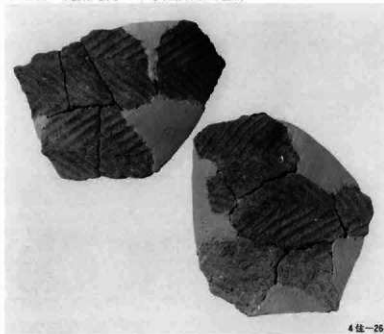


3位-39



4位-1





4位-25



4位-35



4位-23



4位-42



4位-16



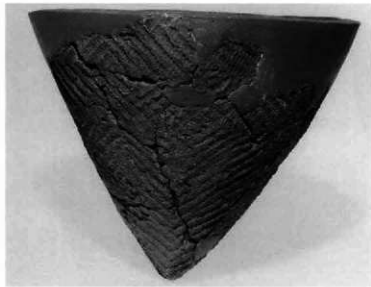
4位-4



4位-21



4位-24



4位-15



4位-25



4位-27



4位-38



4位-28



4位-29



4位-34



4位-33



4位-31



4位-30



4位-40



4位-36



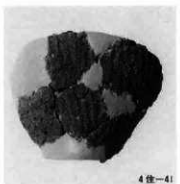
4位-37



4位-43



4位-32



4位-41



4位-39



4位-52



4位-55



4位-54



4位-48



4位-49



4位-47



4位-56



4位-57



4位-44



4位-50

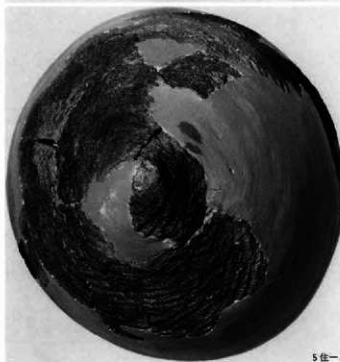


4位-46



4位-53





5 位-2



5 位-3



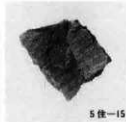
5 位-12



5 位-6



5 位-5



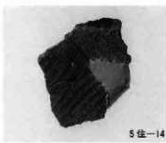
5 位-15



5 位-16



5 位-11



5 位-14



5 位-13



5 位-8



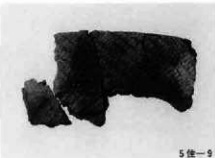
5 位-7



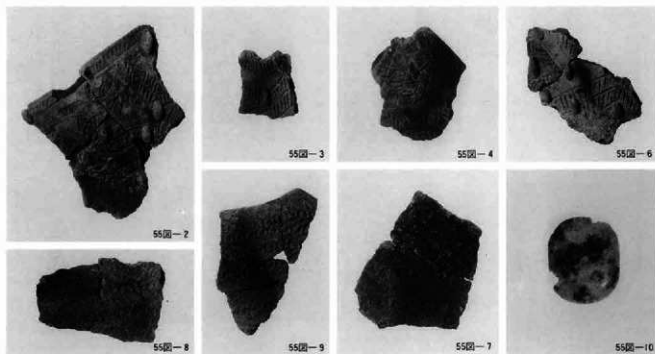
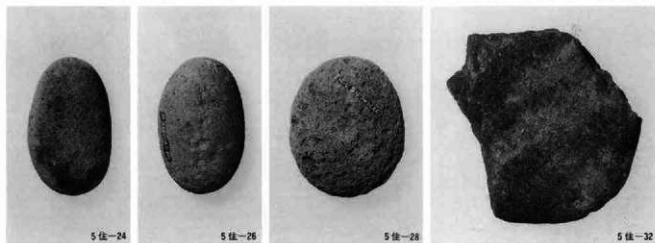
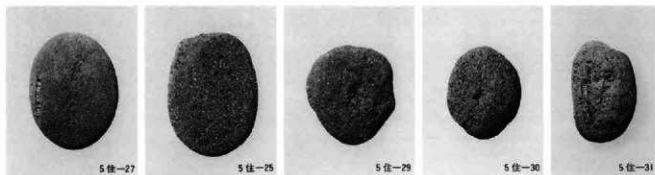
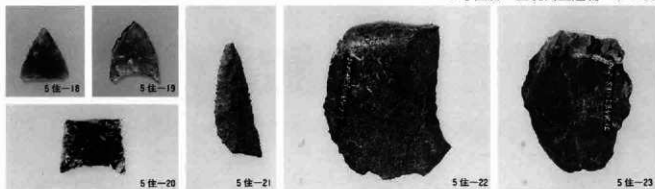
5 位-10

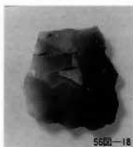
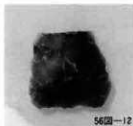


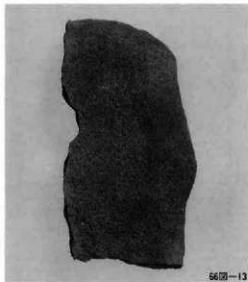
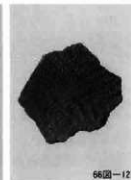
5 位-17

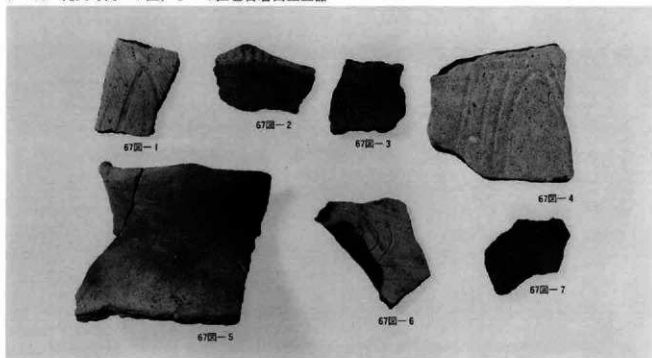


5 位-9

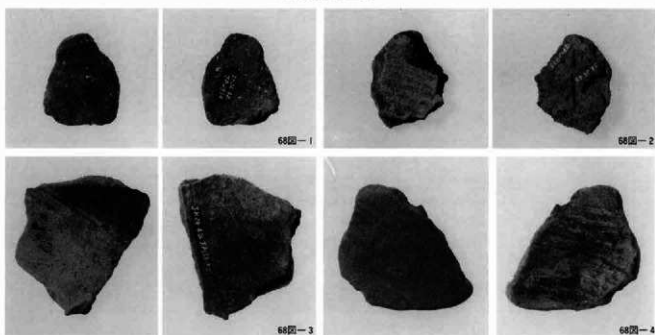




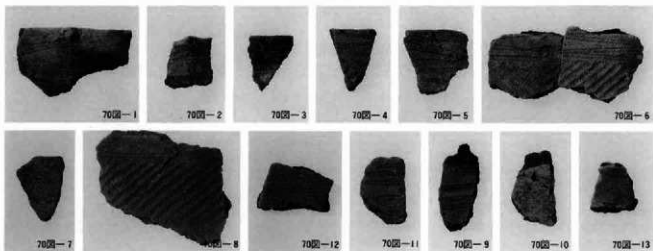




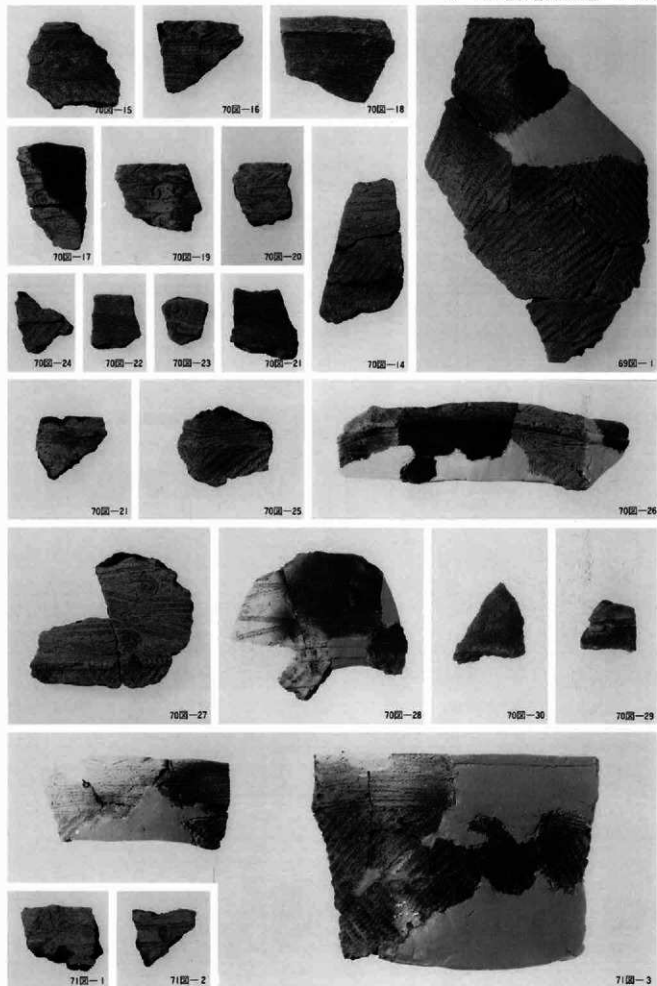
I区包含層出土土器



条痕文系土器 (3・4区)

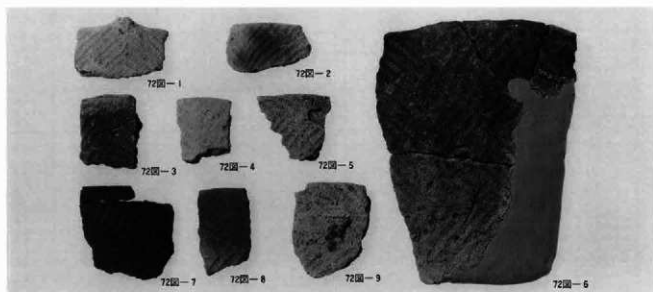
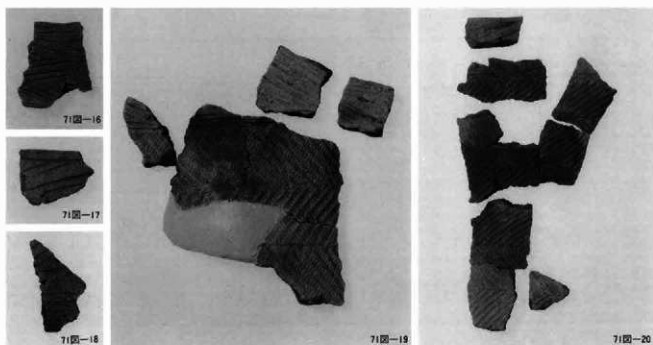
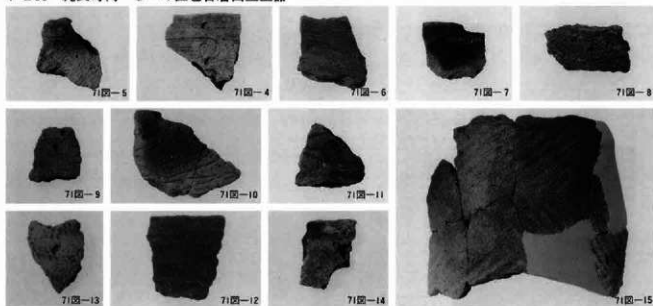


花積下層式土器 (3・4区)

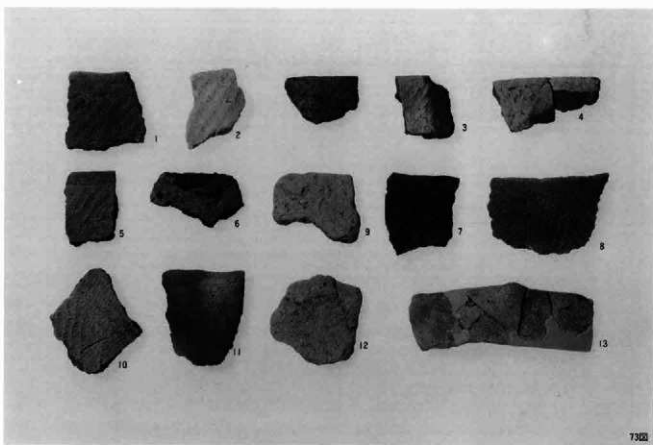
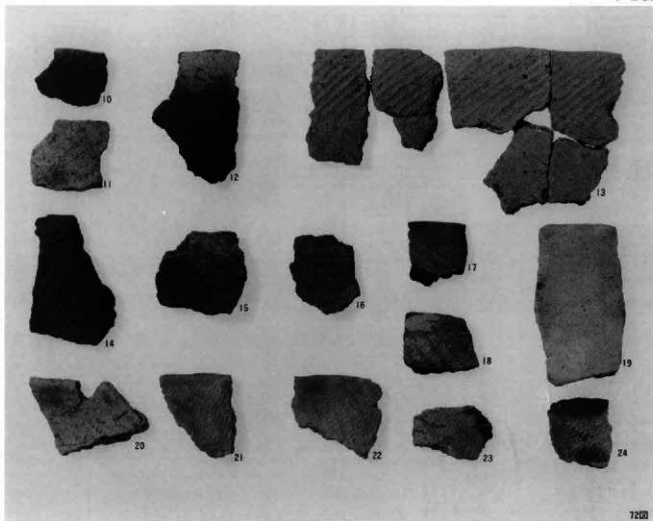


花横下層式土器

P L 60 縄文時代 3・4区包含層出土土器



花横下層式土器

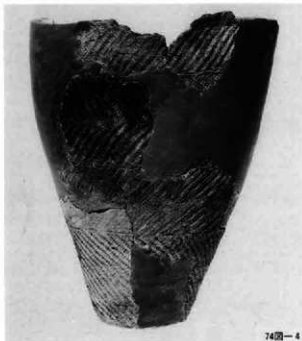




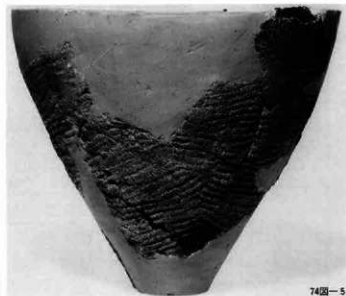
74図-1



74図-3



74図-4



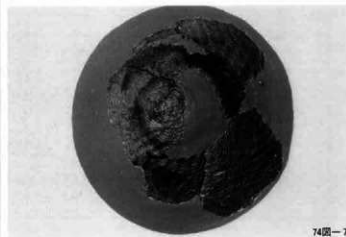
74図-5



74図-2

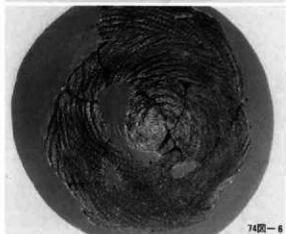


74図-7





7500-2



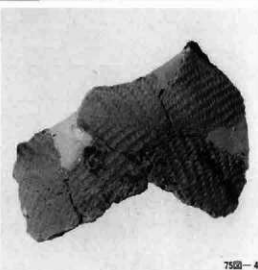
7400-6



7500-1



7500-5



7500-4



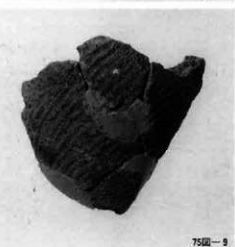
7500-3



7500-6



7500-8

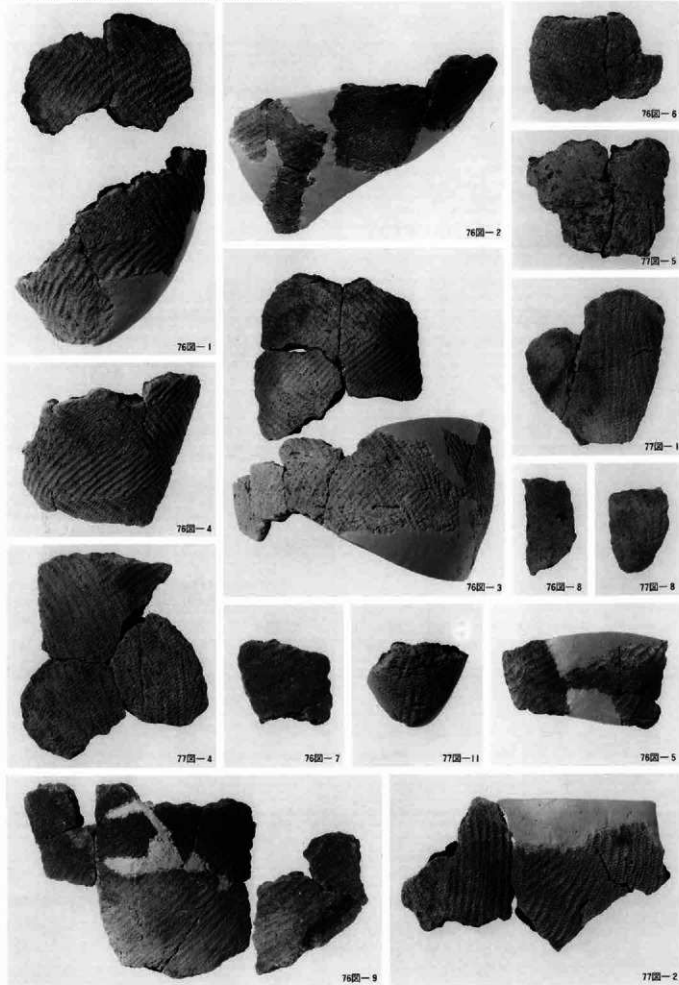


7500-9

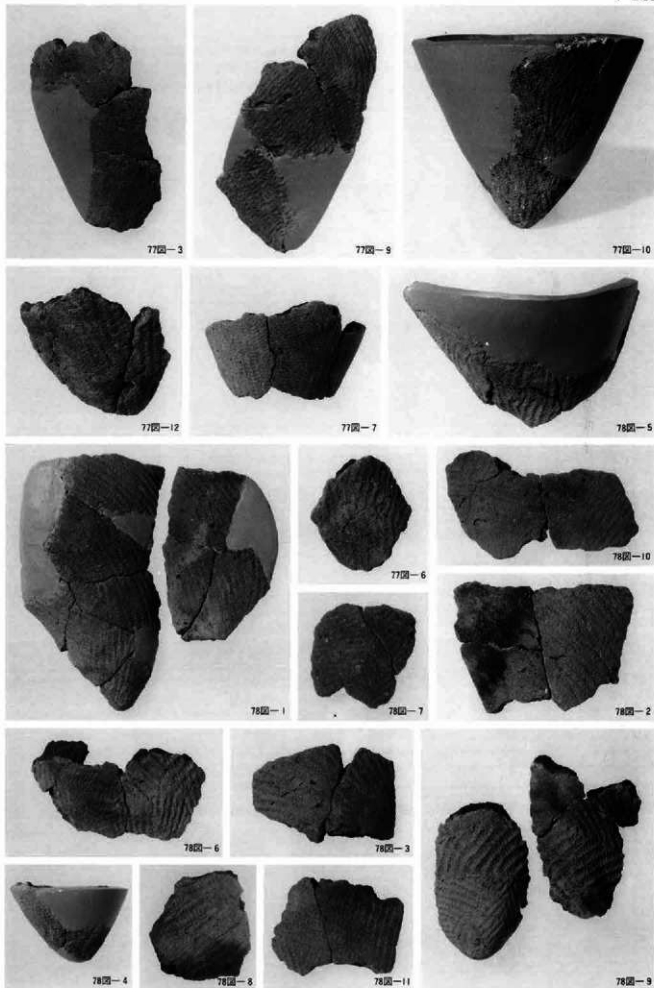


7500-7

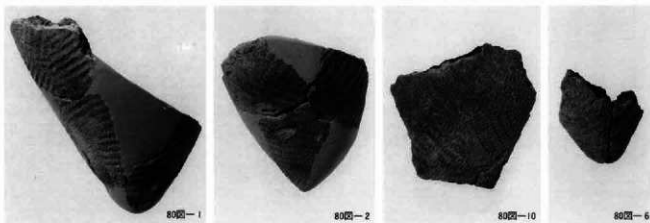
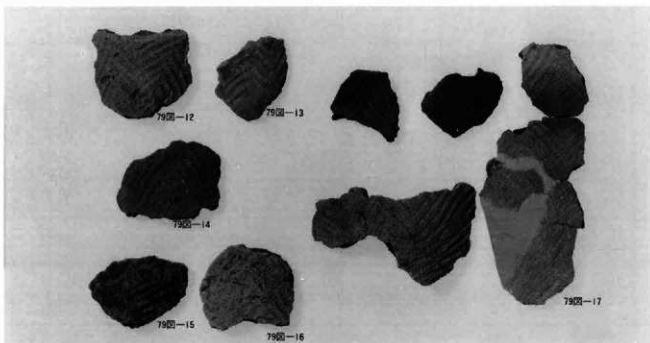
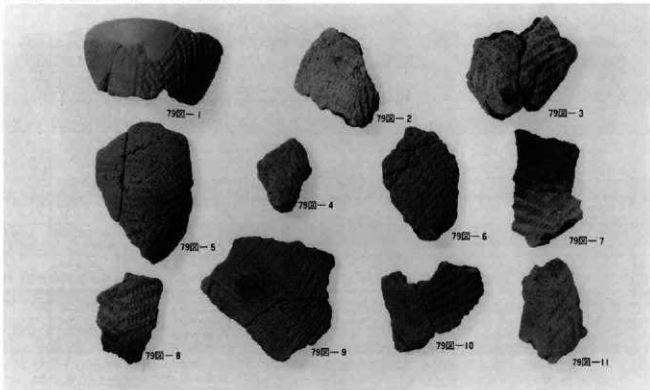
花模下層式土器



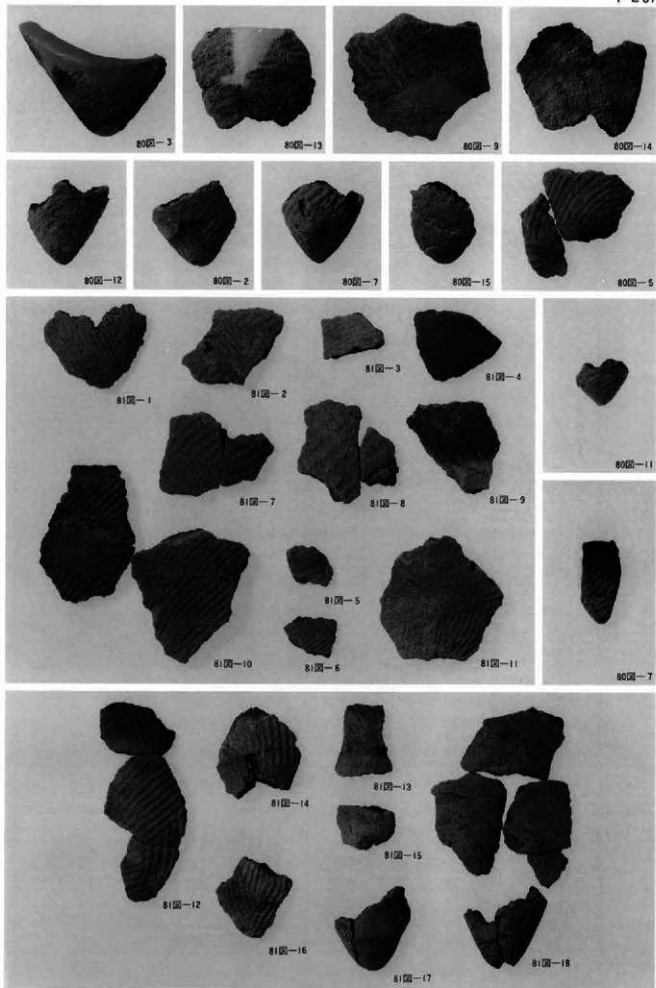
花楨下層式土器



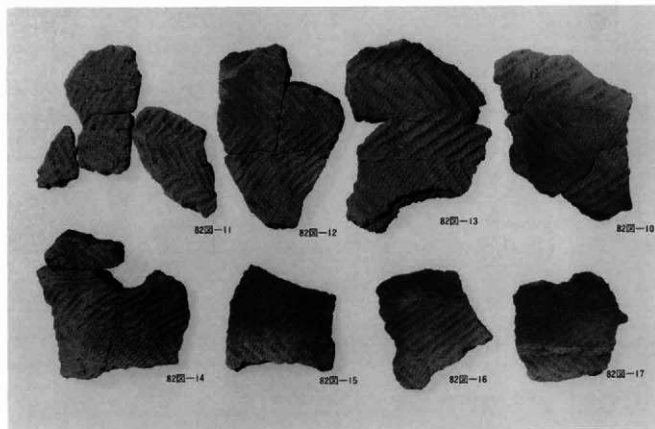
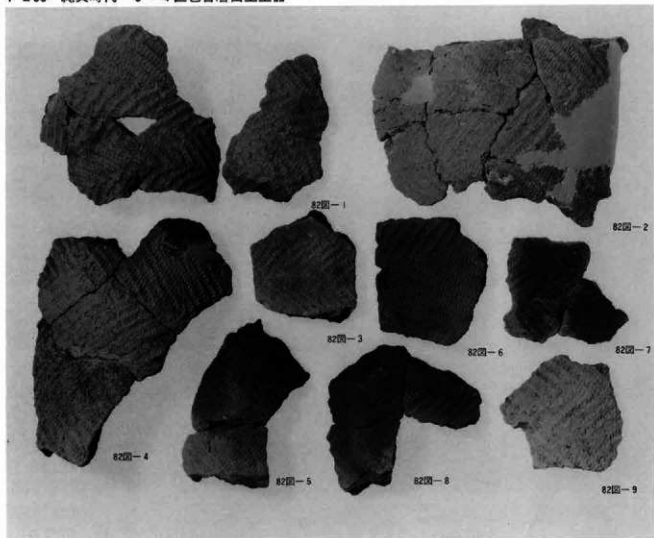
花横下層式土器



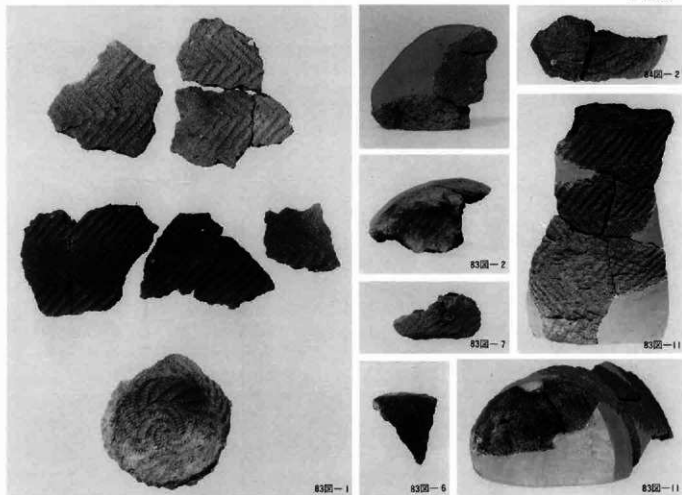
花横下層式土器



花横下層式土器



花積下層式土器



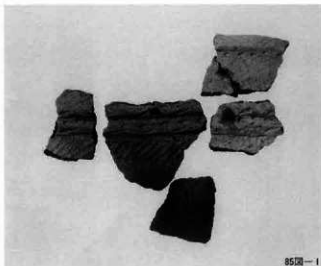
花積下層式土器



関山式土器



85図-10



85図-1



85図-6



85図-2



85図-4



85図-5



85図-9



85図-8



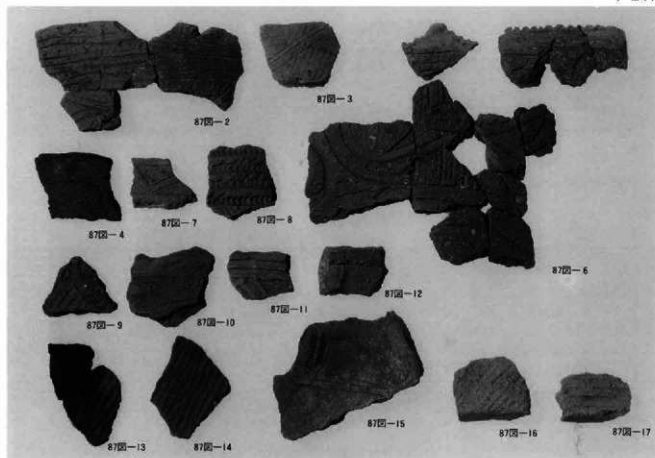
85図-3



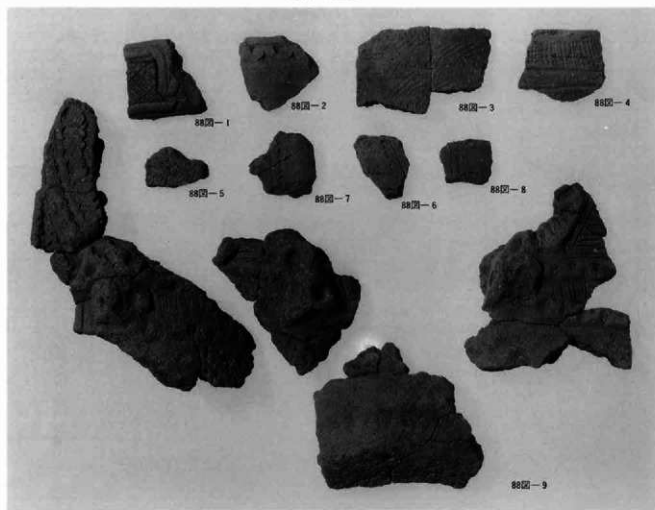
87図-1

ニツ木式土器

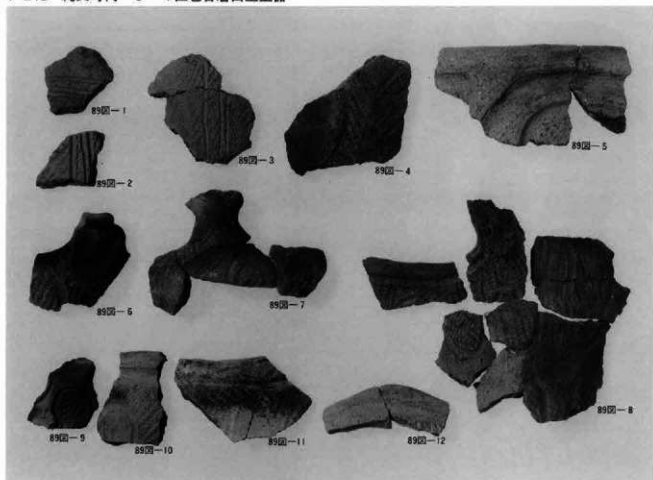
猪俣式土器



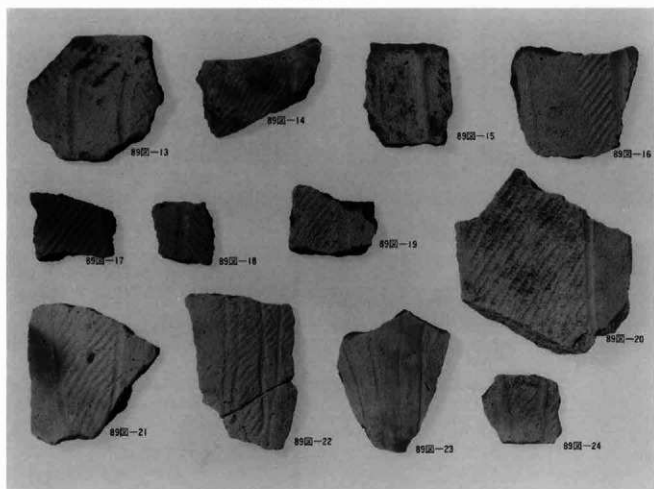
諸磯b式土器



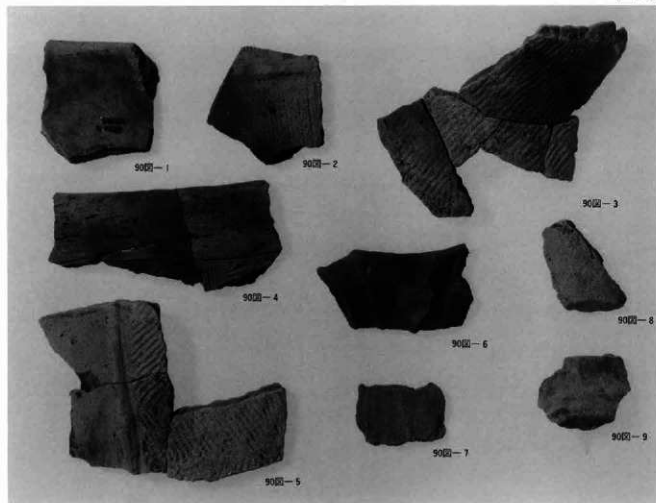
五領ヶ台式・勝板式土器



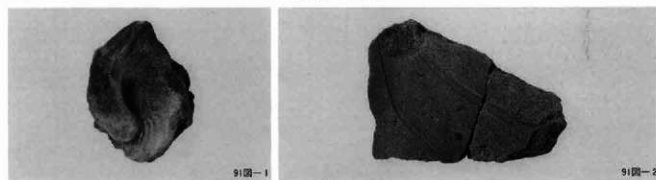
加曾利 E 2 式・同 3 式土器



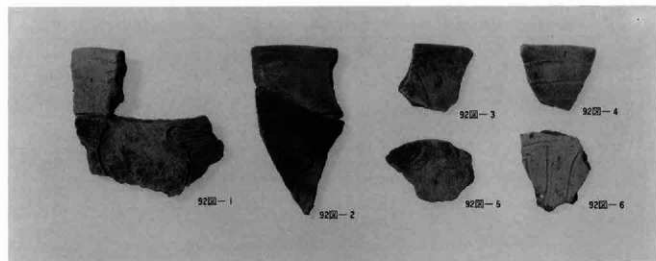
加曾利 E 3 式土器



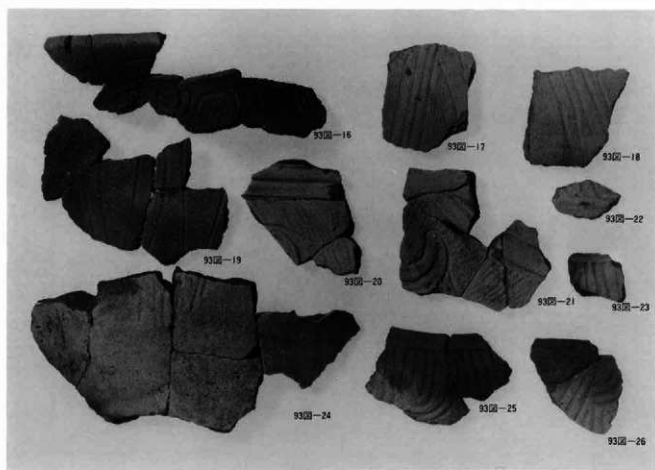
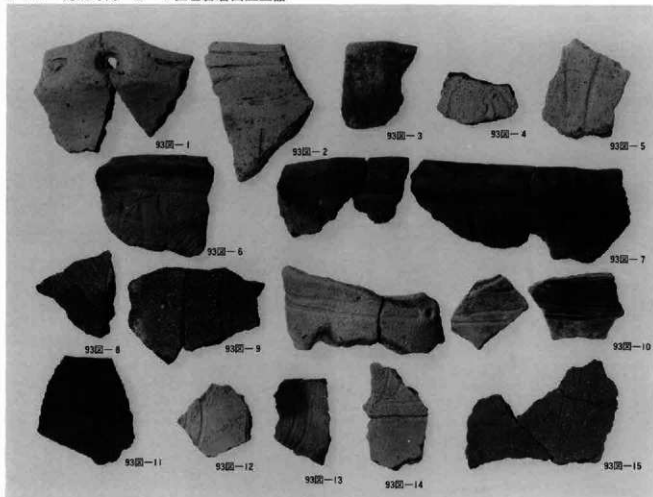
加曾利 E 4 式土器



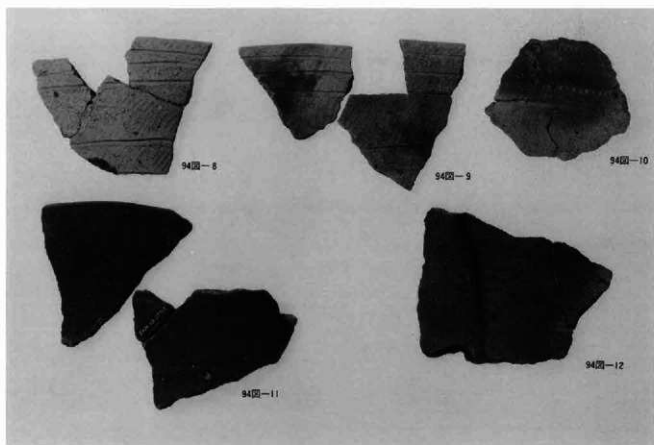
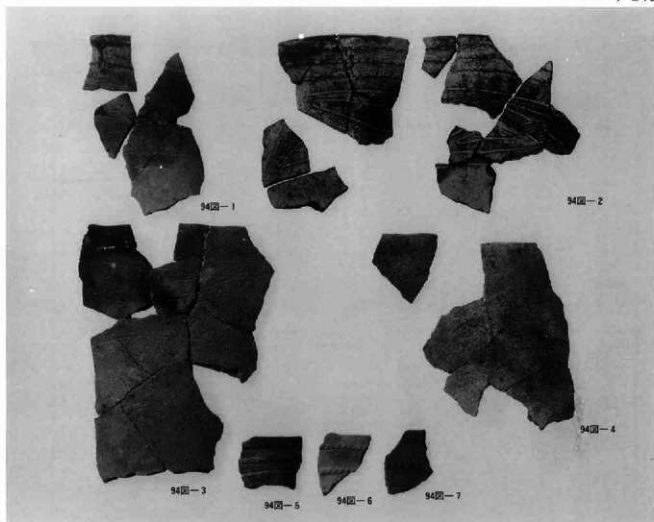
称名寺 I 式土器



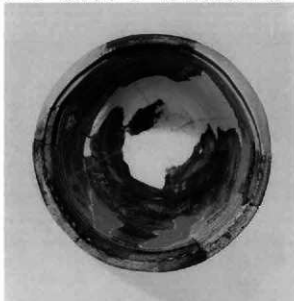
称名寺 II 式土器



堀之内 I 式土器



櫃之内Ⅱ式土器



95図-2



95図-6



95図-3



95図-7



95図-8

95図-9

堀之内式・加曾利B式土器



95圖-1



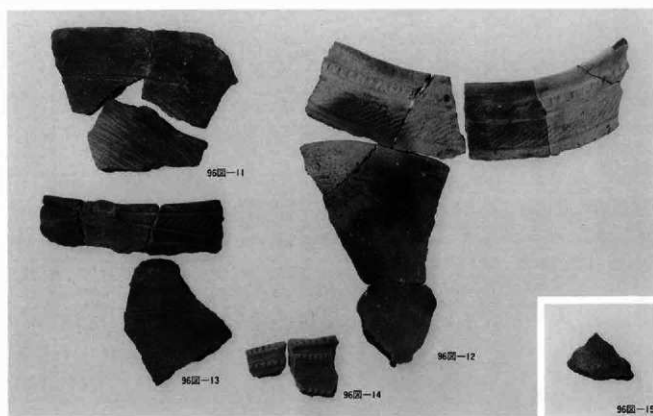
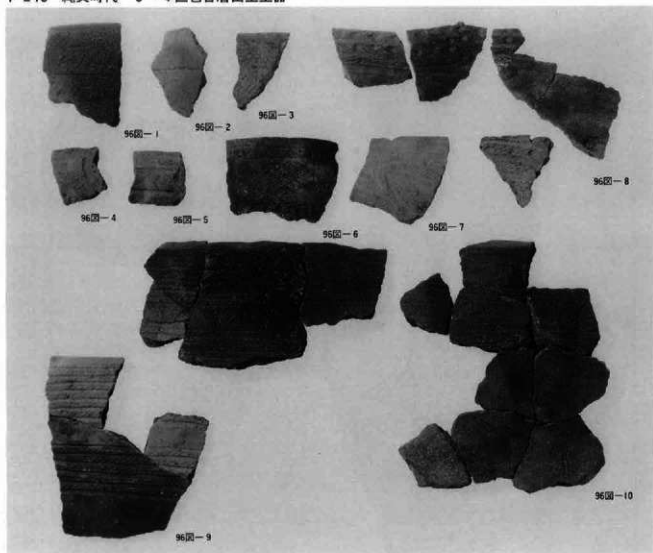
96圖-4



96圖-4



95圖-5



加曾利B式土器



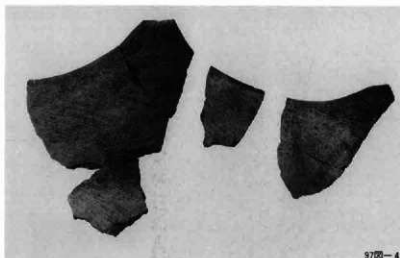
97圖-1



97圖-2



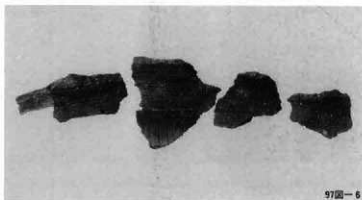
97圖-3



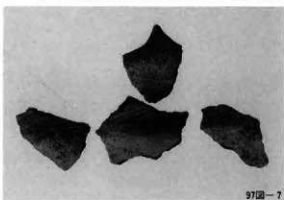
97圖-4



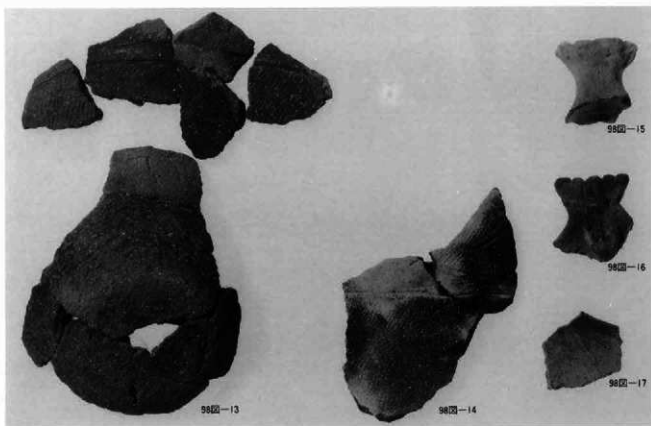
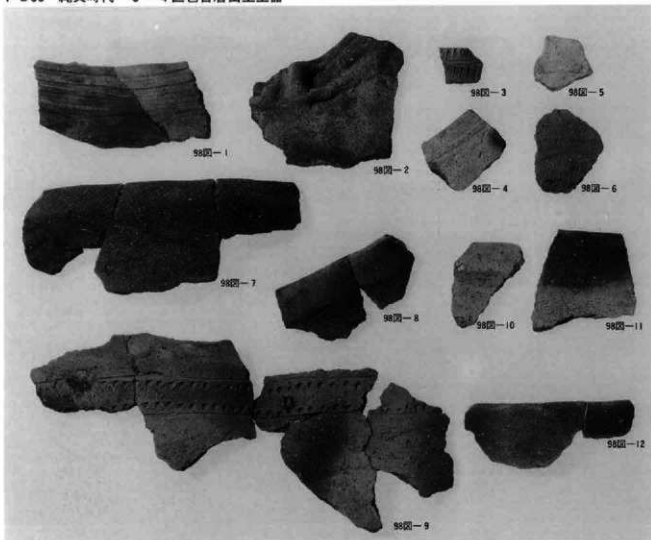
97圖-5



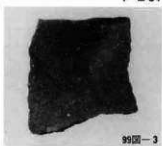
97圖-6



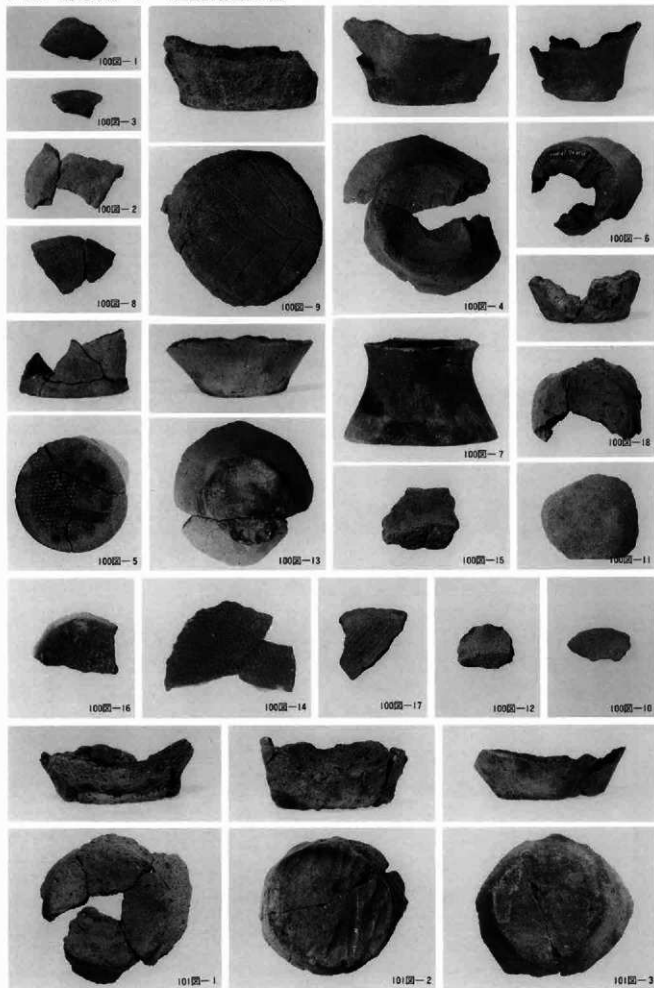
97圖-7

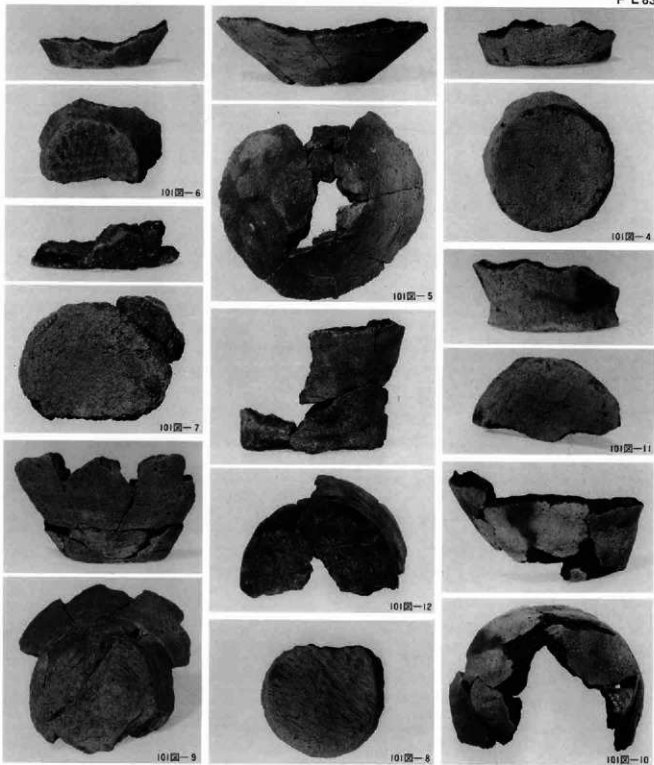


曾谷式・安行式土器

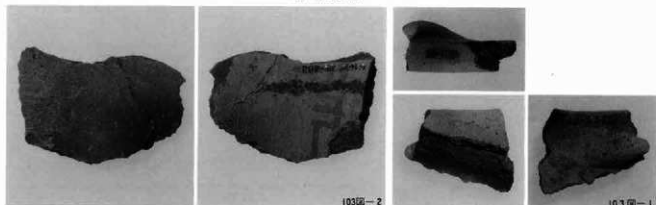


後・晩期土器

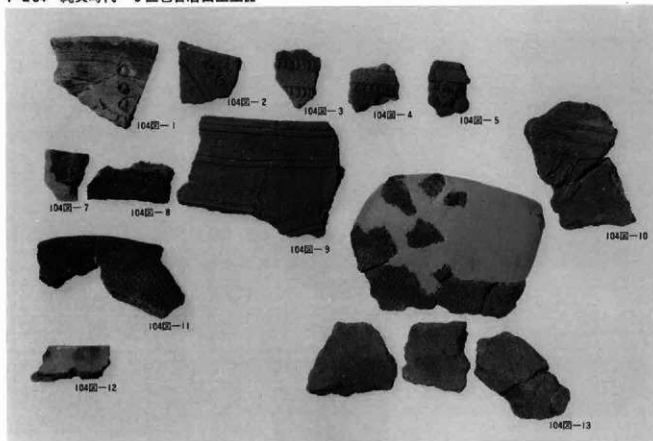




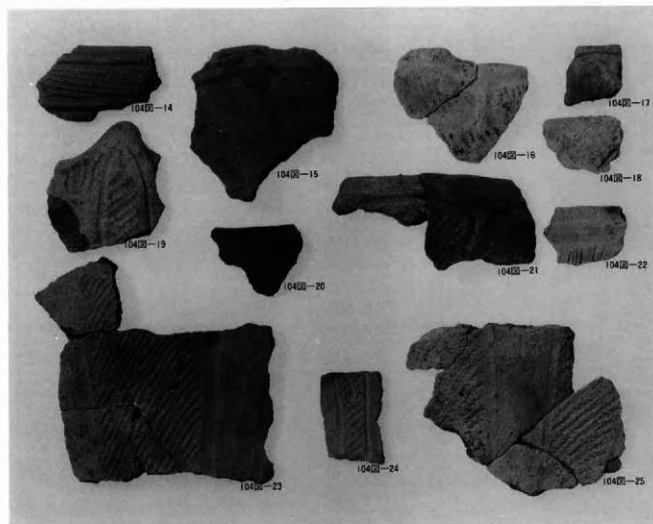
後・晩期土器



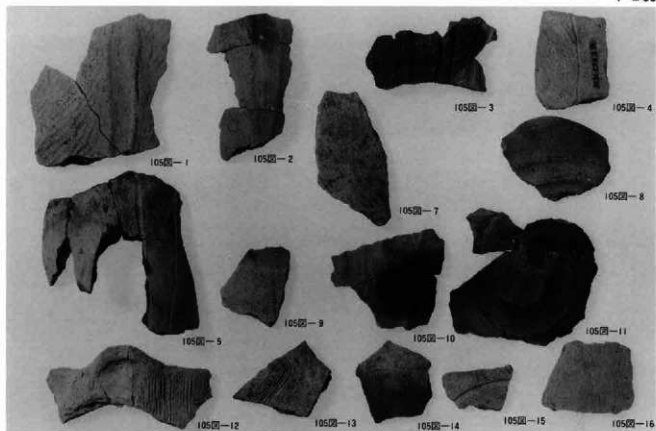
特殊土器



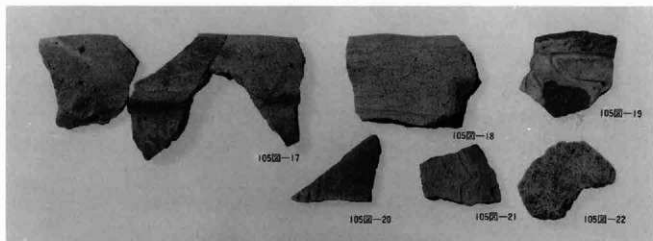
銘機 a 式・岡 b 式土器



加曾利 E 2 式・岡 3 式土器



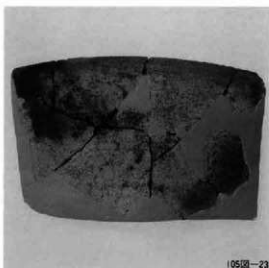
加曾利 E 3 式土器



称名寺 I 式・同 II 式土器

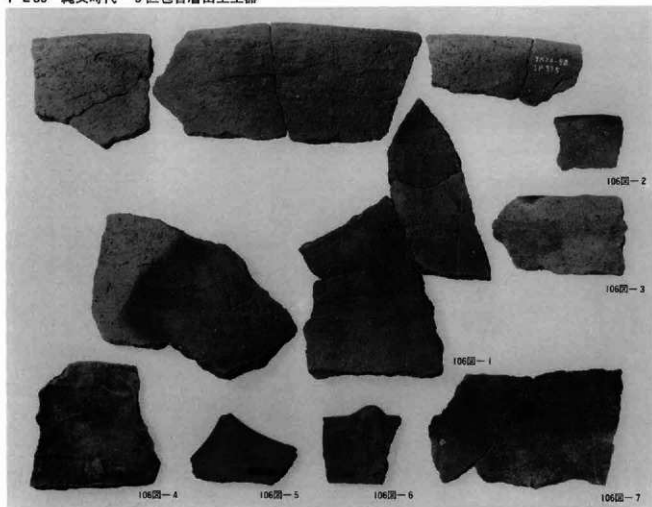


105図-23

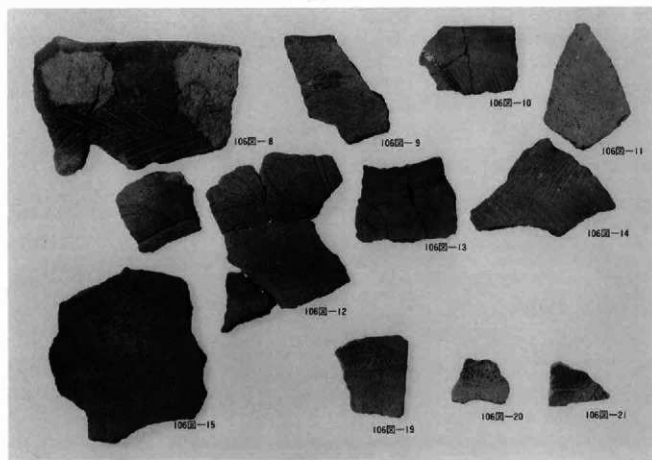


105図-23

堀之内 II 式土器



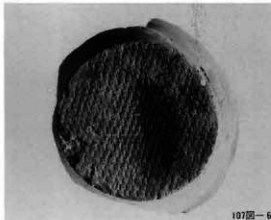
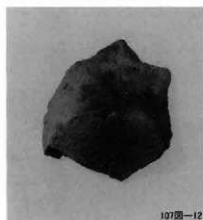
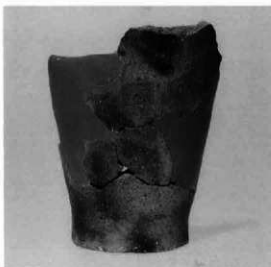
加曾利B式土器



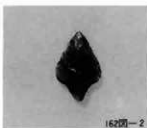
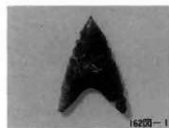
加曾利B式土器



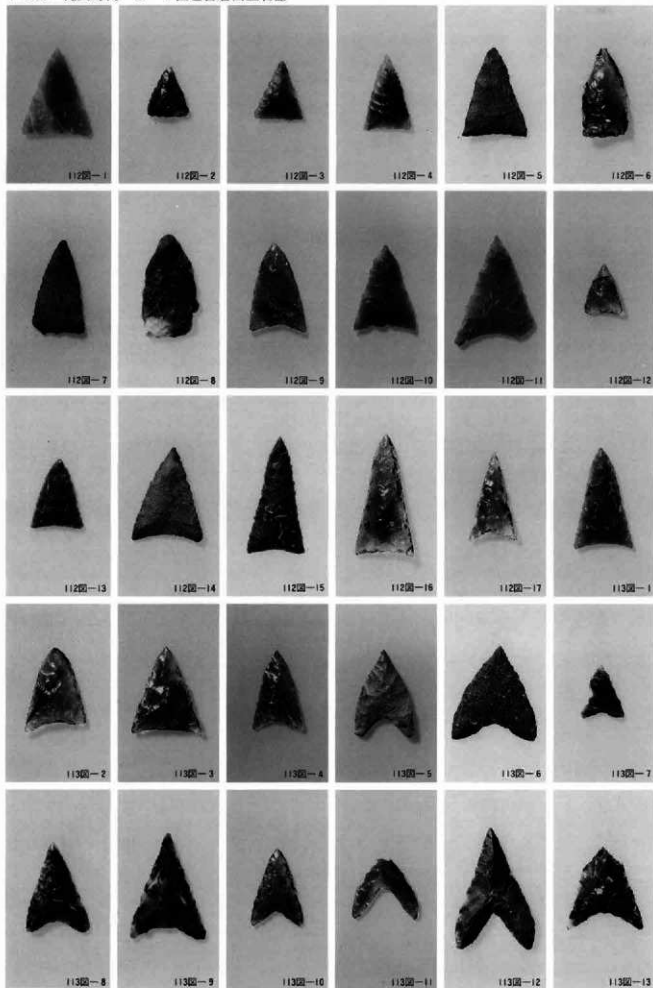
安行式土器

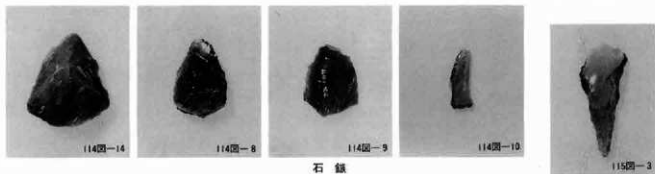
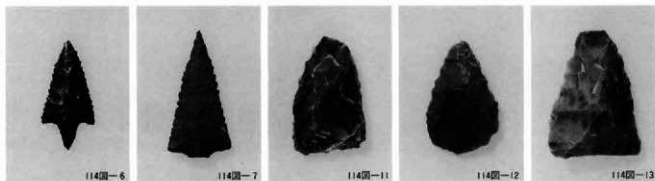
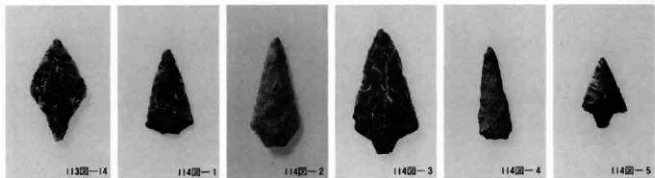


後・晚期土器

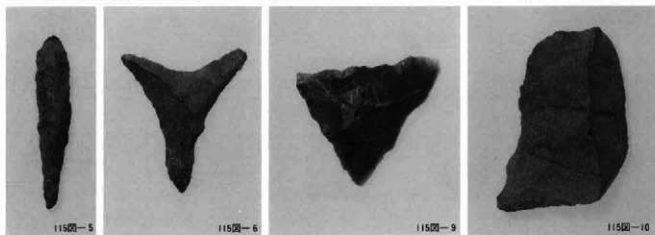
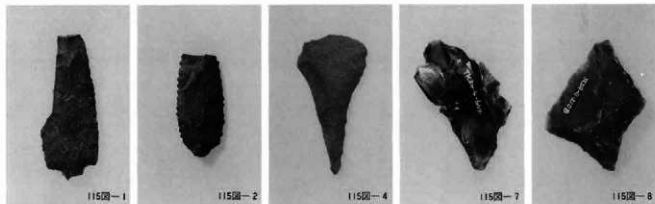


5区包含層出土石器

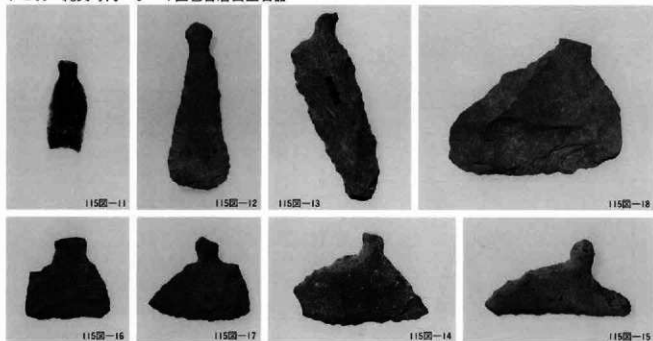




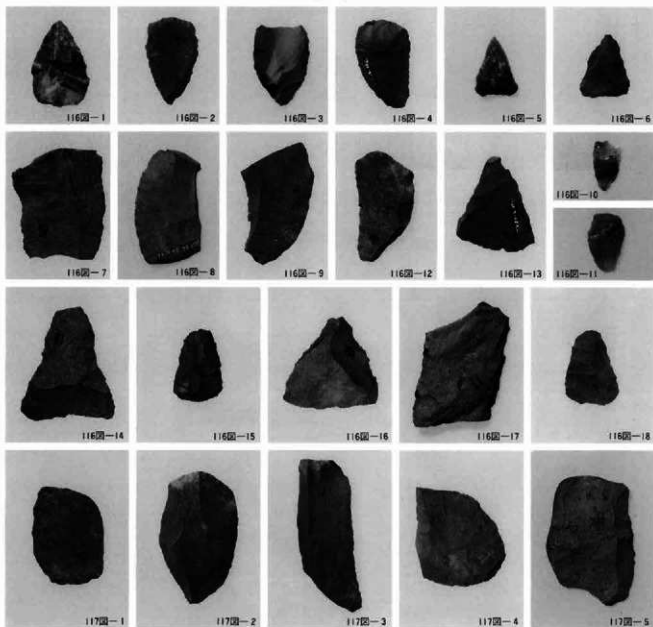
石鏃



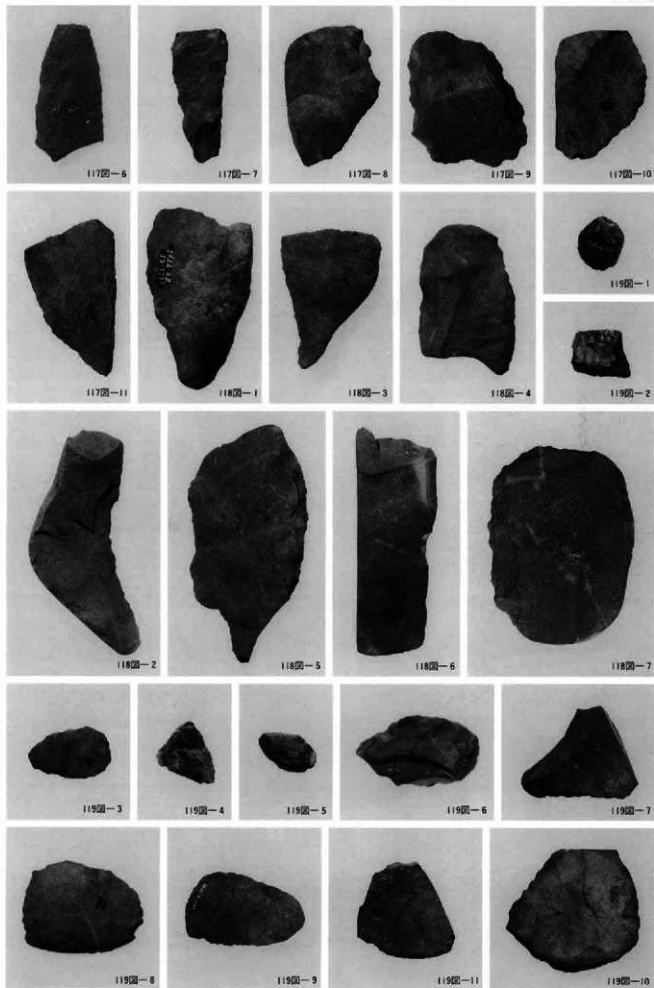
有舌尖頭器・石鏃

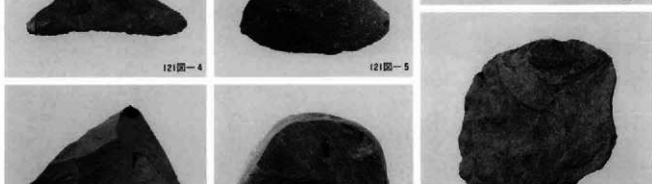
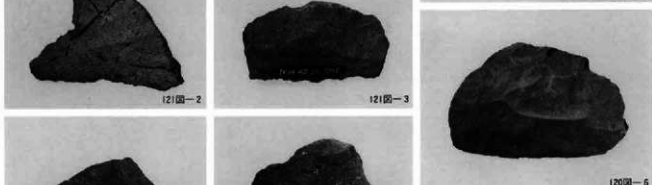
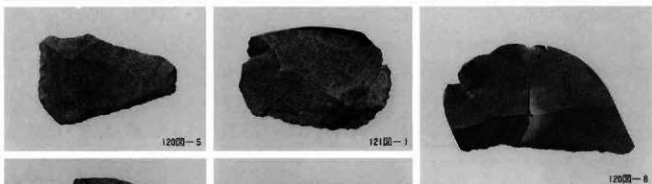
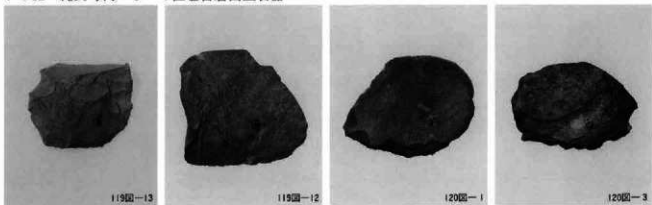


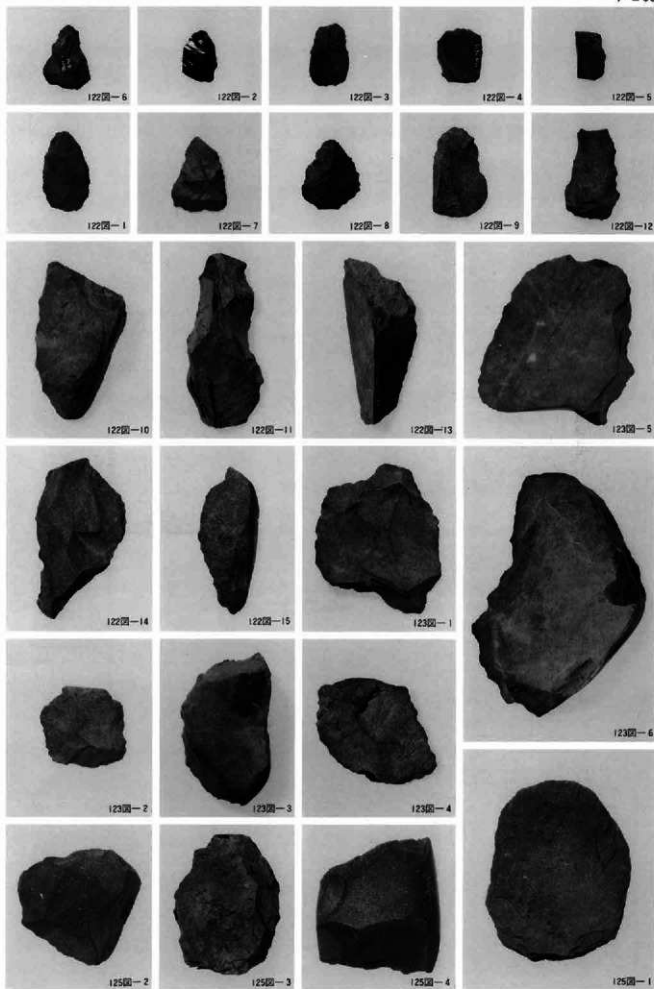
石 匙



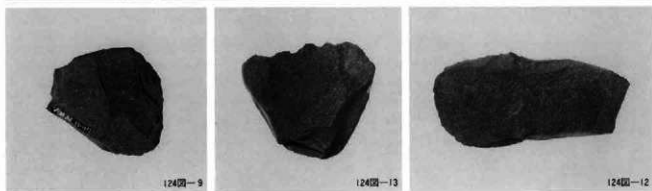
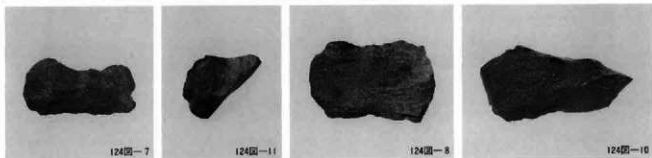
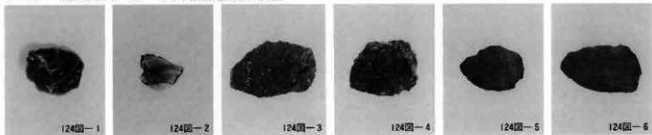
削 器



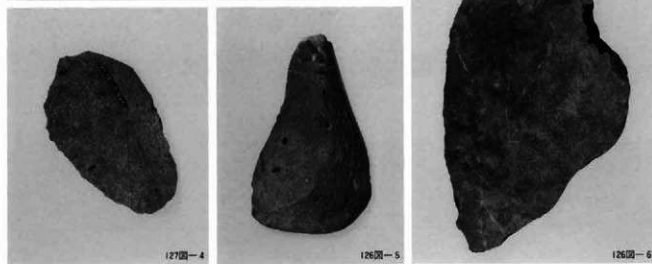
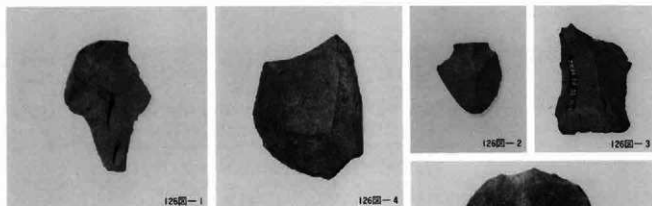


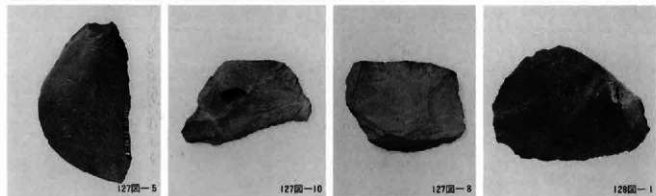
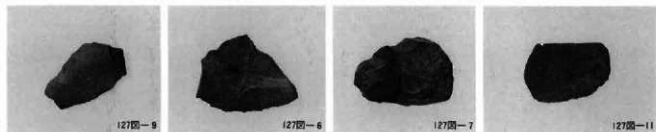
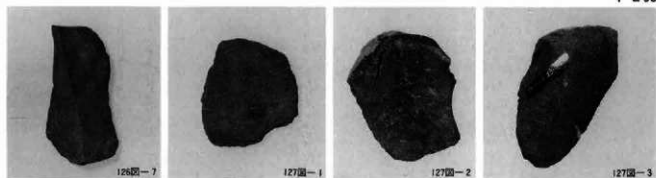


加工痕ある剥片

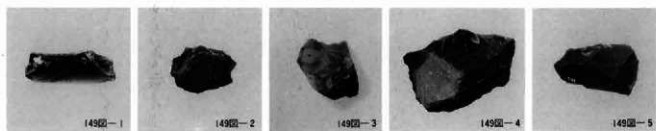


加工痕ある割片

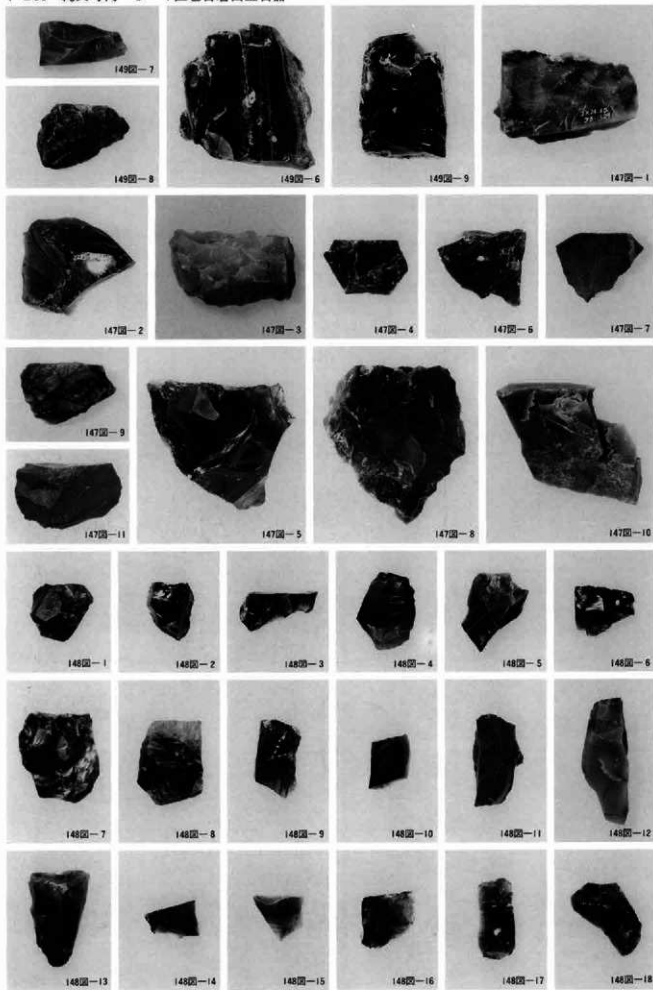


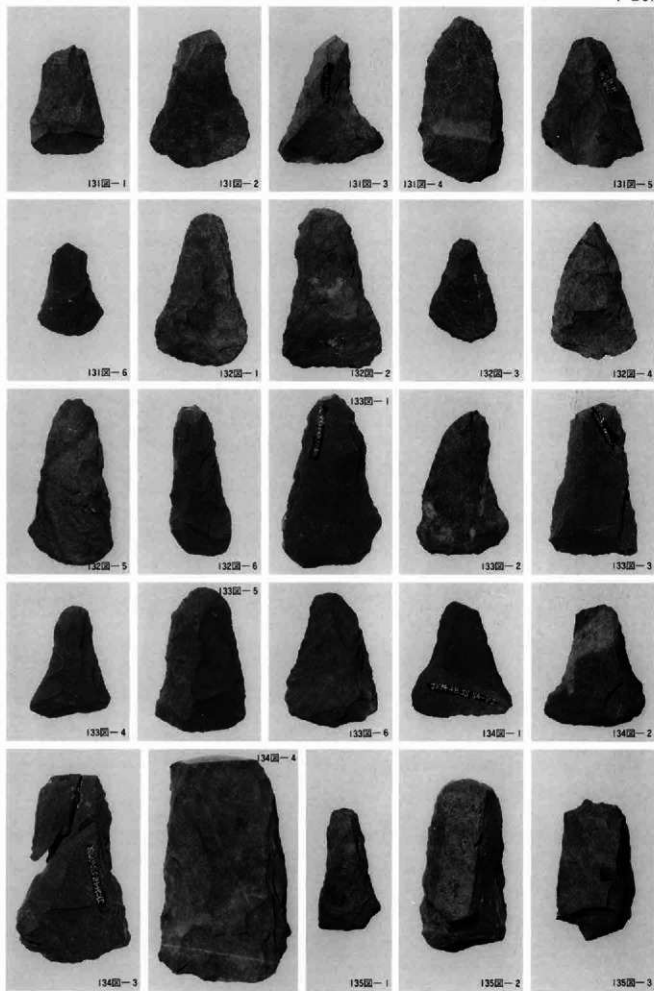


使用俱ある剥片



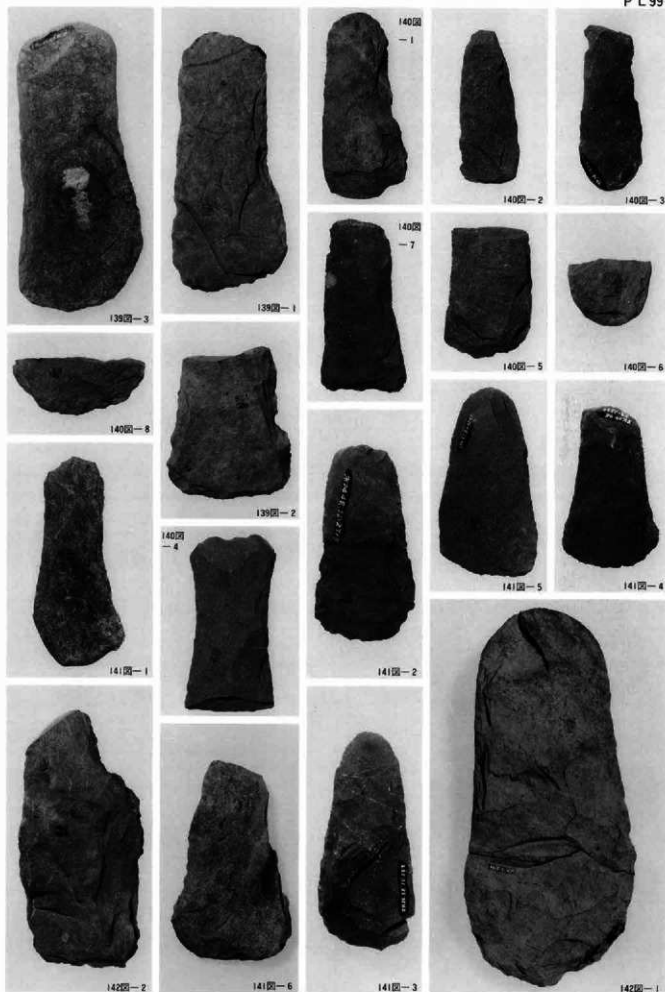
石 核



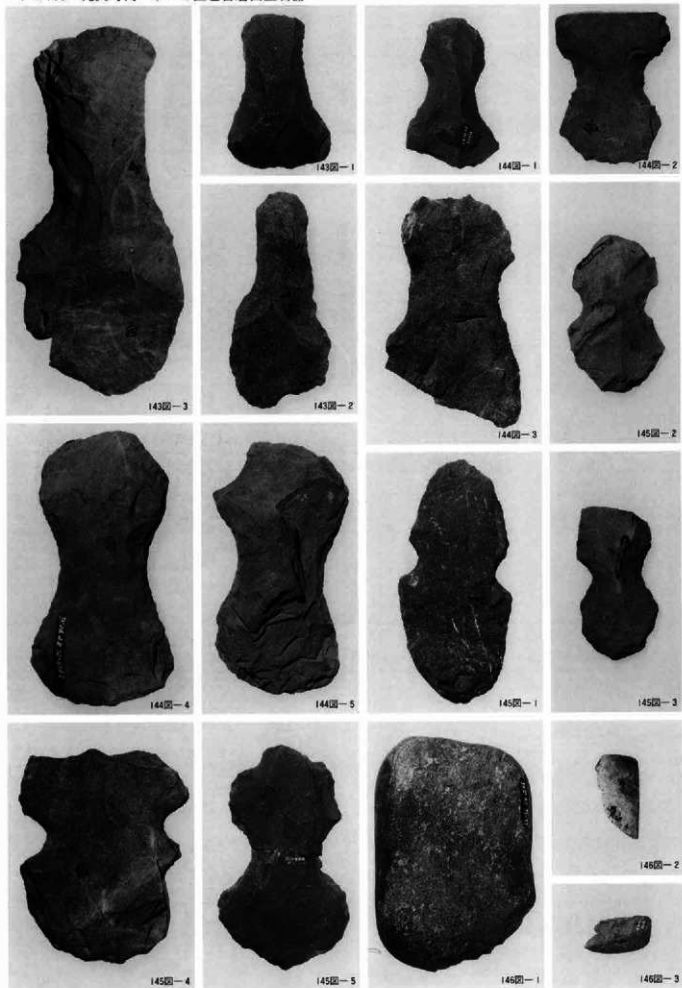


打製石斧

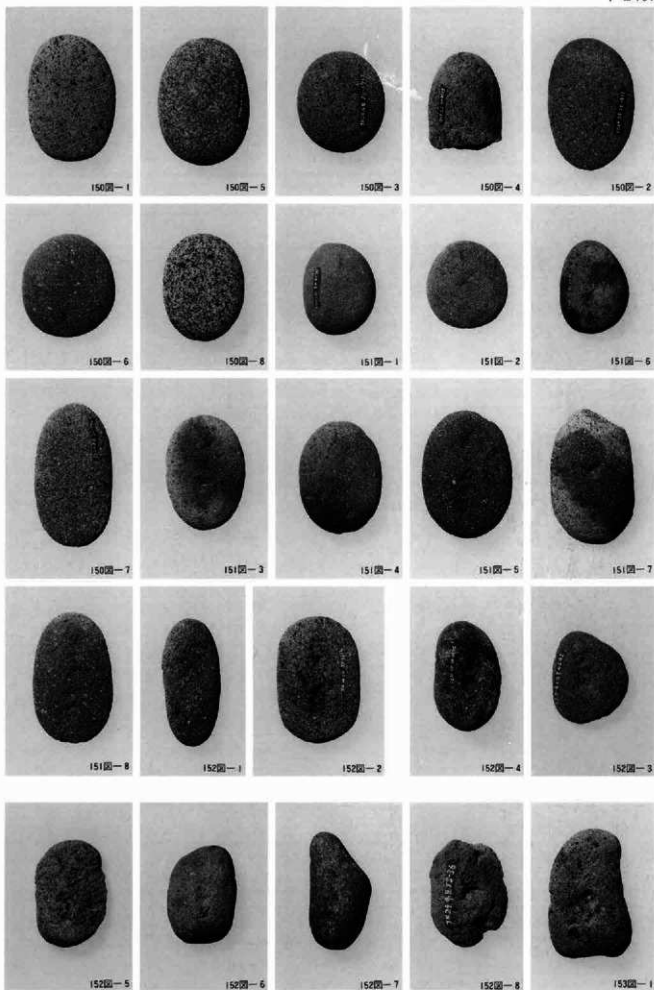




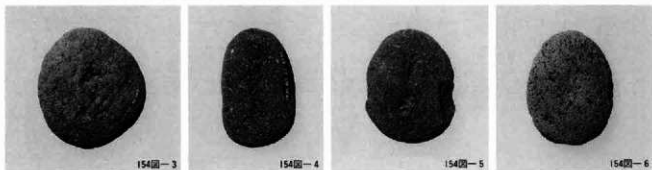
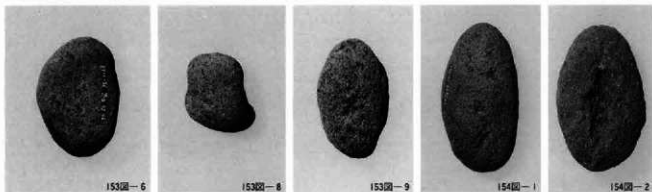
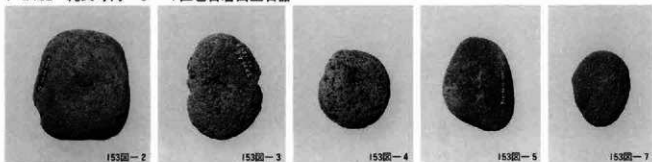
打製石斧



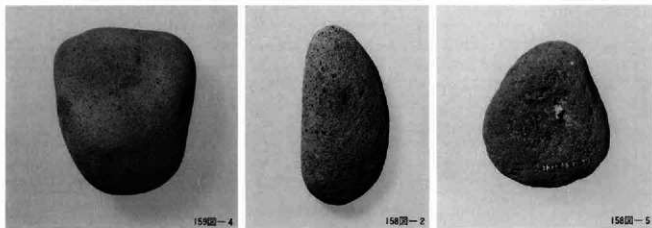
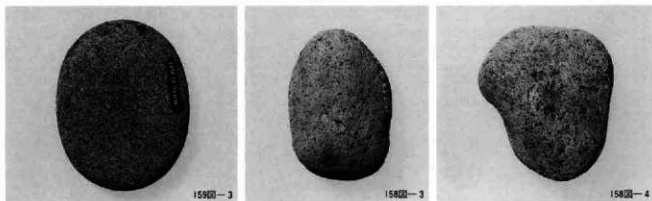
打製石斧・石器・磨製石斧



磨石・凹石



凹石



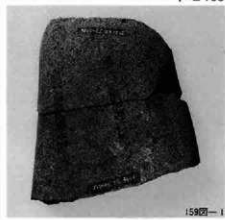
台石



159圖-2



158圖-1



158圖-1



160圖-4



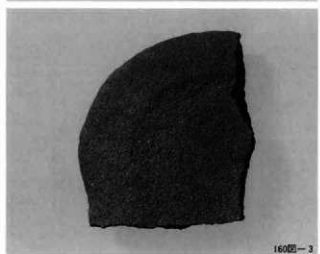
160圖-1



160圖-5



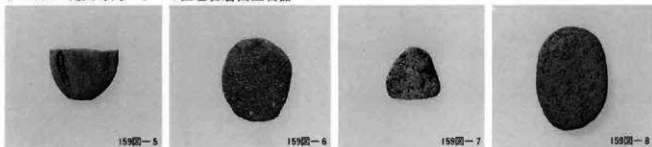
160圖-2



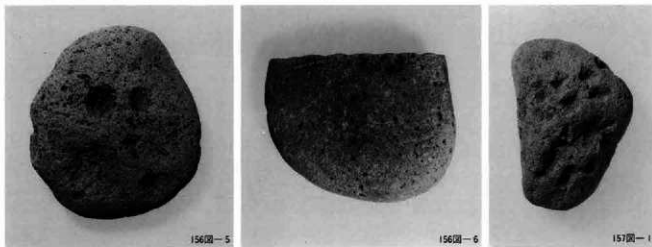
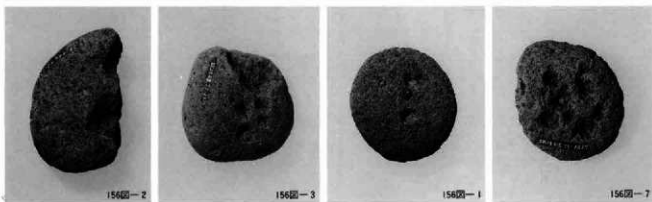
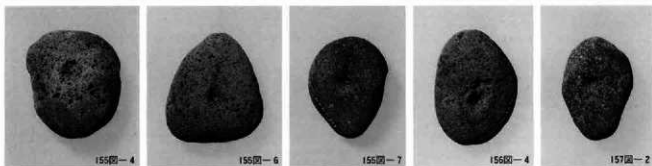
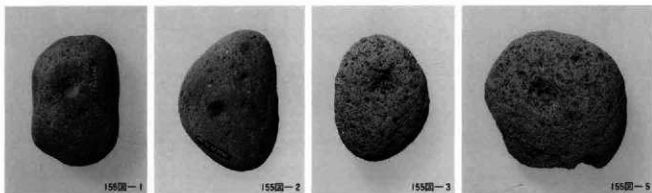
160圖-3



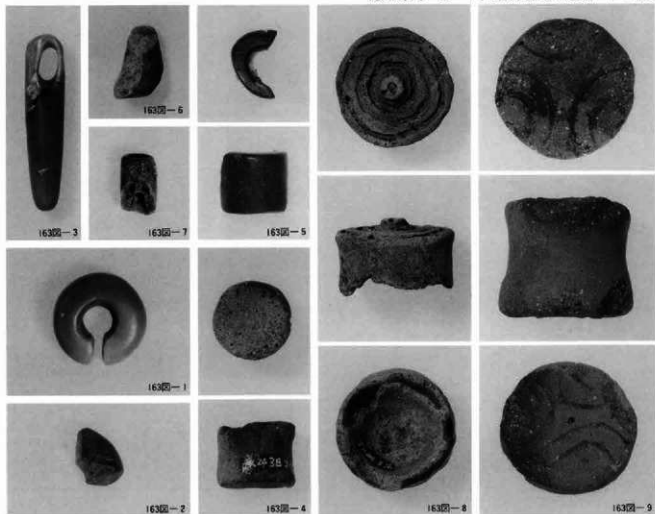
161圖-1



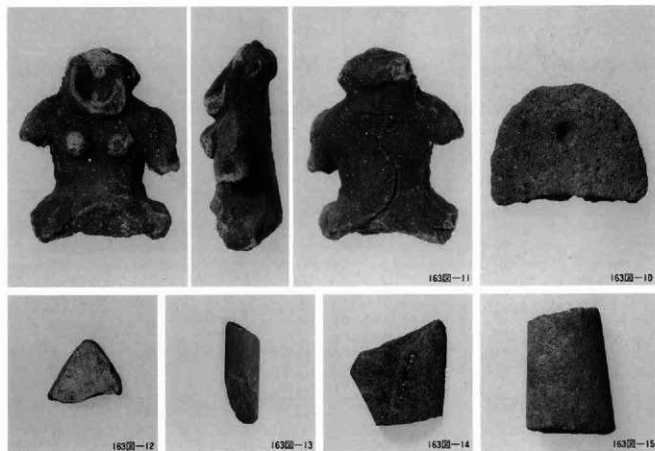
砥石



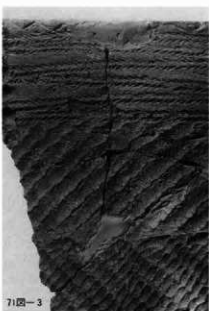
多孔石

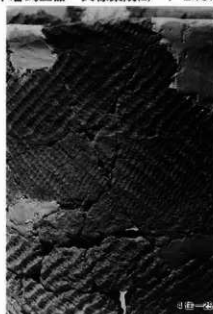
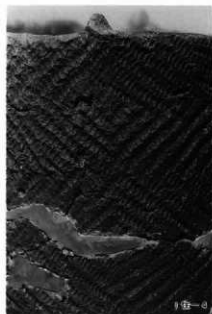


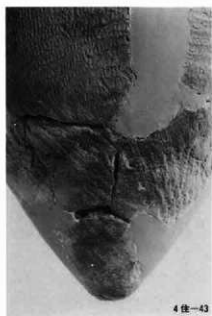
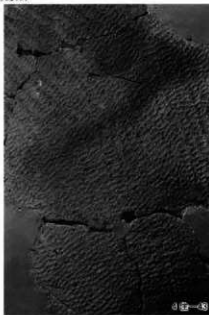
装身具

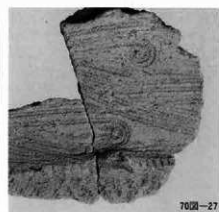
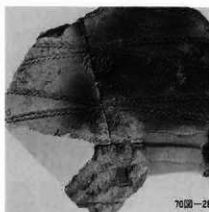
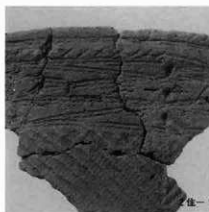
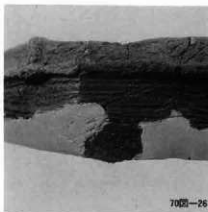
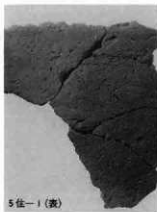


土偶・岩版・石棒



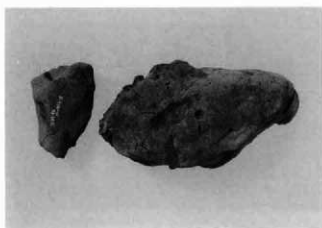




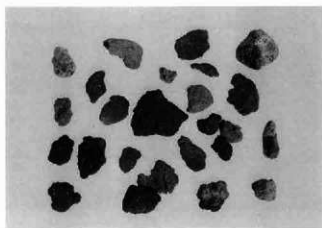




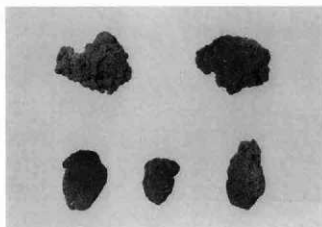
1 出土した粘土塊の総量（大半は焼成されているが、未焼成も数点ある）



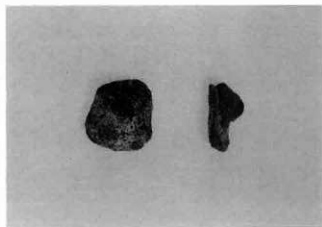
2 未焼成粘土塊



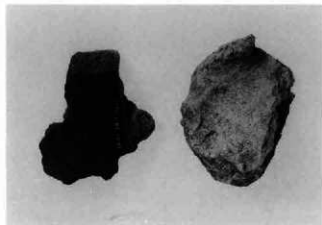
3 粘土クズ



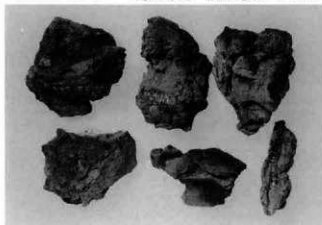
4 粘土クズ



5 粘土が付着した小円礫



1 粘土塊A類



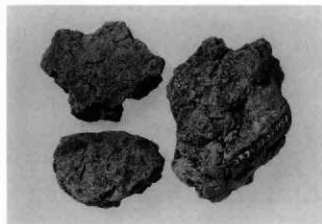
2 粘土塊A類



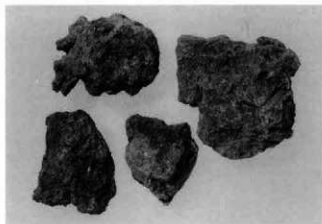
3 粘土塊A類



4 粘土塊B類



5 粘土塊C類



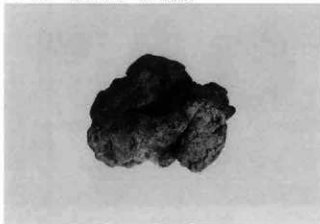
6 粘土塊D類



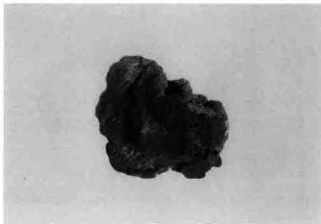
7 粘土塊A類



8 粘土塊A類



1 粘土塊 A類



2 同 A類



3 同 B類



4 同 B類



5 同 B類



6 同 D類



7 同 D類



8 同 D類

(財)群馬埋蔵文化財調査事業団
調査報告書 第144巻

五目牛清水田遺跡

(縄文編)

一般国道17号(上武道路)改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成5年3月20日印刷

平成5年3月26日発行

編集・発行／(財)群馬埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社